

茨城県教育財団文化財調査報告第256集

新善光寺跡 穴戸城跡

主要地方道大洗友部線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 18 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第256集

新善光寺跡
穴戸城跡

主要地方道大洗友部線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成 18 年 3 月

茨城県水戸土木事務所
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、市町村や県の枠を越える広域的な交通と地域の連携を生かした、県全域にわたる調和のとれた発展と振興を図るため、一般国道や主要地方道などの幹線道路網の整備を進めています。

このたび、茨城県水戸土木事務所は、笠間市（旧友部町）宍戸地区において、市内の混雑緩和と北関東自動車道友部インターチェンジへのアクセス向上を図るため、主要地方道大洗友部線道路改良工事を計画いたしました。その事業地内には、新善光寺跡及び宍戸城跡が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所から埋蔵文化財の発掘調査について委託を受け、平成16年10月から平成17年2月まで新善光寺跡及び宍戸城跡の発掘調査を実施しました。

本書は、新善光寺跡・宍戸城跡の調査成果を取録したもので、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県水戸土木事務所から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、笠間市教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 稲葉節生

例 言

1 本書は、茨城県水戸土木事務所の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成16年度に発掘調査を実施した、茨城県笠間市平町（旧西茨城郡友部町大字平町字千栽）391番地の1ほかに所在する新善光寺跡^{しんぜんこうじあと}、同市平町（旧西茨城郡友部町大字平町字殿町）83番地ほかに所在する宍戸城跡^{ししとじょうあと}の発掘調査報告書である。

2 発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

調 査

新善光寺跡 平成16年10月1日～平成16年12月31日

宍戸城跡 平成16年12月1日～平成17年2月28日

整 理 平成17年10月1日～平成18年3月31日

3 発掘調査は、調査課長川井正一のもと、以下の者が担当した。

新善光寺跡

首席調査員兼班長 江幡 良夫

主任調査員 稲田 義弘 平成16年10月1日～平成16年11月30日

主任調査員 小野 克敏 平成16年11月1日～平成16年12月31日

主任調査員 渡邊 浩実

宍戸城跡

首席調査員兼班長 江幡 良夫

主任調査員 稲田 義弘

主任調査員 石川 武志

4 整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長大森雅之のもと、主任調査員稲田義弘が担当した。

5 本書の作成にあたり、宍戸城跡から出土した陶磁器については、財団法人出光美術館主任学芸員荒川正明氏に御指導いただいた。また、宍戸城跡から出土した漆器の保存処理と樹種同定については、株式会社吉田生物研究所に委託した。同じく、宍戸城跡から出土した木器・木製品の樹種同定については、独立行政法人森林総合研究所木材特性研究領域チーム長能城修一氏に委託し、考察は付章として巻末に掲載した。

凡 例

- 1 地区設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系座標を原点とし、新善光寺跡は $X = +38,040\text{m}$ 、 $Y = +40,280\text{m}$ の交点、宍戸城跡は $X = +37,920\text{m}$ 、 $Y = +40,600\text{m}$ の交点を基準（A 1 a1）とした。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々 40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々 10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C…、西から東へ1、2、3…とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa、b、c…j、西から東へ1、2、3…0と小文字を付し、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1区」、「B 2 b2区」のように呼称した。

- 2 実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は、次のとおりである。

遺構 SI-住居跡 SB-掘立柱建物跡 SA-塀跡・柱穴列跡 SK-土坑 SE-井戸跡 SD-溝跡
TM-方形周溝墓・方形周溝状遺構 SX-不明遺構 PG-ピット群 P-ピット SG-池跡
UP-方形竪穴遺構 K-攪乱

遺物 P-土器・陶磁器 TP-拓本記録土器 DP-土製品 Q-石器・石製品 M-金属製品・古銭
T-瓦・埴 W-木器・木製品・漆器 N-自然遺物





土層 K-攪乱

- 3 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は新善光寺跡は400分の1、宍戸城跡は500分の1で、遺構は60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。

(2) 遺物は原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は、個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は、次のとおりである。

	焼土、赤彩		炉、火床面	
	竈材、粘土、炭化材、漆		油煙	
●土器	○土製品	□石器・石製品	■木器・木製品・漆器	△金属器・金属製品・古銭
-----	硬化面			

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構一覧表・遺物観察表の表記は次のとおりである。

(1) 計測値の（ ）内の数値は現存値を、[]内の数値は推定値を示した。計測値の単位は、m、cm、gで示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は、残存率、写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

- 6 「主軸」は、炉または竈を持つ竪穴住居跡についてはそれらを通る軸線とし、他の遺構については長軸（径）を主軸とみなした。「主軸・長軸（径）方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例 N-10°-E）。

抄 録

ふりがな	しんぜんこうじあと ししどじょうあと							
書名	新善光寺跡 宍戸城跡							
副書名	主要地方道大洗友部線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次								
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第256集							
著者名	稲田義弘							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029(225)6587							
発行日	2006(平成18)年3月24日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
しんぜんこうじあと 新善光寺跡	いばらきけんかさまし 茨城県笠間市平町(旧 にし いばらきぐんともべ まちおおあざ たいらまちあざせんざい 平町字千栽)	08216 321044	36度 20分 29秒	140度 17分 00秒	28 ~ 35m	20041001 ~ 20041231	2,938㎡	主要地方道大洗友部線道路改良工事に伴う事前調査
ししどじょうあと 宍戸城跡	いばらきけんかさまし 茨城県笠間市平町(旧 にし いばらきぐんともべ まちおおあざ たいらまちあざとのまち 平町字殿町)	08216 321042	36度 20分 25秒	140度 17分 13秒	25 ~ 26m	20041201 ~ 20050228	2,913㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
新善光寺跡	集落跡	縄文	フラスコ状土坑 陥し穴	17基 4基	縄文土器, 石器(磨石・ 敲石・凹石)			
		弥生	竪穴住居跡	3軒	弥生土器, 紡錘車			
		古墳	竪穴住居跡 方形周溝墓	6軒 2基	土師器, 土製品(球状土 錘), 石製品(勾玉)			
	寺院跡	中・近世	方形竪穴遺構 掘立柱建物跡 地下室状遺構 方形周溝状遺構 溝跡 井戸跡 土坑墓 土坑	2基 1棟 1基 1基 3条 1基 2基 1基	土師質土器, 瓦質土器, 陶磁器, 金属器・金属製品 (釘・煙管), 古銭, 土製 品(人形), 磚, 瓦			
その他	不明	竪穴住居跡 溝跡 土坑	2軒 10条 46基	陶器				
宍戸城跡	城館跡	中・近世	掘立柱建物跡 塀跡 溝跡 井戸跡 ピット群 土坑 池跡 柱穴列跡	17棟 5条 5条 7基 4か所 21基 3か所 3条	土師質土器, 瓦質土器, 陶磁器, 金属器・金属製品 (火箸・釘・鋲・小柄), 古銭, 木器・木製品(椀・ 曲物・箸・杓子・下駄・ 櫛・鋏・折敷・柄), 土製 品(鈴・人形)			
要約	新善光寺跡は、古墳時代の集落跡を中心とする縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。調査区の中央部から確認された堀を伴う溝は寺域を区画するためのものと想定される。 宍戸城跡は、近世初頭の武家屋敷跡を中心とする城館跡である。池や井戸、門を伴い、堀や溝によって区画された武家屋敷群が確認されている。							

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 新善光寺跡	7
第1節 遺跡の概要	7
第2節 基本層序	7
第3節 遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺構と遺物	9
(1) フラスコ状土坑	9
(2) 陥し穴	42
2 弥生時代の遺構と遺物	45
(1) 竪穴住居跡	45
3 古墳時代の遺構と遺物	50
(1) 竪穴住居跡	51
(2) 方形周溝墓	65
4 中・近世の遺構と遺物	68
(1) 方形竪穴遺構	68
(2) 掘立柱建物跡	70
(3) 地下室状遺構	70
(4) 方形周溝状遺構	72
(5) 溝跡	73
(6) 井戸跡	76
(7) 土坑墓	77
(8) 土坑	78
5 その他の遺構と遺物	80
(1) 竪穴住居跡	80
(2) 溝跡	82
(3) 土坑	83
(4) 遺構外出土遺物	87
第4節 まとめ	89
第4章 穴戸城跡	97
第1節 遺跡の概要	97
第2節 基本層序	97
第3節 遺構と遺物	97
1 掘立柱建物跡	99
2 堀跡	116
3 溝跡	122
4 井戸跡	125
5 池跡	129
6 土坑	137
7 ピット群	145
8 柱穴列跡	148
9 遺構外出土遺物	149
第4節 まとめ	150
付章 出土木製品の樹種について	159
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

茨城県水戸土木事務所は、茨城県笠間市（旧西茨城郡友部町）の宍戸地区において、市内の混雑緩和と北関東自動車道友部インターチェンジへのアクセス道路として主要地方道大洗友部線改良工事を進めている。

平成16年4月28日、茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道大洗友部線改良工事地内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成16年5月11日に現地踏査を、平成16年5月25・26日、7月7日に新善光寺跡、10月25日、11月2日に宍戸城跡の試掘調査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成16年6月4日及び7月13日に、茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、事業地内に新善光寺跡が所在する旨を、11月5日に宍戸城跡が所在する旨について回答した。

茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、平成16年7月21日に新善光寺跡、10月5日に宍戸城跡について文化財保護法57条の3第1項の規定に基づき、土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は現状保存が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、茨城県水戸土木事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう、平成16年7月26日に新善光寺跡、10月12日に宍戸城跡についてそれぞれ通知した。

茨城県水戸土木事務所長は、茨城県教育委員会教育長に対して、主要地方道大洗友部線道路改良工事地内に係る埋蔵文化財発掘調査の実施について、新善光寺跡については平成16年8月13日、宍戸城跡については10月18日にそれぞれ協議した。茨城県教育委員会教育長は、茨城県水戸土木事務所長あてに、新善光寺跡については平成16年8月27日、宍戸城跡については10月26日に発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県水戸土木事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、新善光寺跡は平成16年10月1日から12月31日まで、宍戸城跡は平成16年12月1日から平成17年2月28日まで発掘調査をそれぞれ実施することとなった。

第2節 調査経過

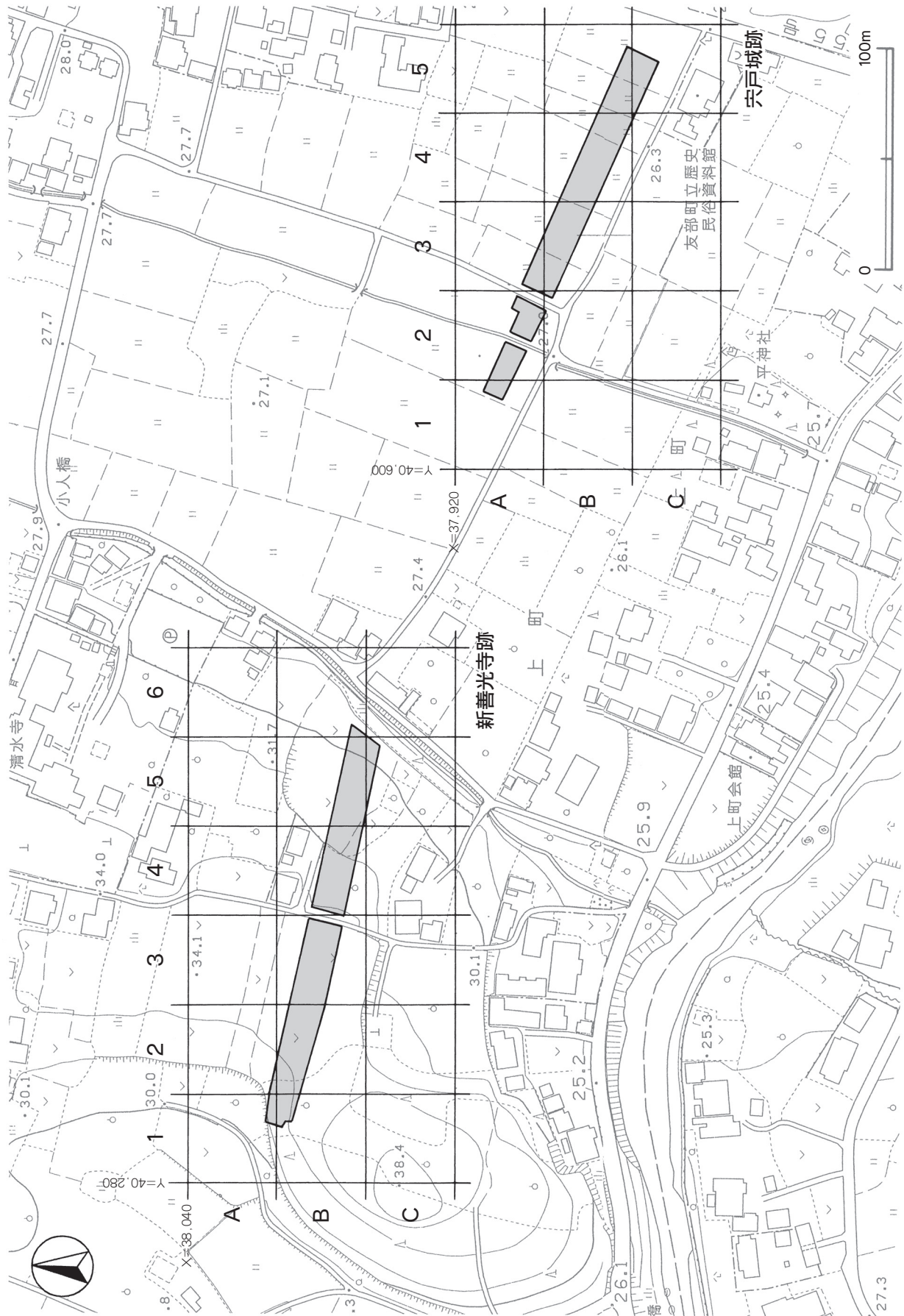
新善光寺跡・宍戸城跡の調査の経過については、概要を表で記載する。

新善光寺跡（平成16年10月1日～12月31日）

	10月	11月	12月
調査準備 表土除去 遺構確認	■		
遺構調査	■		
遺物洗浄 注記作業 写真整理		■	
補足調査 撤収			■

宍戸城跡（平成16年12月1日～平成17年2月28日）

	12月	1月	2月
調査準備 表土除去 遺構確認	■		
遺構調査	■		
遺物洗浄 注記作業 写真整理		■	
補足調査 撤収			■



第1図 新善光寺跡・六戸城跡位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

新善光寺跡及び宍戸城跡は、茨城県笠間市平町（旧西茨城郡友部町大字平町）に所在している。

笠間市の北東部には、八溝山地から張り出した鶏足山塊に属する標高100～200mの山内山、和尚塚、十文字山があり、一帯の丘陵地帯は友部丘陵と呼称されている。一方、南東部を中心に旧友部町域の大部分を占める標高30～40mの台地は東茨城台地と呼ばれ、その広がりには潤沼川に沿って大洗方面にまで及んでいる。当市の国見山付近に水源を持つ潤沼川は、市域のほぼ中央を東流し、枝折川や潤沼前川を合わせながら、潤沼に注いでいる。これらの河川は流域に沖積地を発達させ、現在では豊かな水田地帯となっている。

新善光寺跡は、潤沼川が形成した沖積低地をのぞむ、標高28～35mの舌状台地の先端部に立地している。舌状台地は北から南に向かって伸びており、調査区は台地を横切るように東西に長く設定されている。調査前の現況は、畑地である。宍戸城跡は、新善光寺跡の東側に広がる標高25mほどの沖積低地に立地しており、調査前の現況は水田である。

第2節 歴史的環境

ここでは、笠間市域のうち、当遺跡の所在する旧友部町域にしぼって記述することにする。

笠間市北西部の国見山に源を発する潤沼川と北東部の友部丘陵を上流端とする潤沼前川に挟まれた台地は、縄文時代から人々の生活の場であった。これらの河川に面する台地の縁辺部一帯には広く縄文土器の散布地が認められ、旧友部町域だけで、早期から晩期にいたる43か所の遺跡が確認されている¹⁾。このうち、中期に形成された遺跡は他の時期と複合するものも含めると27か所を数え²⁾、この時期の盛行した様子がうかがえる。新善光寺跡近辺では、^{だいこやま}大古山遺跡〈65〉や^{ほしやま}星山遺跡〈41〉から中期の土器³⁾が確認されている。

弥生時代の遺跡については、これまで正式な発掘調査が少なかつたために、当該文化の希薄な地域とされてきた。しかし、1999年に旧友部町城南東部の^{くほつか}久保塚群〈79〉や^{むかいほら}向原遺跡〈66〉において堅穴住居跡が確認され⁴⁾、続けて2003年には^{さんぼんまつ}三本松遺跡〈23〉において大量の土器と共に15軒の堅穴住居跡が確認される⁵⁾に及んで、当該期においても充実した集落の存在が知られるようになってきた。弥生土器の包蔵地は19か所を数えるようになり、各遺跡は縄文時代と同様に、両河川に面する台地の縁辺部に立地している様子がうかがえる。新善光寺跡近辺には現在のところ当該期の遺跡は少ないが、近年、潤沼川流域は十王台式土器や下稲吉式土器及び二軒屋式土器、樽式土器などの出土⁶⁾によって、地域間の交流をつかむ良好な地域として知られるようになってきており、今後の資料の増加が期待される。

古墳時代になると、集落は台地の縁辺部に、古墳はそれに加えて、台地のやや奥まった地域にも認められるようになる。古墳群は26か所を数え、そのうち旧友部町城北東部に位置している^{いっぽんまつ}一本松古墳群中の^{さんおうづか}山王塚古墳〈22〉は径50mほどの円墳で、前方部が削られた前方後円墳が本来の墳形であったとする説もある規模の大きなものである。同じく北東部に位置している^{やなぎさわ}柳沢古墳群中の^{ふじづか}富士塚古墳〈13〉は、径45mの円墳である。また、新善光寺跡の北西側に位置する^{すわやま}諏訪山古墳〈40〉は全長62.4mの前方後円墳であり、これらの古墳の存在は被葬者の掌握していた権限の大きさを示すものと考えられ、古墳文化の隆盛がうかがえる。一方、古墳を築造し



第2図 新善光寺跡・宍戸城跡周辺遺跡分布図

表1 新善光寺・宍戸城跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	時代						番号	遺跡名	時代							
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世			近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈平	中世	近世
①	新善光寺跡		○	○	○		○	○	45	下加賀田遺跡		○		○		○	
②	宍戸城跡							○	46	橋爪遺跡		○	○				
3	柏原遺跡		○	○	○	○			47	花咲遺跡		○					
4	桂遺跡		○						48	高土台塚群							○
5	桂古墳				○				49	東平遺跡	○	○	○	○	○		
6	高野遺跡		○	○	○	○			50	坂の上塚群				○			○
7	撰子池遺跡		○						51	宝蔵古墳				○			
8	市原城跡						○		52	古峯A遺跡	○	○	○	○	○	○	○
9	御城遺跡		○			○	○	○	53	富士山古墳群				○			
10	四十八塚							○	54	古峯B遺跡	○	○	○	○	○	○	○
11	松崎台遺跡		○						55	上郷遺跡		○		○		○	○
12	和尚塚古墳				○			○	56	善九郎遺跡		○					
13	柳沢古墳群				○				57	善九郎古墳群				○			
14	大日山古墳群				○			○	58	随分附遺跡		○	○				
15	香取、坂場遺跡		○			○	○		59	東原製鉄跡						○	
16	原古墳				○				60	南小泉遺跡		○			○	○	
17	喜平塚古墳				○				61	佐藤林古墳群				○			
18	原坪古墳群				○				62	佐藤氏館跡						○	
19	高寺古墳群				○				63	川郷地池遺跡		○			○		
20	小原城跡						○		64	寺山遺跡	○	○		○			
21	小原遺跡		○	○	○	○			65	大古山遺跡		○		○	○	○	
22	一本松古墳群				○				66	向原遺跡	○	○	○	○	○	○	○
23	三本松遺跡			○		○			67	仲丸塚		○				○	○
24	塚崎古墳				○				68	仲丸遺跡		○		○	○	○	○
25	久保遺跡		○			○			69	前原塚						○	○
26	丹後塚古墳				○			○	70	住吉城跡						○	
27	大塚古墳				○			○	71	芝沼古墳群				○			
28	北平遺跡	○	○			○			72	割塚							○
29	北山遺跡		○					○	73	住吉遺跡		○	○	○	○		
30	石山神遺跡	○	○						74	下宿遺跡		○					
31	掃部塚古墳群				○				75	万部塚						○	
32	家前遺跡		○	○	○				76	千部塚						○	
33	田端内遺跡		○	○	○				77	長兎路遺跡		○					
34	猿丸塚古墳群				○				78	慈救堂古墳				○			
35	五平古墳群				○				79	久保塚群		○	○	○		○	○
36	五平内郷遺跡		○	○	○				80	五万堀古道					○	○	○
37	完全寺後遺跡		○	○	○	○	○	○	81	柏井遺跡		○					
38	二ツ塚古墳				○				82	五万堀遺跡		○			○		
39	八反山遺跡		○			○			83	釈迦堂遺跡		○					
40	諏訪山古墳				○				84	湯崎城跡						○	
41	星山遺跡		○			○			85	長兎路城跡						○	
42	金山遺跡		○	○					86	入場塚古墳				○			
43	古館						○		87	入寂塚古墳				○			
44	端上遺跡		○	○	○	○			88	仁古田遺跡		○	○		○		

た集団の基盤となる集落域は古墳群と対応するものと推測されるが、その分布は必ずしも明確ではない。

また、発掘調査によって明らかになった古墳築造の時期は、いずれも中～後期に比定されるものであり、前期のものは近年まで確認されていなかった。新善光寺跡から確認された方形周溝墓2基は、こうした時間的

白を埋めるものとしてその存在意義は大きいといえる。集落についても前期に属する遺跡は資料的に恵まれていなかったが、^{おぼら}小原遺跡〈21〉や久保塚群から前期後半の竪穴住居跡が確認された⁷⁾ ことに加え、新善光寺跡からこれらの遺跡に先行する時期の竪穴住居跡が確認され、徐々にではあるが資料は整いつつある。

奈良・平安時代の旧友部町域は、那珂郡と茨城郡の両郡にまたがっている。町域東部は那珂郡、西部は茨城郡に編入され、宍戸地区は茨城郡石間（岩間）郷内の北縁部に位置していたと想定される。当該期の遺構としては、^{ひがしだいら}東平遺跡⁸⁾〈49〉や^{きたたいら}北平遺跡⁹⁾〈28〉、三本松遺跡など集落遺跡が少なからず確認されているが、調査事例を見る限り、古墳時代から継続する集落はほとんど見られず、新しい時代を迎えて新規に形成されたものが多い。新善光寺跡や宍戸城跡において当該期の遺構は確認されておらず、古墳時代後期まで展開された集落は該期を迎える前に一旦収束することになる。

中世に至り、当地を支配するようになるのは、総領家の小田氏と常陸守護職を継承し合う宍戸氏である。鎌倉時代の守護所を含め、宍戸氏の居館は特定されていないが、町内に宍戸氏と関連する寺社が多く存在することから、後述する秋田氏居住の宍戸城跡やその東隣に立地する^{ふるだて}古館〈43〉にその地を比定しても不自然ではない。本領である「小鶴荘」（茨城町）の荘名と名字の不一致、及び荘域に「宍戸」なる地名が全く存在しない点はよく指摘される場所であるが、14世紀前半には「宍戸荘」という呼び方が確実に存在していること¹⁰⁾ や「宍戸」を広域地名と見る考え方も示されていること¹¹⁾ から、宍戸地区を本拠地と見るのが妥当と思われる。その後、戦国期においては佐竹氏麾下の將として命脈を保った宍戸氏は、1595年に佐竹氏の命により真壁郡海老ヶ島城^{えびがしま}へ移転することになった。旧領は佐竹氏一族や家臣が分知することになり、宍戸氏の菩提寺として鎌倉時代に建立された新善光寺は、この配置替えに伴って海老ヶ島城内へ移転し、現在に至っている。

近世になると、佐竹氏の秋田移封と入れ替わるようにして秋田氏が宍戸城に入城し、5万石を領したが、早くも1645年には陸奥三春へ国替えとなっている。それに伴い、領地が幕府の直轄地に編入されると、宍戸城は破却され、武家屋敷も取り壊されてその大部分が水田となった。1682年には松平氏を藩主として再び宍戸藩が成立するが、わずか1万石の小大名であることや定府制をとることなどから、城下町としての規模は前代に比して著しく縮小しており、水田化された武家屋敷が再び城下に組み込まれることはなかった。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1及び第2図の該当番号と同じである。

註

- 1) 茨城県教育庁文化課 『茨城県遺跡地図（地名表編・地図編）』 茨城県教育委員会 2001年3月
- 2) 友部町史編さん委員会 『友部町史』 友部町 1990年3月
- 3) 註1)に同じ
- 4) 長岡正雄・仲村浩一郎 「仲丸遺跡 久保塚群 五万掘古道 向原遺跡 向原塚群 前原塚 仲丸塚 総合流通センター整備事業地内 埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第162集 茨城県教育財団 2000年3月
- 5) 早川泉・板野晋鏡・伊藤俊治・東早花 『三本松遺跡』 友部町三本松遺跡発掘調査会 2003年3月
- 6) 近藤恒重 「大戸下郷遺跡 主要地方道内原塩崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第216集 2004年3月
- 7) 服部敬史・小野真美・萩原明美・山本久 『小原遺跡』 大成エンジニアリング株式会社・友部町小原遺跡発掘調査会 2004年3月
- 8) 平松孝志 「寺山遺跡 東平遺跡 坂ノ上塚群 北関東自動車道（友部～水戸）建設工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」『茨城県教育財団 文化財調査報告』第150集 茨城県教育財団 1999年3月
- 9) 能島清光・山口憲一・高橋孝之 『北平遺跡』 友部町北平遺跡発掘調査会 2004年3月
- 10) 如意輪寺（旧友部町上市原）の鰐口に嘉暦3年（1328年）と完（宍）戸荘の銘が記されている。
- 11) 茨城町史編さん委員会 『茨城町史 通史編』 茨城町 1995年2月

第3章 新善光寺跡

第1節 遺跡の概要

新善光寺跡は、北から南に向かって伸びる標高28~35mの舌状の台地上に立地している。調査区は、この台地を東西に横切るように東西長200m、南北長15mほどに設定され、調査面積は2,938㎡で、調査前の現況は畑地である。

今回の調査によって、縄文時代から近世までの遺構と遺物が確認された。検出された遺構は、竪穴住居跡11軒（弥生時代3、古墳時代6、時期不明2）、方形周溝墓2基、掘立柱建物跡1棟、方形周溝状遺構1基、方形竪穴遺構2基、陥し穴4基、フラスコ状土坑17基、土坑墓2基、井戸跡1基、溝跡13条、地下室状遺構1基、土坑47基である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に70箱出土している。主な出土遺物は、縄文土器（深鉢・浅鉢・ミニチュア）、弥生土器（広口壺）、土師器（坏・高坏・器台・甕・壺・甑）、土師質土器（皿）、瓦質土器（火鉢）、陶磁器（碗・皿・瓶子・水注・片口鉢）、土製品（支脚・紡錘車・球状土錘・土人形）、瓦・磚、石器・石製品（鎌・敲石・磨石・石棒・磨製石斧・勾玉）、金属器・金属製品（煙管）、古銭などである。

第2節 基本層序

調査区中央部のB4i5区にテストピットを設定し、基本土層（第3図）の堆積状況の観察を行った。テストピットの観察結果は、以下の通りである。

第1層は、黒褐色を呈する耕作土層である。ロームブロックを少量含んでいる。層厚は34~45cmである。

第2層は、極暗褐色を呈するローム層への漸移層である。層厚は6~16cmである。

第3層は、明褐色を呈するソフトローム層で、赤色粒子を微量含んでいる。層厚は5~18cmである。

第4層は、明褐色を呈するハードローム層である。層厚は14~26cmである。

第5層は、褐色を呈するハードローム層である。第2黒色帯に相当し、層厚は15~26cmである。

第6層は、鹿沼パミス粒子を少量含んだ褐色のハードローム層である。層厚は11~19cmである。

第7層は、鹿沼パミス粒子を中量含んだ褐色のハードローム層である。層厚は4~12cmである。

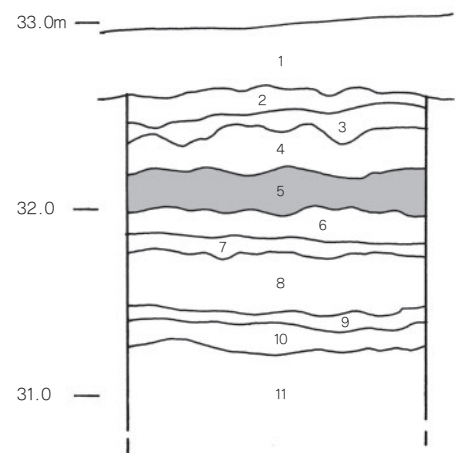
第8層は、明褐色を呈した鹿沼パミス層である。層厚は27~32cmである。

第9層は、灰褐色を呈したハードローム層で、鹿沼パミス粒子を少量含んでいる。層厚は5~10cmである。

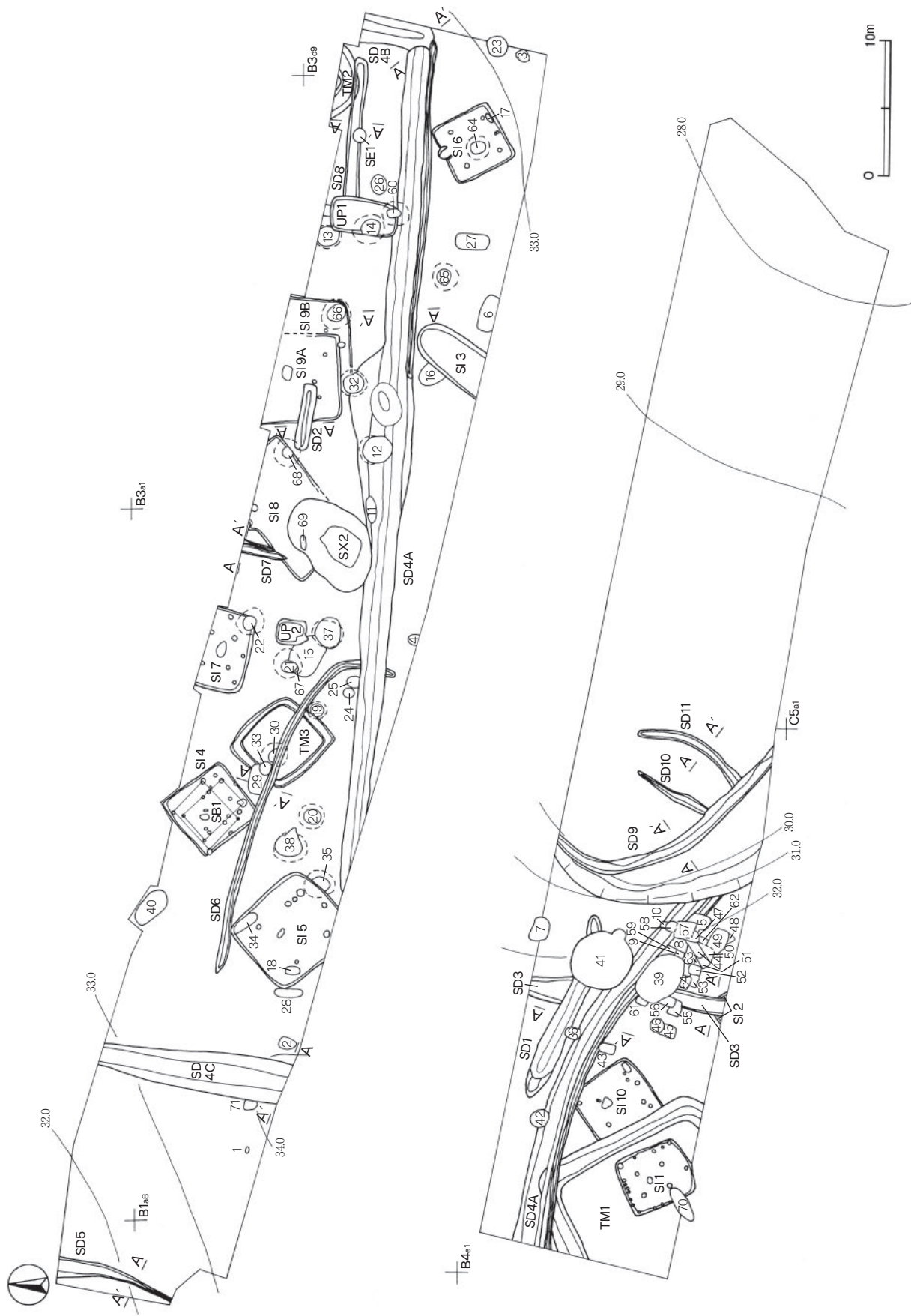
第10層は、暗褐色を呈したハードローム層で、礫を少量含んでいる。層厚は9~16cmである。

第11層は、暗褐色を呈した粘土層で、礫・砂粒を少量含んでいる。下層が未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構は、第2層上面で確認されている。



第3図 基本土層図



第4図 新善光寺跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

フラスコ状土坑17基と陥し穴4基が確認された。以下、確認された遺構及び遺物について記述する。

(1) フラスコ状土坑

第12号土坑（第5～7図）

位置 調査区西部のB 3 e2区，標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第4 A号溝に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は，径2.1mほどの円形である。底面はほぼ平坦で，径2.4mほどの円形を呈している。深さは50～75cmで，壁は底面から内傾し，くびれ部から外傾して立ち上がっている。底面からくびれ部までの高さは35～50cmである。

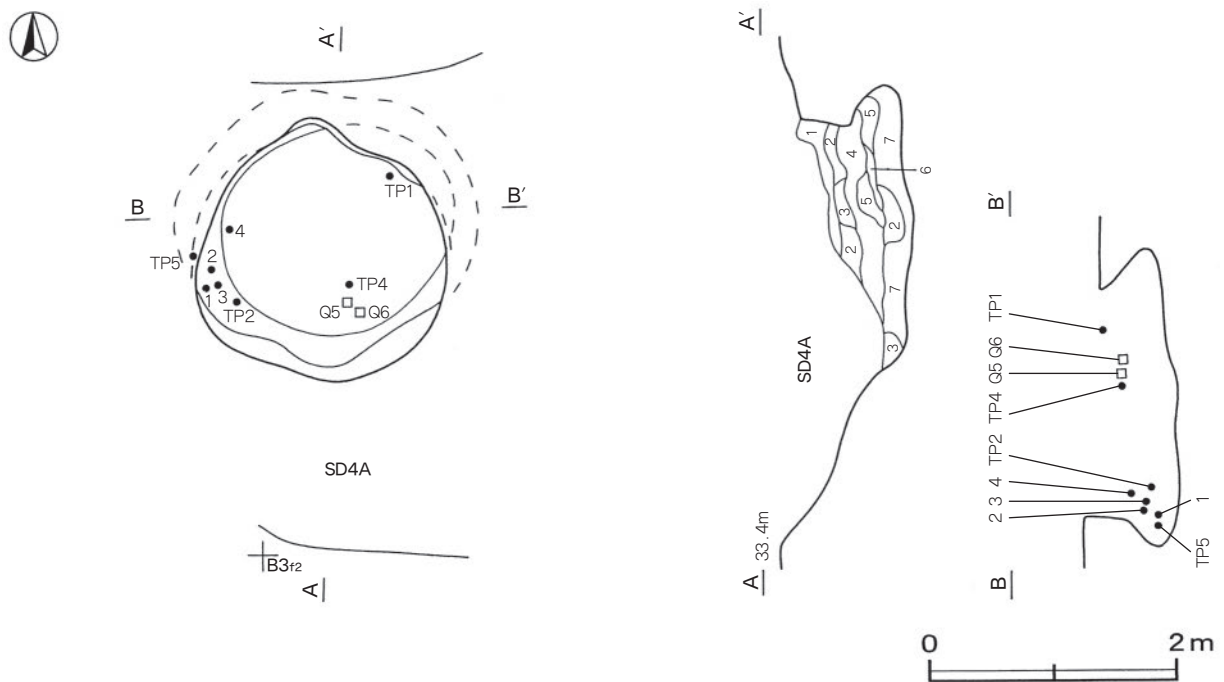
覆土 7層に分層される。全体的に焼土や炭化物，鹿沼パミスを多く含み，大形の土器片が覆土下層を中心に廃棄されたような状態で出土していることなどから，廃棄に伴う人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗赤褐色	焼土ブロック少量，炭化物・ローム粒子・鹿沼パミス微量
2 灰黄褐色	ローム粒子多量，鹿沼パミス少量，炭化物微量	6 褐色	ローム粒子中量，焼土粒子微量
3 黒褐色	炭化物・ローム粒子・鹿沼パミス微量	7 暗褐色	ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子微量
4 黒褐色	炭化粒子少量，ロームブロック・焼土粒子・鹿沼パミス微量		

遺物出土状況 縄文土器片204点，石器4点（磨製石斧3，磨石1）が覆土下層を中心にまとまって出土している。

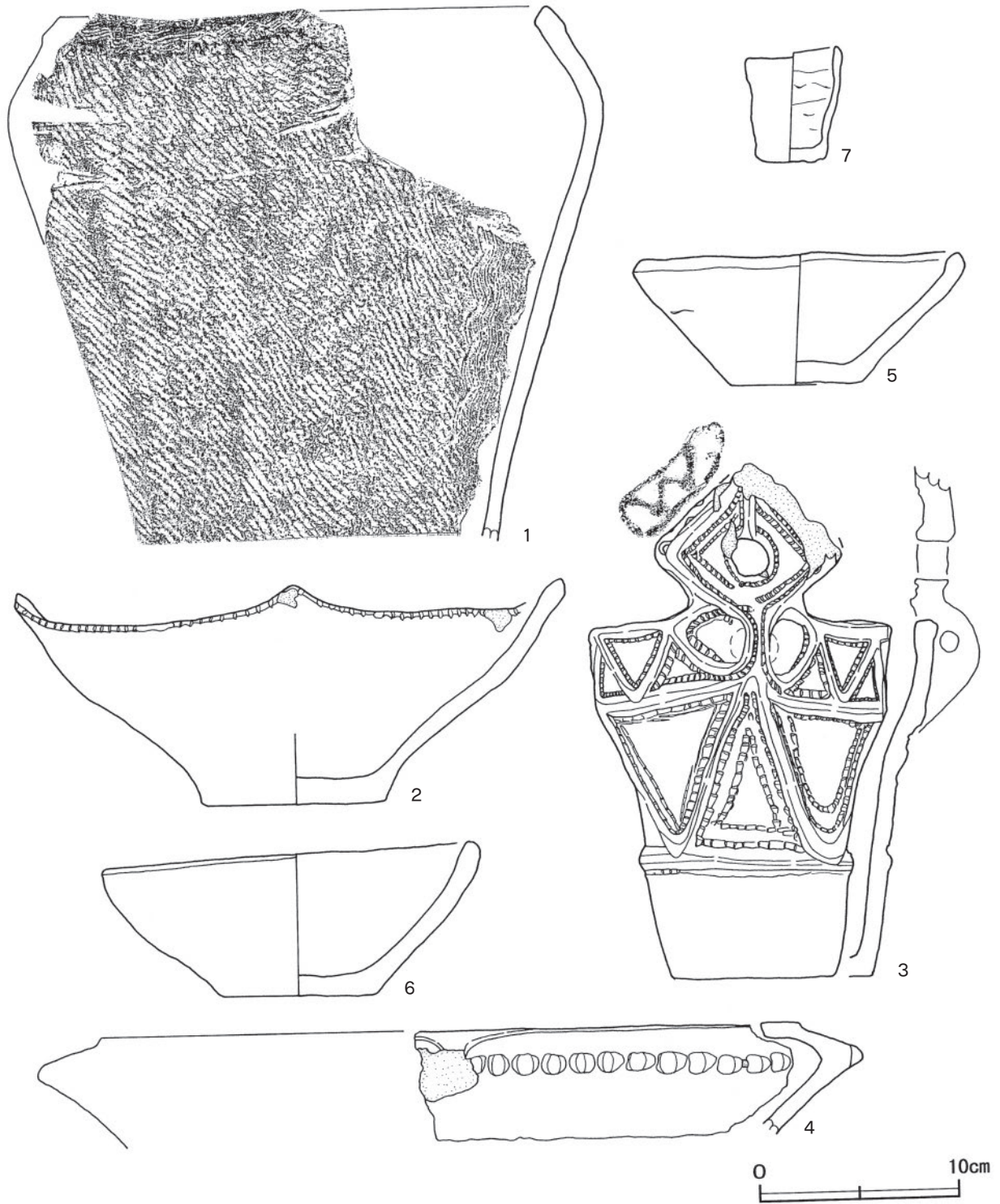
1・2は南西部の覆土下層，3は西壁際の覆土下層から土圧でつぶれた状態で出土している。覆土下層から出土したTP3は，文様や胎土の特徴から，第38号土坑の覆土下層から出土したTP31，第65号土坑の覆土中から出土したTP35と同一個体と考えられる。同様に，覆土下層から出土したTP5は，第32号土坑の覆土下層から出



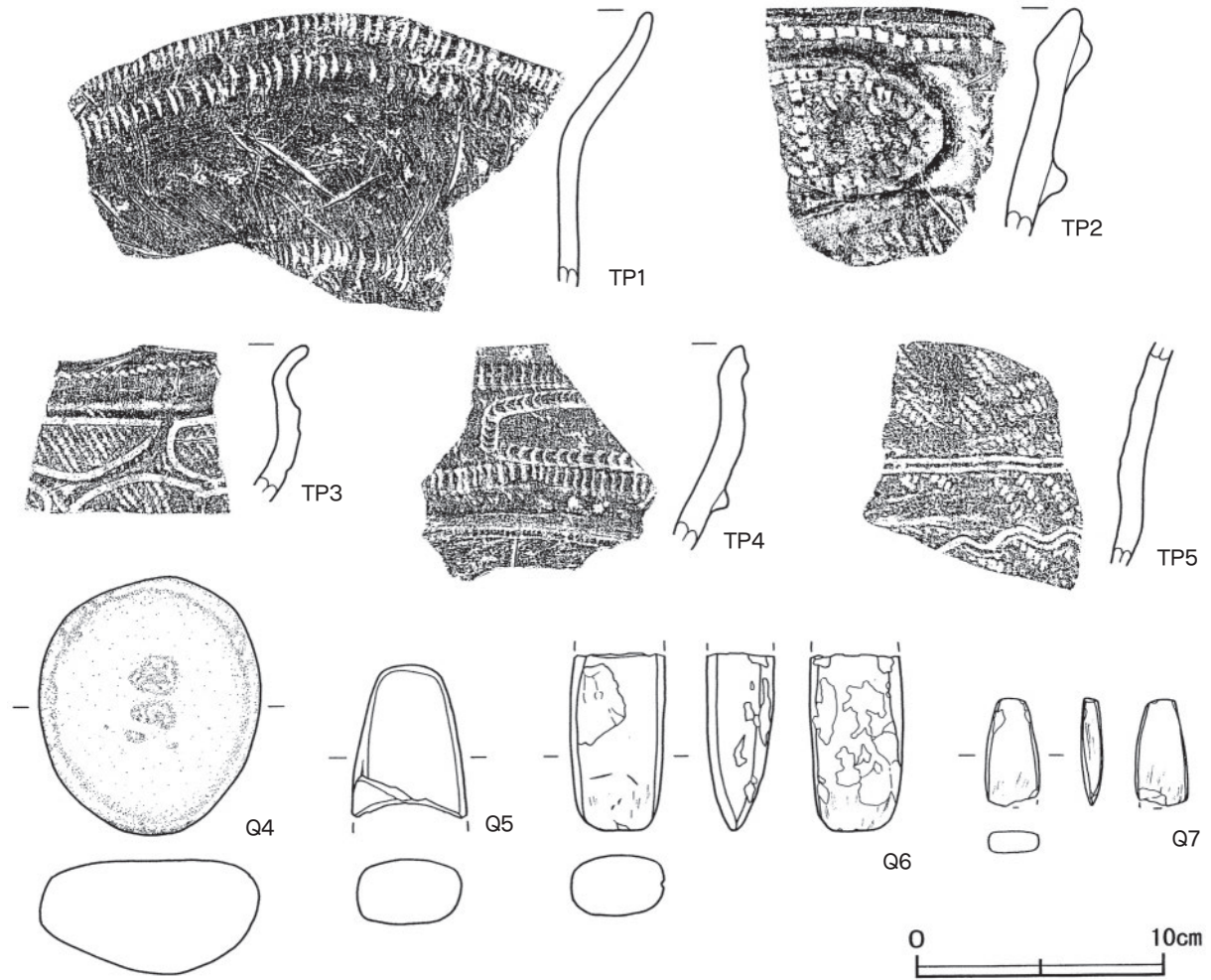
第5図 第12号土坑実測図

土したTP24・TP25, 第37号土坑の覆土下層から出土したTP29・TP30と同一個体と考えられる。

所見 時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。廃棄されたと考えられる土器片の同一個体が他の土坑からも出土していることから, これらの土坑は同時期に開口していたと考えられる。



第6図 第12号土坑出土遺物実測図(1)



第7図 第12号土坑出土遺物実測図(2)

第12号土坑出土遺物観察表 (第6・7図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	[24.2]	(26.9)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	無節縄文を地文とし、口唇部・胴部に半截竹管による波状文施文	南西部下層	20%
2	縄文土器	浅鉢	[27.2]	10.9	9.0	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部にキザミ 胴部は無文	南西部下層	35%
3	縄文土器	深鉢	15.1	(25.9)	8.2	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	円孔を有する方形の把手1か所 口縁部・胴部を隆帯による三角文で区画 結節沈線文施文	南西部中層	95% PL6
4	縄文土器	浅鉢	[31.0]	(5.6)	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	屈曲部先端押圧 口唇部に赤彩痕 胴部無文	西部中層	10%
5	縄文土器	浅鉢	15.9	6.4	6.6	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	無文	覆土中	100%
6	縄文土器	浅鉢	18.1	7.6	7.8	雲母・長石・石英	灰褐	普通	無文	北東部上層	60%
7	縄文土器	ミニチュア	4.4	5.7	3.2	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	無文 内面に輪積み痕	覆土中	100%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q4	磨石	10.3	8.9	4.6	609	安山岩	全側面を使用 表面2孔	覆土中	100%
Q5	磨製石斧	(6.2)	4.6	2.6	(104)	泥岩	定角式	南部中層	
Q6	磨製石斧	(7.2)	3.8	2.7	(119)	泥岩	刃部の破片 表面の一部剥離	南部中層	
Q7	磨製石斧	4.4	2.2	0.9	(13)	泥岩	刃部一部欠損	覆土中	95%

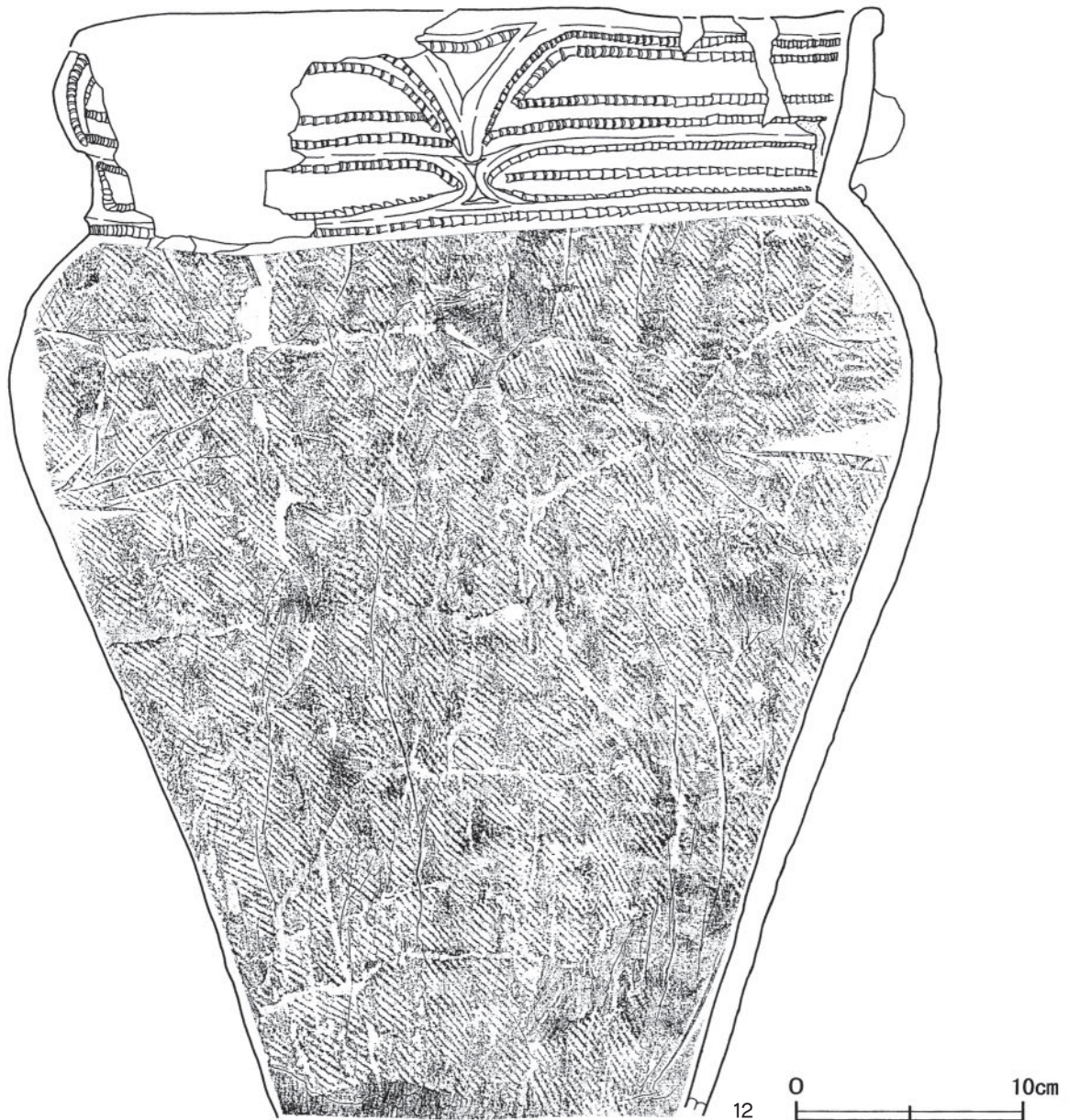
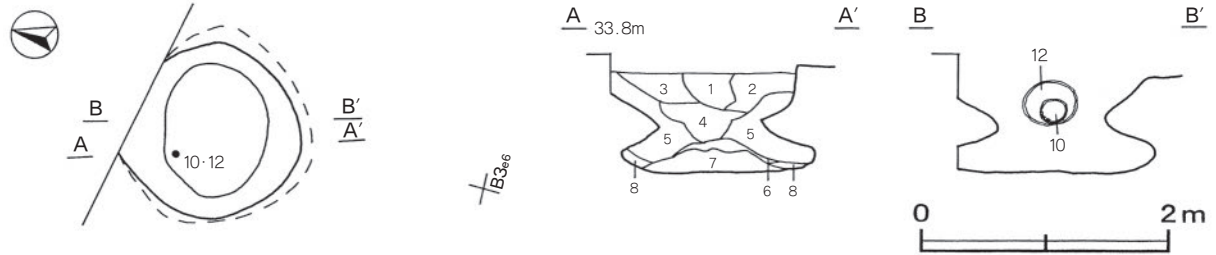
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP1	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	口縁部・胴部にキザミ目	北東部上層	
TP2	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	無節縄文を地文とし 隆帯による楕円形区画文と隆帯に沿う結節沈線文施文	南西部下層	
TP3	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口辺部に原体押圧 単節縄文を施文後 結節沈線文による文様描出	覆土下層	
TP4	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	断面三角形の隆帯貼付後 結節沈線文による文様描出	南部中層	
TP5	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	単節縄文施文後 半截竹管による平行沈線文・波状文施文	西部下層	

第13号土坑（第8～10図）

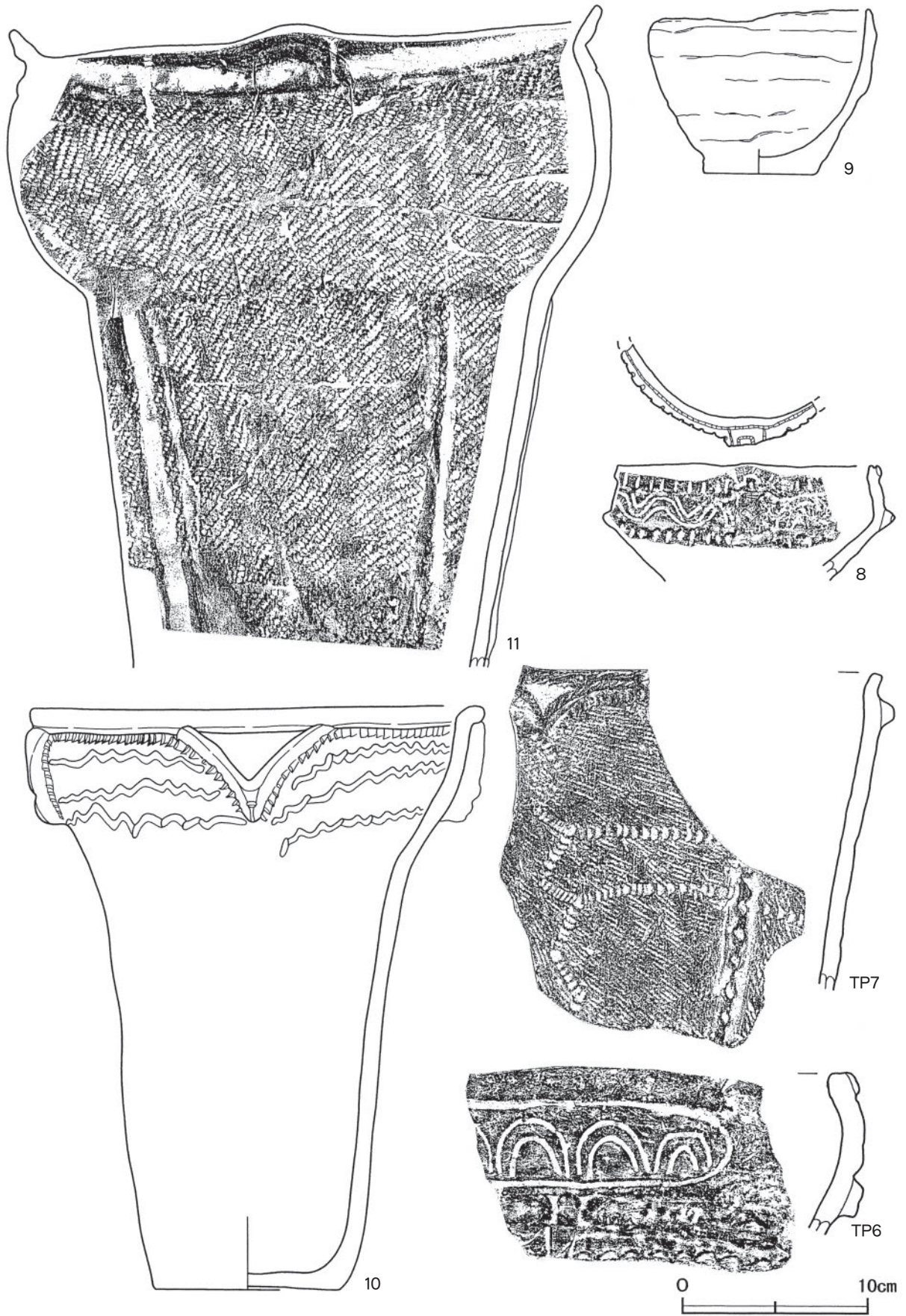
位置 調査区西部のB 3 d6区，標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第1号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

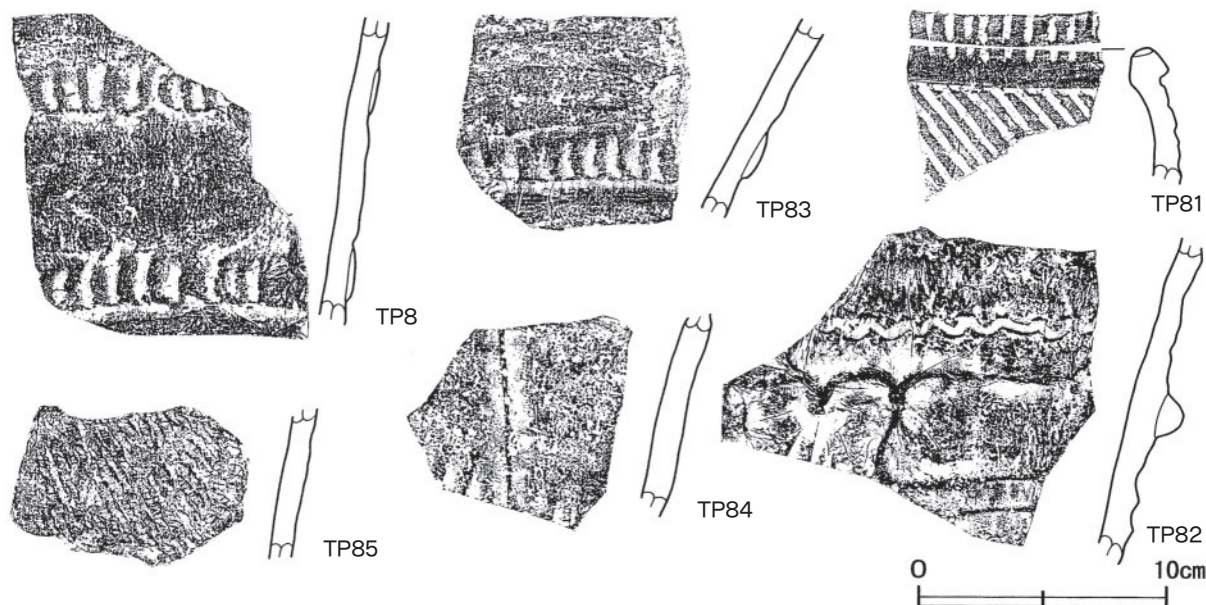
規模と形状 開口部は，径1.4mほどの円形である。底面はほぼ平坦で，径1.6mほどの円形を呈している。深さは78cmで，壁は底面から大きく内傾し，くびれ部から外方に大きく開いて立ち上がっている。底面からくびれ部までの高さは35～40cmである。



第8図 第13号土坑・出土遺物実測図



第9図 第13号土坑出土遺物実測図(1)



第10図 第13号土坑出土遺物実測図(2)

覆土 8層に分層される。ブロック状の不規則な堆積状況を示した人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒色	ローム粒子微量	5 暗褐色	ロームブロック・炭化粒子少量
2 暗褐色	ロームブロック少量	6 暗褐色	ローム粒子少量
3 黒褐色	ロームブロック微量	7 灰黄褐色	ローム粒子多量
4 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子微量	8 褐色	ローム粒子多量

遺物出土状況 縄文土器片99点が出土している。10～12はくびれ部から横位で、ほぼ完形の状態出土している。特に、10は12の中から入れ子の状態で出土しており、10～12はくびれ部まで埋め戻された段階で廃棄されたものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第13号土坑出土遺物観察表（第8～10図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
8	縄文土器	浅鉢	[14.2]	6.2	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	キザミを有する隆帯によって口縁部と胴部を区画 口唇部・口縁部に結節沈線文 胴部無文	覆土上層	20%
9	縄文土器	鉢	11.7	9.1	6.0	長石・石英	にぶい褐	普通	無文 輪積み痕	覆土上層	100%
10	縄文土器	深鉢	24.0	31.6	10.0	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部にV字状の貼付文 隆帯に沿って結節沈線文 口縁部に波状沈線文	覆土上層	95% PL6
11	縄文土器	深鉢	31.2	(35.9)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	4単位の小波状口縁 胴部に垂下する隆帯貼付後 単節縄文施文	覆土中層	60% PL6
12	縄文土器	深鉢	[35.4]	(48.4)	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部2段区画の接点部にV字状の貼付文 隆帯に沿って結節沈線文 胴部無節縄文施文	覆土上層	70% PL6

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP6	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	単列の結節沈線文による楕円形区画内に複列の結節沈線文により連弧状の文様描出	覆土中	
TP7	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	無節縄文地文 隆帯貼付後 結節沈線文による文様描出	覆土中層	
TP8	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	ヒタ状圧痕	覆土中	
TP81	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口唇部にキザミ目 口縁部に斜位の結節沈線文を密に施文	覆土中	
TP82	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	断面三角形の隆帯と単列の波状文を平行に施文 V字状の隆帯貼付	覆土中	
TP83	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	ヒタ状圧痕	覆土中	
TP84	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	ヒタ状圧痕 断面三角形の隆帯	覆土中	
TP85	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	無節縄文施文	覆土中	

第14号土坑（第11～13図）

位置 調査区西部のB 3 e6区，標高33.5mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第1号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は，残存する部分から円形と推測される。底面はほぼ平坦で，径2.4mの円形を呈している。深さは140cmで，壁は底面から大きく内傾し，くびれ部から外傾して立ち上がっている。底面からくびれ部までの高さは105cmである。

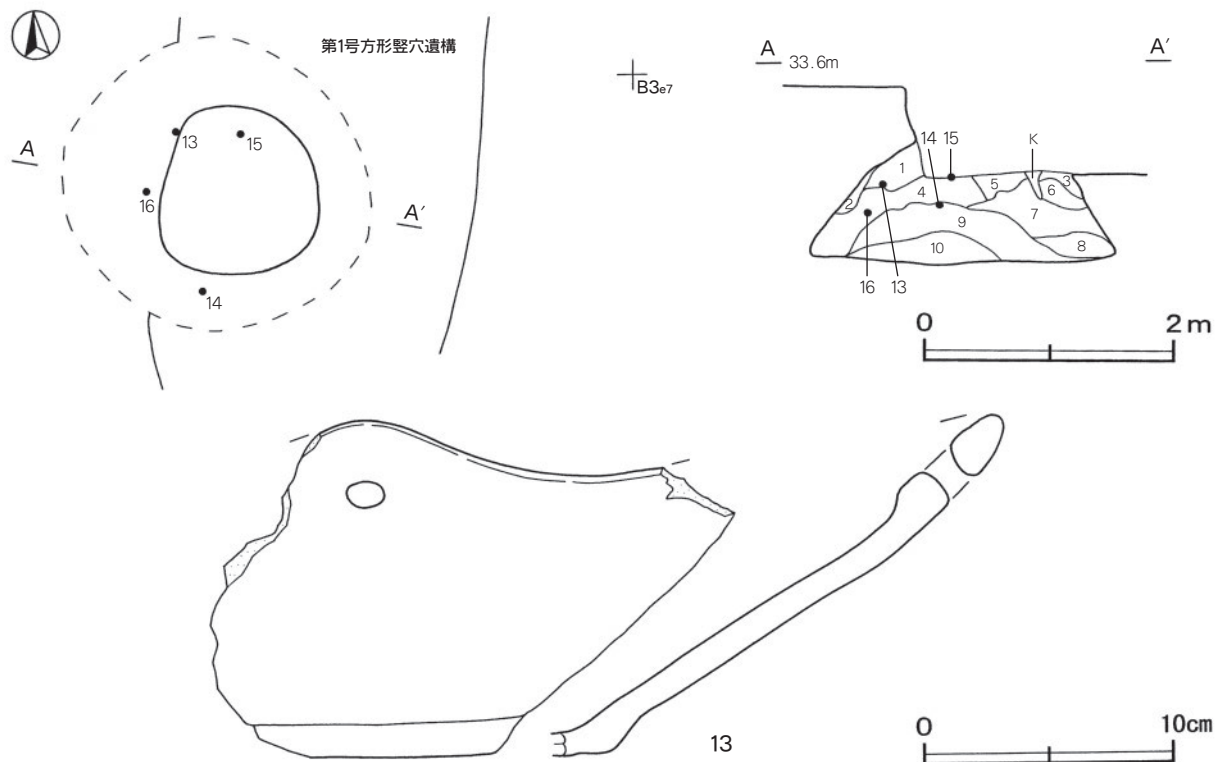
覆土 10層に分層される。最下層である第10層は壁等の崩落土と考えられ，その上位に堆積する第4～9層は炭化粒子や鹿沼パミスを含み，大形の土器片が廃棄されたような状態でまとまって出土していることから，廃棄に伴う人為堆積と考えられる。

土層解説

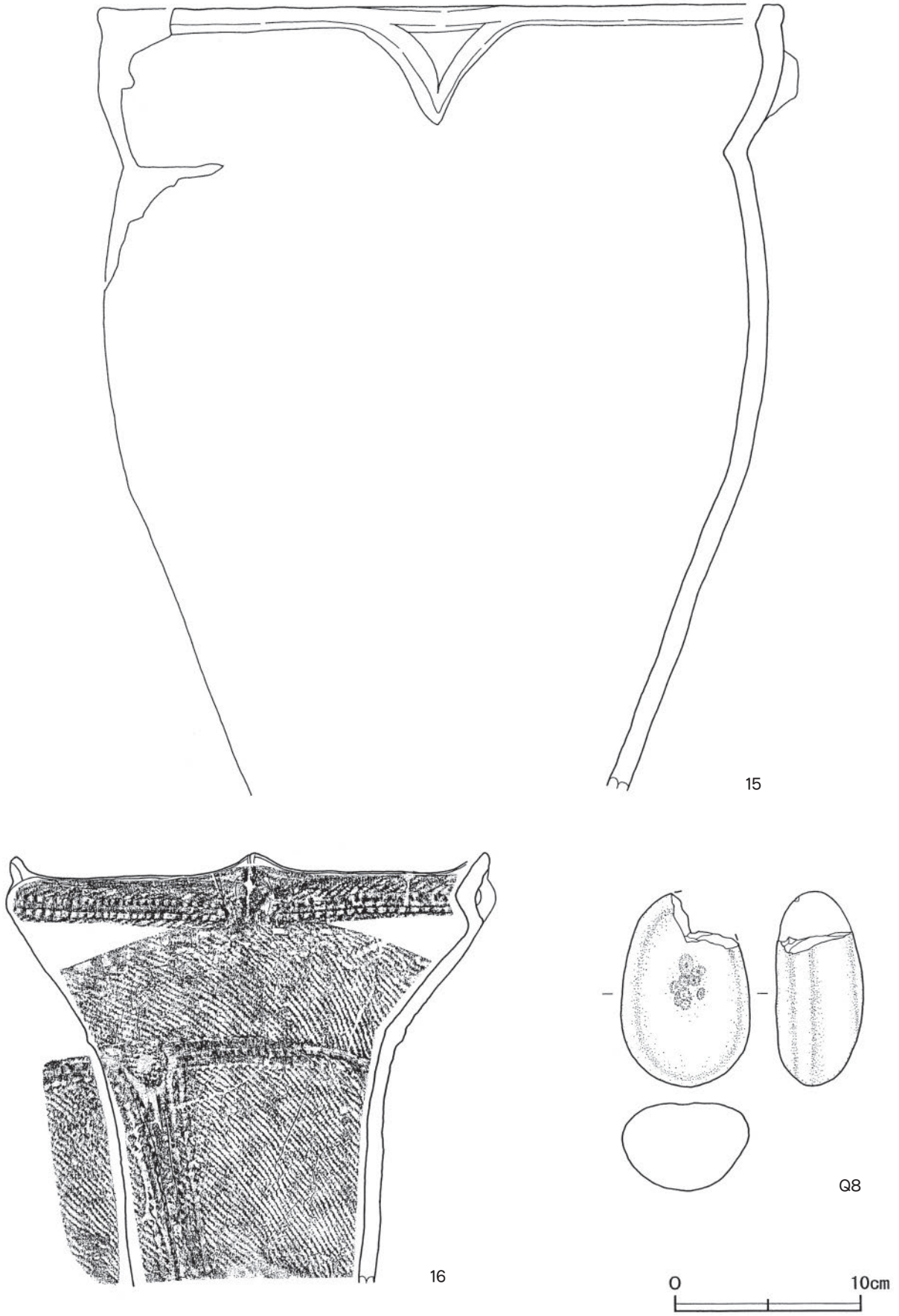
1 灰褐色	ローム粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック少量，炭化粒子・鹿沼パミス微量
2 灰褐色	ローム粒子少量	7 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量
3 灰褐色	ロームブロック微量	8 黒褐色	ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量
4 黒褐色	ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量	9 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量
5 褐色	ロームブロック少量，焼土粒子・炭化粒子微量	10 暗褐色	ローム粒子多量

遺物出土状況 縄文土器片123点，石器1点（磨石）が覆土下層を中心に出土している。13は北西部の覆土中層，15は北部の覆土上層，16は西部の覆土中層から出土している。14は第9層の上面から散在した状態で出土した土器片が接合されたもので，廃絶に伴って廃棄されたものと推測される。15は本跡から西へ32mの距離に位置する第21号土坑の覆土下層から出土した土器片と接合関係にある。

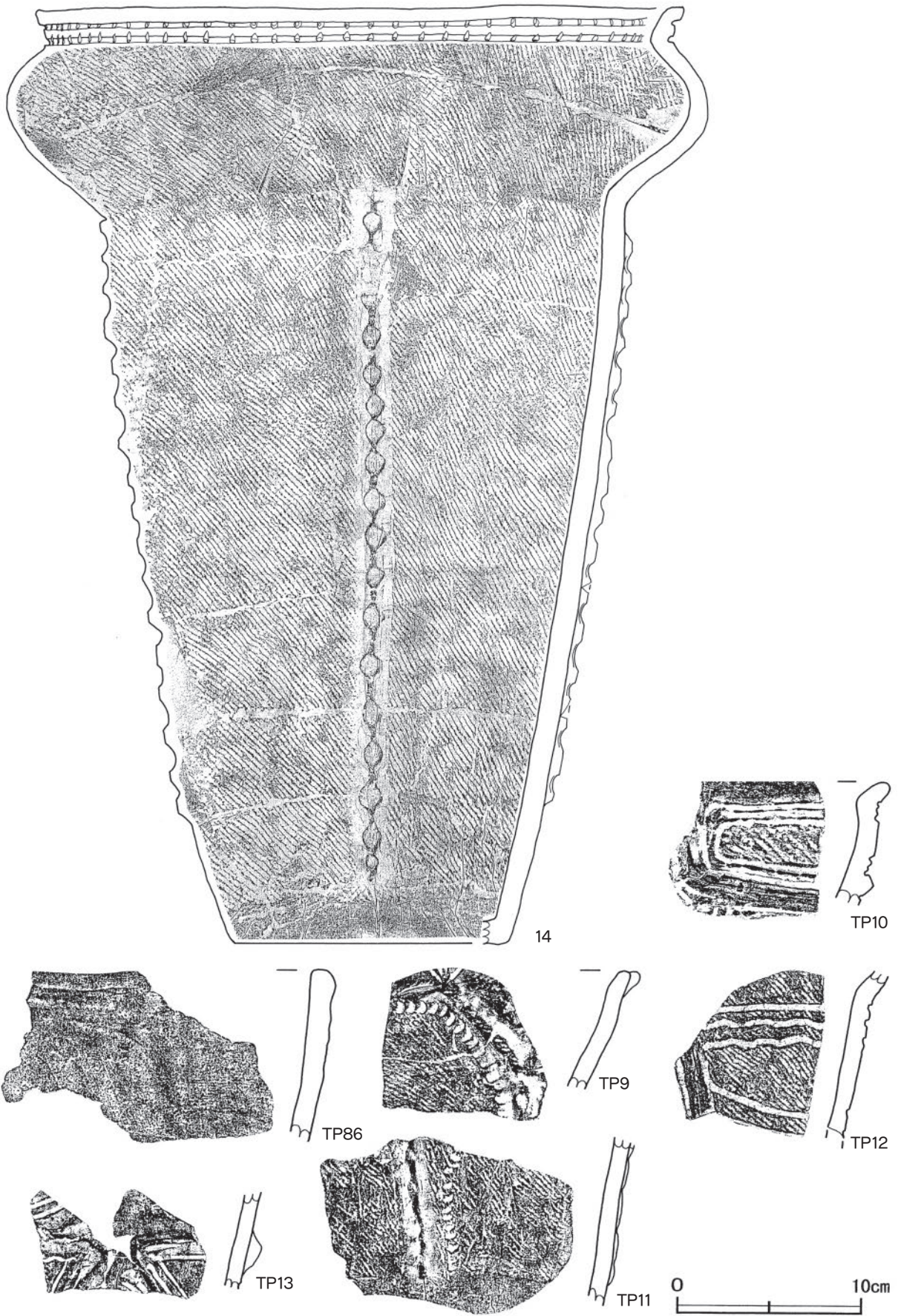
所見 時期は，出土土器から中期中葉と考えられる。同一の土器の遺構間接合が確認されたことから，本跡と第21号土坑は同時期に開口していた可能性が高い。



第11図 第14号土坑・出土遺物実測図



第12図 第14号土坑出土遺物実測図(1)



第13図 第14号土坑出土遺物実測図(2)

第14号土坑出土遺物観察表（第12・13図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
13	縄文土器	浅鉢	[41.6]	13.4	[10.7]	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	円孔を有する波状口縁 胴部無文	北西部中層	20%
14	縄文土器	深鉢	34.9	50.7	15.0	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	口辺部に2条の平行沈線施文後 細い円形竹管による刺突 胴部無節 縄文施文後 隆帯貼付・押圧	南部中層	90% PL8
15	縄文土器	深鉢	36.8	(42.3)	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	口唇部肥厚 口縁部に隆帯によるV字状文を4か所貼付 胴部無文	北部上層	60%
16	縄文土器	深鉢	25.4	(23.2)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	地文に無節縄文4単位の小波状口縁 波頂部下に橋状把手 頸部と胴部を隆帯で区画 環状の粘土瘤貼付	西部中層	60% PL6

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP9	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	無節縄文地文 弧状の隆帯に沿う結節沈線文	覆土中	
TP10	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	区画内に無節縄文施文後 隆帯に沿って平行沈線文	覆土中	
TP11	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	無節縄文を地文とし 隆帯貼付後押圧 結節沈線文施文	覆土中	
TP12	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	黒褐	普通	無節縄文施文後 結節沈線により蛇行・弧状文施文	覆土中	
TP13	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	隆帯に沿う平行沈線文	覆土中	
TP86	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい黄橙	普通	無文	覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q8	磨石	(10.5)	7.1	4.7	(443)	角閃石片麻岩カ	一部欠損 被熱痕 側縁に使用痕	覆土中	80%

第19号土坑（第14図）

位置 調査区西部のB 2 d7区，標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は，径1.2mほどの円形である。底面はほぼ平坦で，径1.7mの円形を呈している。深さは70cmで，壁は底面から大きく内傾し，くびれ部から外傾して立ち上がっている。底面からくびれ部までの高さは45cmである。

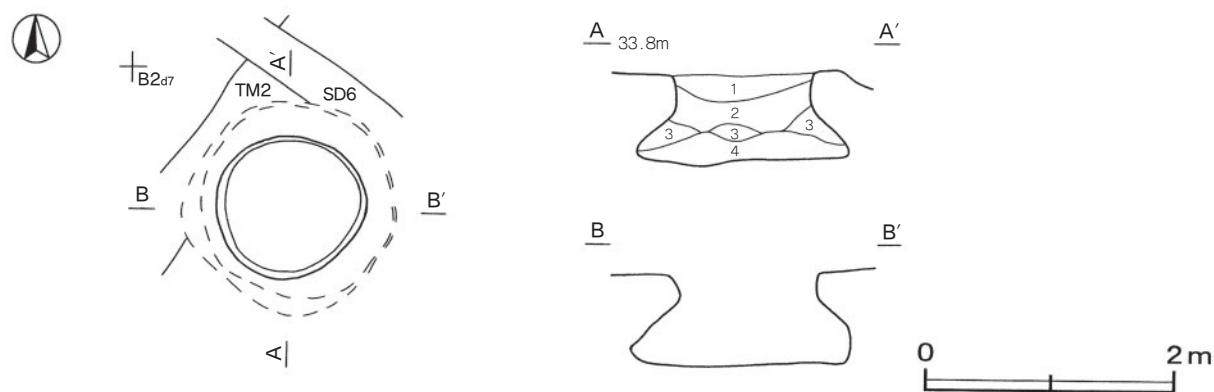
覆土 4層に分層される。ロームブロックを含んだ堆積状況から人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|-------|-------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土粒子微量 | 3 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量，炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量，鹿沼パミス微量 |

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は，遺構の形状や周囲の様相から中期と考えられる。



第14図 第19号土坑実測図

第20号土坑（第15図）

位置 調査区西部のB 2 d5区，標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は，不明である。底面はほぼ平坦で，平面形は径2.2mの円形である。深さは62～80cmで，壁は底面から大きく内傾し，くびれ部に至っている。

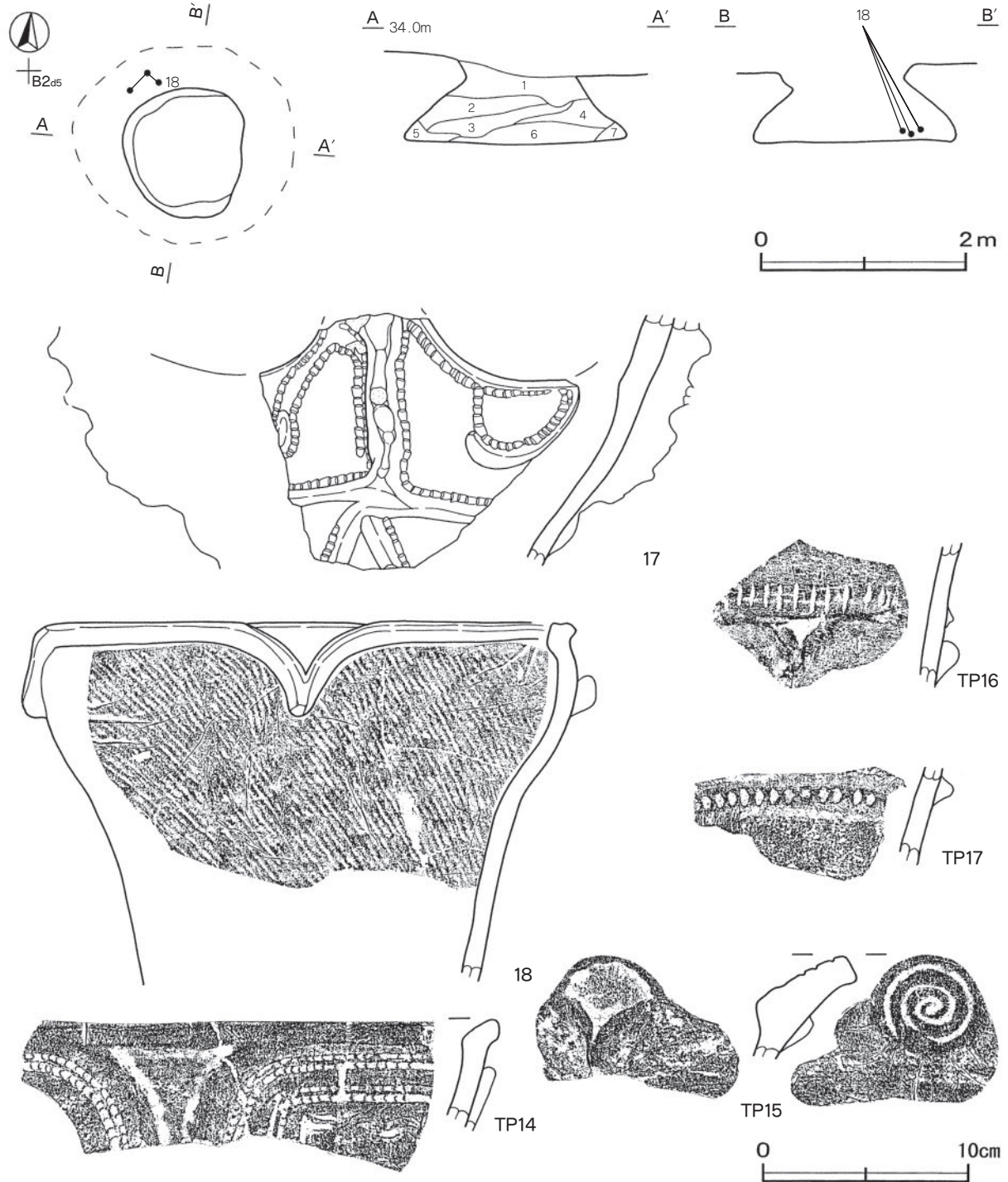
覆土 7層に分層される。焼土粒子や炭化粒子を含み、不自然な堆積状況を示した人為堆積と考えられる。

土層解説

1 暗褐色	ローム粒子・鹿沼パミス中量, 焼土粒子・炭化粒子微量	4 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子少量, 鹿沼パミス微量
3 黒褐色	ローム粒子中量, 炭化物微量	6 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・鹿沼パミス微量
		7 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量

遺物出土状況 縄文土器片47点が出土している。17・TP14～TP17は覆土下層, 18は底面からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。



第15図 第20号土坑・出土遺物実測図

第20号土坑出土遺物観察表（第15図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
17	縄文土器	深鉢	—	(12.1)	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	波頂部から押圧文を加えた隆帯を貼付区画内を結節沈線文と隆帯で文様描出	覆土下層	
18	縄文土器	深鉢	[25.3]	(17.3)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部に隆帯によるV字状文無節縄文施文	底面	30%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP14	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	隆帯による区画内に結節沈線文と波状文で文様描出	覆土下層	
TP15	縄文土器	鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	波頂部外面にV字状の貼付文 内面に渦巻状の貼付文	覆土下層	
TP16	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	V字状の貼付文 キザミ目	覆土下層	
TP17	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	断面三角形の隆帯に縄文原体押圧	覆土下層	

第21号土坑（第16～19図）

位置 調査区西部のB 2 c8区，標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は，長径1.2m，短径1.0mの楕円形である。底面はほぼ平坦で，長径2.7m，短径2.5mの楕円形を呈している。深さは90～106cmで，壁は底面から大きく内傾し，くびれ部から外傾して立ち上がっている。底面からくびれ部までの高さは76～88cmである。

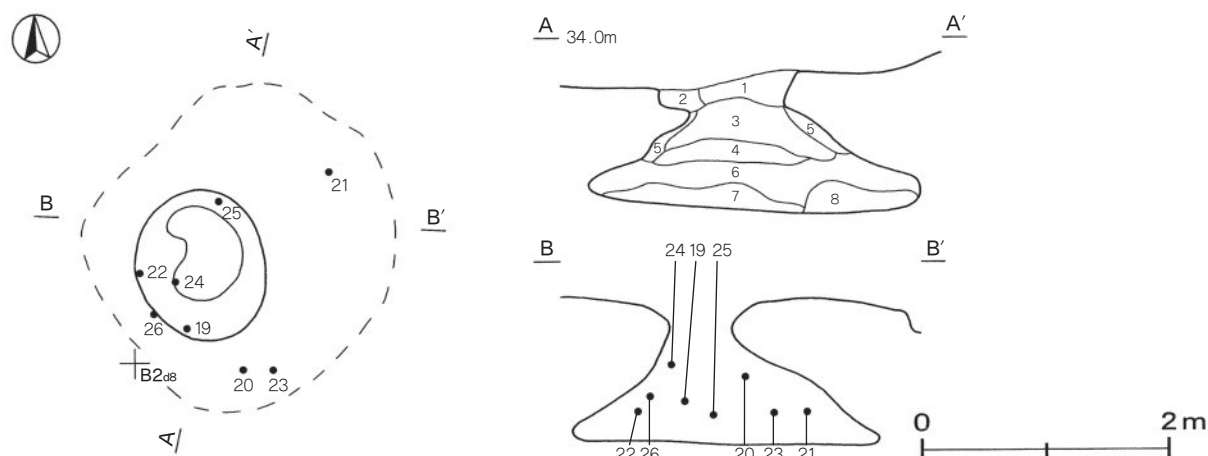
覆土 8層に分層される。全体的に焼土や炭化物，鹿沼パミスを多く含み，大形の土器片が覆土下層を中心に廃棄されたような状態で出土していることから，廃棄に伴う人為堆積と考えられる。

土層解説

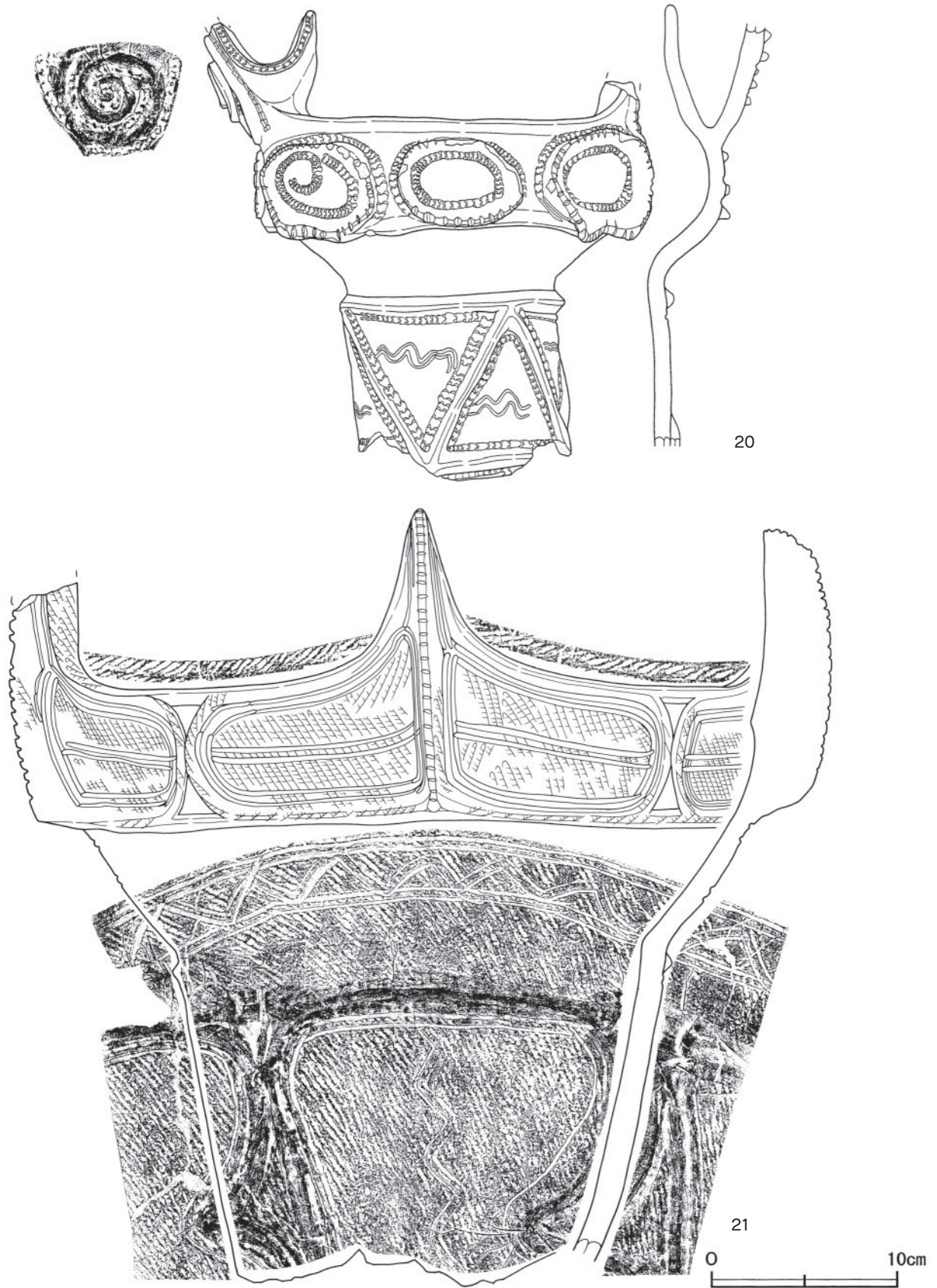
- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|---------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス微量 | 6 極暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック微量 | 7 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量 |
| 3 黒褐色 | 鹿沼パミス少量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | 炭化粒子少量，ローム粒子・焼土粒子・鹿沼パミス微量 |
| 4 極暗褐色 | 鹿沼パミス中量，ローム粒子・炭化粒子少量 | | |
| 5 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子・鹿沼パミス微量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片151点，石皿1点が，覆土下層を中心に出土している。19～21・25はいずれも完形に近い状態で，覆土下層から出土している。22・23は覆土下層，24は覆土中層から出土している。また，覆土下層から出土した土器片は，第14号土坑から出土した土器（第12図15）と接合している。

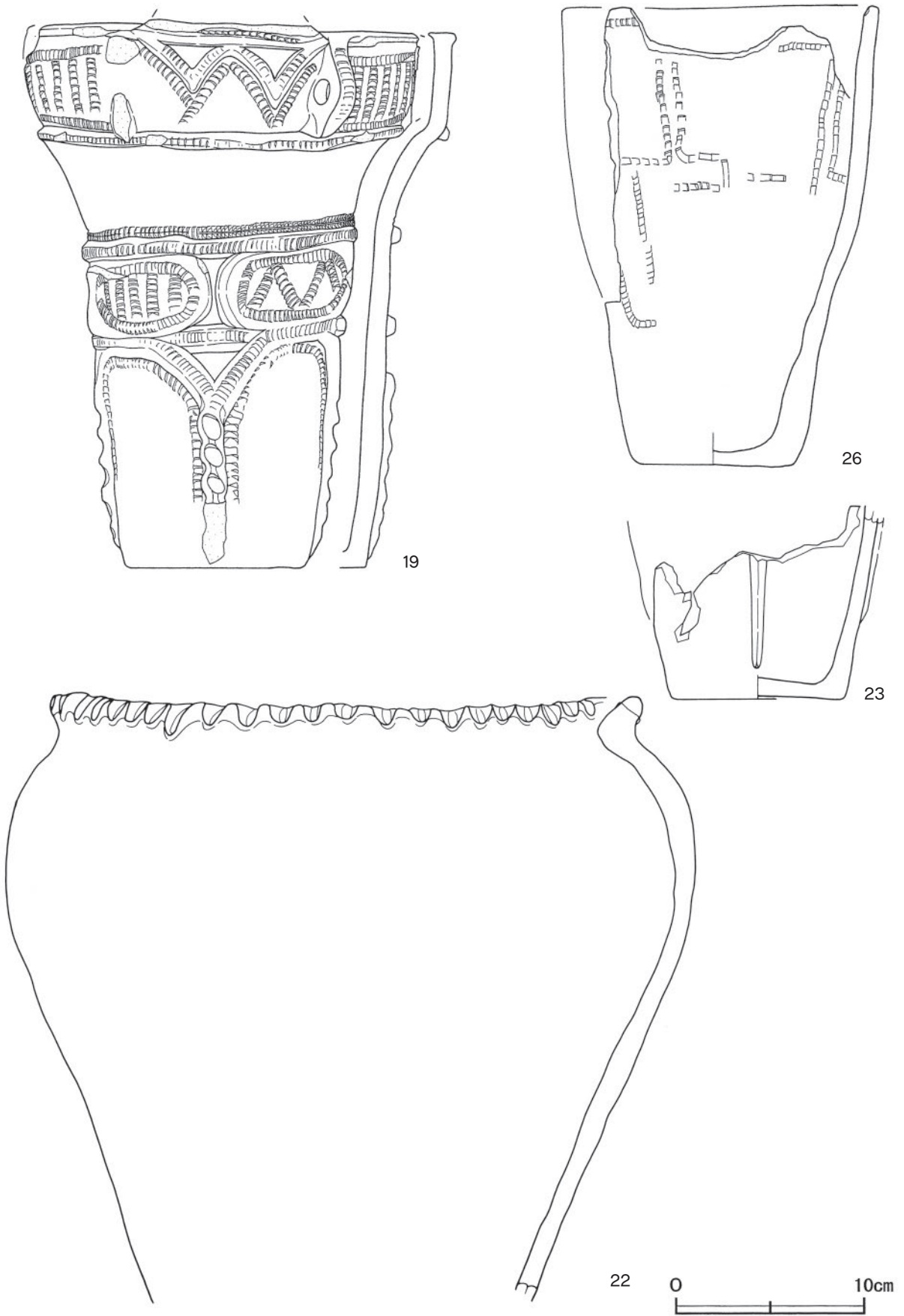
所見 時期は，出土土器から中期中葉と考えられる。本跡と第14号土坑は，同一の土器の遺構間接合が確認され，その他の土器の様相にも類似点が認められることから，同時期に機能していた可能性が示唆される。



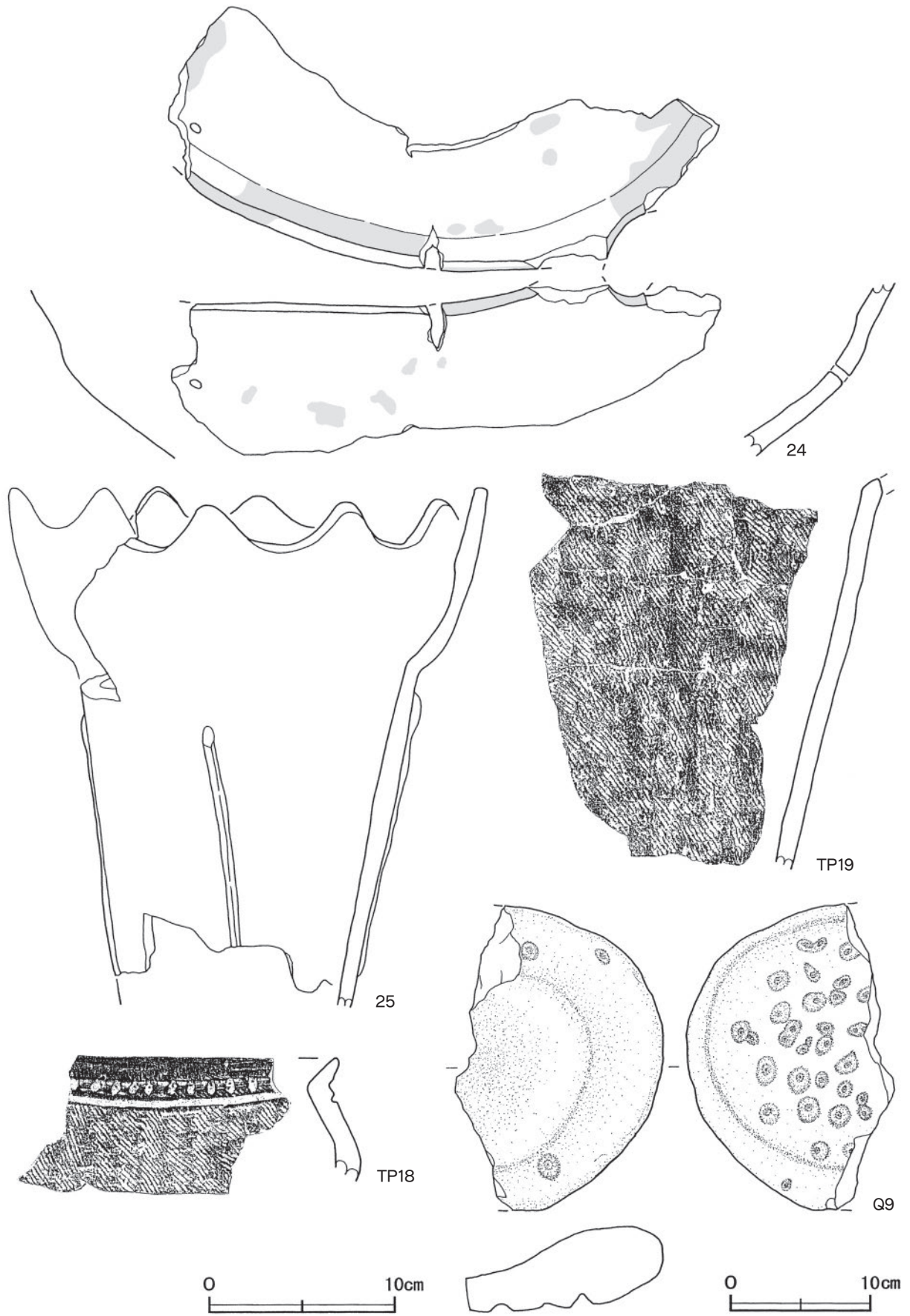
第16図 第21号土坑実測図



第17图 第21号土坑出土遺物实测图(1)



第18图 第21号土坑出土遺物实测图(2)



第19図 第21号土坑出土遺物実測図(3)

第21号土坑出土遺物観察表（第17～19図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
19	縄文土器	深鉢	22.8	(29.8)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	橋状把手を5か所に配し区画内を結節沈線文で文様描出 胴部を隆帯と結節沈線文で文様描出	南部下層	90% PL8
20	縄文土器	深鉢	18.8	(25.9)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	渦巻状の隆帯を貼り付けた上方に開口する大形把手2か所 口縁部に8単位の楕円形区画 胴部に三角区画文	南部下層	70% PL6
21	縄文土器	深鉢	39.5	(41.8)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部を4単位の大波状口縁と隆帯によって区画し区画内・胴部を無節縄文・平行沈線文によって文様描出	北東部下層	70% PL7
22	縄文土器	深鉢	31.1	(32.8)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部押圧文 胴部無文	西部下層	70% PL7
23	縄文土器	深鉢	—	(10.4)	9.3	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	胴部に4単位の垂下する隆帯貼付	南部下層	10%
24	縄文土器	浅鉢	—	(9.3)	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	無文 内外面赤彩痕 円孔1か所	南部中層	20%
25	縄文土器	深鉢	25.7	(27.8)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	10単位以上の波状口縁 口縁部無文 胴部に4単位の垂下する隆帯貼付	中央部下層	70% PL8
26	縄文土器	深鉢	[17.0]	24.7	8.5	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	胴部にクランク状の結節沈線文施文	南西部下層	30%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q9	石 皿	(22.2)	(14.9)	7.0	(2250)	安山岩	中央が大きく窪む 表面3孔 裏面31孔	覆土中	80% PL10

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP18	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	無節縄文施文後 口辺部に平行沈線と刺突文施文	覆土下層	
TP19	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	無節縄文施文	覆土下層	

第22号土坑（第20・21図）

位置 調査区西部のB 2 c9区，標高33.5mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第7号住居に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は第7号住居に掘り込まれているために一部が残存するだけであり，詳細は不明である。底面はほぼ平坦で，平面形は径2.4mの円形である。深さは95cmで，壁は底面から内傾して立ち上がり，中位で強く屈曲し，開口部は緩やかに外反している。底面からくびれ部までの高さは55cmである。

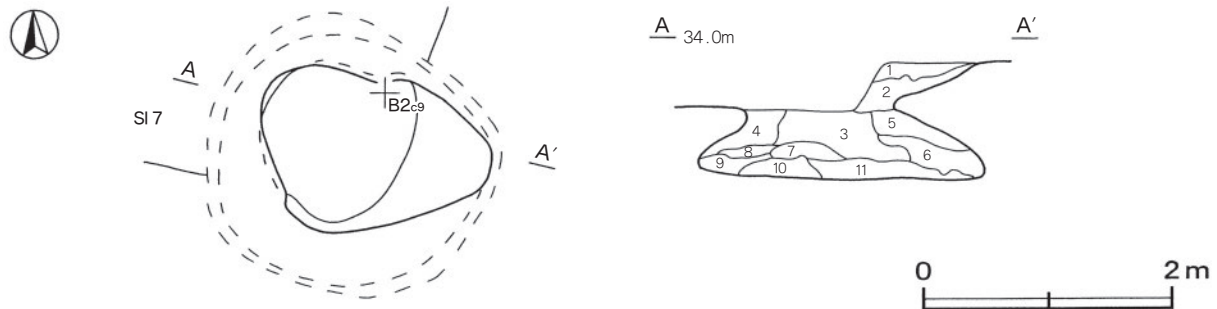
覆土 11層に分層される。全体的に焼土や炭化物，鹿沼パミスを多く含み，ブロック状の堆積状況を示していることから，人為堆積と考えられる。

土層解説

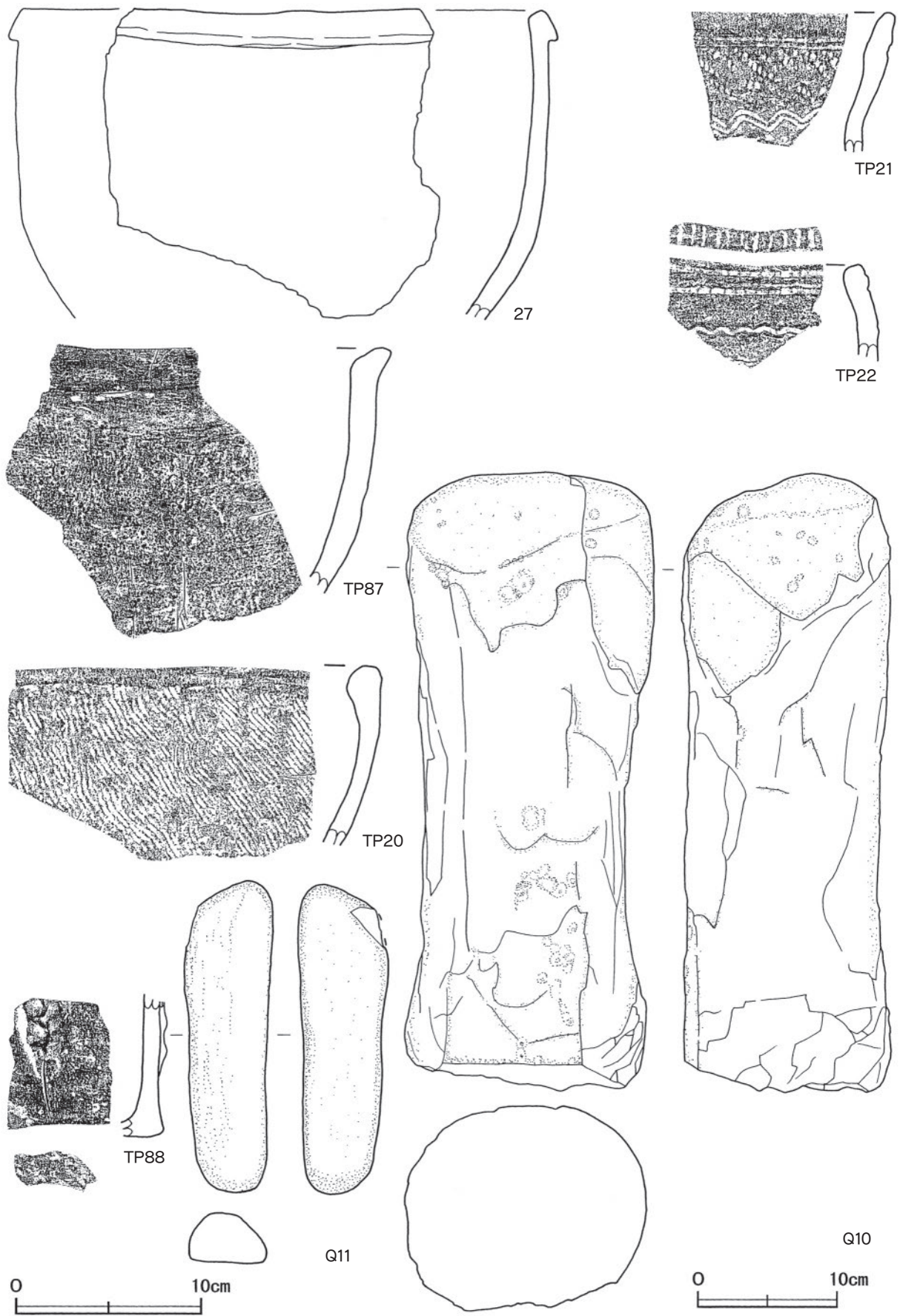
1	黒褐色	ロームブロック少量	7	褐色	ローム粒子中量，炭化物・焼土粒子・鹿沼パミス微量
2	褐色	ロームブロック多量	8	暗褐色	ロームブロック少量，炭化粒子微量
3	黒褐色	ローム粒子・炭化粒子少量，焼土粒子微量	9	暗褐色	ローム粒子少量，炭化粒子・鹿沼パミス微量
4	黒褐色	ローム粒子・炭化物少量，焼土粒子微量	10	褐色	ローム粒子中量，炭化物微量
5	黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量，焼土粒子・鹿沼パミス微量	11	黒褐色	ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子・鹿沼パミス微量
6	黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量			

遺物出土状況 縄文土器片69点，石器・石製品2点（敲石，石棒）が出土している。27・TP20・TP22は覆土下層，Q10は覆土中層，TP21は覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は，出土土器から中期中葉と考えられる。Q10の出土は，集落内において祭祀的な行為が行われていたことをうかがわせるものである。



第20図 第22号土坑実測図



第21図 第22号土坑出土遺物実測図

第22号土坑出土遺物観察表 (第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
27	縄文土器	深鉢	[28.4]	(16.8)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	無文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q10	石棒	44.8	18.0	15.5	(18.4kg)	流紋岩	表面は著しい風化 先端部のみ表面残存	覆土中層	90% PL10
Q11	敲石	16.8	4.8	2.1	(390)	角閃石片麻岩	両端を使用 石質に角閃石と斜長石を含む	覆土中	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP20	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	無節縄文施文	覆土下層	
TP21	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	単節縄文施文後 結節沈線文 平行沈線による波状文施文	覆土上層	
TP22	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口辺部に結節沈線文 平行沈線による波状文施文	覆土下層	
TP87	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	無文	覆土下層	
TP88	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	押圧を加えた隆帯貼付	覆土上層	

第30号土坑 (第22図)

位置 調査区西部のB 2 c6区, 標高33.5mほどの台地の平坦部に位置している。

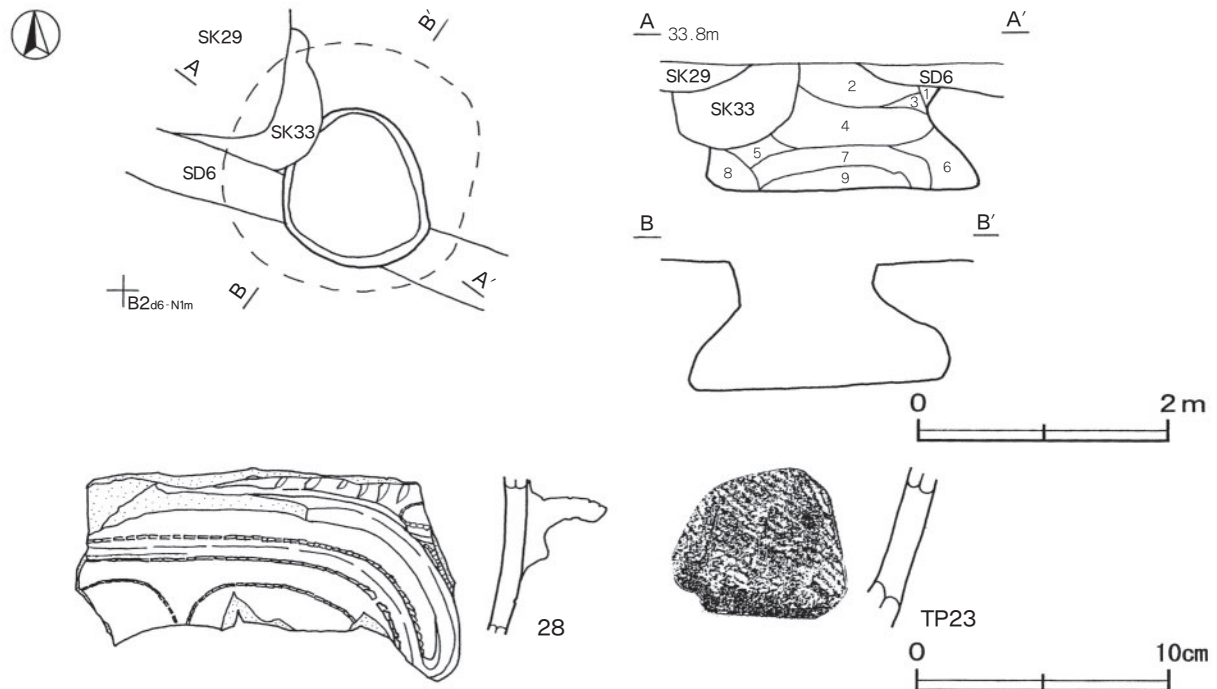
重複関係 第6号溝, 第29・33号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は, 残存する北側部分の形状から, 径1.2mほどの円形又は楕円形と推測される。底面はほぼ平坦で, 平面形は径2.1mの円形である。深さは95~100cmで, 壁は底面から大きく内傾し, くびれ部から外傾して立ち上がっている。底面からくびれ部までの高さは60~78cmである。

覆土 9層に分層される。全体的に焼土や炭化物, 鹿沼パミスを含む層が多く, ブロック状の堆積状況を示していることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------------------|-------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | ロームブロック中量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子・鹿沼パミス微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化物・鹿沼パミス微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子・鹿沼パミス微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量 | 9 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量 |
| 5 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・鹿沼パミス微量 | | |



第22図 第30号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片10点が出土している。28・TP23は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。

第30号土坑出土遺物観察表（第22図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
28	縄文土器	深鉢	—	(8.3)	—	雲母・長石・石英	橙	普通	突出する隆帯による区画内を単列の結節沈線文によって文様描出	覆土下層	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP23	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	無節縄文施文	覆土下層	

第32号土坑（第23図）

位置 調査区西部のB 3 e3区で、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

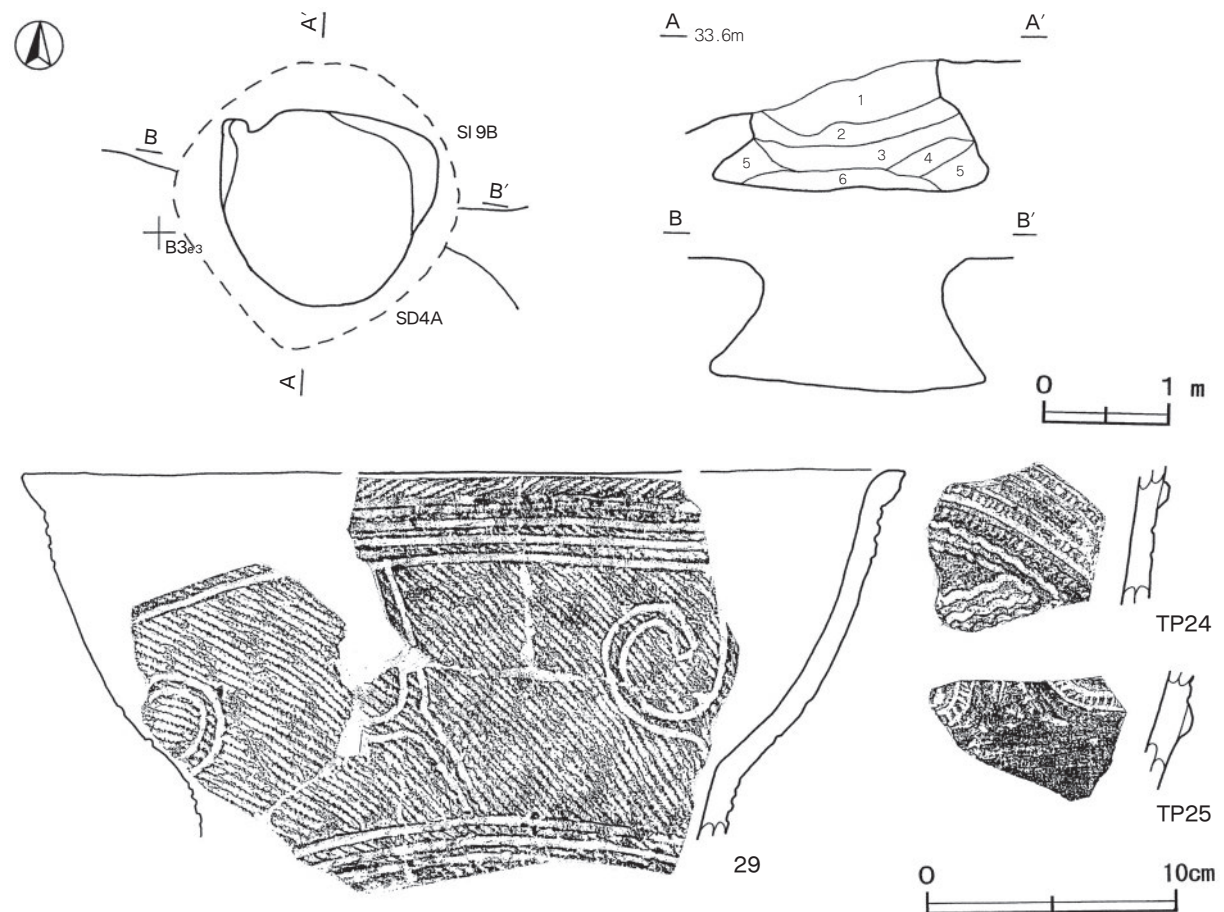
重複関係 第9 B号住居・第4 A号溝に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は、第4 A号溝に掘り込まれているため不明である。底面はほぼ平坦で、平面形は径2.2mの円形である。深さは105cmで、壁は底面から内傾して立ち上がり、くびれ部に至っている。

覆土 6層に分層される。レンズ状に堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、鹿沼パミス微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼パミス少量 |



第23図 第32号土坑・出土遺物実測図

遺物出土状況 縄文土器片5点が出土している。29・TP24・TP25は覆土下層から出土している。TP24・TP25は文様や胎土の特徴から、第12号土坑の覆土下層から出土しているTP5及び第37号土坑の覆土下層から出土しているTP29・TP30と同一個体と考えられる。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。同一個体と考えられる土器が他の土坑からも出土していることから、これらの土坑は同時期に開口していたことが考えられる。

第22号土坑出土遺物観察表（第23図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
29	縄文土器	深鉢	[35.4]	(14.8)	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	単節縄文を地文とし 頸部と胴部の境を沈線で区画 複列の結節沈線で文様を描出	覆土下層	
TP24	縄文土器	深鉢				長石・石英・雲母	黒褐	普通	波状文と2条の平行沈線内にキザミ目を充填し 文様描出	覆土下層	
TP25	縄文土器	深鉢				長石・石英・雲母	褐灰	普通	2条の平行沈線内にキザミ目を充填	覆土下層	

第35号土坑（第24・25図）

位置 調査区西部のB 2 d4区、標高33.5mほどの台地の平坦部に位置している。

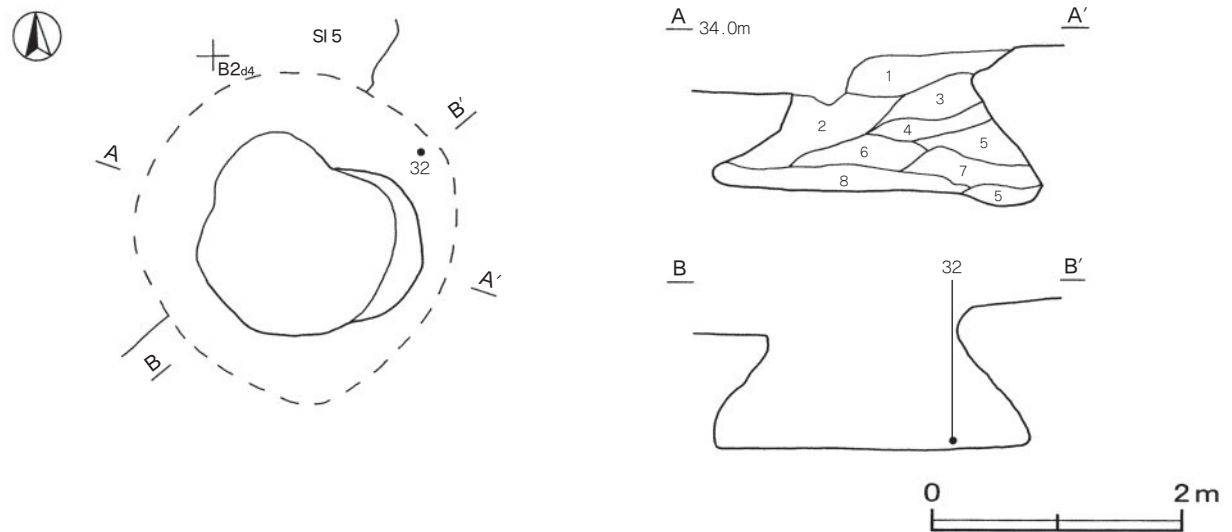
重複関係 第5号住居に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は、第5号住居に掘り込まれているため、一部が残存するだけであり、全容は不明である。底面はほぼ平坦で、平面形は径2.5mの円形である。深さは105cmで、壁は底面から内傾して立ち上がり、中位で屈曲し、開口部は大きく外方に開いている。底面からくびれ部までの高さは、90cmである。

覆土 8層に分層される。第5層は、壁の崩落土と考えられる。その他の層は焼土や炭化物を含み、第8層上面からは大形の土器片が廃棄された状態で多く出土していることや、東側から投げ込まれた堆積状況などから、廃棄に伴った人為堆積と考えられる。

土層解説

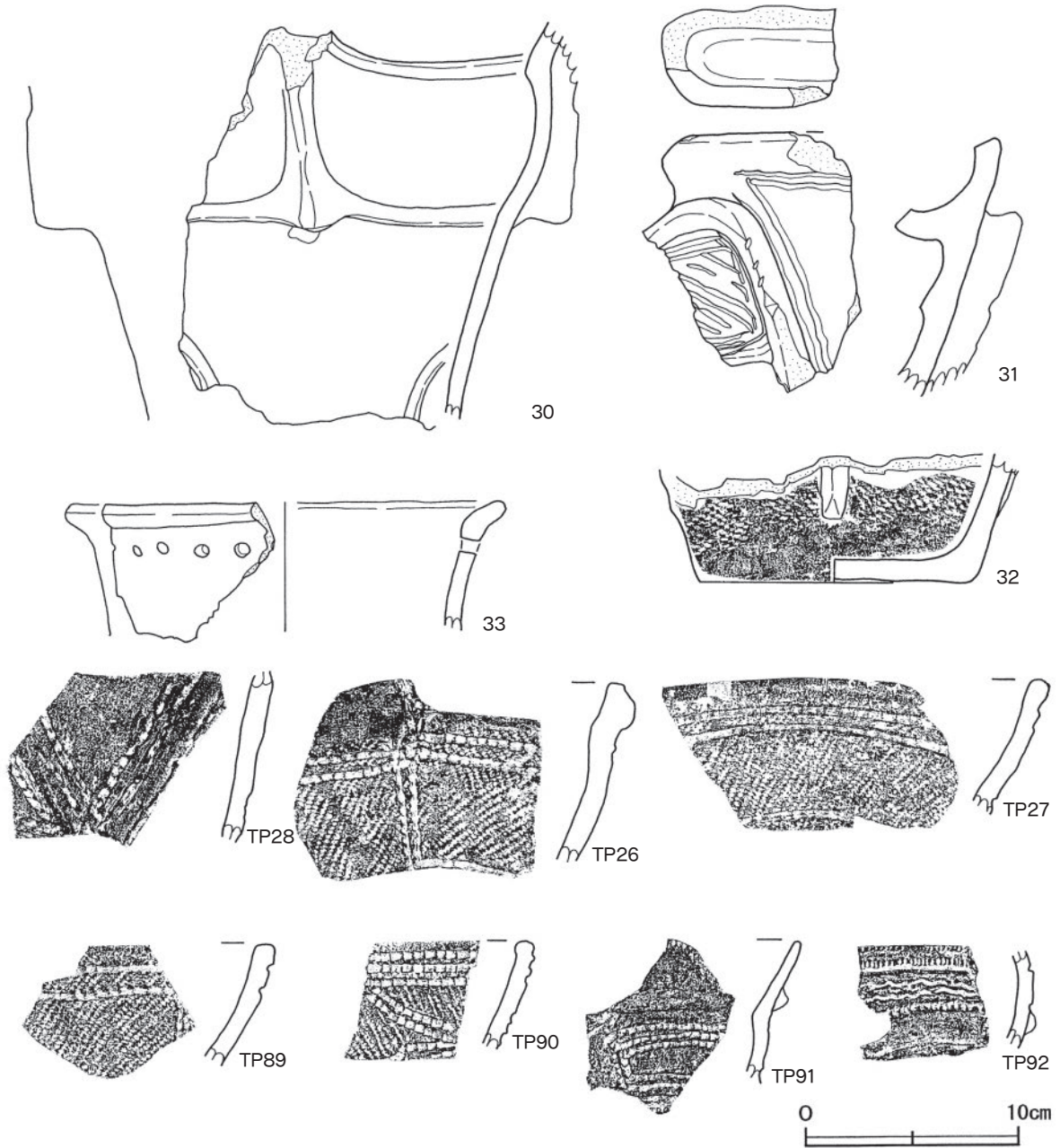
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|------------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化物微量 | 6 黒褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子少量，炭化物・焼土粒子・鹿沼パミス微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック少量，焼土ブロック・炭化物・鹿沼パミス微量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量 | | |
| 5 褐色 | ローム粒子多量 | | |



第24図 第35号土坑実測図

遺物出土状況 縄文土器片140点が出土している。30～33・TP26～TP28は、いずれも覆土下層にあたる第8層の上面から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第25図 第35号土坑出土遺物実測図

第35号土坑出土遺物観察表（第25図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
30	縄文土器	深鉢	—	(18.9)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部区画文の接点部が突起状に隆起 胴部に湾曲する隆帯貼付	覆土下層	30%
31	縄文土器	深鉢	—	(12.7)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口唇部に受け皿状の突起 口縁部区画内を沈線で充填	覆土下層	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
32	縄文土器	深鉢	—	(6.0)	12.8	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	単節縄文施文	北東部下層	10%
33	縄文土器	鉢	[20.2]	(6.1)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	無文地に円孔を横位に配す	覆土下層	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP26	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文施文後 複列の結節沈線文をクランク状に施文	覆土下層	
TP27	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文施文後 複列の結節沈線文施文	覆土下層	
TP28	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	隆帯に沿って複列の結節沈線文施文	覆土下層	
TP89	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	単節縄文施文後 口辺部に複列の結節沈線文施文	覆土下層	
TP90	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	単節縄文施文後 2～3列の結節沈線文施文	覆土下層	
TP91	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	波状口縁 口唇部にキザミ目 3列の結節沈線文施文	覆土下層	
TP92	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	口辺部にキザミ目 隆帯に沿って結節沈線文 区画内に平行沈線文	覆土下層	

第37号土坑（第26図）

位置 調査区西部のB 2 d8区、標高33.5mほどの台地の平坦部に位置している。

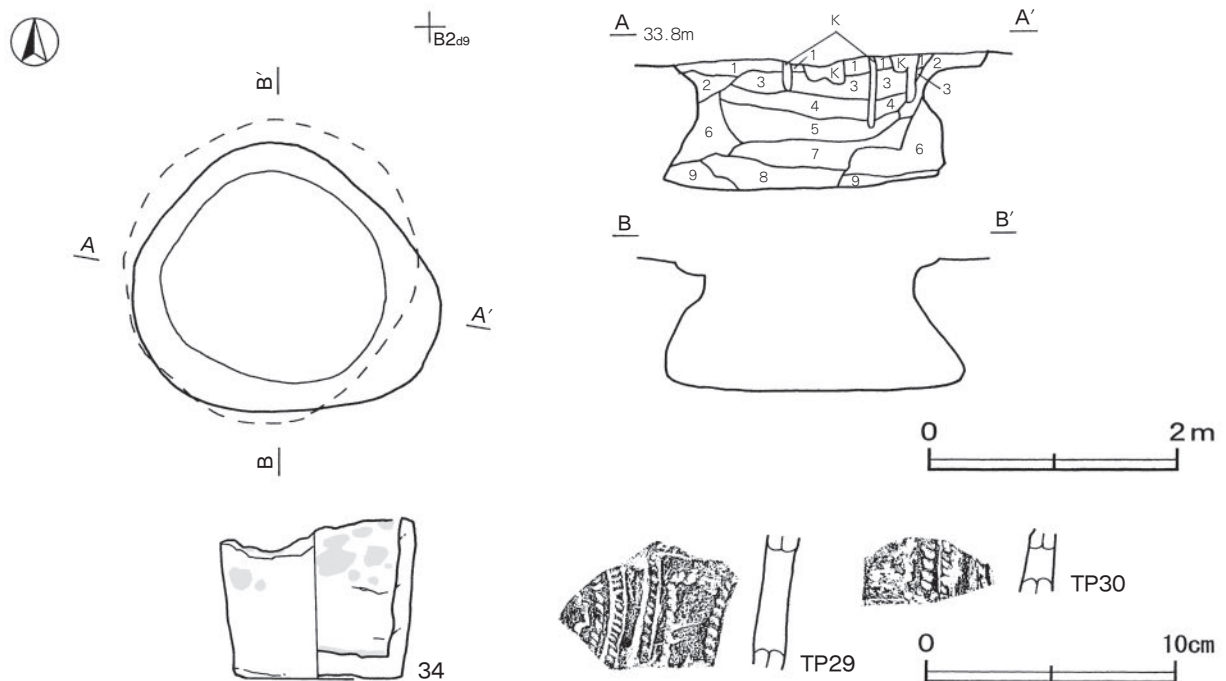
規模と形状 開口部は、長径2.5m、短径2.2mの楕円形である。底面はほぼ平坦で、径2.4mほどの円形を呈している。深さは100～105cmで、壁は底面からわずかに内傾して立ち上がり、開口部で外方に大きく開いている。底面からくびれ部までの高さは55～60cmである。

覆土 9層からなる。第2・6層は壁の崩落土と考えられる。その他の層は、水平に堆積した自然堆積である。

土層解説

1 黒褐色	ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量	6 褐色	ロームブロック多量、炭化粒子微量
2 暗褐色	ロームブロック多量	7 極暗褐色	ロームブロック少量
3 黒褐色	ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量	8 暗褐色	ロームブロック少量
4 極暗褐色	ローム粒子少量、炭化粒子微量	9 極暗褐色	ロームブロック・鹿沼バミス少量
5 黒褐色	ロームブロック・炭化粒子少量		

遺物出土状況 縄文土器片26点が出土している。34・TP29・TP30は、覆土下層から出土している。TP29・TP30は、文様や胎土の特徴から、第12号土坑の覆土下層から出土したTP5、第32号土坑の覆土下層から出土したTP24・TP25と同一個体と考えられる。



第26図 第37号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。土層断面から壁の崩落土が確認されており、くびれ部の壁が崩落したことによって他の土坑と形状に違いが生じていると考えられる。

第37号土坑出土遺物観察表（第26図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
34	縄文土器	鉢	[7.1]	6.4	6.7	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	無文 内外面赤彩痕 内面輪積み痕	覆土下層	80%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP29	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	隆帯に沿って平行沈線を配し、キザミ目を充填	覆土下層	
TP30	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	隆帯に沿って平行沈線を配し、キザミ目を充填	覆土下層	

第38号土坑（第27～29図）

位置 調査区西部のB 2 c4区、標高33.5mほどの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 開口部は、長径2.2m、短径1.8mの楕円形である。底面はほぼ平坦で、平面形は径2.5mの円形である。深さは100～115cmで、壁は底面から大きく内傾し、くびれ部から緩やかに外傾して立ち上がっている。底面からくびれ部までの高さは45～65cmである。

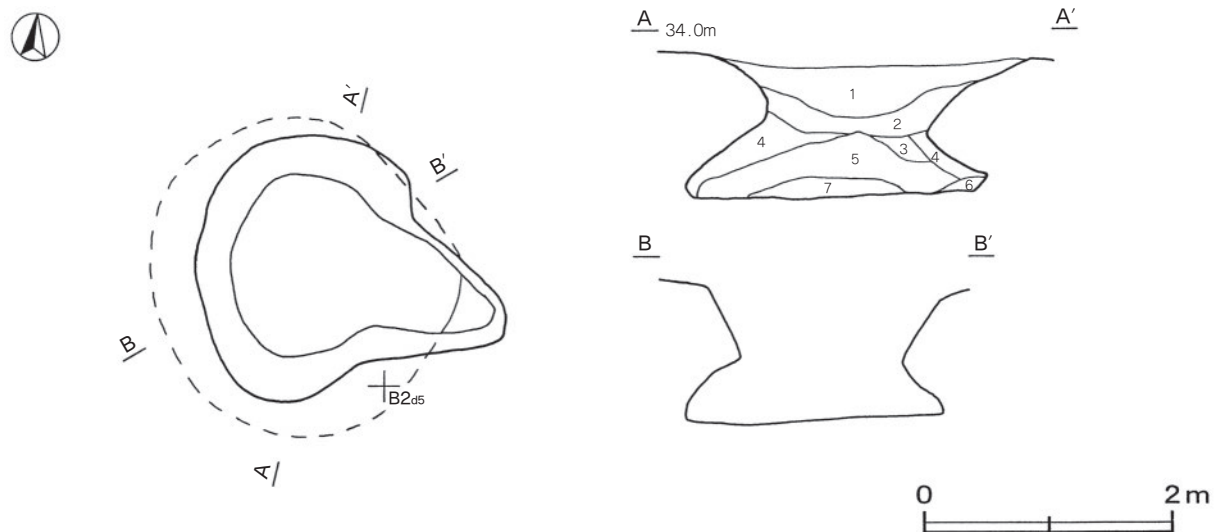
覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

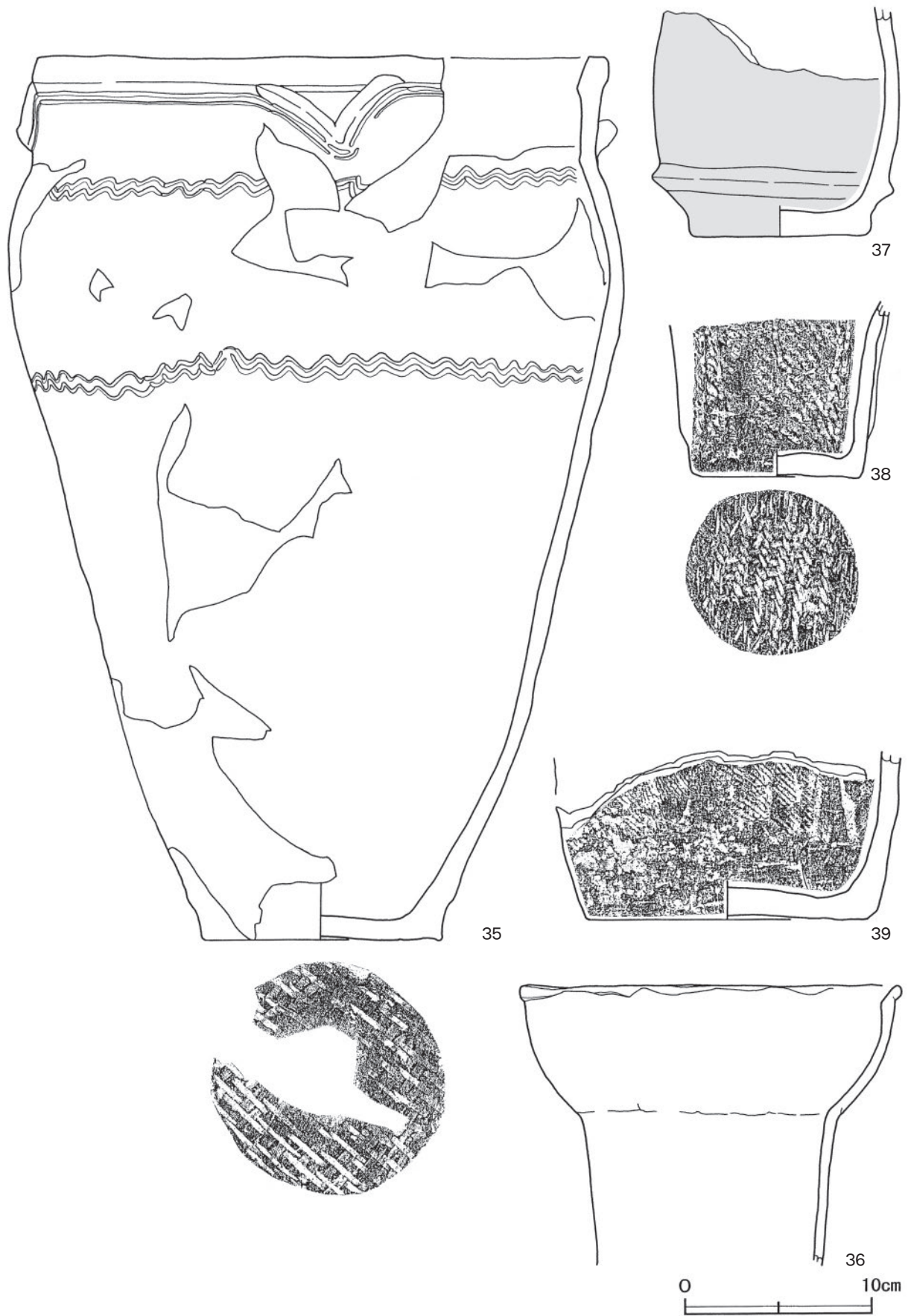
- | | | | |
|-------|-------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス微量 | 6 黒褐色 | 鹿沼バミス少量、ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子微量 | 7 黒褐色 | ローム粒子・鹿沼バミス少量 |
| 4 黒褐色 | ローム粒子少量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片143点が出土している。35～37・39・TP31は覆土下層から出土している。TP31は、文様や胎土の特徴から、第12号土坑の覆土下層から出土したTP3、第65号土坑の覆土下層から出土したTP35と同一個体と考えられる。

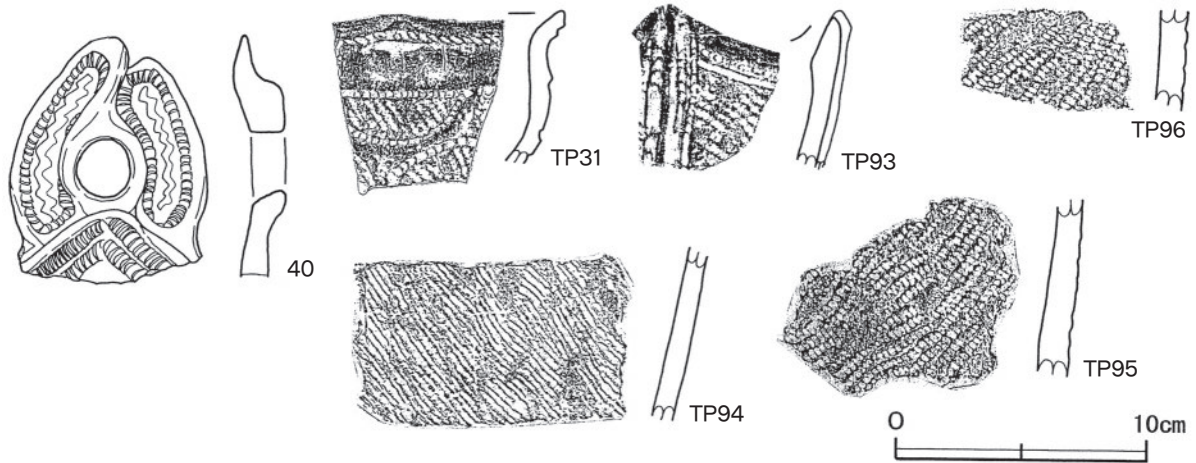
所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。同一個体と考えられる土器片が他の土坑からも出土していることから、これらの土坑は同時期に開口していたことが考えられる。



第27図 第38号土坑実測図



第28図 第38号土坑出土遺物実測図(1)



第29図 第38号土坑出土遺物実測図(2)

第38号土坑出土遺物観察表 (第28・29図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
35	縄文土器	深鉢	[30.4]	47.3	[12.5]	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	V字状貼付文 半截竹管による波状沈線文	覆土下層	80% PL7
36	縄文土器	深鉢	[20.4]	(15.0)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	無文	覆土下層	20%
37	縄文土器	深鉢	—	(12.2)	9.5	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	胴部下位に断面三角形の隆帯貼り付け 外面赤彩	覆土下層	
38	縄文土器	深鉢	—	(9.4)	9.1	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	無節縄文施文後 隆帯貼り付け 複列の結節沈線文	覆土中	
39	縄文土器	深鉢	—	(9.0)	15.0	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	胴部無節縄文 底部網代痕	覆土下層	
40	縄文土器	浅鉢	—	(9.7)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	円孔を有する把手 結節沈線文と沈線による鋸歯状文	覆土中	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP31	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	口辺部に原体押圧 口縁部区画内に単節縄文充填後 隆帯に沿う結節沈線文施文	覆土下層	
TP93	縄文土器	深鉢	長石・石英	にぶい橙	普通	波頂部から垂下する隆帯貼付 無節縄文施文後 結節沈線文施文	覆土下層	
TP94	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	黒褐	普通	無節縄文施文	覆土中層	
TP95	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	単節縄文施文	覆土下層	
TP96	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	単節縄文施文 TP95と同一個体か	覆土下層	

第60号土坑 (第30・31図)

位置 調査区西部のB 3e6区, 標高33.5mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第4A号溝・第1号方形竪穴遺構に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は, 第1号方形竪穴遺構に掘り込まれているため, 不明である。底面はほぼ平坦で, 径2.1mの円形である。確認できた深さは85~90cmで, 壁は内傾して立ち上がっている。

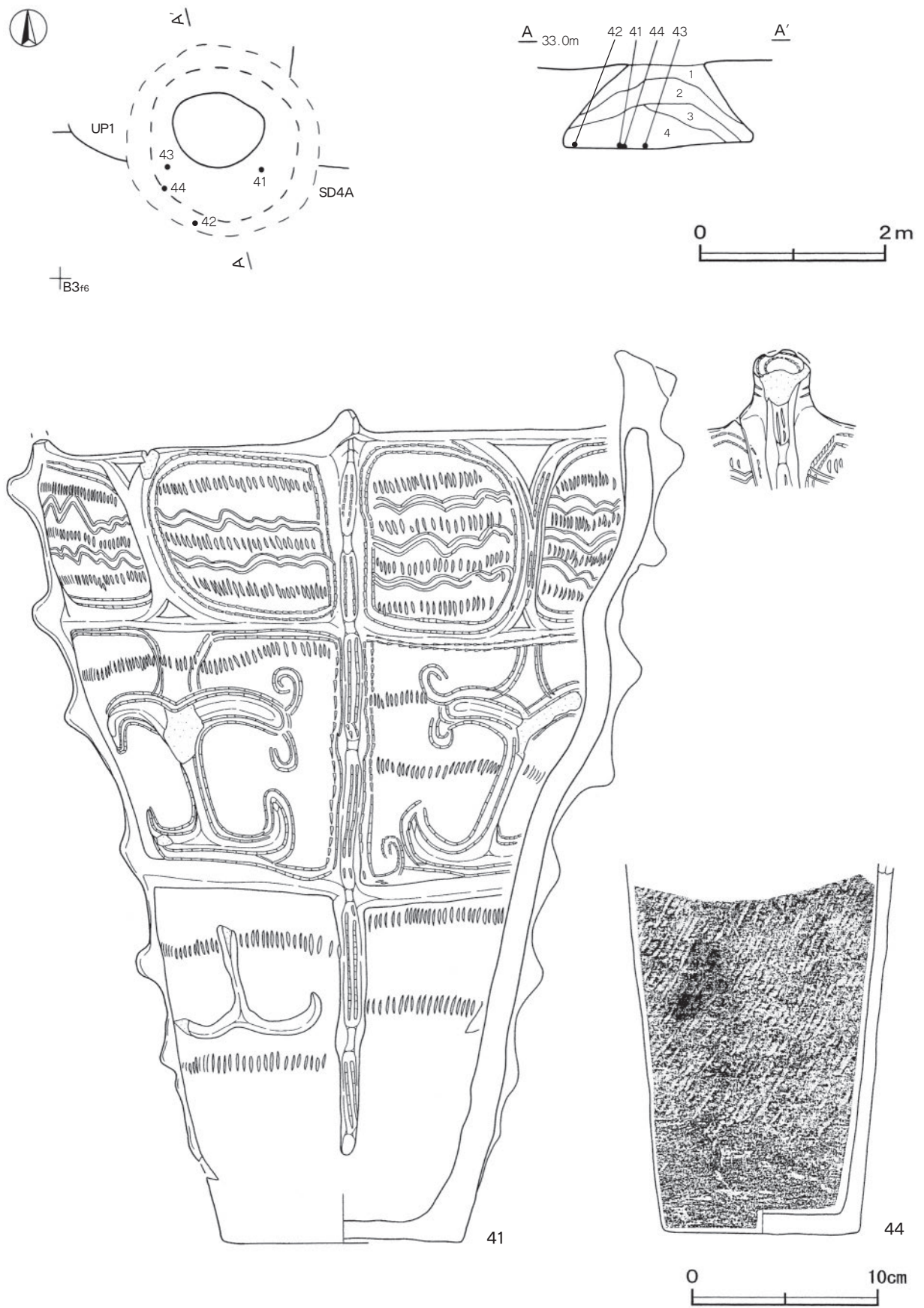
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

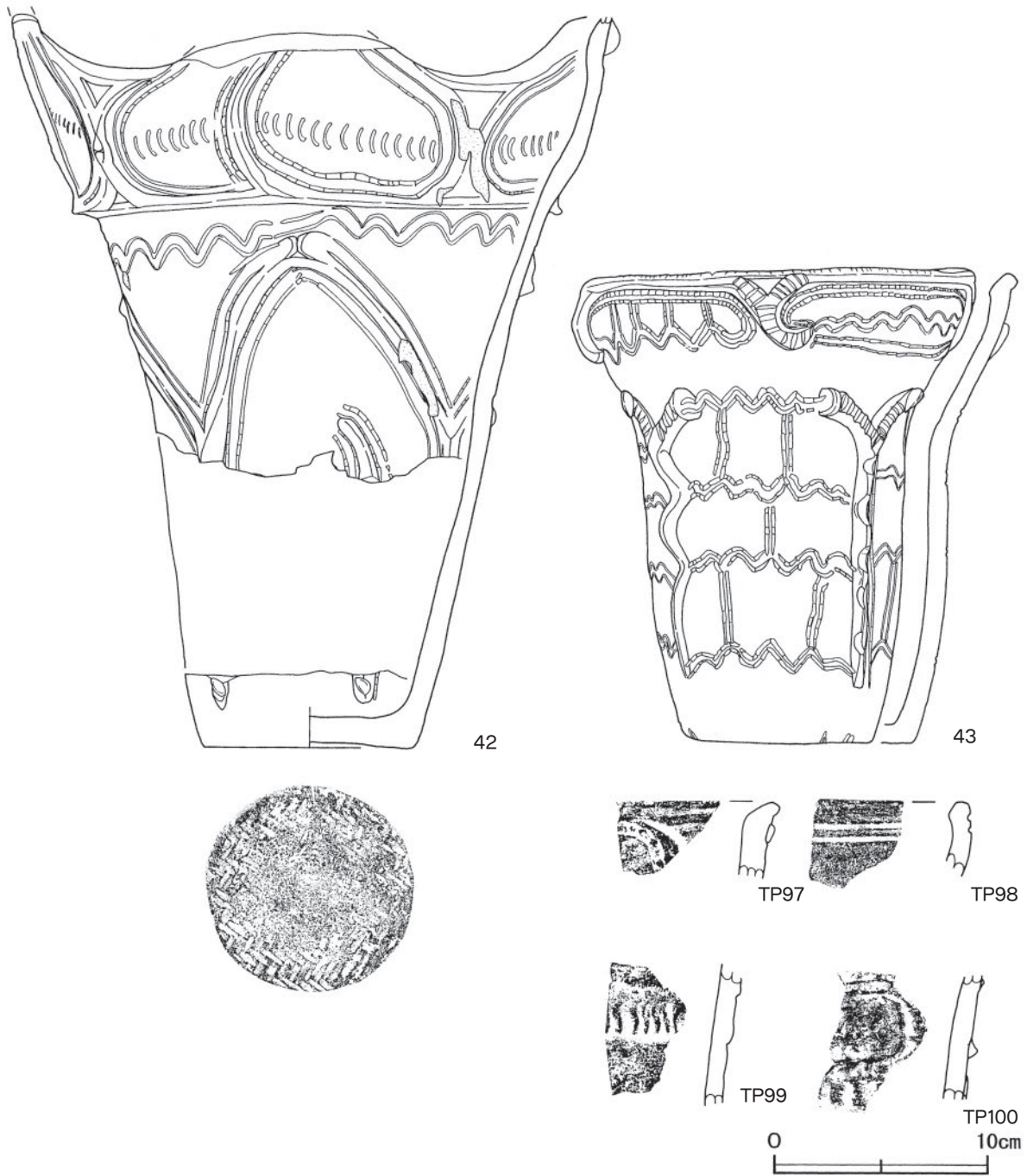
- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子・鹿沼バミス微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・鹿沼バミス微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

遺物出土状況 縄文土器片69点が出土している。42は南部の底面, 43は南西部の底面から横位で完形に近い状態で出土している。41は東部の覆土下層から土圧でつぶれた状態で出土している。いずれも, 廃絶時に遺棄されたものと推測される。

所見 時期は, 出土土器から中期中葉と考えられる。



第30图 第60号土坑·出土遗物实测图



第31図 第60号土坑出土遺物実測図

第60号土坑出土遺物観察表 (第30・31図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
41	縄文土器	深鉢	33.3	48.1	13.0	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	曲線的な隆帯をX字状に配し、結節沈線文を添わせる。波状沈線文・結節沈線文・キザミによって文様描出	東部下層	90% PL7
42	縄文土器	深鉢	28.0	(34.5)	10.0	雲母・長石・石英	明褐	普通	波頂部を中心に3本の隆帯によって連続する楕円形区画を作出し、区画内に半截竹管による刺突状のキザミ	南部底面	80% PL7
43	縄文土器	深鉢	18.1	22.2	8.8	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	胴部に蛇行する隆帯と押圧された垂下する隆帯を交互に貼付け、隆帯間を結節沈線文によって繋ぐ	南西部底面	100% PL8
44	縄文土器	深鉢	—	(20.1)	10.6	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	無節縄文施文	南西部底面	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP97	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	隆帯に沿う結節沈線文	覆土中	
TP98	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部に複列の結節沈線文	覆土中	
TP99	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	明赤褐	普通	ヒダ状圧痕	覆土中	
TP100	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	断面三角形の隆帯による区画 下位にヒダ状圧痕	覆土中	

第64号土坑（第32・33図）

位置 調査区西部のB 3g7区，標高33.5mほどの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第6号住居に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は，径1.2mほどの円形である。底面はほぼ平坦で，平面形は径1.8mの不整円形である。深さは95cmで，壁は底面から内傾して立ち上がり，中位で屈曲し，開口部で緩やかに外反している。底面からくびれ部までの高さは，65～75cmである。

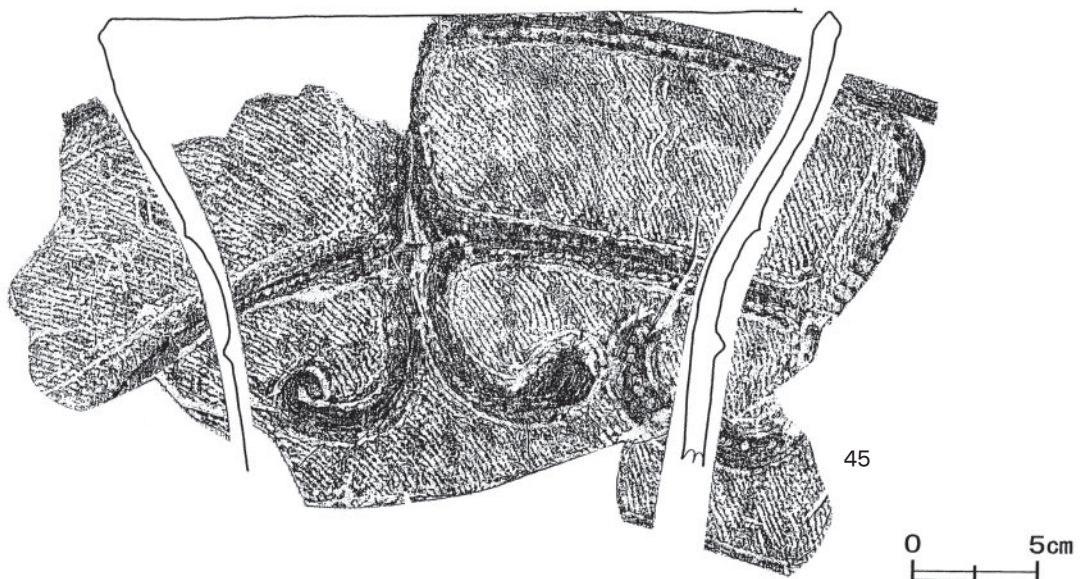
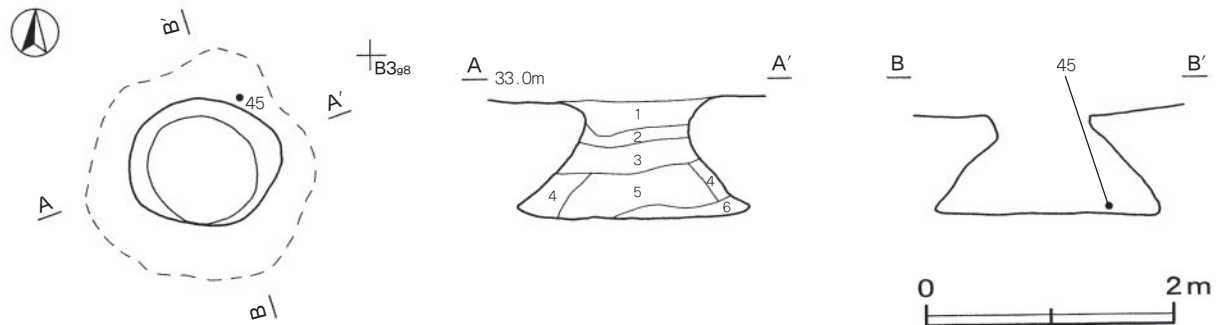
覆土 6層に分層される。第4層は壁の崩落土で，水平な堆積状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

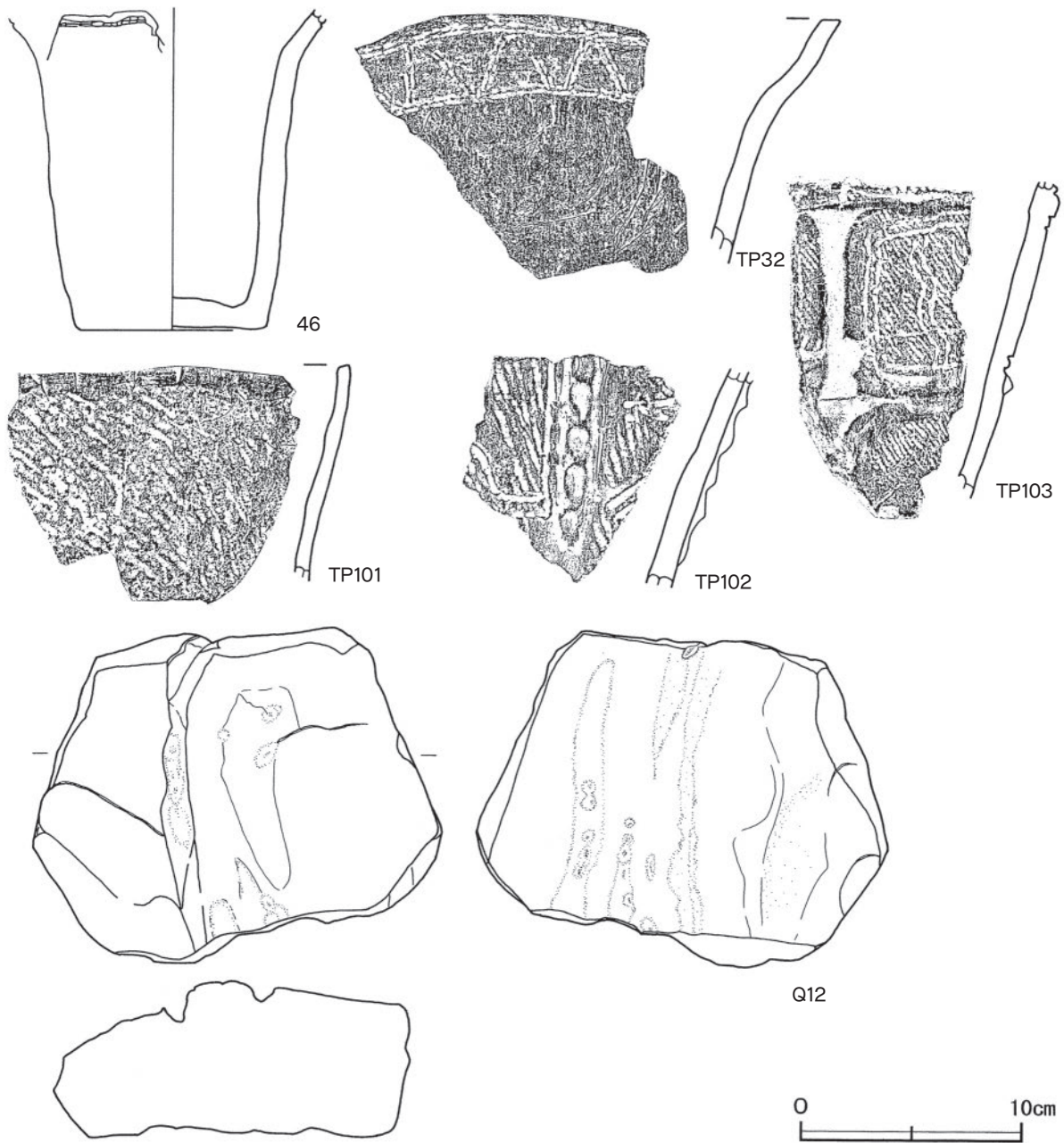
- | | | | |
|-------|----------------|-------|---------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック中量，鹿沼パミス微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量，炭化粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子多量，鹿沼パミス微量 |

遺物出土状況 縄文土器片75点，石器1点(凹石)が出土している。45・46・TP32は覆土下層から出土している。

所見 時期は，出土土器から中期中葉と考えられる。



第32図 第64号土坑・出土遺物実測図



第33図 第64号土坑出土遺物実測図

第64号土坑出土遺物観察表 (第32・33図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
45	縄文土器	深鉢	[20.9]	(18.2)	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	口縁部に長方形の区画文を配し 区画の接合部直下からJ字状の隆 帯貼付 無節縄文地文	北部下層	
46	縄文土器	深鉢	—	(14.5)	8.6	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	胴部上位に結節沈線文	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q12	凹石	20.2	24.8	9.9	8210	角閃石片麻岩	自然な割れ口を使用	覆土下層	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP32	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	口縁部に結節沈線文による三角形文を描出	覆土下層	
TP101	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	無節縄文施文 内面炭化物付着	覆土下層	
TP102	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	無節縄文施文後 押圧を加えた隆帯に沿う結節沈線文施文	覆土中	
TP103	縄文土器	深鉢	雲母・長石・石英	灰褐	普通	隆帯による区画文内に無節縄文充填後 結節沈線文により文様描出	覆土下層	

第65号土坑（第34図）

位置 調査区西部のB 3 5区，標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

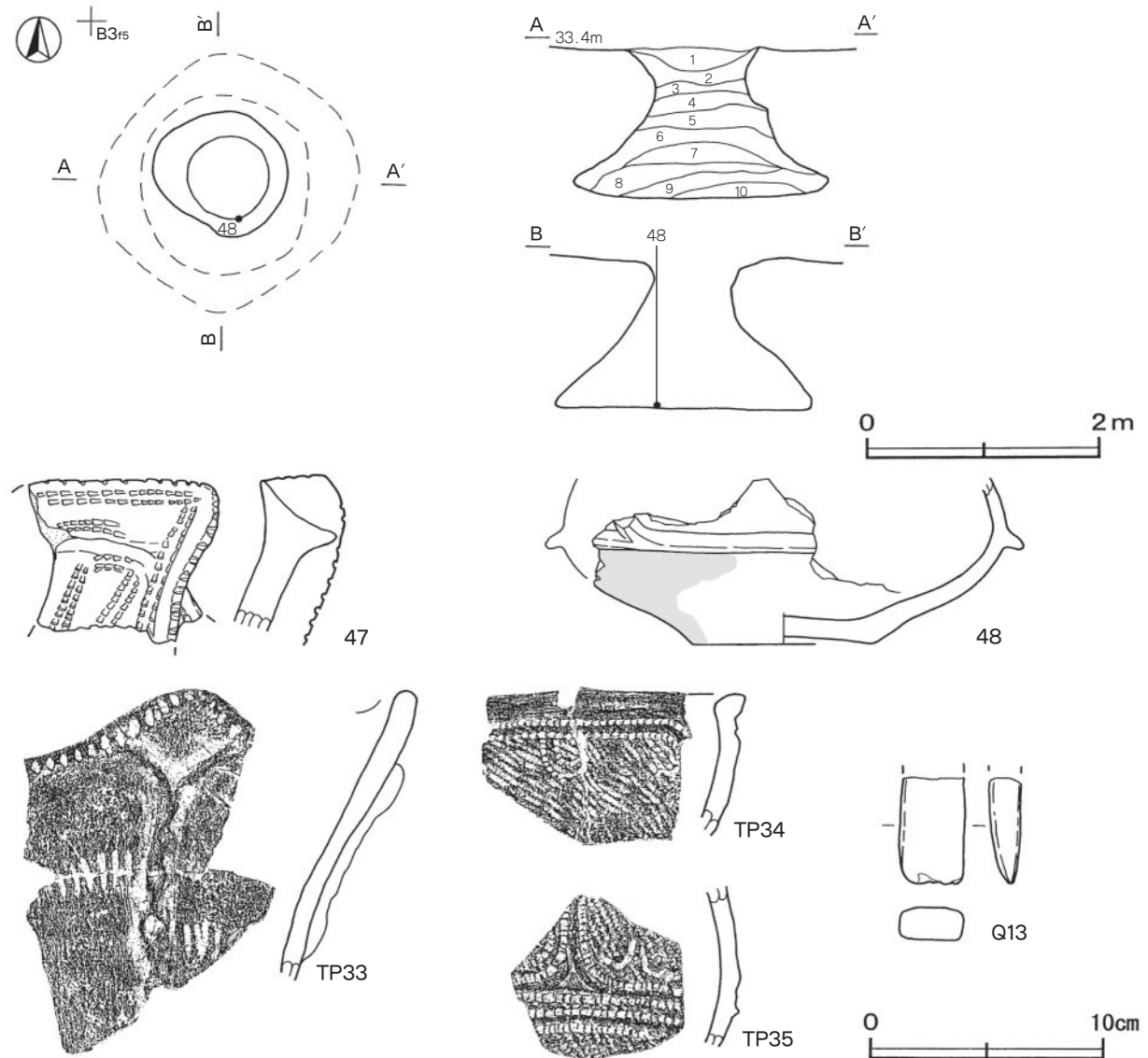
規模と形状 開口部は，長径1.2m，短径1.0mの楕円形である。底面はほぼ平坦で，径2.2mの円形を呈している。深さは125cmで，壁は底面から内傾して立ち上がり，中位で屈曲し，開口部で緩やかに外反している。底面からくびれ部までの高さは，90～100cmである。

覆土 10層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

1 極暗褐色	ローム粒子少量	6 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
2 暗褐色	ローム粒子中量	7 黒褐色	ローム粒子少量，炭化粒子微量
3 黒褐色	ローム粒子少量	8 黒褐色	ローム粒子少量，焼土粒子微量
4 黒褐色	ローム粒子少量，鹿沼パミス微量	9 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス少量
5 黒褐色	ロームブロック少量，鹿沼パミス微量	10 褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミス少量

遺物出土状況 縄文土器片70点，石器1点（磨製石斧）が出土している。48は中央部の底面から出土している。覆土中から出土したTP35は，文様や胎土の特徴から，第12号土坑の覆土下層から出土したTP3，第38号土坑の覆土下層から出土したTP31と同一個体と考えられる。



第34図 第65号土坑・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。同一個体と考えられる土器片が他の土坑からも出土していることから、これらの土坑は同時期に開口していたことが考えられる。

第65号土坑出土遺物観察表（第34図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
47	縄文土器	深鉢	—	(7.3)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	端部にキザミを有する大形の把手結節沈線文による文様描出	覆土中	
48	縄文土器	浅鉢	—	(7.0)	7.7	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	突出する隆帯によって口縁部を区画 赤彩痕	中央部底面	20%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q13	磨製石斧	(4.6)	2.8	1.4	(35.0)	閃緑岩	刃部の破片 表面丁寧な研磨	覆土中	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP33	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部にキザミ 波頂部からY字状の隆帯貼付 胴部キザミ目列	覆土中	
TP34	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰褐	普通	無節縄文施文後 口辺部に結節沈線文によるJ字状文	覆土中	
TP35	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	単節縄文施文後 隆帯に沿う結節沈線文	覆土中	

第66号土坑（第35・36図）

位置 調査区西部のB 3 d4区で、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第9B号住居に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は、長径1.3m、短径1.1mの楕円形である。底面はほぼ平坦で、径2.4mの円形を呈している。深さは115cmで、壁は底面から大きく内傾して立ち上がり、開口部で緩やかに外反している。底面からくびれ部までの高さは、90～95cmである。

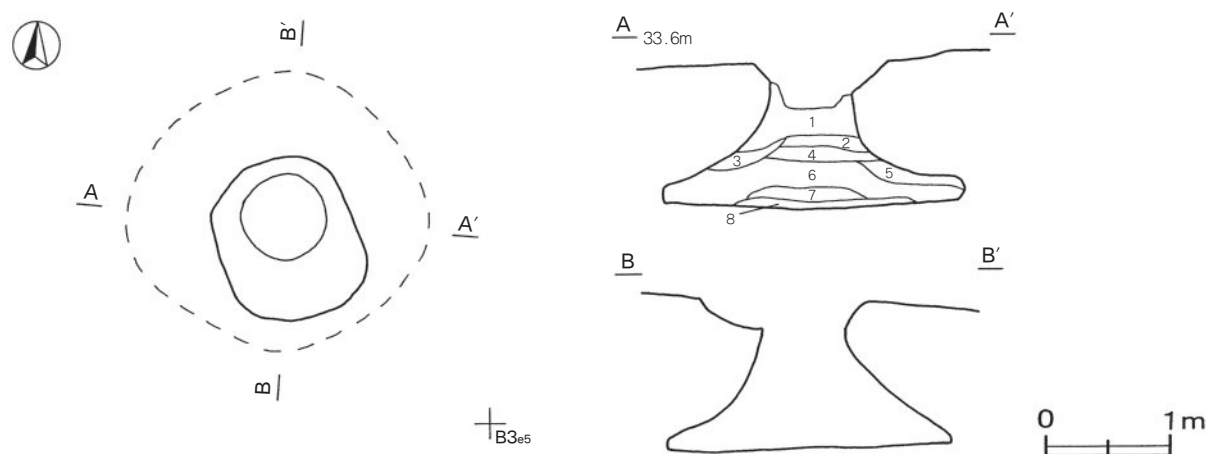
覆土 8層に分層される。覆土下層から中層にかけてはロームブロックや焼土及び炭化物を含み、人為的に埋め戻された人為堆積で、覆土中層から上層にかけてはレンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

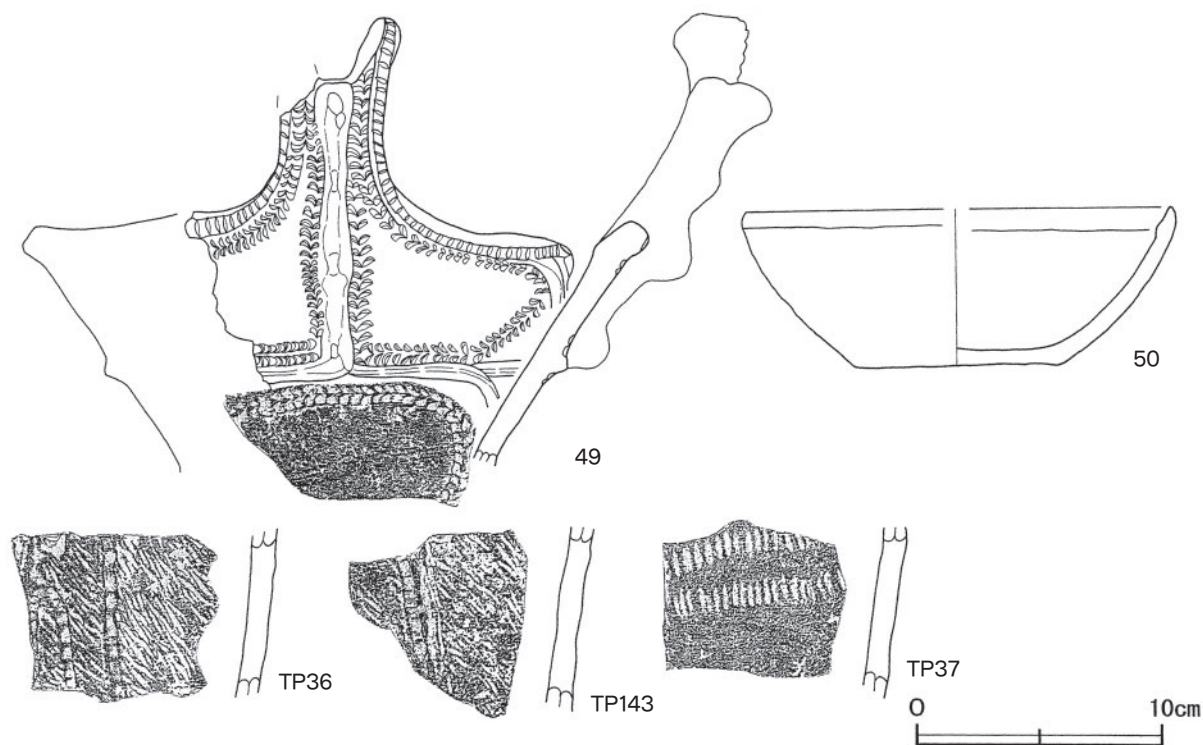
- | | | | |
|-------|-------------------------------|-------|-----------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子・鹿沼パミス少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量 | 7 黒褐色 | ロームブロック・炭化物・焼土粒子・鹿沼パミス少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・炭化粒子・鹿沼パミス微量 | 8 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼パミス少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 黒褐色 | 炭化物少量、ロームブロック・焼土粒子微量 | | |
| 5 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | | |

遺物出土状況 縄文土器片92点が出土している。49・50は覆土下層から出土している。

所見 時期は、出土土器から中期中葉と考えられる。



第35図 第66号土坑実測図



第36図 第66号土坑出土遺物実測図

第66号土坑出土遺物観察表（第36図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
49	縄文土器	深鉢	[24.0]	(18.4)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	波頂部から垂下する隆帯によって区画し斜めに切り込んだ半截竹管による結節沈線文施文	覆土下層	
50	縄文土器	浅鉢	[17.6]	6.4	8.4	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	無文	覆土下層	40%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP36	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	褐灰	普通	無節縄文施文後 結節沈線文施文 TP143は同一個体	覆土中	
TP37	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	キザミ目列	覆土中	

第68号土坑（第37・38図）

位置 調査区西部のB 3 c2区，標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第8号住居に掘り込まれている。

規模と形状 開口部は，第8号住居に掘り込まれているため不明である。底面はほぼ平坦で，径2.2mの円形を呈している。底面からくびれ部までの高さは100～115cmで，壁は底面から大きく内傾して立ち上がり，くびれ部に至っている。

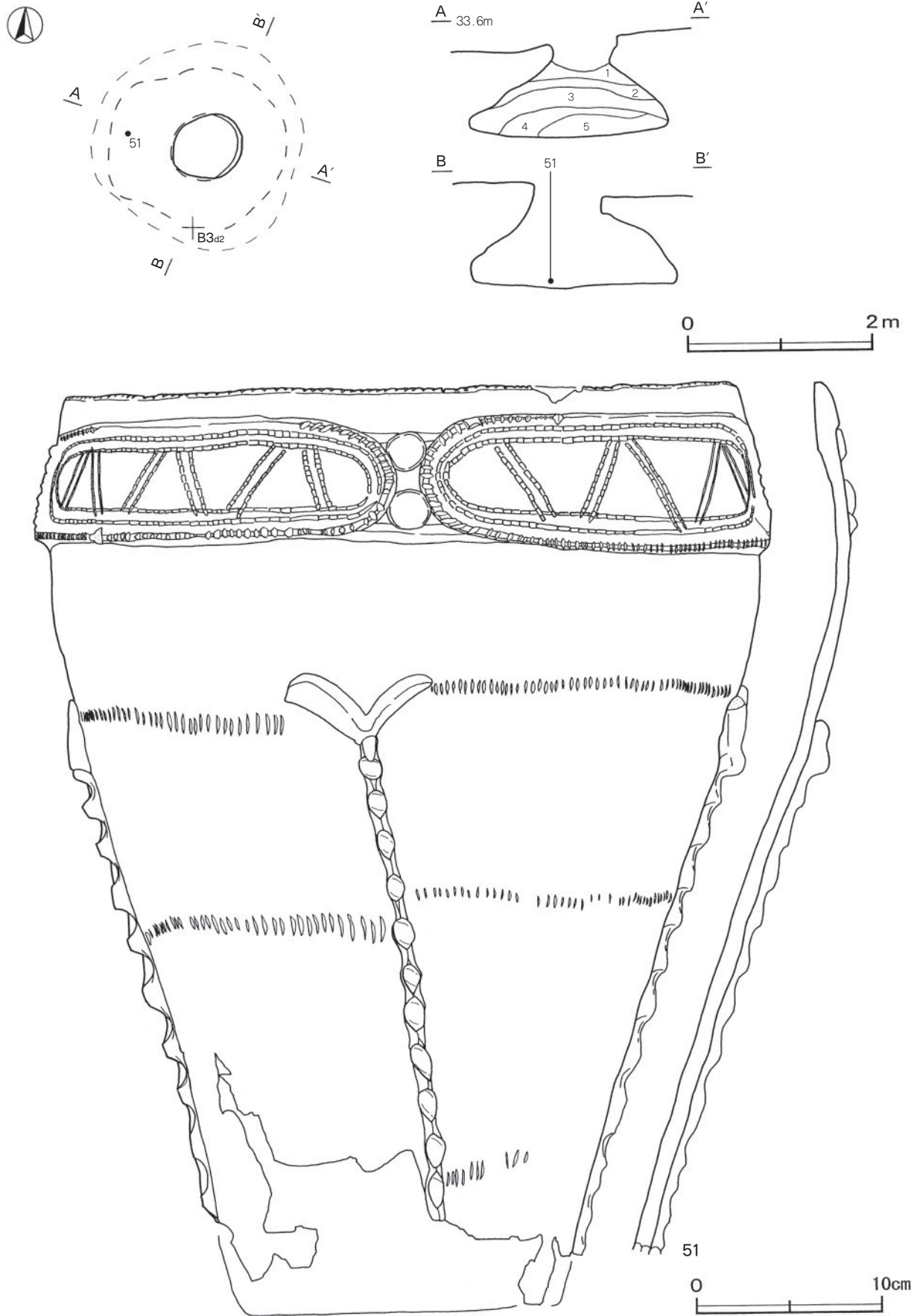
覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

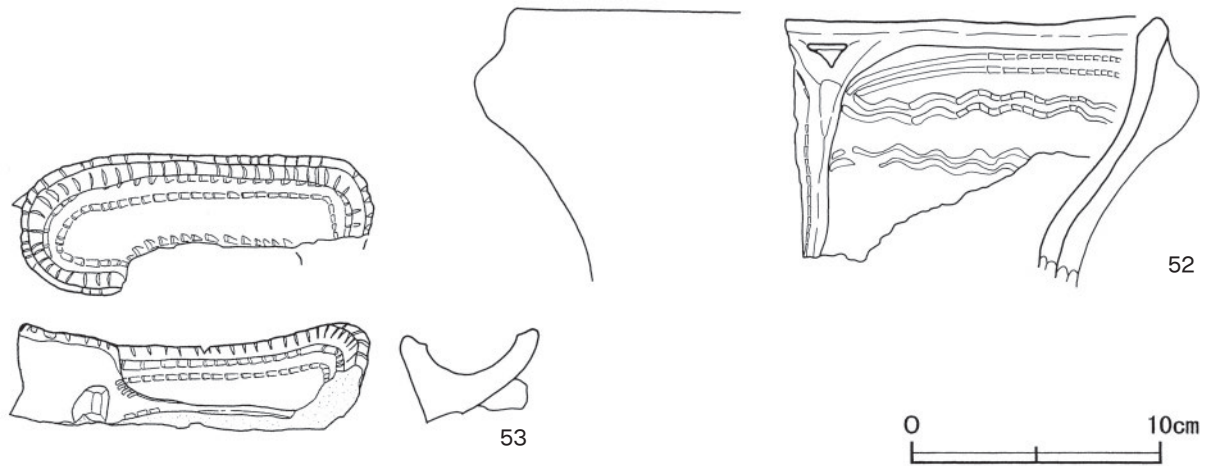
1 黒褐色	ローム粒子少量	4 黒褐色	ローム粒子少量，鹿沼パミス微量
2 黒褐色	ローム粒子微量	5 暗褐色	ローム粒子中量，鹿沼パミス少量
3 黒褐色	ローム粒子・鹿沼パミス微量		

遺物出土状況 縄文土器片80点が出土している。51は西壁際の底面から土圧でつぶれた状態で出土しており，廃絶時に遺棄されたものと推測される。

所見 時期は，出土土器から中期中葉と考えられる。



第37図 第63号土坑・出土遺物実測図



第38図 第68号土坑出土遺物実測図

第68号土坑出土遺物観察表 (第37・38図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
51	縄文土器	深鉢	35.8	49.2	[16.8]	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	キザミを有する隆帯による楕円形区画区画の接合部にボタン状の粘土瘤貼付区画内に結節沈線文施文	西部底面	80% PL7
52	縄文土器	深鉢	(25.6)	(11.0)	—	雲母・長石・石英	褐	普通	口唇部から垂下するY字状の隆帯貼付半截竹管による平行沈線文・結節沈線文施文	覆土中	
53	縄文土器	深鉢	—	(5.5)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	端部にキザミを有する皿状の突起内面周縁に結節沈線文施文	覆土中	40%

表2 フラスコ状土坑一覧表

番号	位置	開口部 平面形	規模(m, 深さはcm)			壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
			開口部(長径×短径)	底部(長径×短径)	深さ					
12	B 3 e2	円形	2.1×2.0	2.4×2.2	75	内傾	平坦	人為	深鉢, 浅鉢, 磨製石斧	本跡→SD4A
13	B 3 d6	[円形]	1.4×(1.4)	1.6×1.6	78	内傾	平坦	人為	深鉢, 浅鉢	本跡→第1号方形竪穴遺構
14	B 3 e6	不明	—	2.4×2.4	140	内傾	平坦	人為・自然	深鉢, 浅鉢, 磨石	本跡→第1号方形竪穴遺構
19	B 2 d7	円形	1.2×1.2	1.7×1.7	70	内傾	平坦	人為	—	
20	B 2 d5	不明	—	2.2×2.2	80	内傾	平坦	人為	深鉢	
21	B 2 c8	楕円形	1.2×1.0	2.7×2.5	106	内傾	平坦	人為	深鉢, 浅鉢, 石皿	
22	B 2 c9	不明	—	2.4×2.4	95	内傾	平坦	人為	深鉢, 石棒, 敲石	本跡→SI7
30	B 2 c6	[円形]	1.2×(1.2)	2.1×2.1	100	内傾	平坦	人為	深鉢	本跡→SD6,SK29・33
32	B 3 e3	不明	—	2.2×2.2	105	内傾	平坦	自然	深鉢	本跡→SI9B・SD4A
35	B 2 d4	不明	—	2.5×2.5	105	内傾	平坦	人為	深鉢, 浅鉢	本跡→SI5
37	B 2 d8	楕円形	2.5×2.2	2.4×2.4	105	内傾	平坦	自然	深鉢	
38	B 2 c4	楕円形	2.2×1.8	2.5×2.5	115	内傾	平坦	自然	深鉢	
60	B 3 e6	不明	—	2.1×2.1	90	内傾	平坦	自然	深鉢	本跡→第1号方形竪穴遺構
64	B 3 g7	円形	1.2×1.2	1.8×1.8	95	内傾	平坦	自然	深鉢, 凹石	本跡→SI6
65	B 3 f5	楕円形	1.2×1.0	2.2×2.2	125	内傾	平坦	自然	深鉢, 浅鉢, 磨製石斧	
66	B 3 d4	楕円形	1.3×1.1	2.4×2.2	115	内傾	平坦	人為・自然	深鉢, 浅鉢	本跡→SI9B
68	B 3 c2	不明	—	2.2×2.2	115	内傾	平坦	自然	深鉢	本跡→SI8

(2) 陥し穴

第11号土坑 (第39図)

位置 調査区西部のB 3 e1区で, 標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第4A号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長径1.8m, 短径0.8mの楕円形で, 長径方向はN-73°-Eである。深さは80cm, 底面はほぼ平坦で,

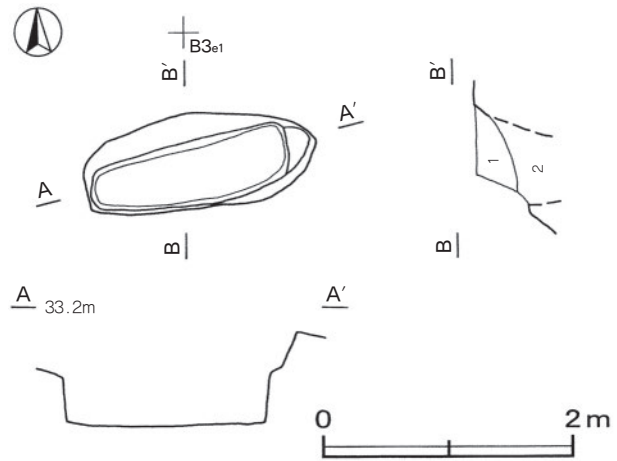
壁は下位が直立し、上位は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層からなる。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

所見 詳細な時期は土器が出土していないため不明であるが、付近から前期の土器片が確認されていることから、中期に集落が形成される以前に、狩猟場として利用されていたことが考えられる。



第39図 第11号土坑実測図

第34号土坑 (第40図)

位置 調査区西部のB 2 c3区で、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第5号住居に掘り込まれている。

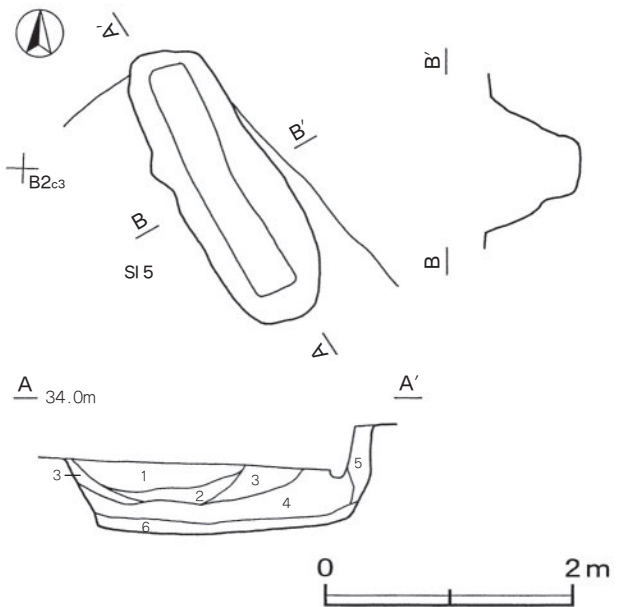
規模と形状 長径2.5m、短径0.9mの楕円形で、長径方向はN-30°-Wである。深さは85cm、底面はほぼ平坦で、壁は急な傾斜で立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。各層とも締まりが強く、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、鹿沼バミス微量
- 5 褐色 ローム粒子多量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・鹿沼バミス微量

所見 詳細な時期は、土器が出土していないため不明である。第40号土坑と長径方向や深さがほぼ同じであり、同時期に機能していたことが考えられる。



第40図 第34号土坑実測図

第40号土坑 (第41図)

位置 調査区西部のB 2 a3区で、標高33.5mの台地の縁辺部に位置している。

規模と形状 長径2.7m、短径1.5mの不整長方形で、長径方向はN-38°-Wである。深さは95cm、底面はほぼ平坦で、中央部から円筒状のピットが確認されている。壁は下位が直立し、上位は外傾して立ち上がっている。

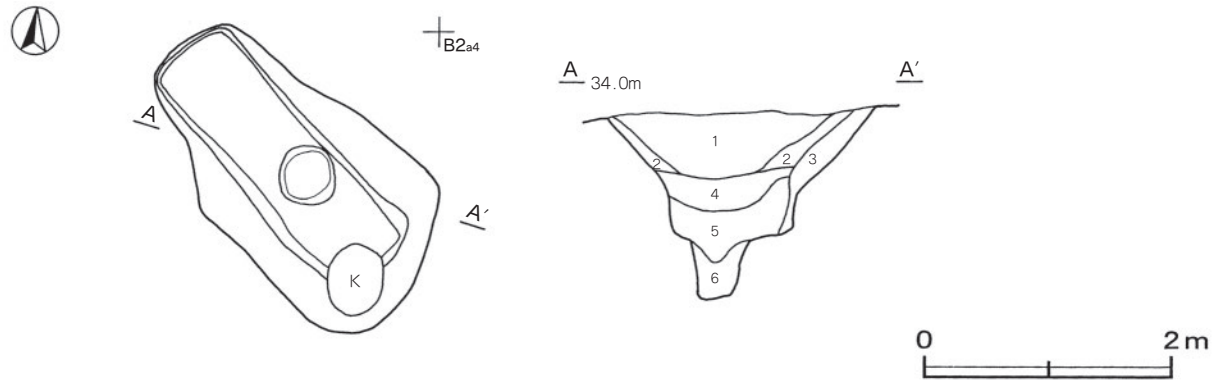
ピット 底面の中央部に位置し、径45cmの円形で、深さは48cmである。逆茂木を据えた痕跡と考えられる。

覆土 6層に分層される。各層とも締まりが強く、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量

所見 詳細な時期は土器が出土していないため不明であるが、周囲の遺構の様相から縄文時代と考えられる。



第41図 第40号土坑実測図

第70号土坑（第42図）

位置 調査区東部のB 4 i2区、標高33.5mの台地の縁辺部に位置している。

重複関係 第1号住居に掘り込まれている。

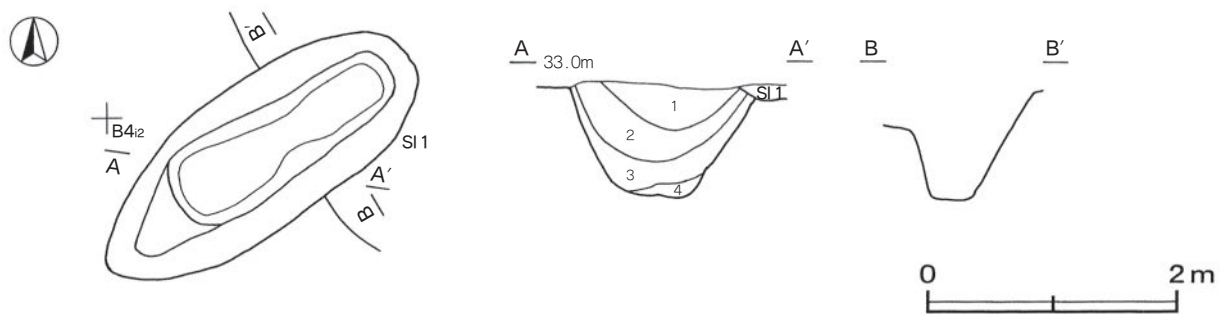
規模と形状 長径2.9m、短径1.1mの楕円形で、長径方向はN-60°-Eである。深さは90cm、底面はほぼ平坦で、壁は急な傾斜で立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。各層とも締まりが強く、レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|--------------|-------|--------------------|
| 1 黒色 | ローム粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子・鹿沼パミス微量 |

所見 詳細な時期は、出土土器がないため不明であるが、周囲の遺構の様相や状況から縄文時代と考えられる。



第42図 第70号土坑実測図

表3 陥し穴一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
11	B 3 e1	N-73°-E	楕円形	1.8×0.8	80	外傾	平坦	自然	—	本跡→SD4A
34	B 2 c3	N-30°-W	楕円形	2.5×0.9	85	外傾	平坦	自然	—	本跡→SI5
40	B 2 a3	N-38°-W	不整長方形	2.7×1.5	95	直立	平坦	自然	—	
70	B 4 i2	N-60°-E	楕円形	2.9×1.1	90	外傾	平坦	自然	—	本跡→SI1

2 弥生時代の遺構と遺物

竪穴住居跡3軒が確認されている。以下、確認された遺構と遺物について記述する。

竪穴住居跡

第7号住居跡（第43・44図）

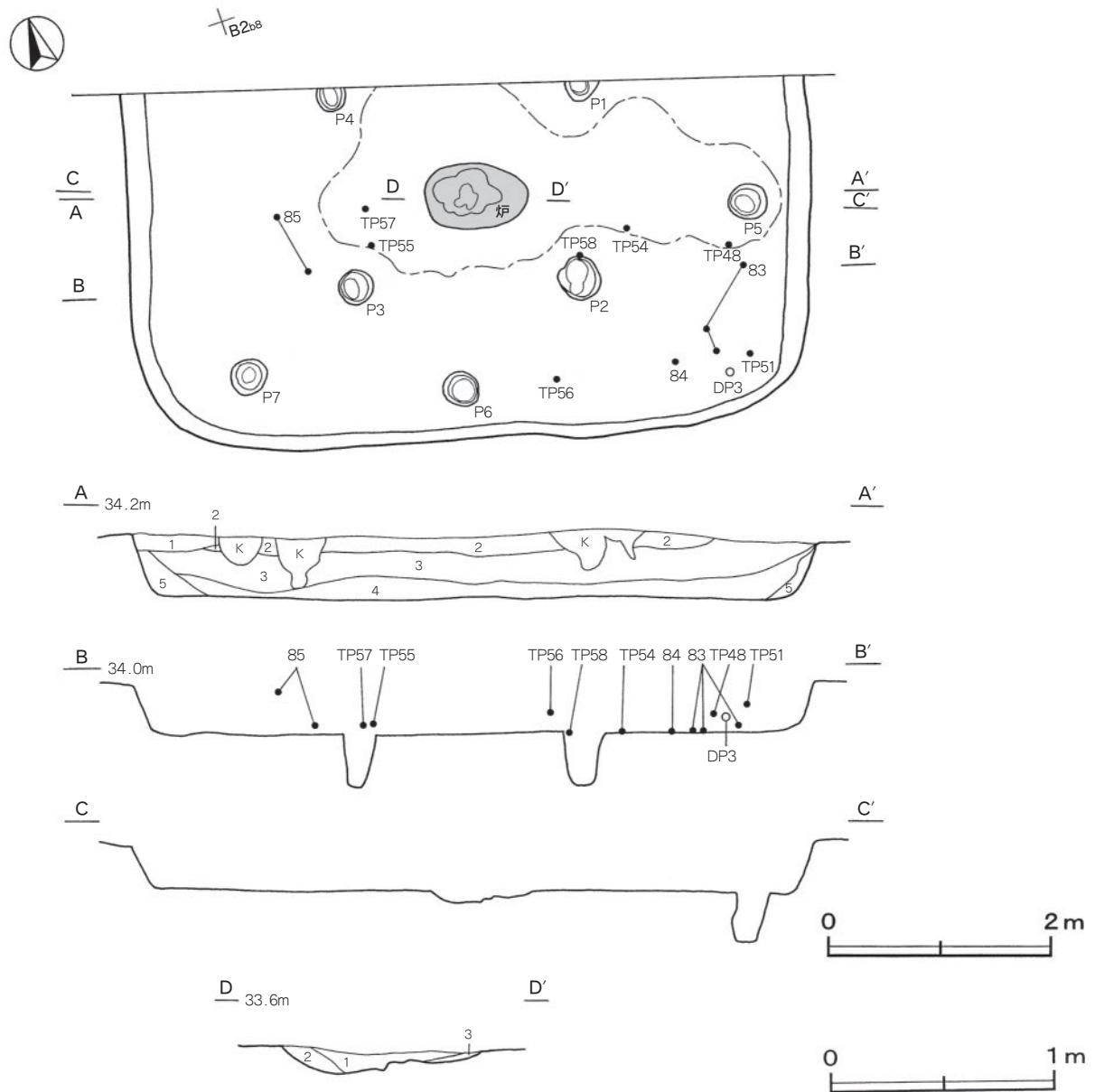
位置 調査区西部のB 2 b8区で、標高33.8mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第22号土坑を掘り込んでいる。

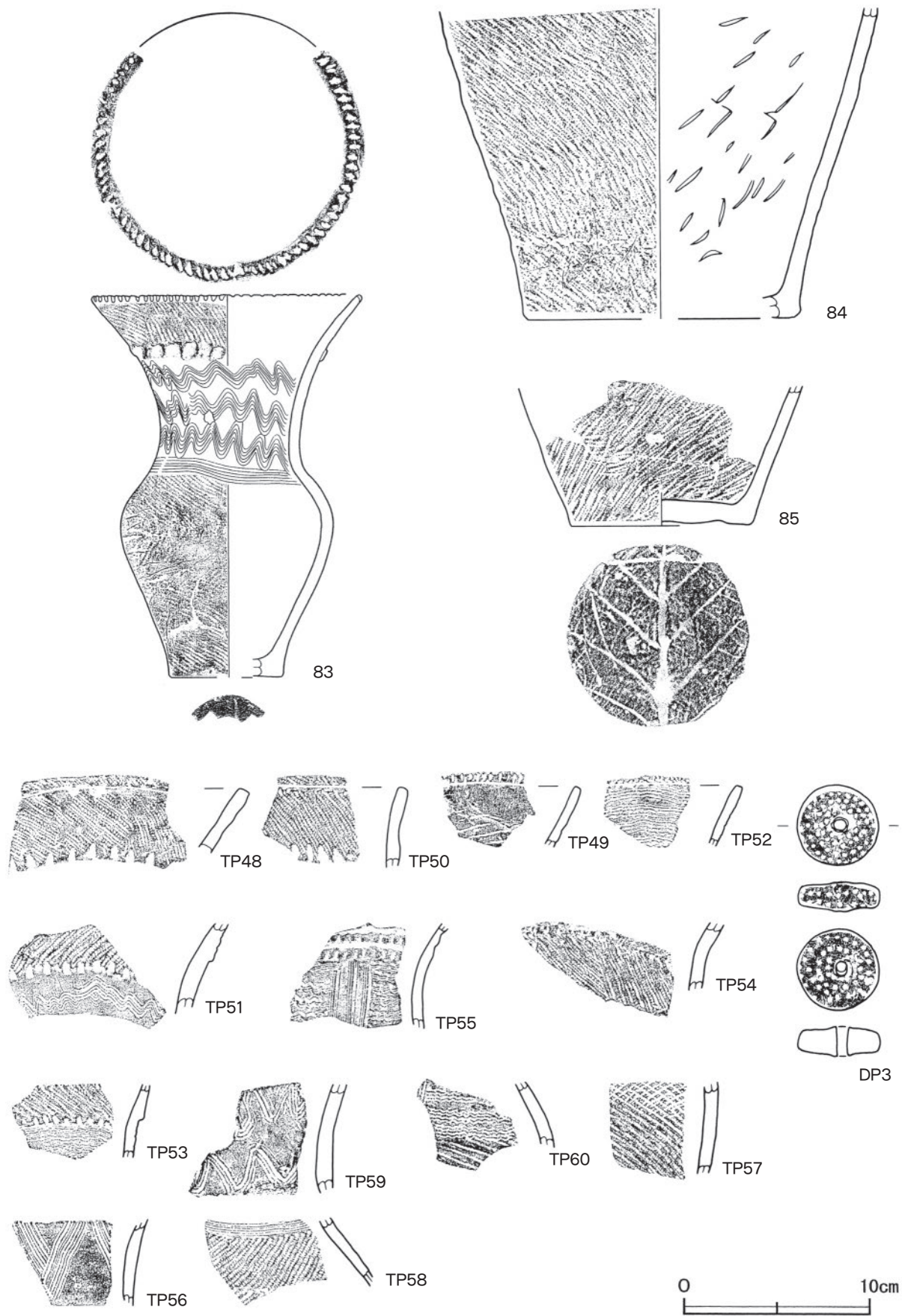
規模と形状 北側部分が調査区域外に延びているため、東西軸は6.1m、南北軸は3.2mが確認されただけである。柱穴の配置から長方形と推測され、主軸方向はN-75°-Wである。壁高は45~55cmで、急な傾斜で立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から東部にかけて踏み固められている。

炉 P1~P4に囲まれた中央部に位置している。長径90cm、短径60cmの楕円形で、床面を10cmほど掘り込ん



第43図 第7号住居跡実測図



第44图 第7号住居跡出土遺物実測図

だ地床炉である。炉床は火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 にぶい赤褐色 焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子微量

ピット 7か所。P1～P4は深さ46～54cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ47cmで、壁際から炉に向かって斜めに掘り込まれており、東壁寄りの炉と向かい合う位置にあることから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6・P7は深さがそれぞれ14cm, 30cmで、性格は不明である。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片179点(壺)が、覆土下層を中心に散在した状態で出土している。83は、南東コーナー部の床面から底部の一部を欠いただけの完形に近い状態で横位で出土している。84・TP54は南東部の覆土下層、85・TP55・TP57は南西部の覆土下層、TP48・TP51は南東部の覆土中層、TP58は南部の覆土下層、TP56は南部の覆土中層からそれぞれ出土している。また、縄文土器片63点、土師器片98点も覆土上層を中心に出土しており、埋没途中で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。床面から完形又は完形に近い状態の土器が単体で出土する事例は、第9B号住居跡でも確認されている。

第7号住居跡出土遺物観察表(第44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
83	弥生土器	広口壺	14.4	20.6	[6.0]	雲母・長石・石英	褐	普通	口唇部原体押圧 口縁部下端指頭押圧 頸部櫛歯状工具(6本)による波状文 胴部附加条一種縄文施文	南東部床面	90% PL8
84	弥生土器	広口壺	—	(16.7)	[14.4]	長石	にぶい橙	普通	結節回転文施文後 附加条一種縄文施文	南東部下層	15%
85	弥生土器	広口壺	—	(7.5)	9.8	長石・石英	にぶい褐	普通	附加条一種縄文施文	南西部下層	20%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP48	弥生土器	壺	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	附加条一種縄文施文, 下端刺突	南東部中層	
TP49	弥生土器	壺	石英	明黄褐	普通	口唇部刻み 口縁部附加条二種縄文施文	南西部覆土中	
TP50	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい橙	普通	附加条一種縄文施文 下端原体押圧	覆土中	
TP51	弥生土器	壺	長石	にぶい褐	普通	口縁部附加条一種縄文 下端刺突 頸部櫛歯状工具(5本)による波状文	南東部中層	
TP52	弥生土器	壺	長石	にぶい橙	普通	口唇部原体押圧 口縁部櫛歯状工具(4本)による波状文	覆土中	
TP53	弥生土器	壺	長石	にぶい橙	普通	口縁部附加条一種縄文 下端刺突 頸部櫛歯状工具(6本)による波状文	北東部覆土中	
TP54	弥生土器	壺	長石・赤色粒子	明赤褐	普通	附加条一種縄文施文	南東部下層	
TP55	弥生土器	壺	長石	にぶい褐	普通	櫛歯状工具(4本)による縦区画内に波状文	南西部下層	
TP56	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい褐	普通	櫛歯状工具(9本)による山形文	南部中層	
TP57	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい橙	普通	附加条一種縄文施文	南西部下層	
TP58	弥生土器	壺	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	横走文 附加条一種縄文施文	南部下層	
TP59	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい橙	普通	櫛歯状工具(3本)による波状文	覆土中	
TP60	弥生土器	壺	石英	にぶい褐	普通	櫛歯状工具(4本)による波状文 附加条二種縄文	北東部覆土中	

番号	器種	長さ	厚さ	孔径	胎土	重量	特徴	出土位置	備考
DP3	紡錘車	4.4	1.6	0.6	雲母・長石	30.0	円形の刺突	覆土中	

第9A号住居跡(第45・46図)

位置 調査区西部のB3c3区で、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第9B号住居と第2号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北側部分が調査区域外に延びているため、東西軸は6.3m、南北軸は6.0mが確認され、方形又は長方形と推測される。主軸方向はN-0°である。壁高は5cmほどで、外傾して立ち上がっている。東壁の北部は、第9B号住居の炉によって掘り込まれている。

床 ほぼ平坦で、炉の南側が踏み固められている。

炉 ほぼ中央部に設けられている。長径100cm、短径80cmの楕円形で、床面と同じ高さの地山面を使用した地床炉である。炉床は、火熱を受けて赤変硬化している。

ピット 2か所。P1は深さ35cm、P2は深さ34cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。

覆土 2層に分層される。層厚が薄く、堆積状況は不明である。

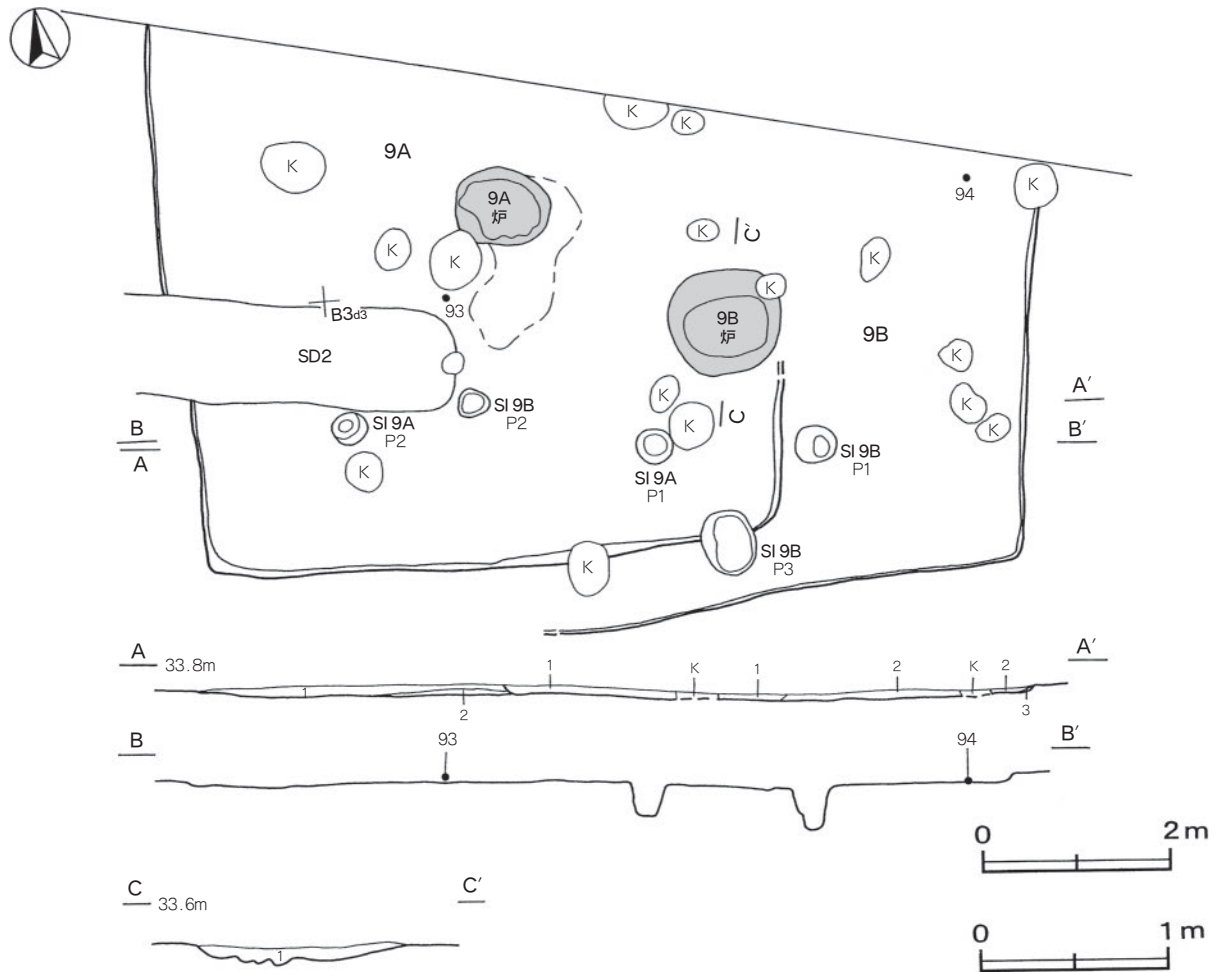
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

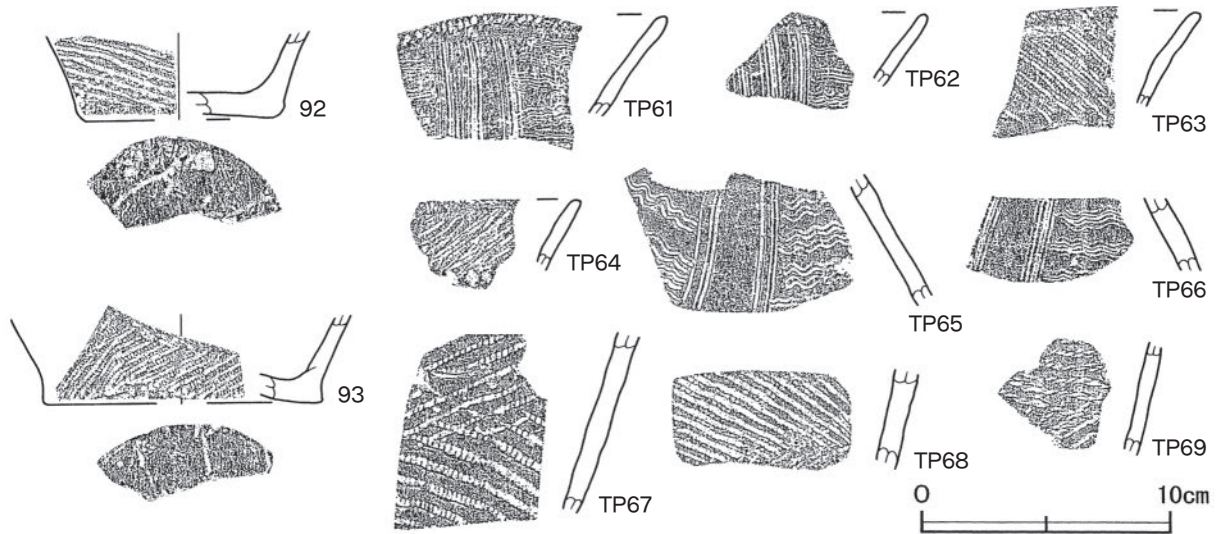
2 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 弥生土器片133点（壺）が、床面を中心に散在した状態で出土している。92・TP67・TP68は西部の覆土中、93は中央部の床面、TP61・TP62・TP65は南部の覆土下層、TP63・TP66は南東部の覆土下層から出土している。縄文土器片37点、土師器片69点も覆土上層を中心に出土しており、埋没途中で流れ込んだものと考えられる。

所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。重複する第9B号住居は、本跡の床面を再利用しており、建て替えに伴う小移動が行われたことが推測される。



第45図 第9A・9B号住居跡実測図



第46図 第9A号住居跡出土遺物実測図

第9A号住居跡出土遺物観察表（第46図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
92	弥生土器	広口壺	—	(3.5)	[8.0]	長石・石英	にぶい橙	普通	胴部附加条二種縄文施文 底部木葉痕	西部覆土中	
93	弥生土器	広口壺	—	(3.6)	[11.2]	長石	にぶい橙	普通	胴部附加条一種縄文施文 底部木葉痕	中央部床面	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP61・62	弥生土器	壺	長石・石英・針状鉱物	にぶい黄橙	普通	口唇部原体押圧 口縁部櫛歯状工具(5本)による縦区画に波状文充填	南部下層	
TP63	弥生土器	壺	長石	にぶい赤褐	普通	附加条一種縄文施文	南東部下層	
TP64	弥生土器	壺	石英・針状鉱物	明赤褐	普通	附加条一種縄文施文 下端刺突	南西部覆土中	
TP65	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	普通	櫛歯状工具(3・4本)による縦区画に波状文充填	南部下層	
TP66	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	普通	櫛歯状工具(5本)による縦区画に波状文充填	南東部下層	
TP67	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	西部覆土中	
TP68	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい赤褐	普通	附加条一種縄文施文 羽状構成	西部覆土中	
TP69	弥生土器	壺	長石	にぶい黄橙	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	南東部覆土中	

第9B号住居跡（第45・47図）

位置 調査区西部のB 3 d4区で、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第9A号住居跡と第32・66号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 北側部分が調査区域外に延びているため、東西軸5.0m、南北軸6.1mが確認され、方形又は長方形と推測される。主軸方向はN-0°である。壁高は5cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦である。

炉 ほぼ中央部に位置し、径120cmの円形で、床面を10cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床は、火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

1 黒褐色 焼土ブロック少量、ローム粒子微量

ピット 3か所。P1・P2はそれぞれ深さ45cm・36cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P3は深さ20cmで、炉と向き合う位置にあり、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 3層に分層される。層厚が薄く、堆積状況は不明である。

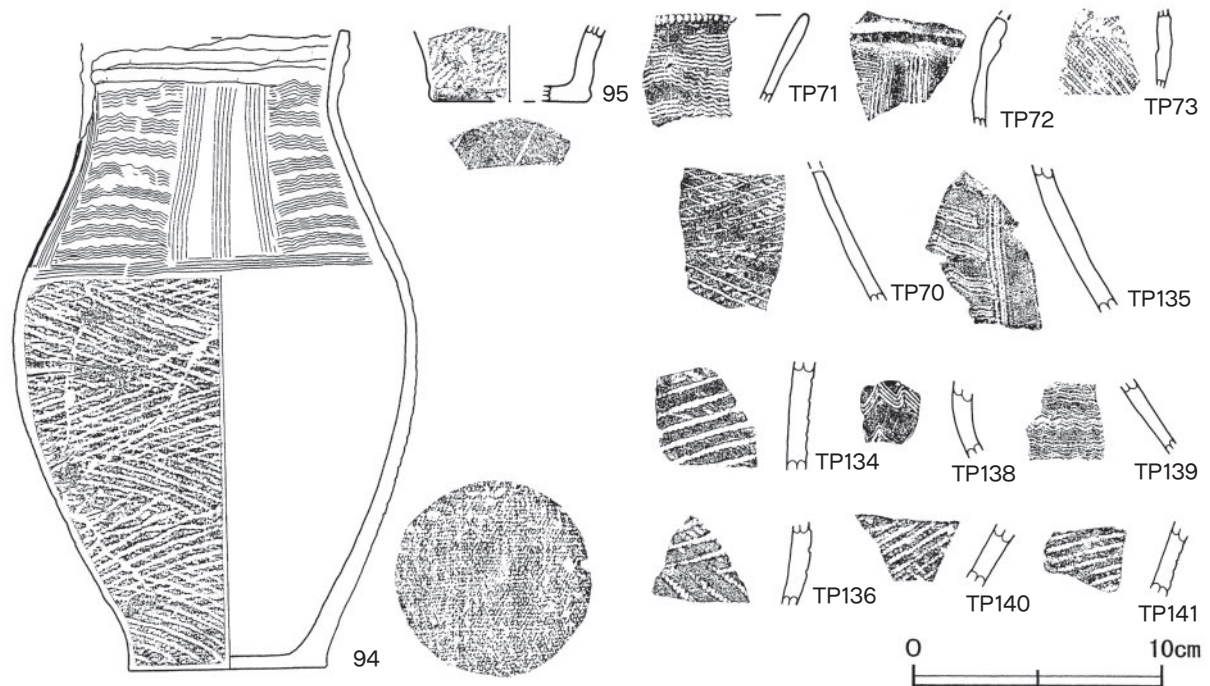
土層解説

1 黒褐色 ローム粒子微量

3 暗褐色 ローム粒子中量

2 暗褐色 ローム粒子少量

遺物出土状況 弥生土器片110点（壺），混入した土師器片18点が出土している。遺物は床面を中心に散在した状態で出土している。94は口縁部を欠いただけの完形に近い状態で，東壁際の床面から横位で出土している。所見 時期は，出土土器から後期後半と考えられる。



第47図 第9B号住居跡出土遺物実測図

第9B号住居跡出土遺物観察表（第47図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
94	弥生土器	広口壺	—	(25.6)	8.0	石英	灰褐	普通	頸部櫛歯状工具(5本)による縦区画内に波状文充填 胴部附加条二種縄文施文 底部布目痕	東部床面	75% PL9
95	弥生土器	広口壺	—	(3.5)	[6.4]	長石	にぶい橙	普通	胴部単節縄文施文 底部木葉痕	炬覆土中	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP70	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	南東部床面	
TP71	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部原体押圧 口縁部櫛歯状工具(4・5本)による波状文	覆土中	
TP72	弥生土器	壺	赤色粒子	灰黄褐	普通	櫛歯状工具(5本)による縦区画に波状文充填	覆土中	
TP73	弥生土器	壺	長石・石英	にぶい黄橙	普通	附加条一種縄文施文	覆土中	
TP134	弥生土器	壺	長石・針状鉱物	にぶい橙	普通	附加条二種縄文施文	東部床面	
TP135	弥生土器	壺	長石・石英	浅黄橙	普通	櫛歯状工具(5本)による縦区画に波状文充填	北東部覆土中	
TP136	弥生土器	壺	長石・針状鉱物	にぶい黄橙	普通	附加条二種縄文施文	南西部覆土中	
TP138	弥生土器	壺	長石・石英	灰褐	普通	櫛歯状工具(5本)による波状文	北東部覆土中	
TP139	弥生土器	壺	長石・針状鉱物	にぶい黄橙	普通	櫛歯状工具(5本)による波状文	南西部覆土中	
TP140	弥生土器	壺	長石	橙	普通	附加条一種縄文施文	覆土中	
TP141	弥生土器	壺	長石・石英	明赤褐	普通	附加条一種縄文施文	覆土中	

表4 弥生時代竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内 部 施 設				覆土	主な出土遺物	時代	備考 新旧関係(旧→新)	
								主柱	出入口	ヒット	炉・竈 貯蔵穴					
7	B 2 b8	N - 75° - W	[長方形]	6.1×(3.2)	45~55	平坦	—	4	1	2	炉1	—	自然	広口壺	後期後半	SK22 → 本跡
9A	B 3 c3	N - 0°	[方形・長方形]	6.3×(6.0)	5	平坦	—	2	—	—	炉1	—	不明	広口壺	後期後半	本跡 → SI9B, SD2
9B	B 3 d4	N - 0°	[方形・長方形]	(6.1)×(5.0)	5	平坦	—	2	1	—	炉1	—	自然	広口壺	後期後半	SI9A, SK32・66 → 本跡

2 古墳時代の遺構と遺物

竪穴住居跡6軒，方形周溝墓2基が確認されている。以下，確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

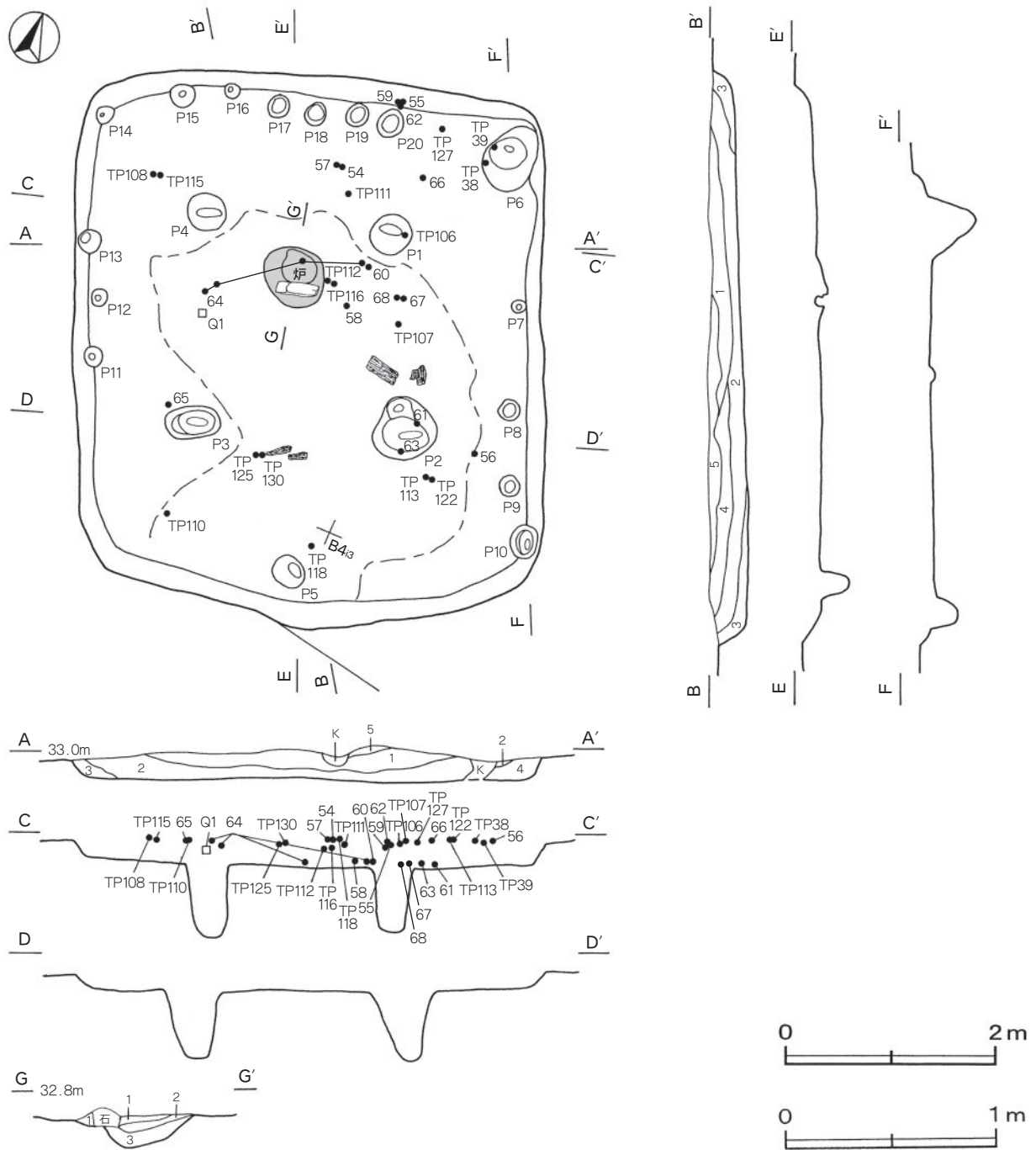
第1号住居跡 (第48~51図)

位置 調査区東部のB4 h2区, 標高33.5mの台地の縁辺部に位置している。

重複関係 第70号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸5.2m, 短軸4.4mほどの長方形で, 主軸方向はN-24°-Wである。壁高は20~28cmで, 外傾して立ち上がっている。

床 平坦な地山面をそのまま床面として使用しており, 焼土や炭化粒子がほぼ全域から薄く広がって確認されている。中央部から南部にかけて踏み固められている。



第48図 第1号住居跡実測図

炉 中央部やや北寄りに位置している。径60cmほどの円形で、床面を8cmほど掘り込んだ地床炉である。炉床の南部に炉石が敷設され、炉石及び炉床は火熱を受けて赤変している。

炉土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|--------|---------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・炭化粒子微量 | 3 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量, ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | | |

ピット 20か所。P1～P4は深さ65～71cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ28cmで、配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P20は深さ11～18cmで、壁際に規則的に配されており、壁柱穴と考えられる。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示し、中層に焼土や炭化材が含まれることから、焼失後、自然堆積したものと考えられる。

土層解説

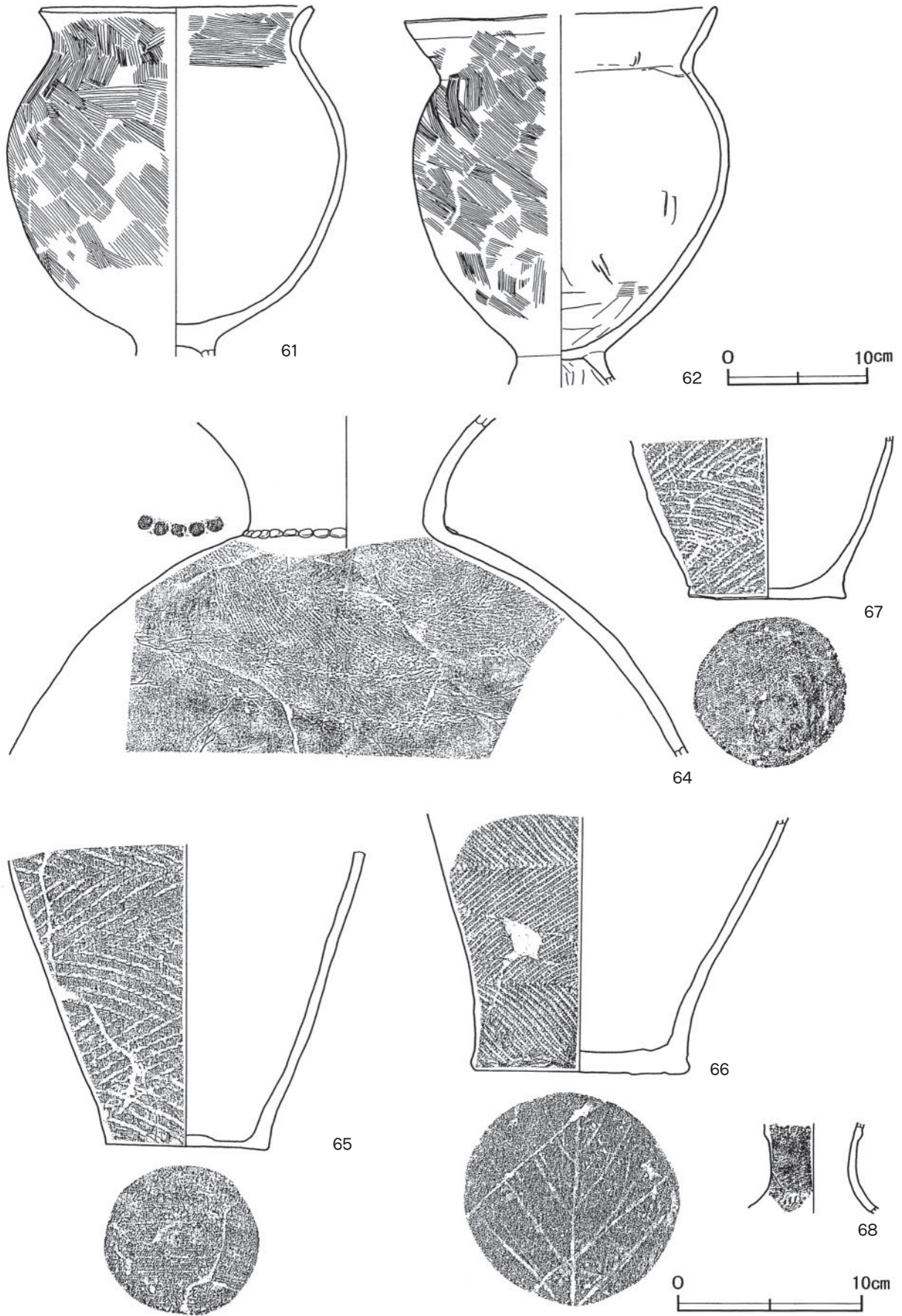
- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 4 黒色 | 炭化物中量, ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化物微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量 | | |

遺物出土状況 土師器片997点（甕類923，甑類44，高坏類30），石製品1点（勾玉），炭化材が出土している。また、縄文土器片37点（鉢），弥生土器片414点（壺）も出土している。土師器片と弥生土器片の多くは炭化材の直上から出土していることや摩滅が少ないことなどから、焼失後の窪地に投棄されたと考えられる。58～61・63は床面からの出土で、焼失前に廃棄されたものと考えられる。54～57・62・65・66・TP38～TP41は、炭化材の直上から出土している。縄文土器片は流れ込みと考えられる。

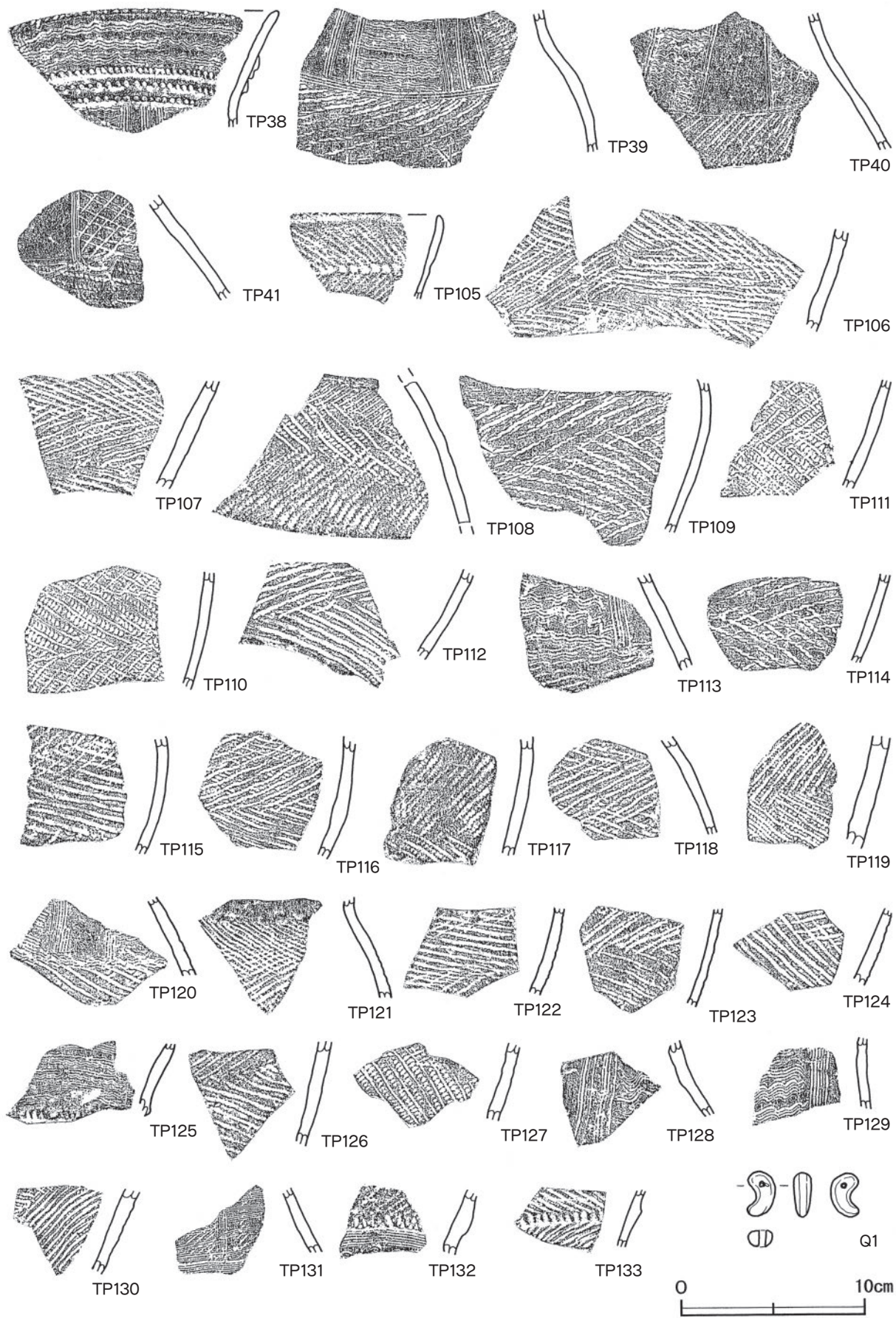
所見 時期は、出土土器から前期前半と考えられる。



第49図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第50図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)



第51图 第1号住居跡出土遺物実測図(3)

第1号住居跡出土遺物観察表（第49～51図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
54	土師器	器台	9.2	8.1	11.8	長石・石英・針状鉱物	橙	普通	器受け部横ナデ	北部上層	90% PL10
55	土師器	器台	8.0	7.8	11.2	長石・石英・針状鉱物	にぶい褐	普通	器受け部横ナデ	北部上層	90% PL10
56	土師器	高坏	23.2	13.4	[11.4]	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	脚部内面ヘラナデ	東部上層	90% PL10
57	土師器	台付甕	[9.7]	15.7	[7.4]	長石・石英・針状鉱物	浅黄橙	普通	体部内面ヘラナデ 脚部外面ナデ	北部上層	70%
58	土師器	甕	9.6	(8.9)	-	長石・石英・針状鉱物	にぶい黄橙	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き	中央部床面	60%
59	土師器	甕	12.8	(14.3)	-	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部内面ヘラナデ	北部床面	40%
60	土師器	壺	14.2	(5.3)	-	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後ヘラ磨き 破断面摩滅	中央部床面	10%
61	土師器	台付甕	[19.6]	(25.4)	-	長石・石英	橙	普通	体部内面ナデ	東部床面	30% PL9
62	土師器	台付甕	[22.4]	(27.1)	-	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後横ナデ 体部内面ヘラナデ	北部上層	50% PL9
63	土師器	甕	19.8	13.3	3.6	雲母・長石・石英	橙	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	東部床面	90% PL10
64	弥生土器	壺	-	(18.6)	-	雲母・長石・石英	にぶい赤褐	普通	胴部上位結節縄文・附加条一種縄文 下位ヘラ磨き	中央部上層	30% PL9
65	弥生土器	広口壺	-	(16.5)	8.7	長石・石英	にぶい黄橙	普通	胴部附加条二種縄文による羽状構成 破断面摩滅	南西部上層	40% PL8
66	弥生土器	広口壺	-	(13.9)	11.3	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部附加条一種縄文による羽状構成	北部上層	
67	弥生土器	広口壺	-	(8.7)	8.6	石英	にぶい黄褐	普通	胴部附加条二種縄文による羽状構成	中央部床面	
68	弥生土器	広口壺	-	(4.9)	-	長石・石英	にぶい黄橙	普通	口縁部下端縄文原体押圧 胴部附加条一種縄文	中央部床面	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	勾玉	2.4	1.5	1.0	4.4	水晶	完形 両側穿孔 径1mm	中央部中層	100%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP38	弥生土器	広口壺	石英	灰黄褐	普通	口唇部・頸部微隆帯にキザミ 口縁部櫛歯状工具（4本）による波状文	北部上層	
TP39	弥生土器	広口壺	石英	灰黄褐	普通	櫛歯状工具（4本）による縦区画内に波状文充填 胴部附加条二種縄文施文	北部上層	
TP40	弥生土器	広口壺	石英	にぶい黄橙	普通	櫛歯状工具（3本）による縦区画内に波状文充填 胴部附加条一種縄文施文	西部覆土中	
TP41	弥生土器	広口壺	石英	灰白	普通	櫛歯状工具（4本）による縦区画内に格子文充填 胴部附加条二種縄文施文	西部覆土中	
TP105	弥生土器	広口壺	石英	浅黄橙	普通	口唇部押圧 口縁部に附加条一種縄文と結節部押圧	北部上層	
TP106	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄橙	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	北西部上層	
TP107	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄橙	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	中央部上層	
TP108	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい橙	普通	附加条一種・二種縄文施文 羽状構成	北西部上層	
TP109	弥生土器	広口壺	雲母・石英	にぶい黄褐	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	北西部上層	
TP110	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい橙	普通	附加条二種縄文・結節回転文施文 羽状構成	南西部上層	
TP111	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい橙	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	北部上層	
TP112	弥生土器	広口壺	長石	にぶい黄橙	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	中央部上層	
TP113	弥生土器	広口壺	長石・針状鉱物	灰黄褐	普通	櫛歯状工具（5本）による縦区画内に波状文充填 胴部附加条二種縄文施文	南東部上層	
TP114	弥生土器	広口壺	石英	にぶい褐	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	北西部上層	
TP115	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄褐	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	北西部上層	
TP116	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい褐	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	中央部上層	
TP117	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄褐	普通	単節縄文・附加条二種縄文施文 羽状構成	南西部覆土中	
TP118	弥生土器	広口壺	長石・石英	灰褐	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	南部上層	
TP119	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい黄橙	普通	附加条一種縄文施文 羽状構成	南西部覆土中	
TP120	弥生土器	広口壺	長石・石英	にぶい褐	普通	櫛歯状工具（7本）による縦区画内に波状文充填 胴部附加条二種縄文施文	南東部上層	
TP121	弥生土器	広口壺	雲母・長石	灰褐	普通	附加条一種縄文施文 羽状構成	北西部上層	
TP122	弥生土器	広口壺	石英	にぶい橙	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	南東部上層	
TP123	弥生土器	広口壺	石英	にぶい褐	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	北東部下層	
TP124	弥生土器	広口壺	石英・針状鉱物	にぶい褐	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	北西部上層	
TP125	弥生土器	広口壺	雲母・長石・石英	にぶい黄橙	普通	櫛歯状工具（4本）による波状文 下端に押圧を加えた隆帯貼付	南部上層	
TP126	弥生土器	広口壺	長石・針状鉱物	にぶい褐	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	北東部上層	
TP127	弥生土器	広口壺	長石・針状鉱物	にぶい橙	普通	附加条二種縄文施文 羽状構成	北部上層	
TP128	弥生土器	広口壺	長石・石英	橙	普通	櫛歯状工具（5本）による縦区画内に波状文充填	北東部下層	
TP129	弥生土器	広口壺	石英・針状鉱物	にぶい黄橙	普通	櫛歯状工具（5本）による縦区画内に波状文充填	南西部上層	
TP130	弥生土器	広口壺	長石	明赤褐	普通	附加条一種縄文施文 羽状構成	南部上層	
TP131	弥生土器	広口壺	長石	橙	普通	附加条一種縄文施文後 櫛歯状工具（6本）による縦区画と横走文	南西部上層	
TP132	弥生土器	広口壺	長石・石英	明赤褐	普通	口縁部下端原体押圧 頸部櫛歯状工具（7本）による横走文	床面	
TP133	弥生土器	広口壺	長石	褐	普通	附加条一種縄文施文 口縁部下端原体押圧	床面	

第4号住居跡（第52・53図）

位置 調査区西部のB2 b5区、標高33.5mの台地の縁辺部に位置している。

重複関係 第1号掘立柱建物と第6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸5.1m, 短軸4.9mの方形で, 主軸方向はN-35°-Wである。壁高は5cmほどで, 外傾して立ち上がっている。壁溝が全周している。

床 ほぼ平坦で, 中央部から南西壁際にかけて踏み固められている。

炉 中央部やや北寄りに位置している。長径65cm, 短径45cmの楕円形で, 床面と同じ高さの地山面をそのまま使用した地床炉である。炉床は, 火熱を受けて赤変硬化している。

炉土層解説

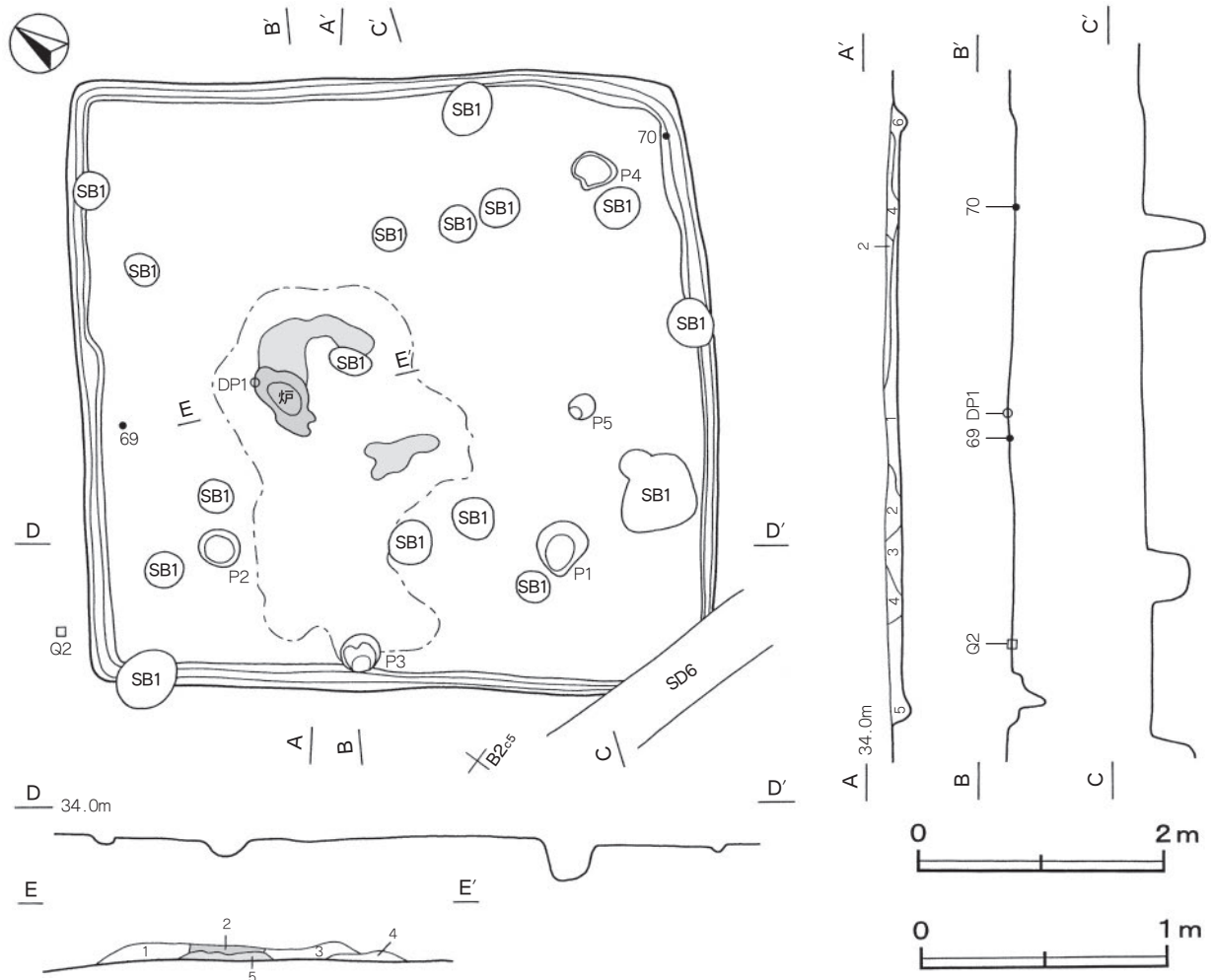
- | | | | |
|--------|-------------------|--------|----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量 | 5 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | | |

ピット 5か所。P1は深さ36cm, P2は深さ11cmで, 配置から支柱穴と考えられる。P3は深さ27cmで, 硬化面の広がりから出入り口施設に伴うピットの可能性も考えられるが, 詳細は不明である。P4・5は深さ11cm, 21cmで, 配置が不揃いのため, 性格は不明である。

覆土 6層に分層される。ブロック状に堆積した人為堆積と考えられる。

土層解説

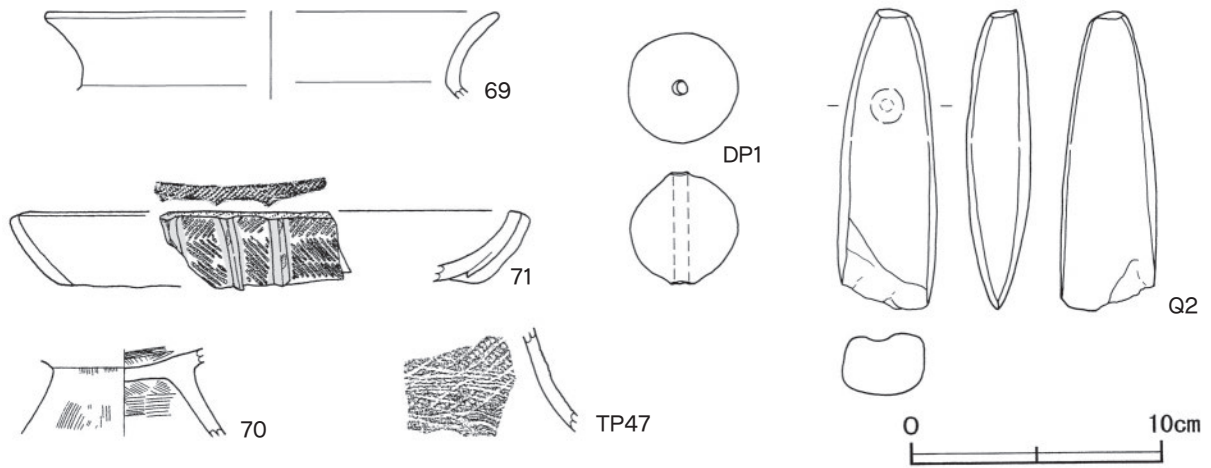
- | | | | |
|-------|------------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |



第52図 第4号住居跡実測図

遺物出土状況 土師器片198点（甕類189，高坏類9）が出土している。また，縄文土器片27点（鉢），弥生土器片46点（壺）も出土している。土器のほとんどは細片で，全域に散在した状態で出土している。69は北西部の床面，70は東部の床面から出土している。縄文土器片は流れ込みと考えられる。

所見 時期は，出土土器から前期前半と考えられる。



第53図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表（第53図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
69	土師器	甕	[18.2]	(3.5)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	北西部床面	50%
70	土師器	台付甕	—	(3.5)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	体部・脚部ハケ目調整	東部床面	
71	弥生土器	壺	[20.2]	(2.9)	—	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部単節縄文施文後 赤彩された棒状浮文貼付	南西部床面	PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q2	磨製石斧	11.9	4.0	2.6	200	玄武岩カ	完形丁寧な研磨	南西部壁外	100% PL10
DP1	球状土錘	4.4	4.4	4.4	80.5	長石・針状鉱物	完形 ナデ 孔径 0.6cm	炉北側床面	100%

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP47	弥生土器	壺	—	(3.1)	—	長石・石英	にぶい褐	普通	附加条二種縄文施文後 撚糸文施文	東部床面	

第5号住居跡（第54・55図）

位置 調査区西部のB2 c3区，標高33.5mの台地の縁辺部に位置している。

重複関係 第34・35号土坑を掘り込み，第18・28号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 南コーナー部は調査区域外に延びている。長軸7.1m，短軸6.5mの方形で，主軸方向はN-45°-Wである。壁高は28~36cmで，外傾して立ち上がっている。

床 ほほ平坦で，中央部から南東壁際にかけて踏み固められている。壁溝が全周している。

炉 中央部やや北西寄りに位置している。長径62cm，短径38cmの楕円形で，床面と同じ高さの地山面をそのまま使用した地床炉である。炉床の南東部に炉石が敷設され，炉石及び炉床は火熱を受けて赤変している。

炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土ブロック少量，ローム粒子微量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量，焼土ブロック微量
- 3 灰褐色 ロームブロック少量，焼土ブロック微量

ピット 7か所。P1~P4は深さ48~56cmで，規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ14cmで，配置から出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6は深さ61cm，P7は深さ43cmで，P2を挟むように位置しており，P2の補助柱穴と考えられる。

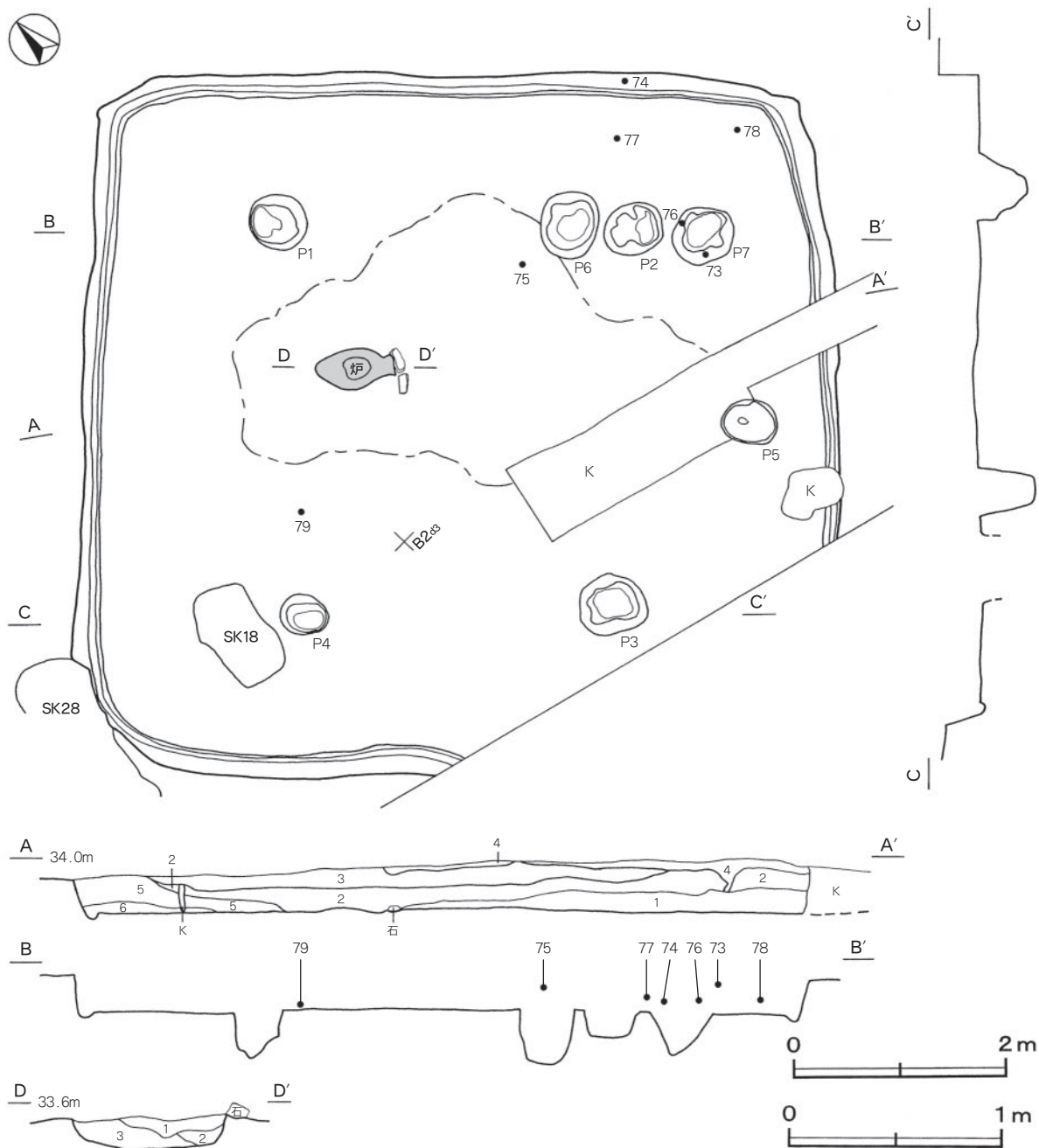
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

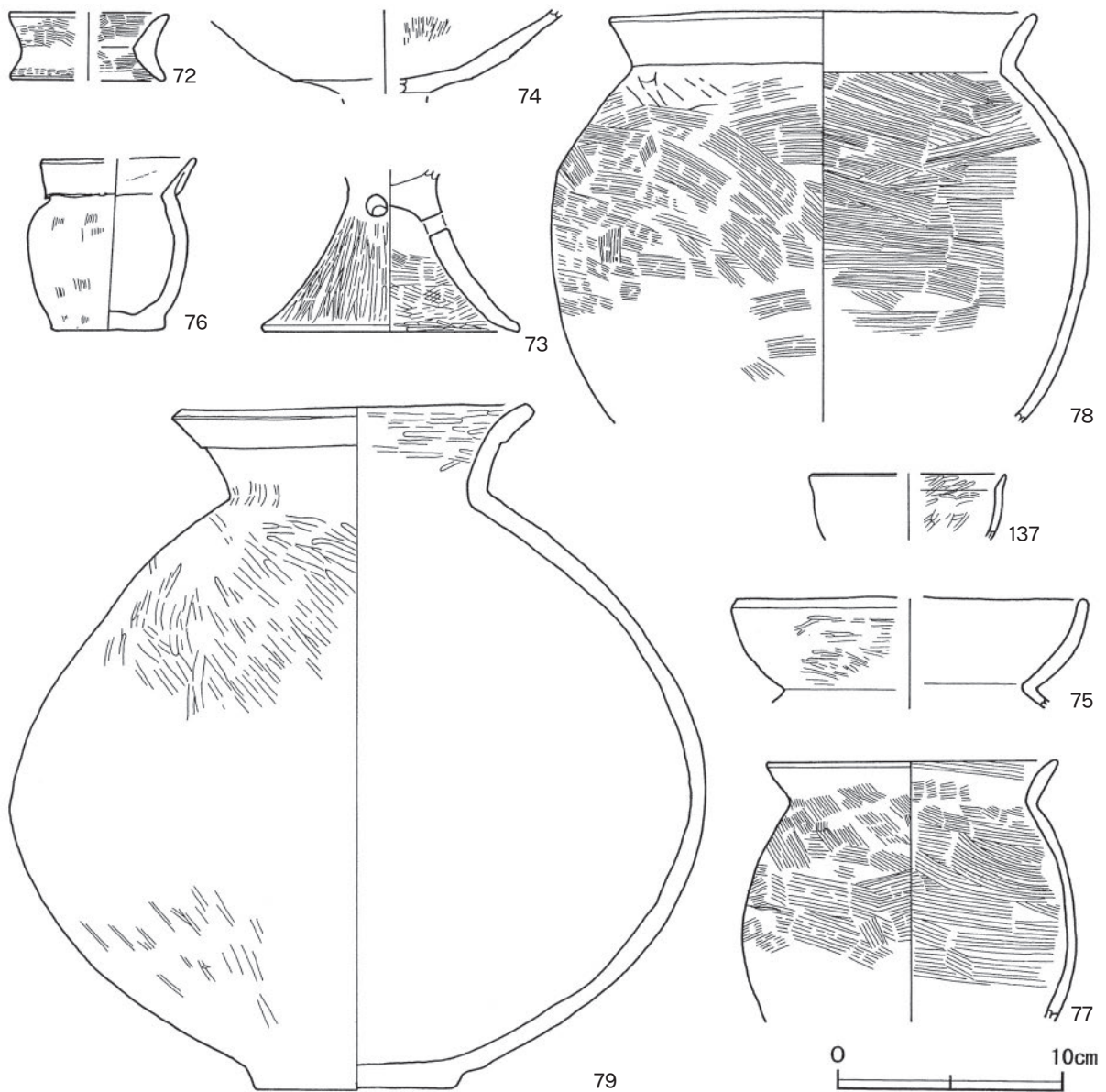
- | | | | |
|-------|-------------------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 2 黒色 | ローム粒子少量, 焼土ブロック微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 6 黒褐色 | ロームブロック微量 |

遺物出土状況 土師器片287点（甕・壺類281, 高坏類5, 椀類1）, 流れ込みによる縄文土器片53点, 弥生土器片31点が出土している。土師器片は東コーナー部を中心に出土しており, 投棄された様相を呈している。73～78は東コーナー部の覆土下層から中層にかけて出土している。79は中央部の床面からはほぼ完形の状態で出土している。また, 104（第62図）と同一個体と見られる壺の体部片が南部の床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器から前期前半と考えられる。本跡は, 当該期における最も大形の住居である。



第54図 第5号住居跡実測図



第55図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表（第55図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
72	土師器	器台	[7.0]	3.0	[7.0]	長石・針状鉱物	にぶい橙	普通	器受け部・脚部内外面ハケ目調整後ナデ	覆土中	40%
73	土師器	高坏	—	(7.1)	[11.2]	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	脚部3孔外面ヘラ磨き内面ハケ目整形	東部中層	30%
74	土師器	高坏	—	(3.6)	—	長石・石英	浅黄橙	普通	坏部内面ヘラ磨き外面風化のため不明	東部下層	
75	土師器	壺	[15.5]	(4.8)	—	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	口縁部外面ヘラ磨き内面横ナデ	東部中層	
76	土師器	ミニチュア	[6.7]	7.6	5.1	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ハケ目調整後ナデ	東部下層	90% PL10
77	土師器	甕	12.8	(11.6)	—	長石・石英・針状鉱物	橙	普通	口縁部外面横ナデ内面ハケ目調整	東部下層	50%
78	土師器	甕	18.8	(18.2)	—	長石・石英・針状鉱物	橙	普通	口縁部内外面横ナデ	東部下層	50%
79	土師器	壺	15.2	30.6	8.8	長石・石英	褐	普通	口縁部・体部外面ヘラ磨き内面剥離の為不明	中央部床面	80% PL9
137	土師器	椀	[8.6]	(2.9)	—	石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	体部内外面ヘラ磨き	北部中層	

第6号住居跡（第56・57図）

位置 調査区西部のB3g7区、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第64号土坑を掘り込み、第17号土坑に掘り込まれている。

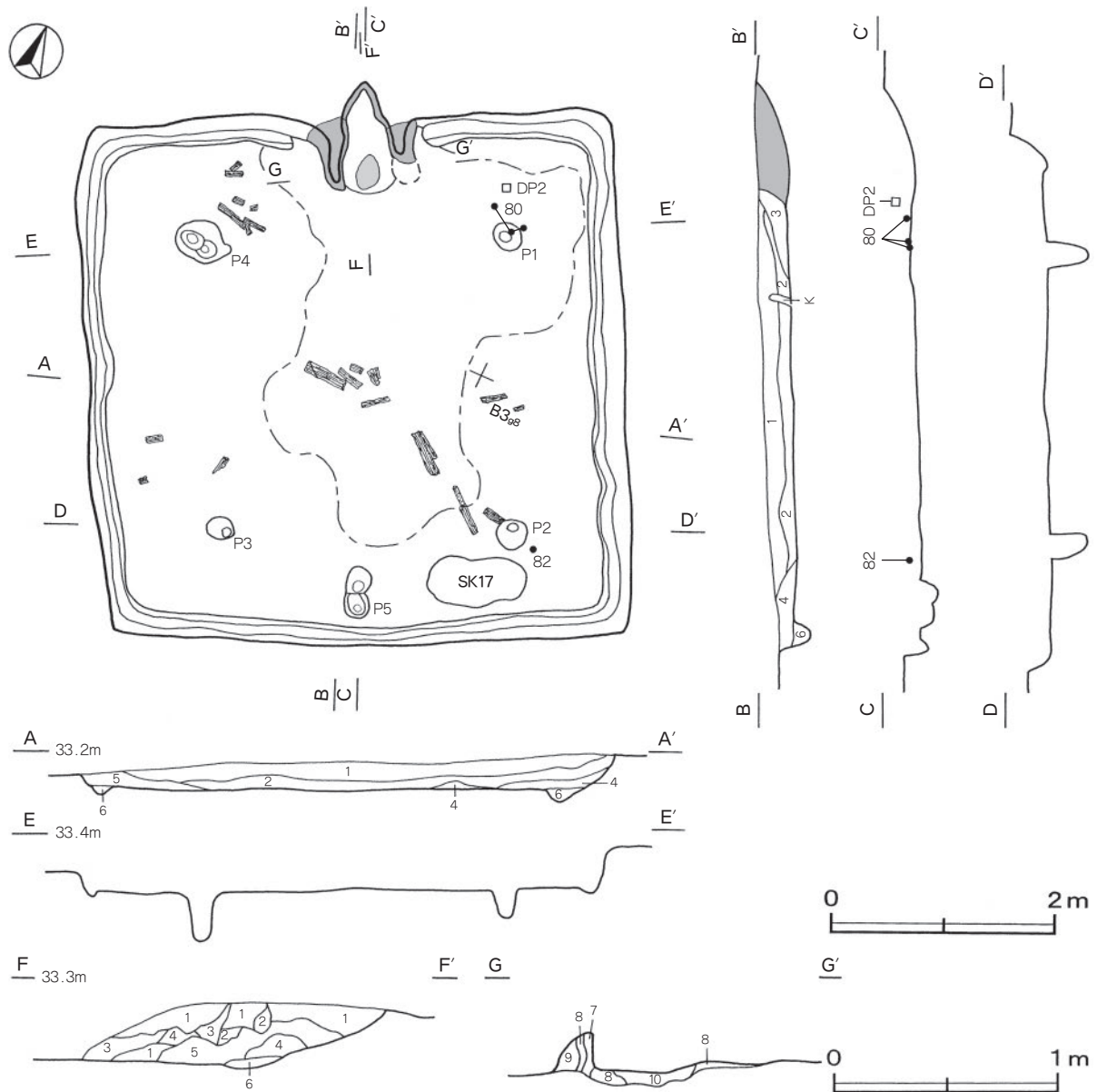
規模と形状 一辺が4.7mの方形で、主軸方向はN-25°-Wである。壁高は10~28cmで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、中央部から竈前にかけて踏み固められている。焼土や炭化粒子がほぼ全域から薄く広がって確認されている。壁溝が全周している。

竈 北西壁の中央部に付設されている。規模は、焚口部から煙道部まで100cm、袖部幅85cmほどである。袖部は床面と同じ高さの地山面を基部として、砂質粘土を主体に構築されている。火床部は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用しており、火床面は火熱を受けて赤変している。煙道部は壁外に35cmほど掘り込まれ、火床面から緩やかに外傾して立ち上がっている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|----------------------------|----------|-------------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック微量 | 6 灰褐色 | ローム粒子少量、焼土ブロック微量 |
| 2 暗褐色 | 粘土ブロック・砂粒中量、ローム粒子・焼土ブロック微量 | 7 暗赤褐色 | 焼土ブロック多量、ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック・焼土ブロック微量 | 8 暗赤褐色 | 焼土ブロック中量、粘土粒子微量 |
| 4 暗赤褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 | 9 褐色 | 粘土粒子・砂粒多量、焼土粒子少量 |
| 5 極暗赤褐色 | 焼土粒子少量、ロームブロック微量 | 10 極暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量、炭化粒子少量 |



第56図 第6号住居跡実測図

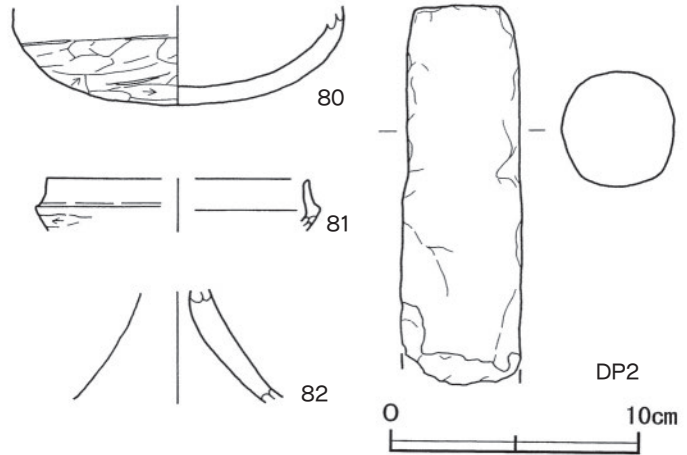
ピット 5か所。P1～P4は深さ35～50cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ21cmで、竈と向かい合う位置にあり、出入口施設に伴うピットと考えられる。

覆土 6層に分層される。下層から炭化物や焼土粒子が確認され、中・上層はレンズ状の堆積状況を示していることから、焼失後、自然堆積したと考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|----------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック・焼土粒子・炭化物微量 | 5 暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | 焼土ブロック少量、ローム粒子微量 | 6 褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片221点（甕類188, 坏類23, 高坏類10), 土製品1点(支脚), 炭化材, 流れ込みによる縄文土器片26点が出土している。炭化材は径10cm未満の丸材で、床面上から放射状に確認されており、屋根材の一部と考えられる。80～82・DP2は、いずれも炭化材と同じ層位から破片の状態出土している。



所見 時期は、出土土器から後期後半と考えられる。炭化材の出土状況から、廃絶に伴う焼失住居である。

第57図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物観察表（第57図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
80	土師器	坏	—	(4.0)	—	石英・針状鉱物	褐灰	普通	坏部外面へラ削り・砥石転用痕 黒色処理痕	北部下層	70%
81	土師器	坏	[10.6]	(2.1)	—	長石	にぶい橙	普通	口縁部横ナデ	南西部下層	10%
82	土師器	高坏	—	(4.4)	—	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	脚部内外面ナデ	東部上層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP2	支脚	(15.2)	4.9	4.9	(455)	雲母・長石・石英	ナデ 中位に糊痕	北部上層	

第8号住居跡（第58図）

位置 調査区西部のB3c1区、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第7号溝と第1号地下室状遺構に掘り込まれている。

規模と形状 北部は調査区域外に延びている。長軸9.6m、短軸5.2mの長方形で、主軸方向はN-33°-Wである。覆土が薄く、壁の立ち上がりは確認されていない。

床 平坦な地山面をそのまま床面としている。全体的に締まっているが、顕著な硬化面は確認されていない。壁溝が、西部を除いて巡っている。

竈 北西壁際に付設されている。遺存状態が悪く、煙道部と火床面が確認されただけである。確認された規模は、火床面から煙道部まで90cmほどである。火床面は地山面を15cmほど掘り込み、ローム土を埋め戻して使用されており、火熱を受けて赤変硬化している。煙道部は壁外へ30cmほど掘り込んで構築されている。また、火床面の東側から、袖部材の一部と考えられる粘土塊が確認されている。

竈土層解説

- | | | | |
|---------|-----------------------|--------|------------------|
| 1 極暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック・粘土粒子少量 | 3 暗赤褐色 | ロームブロック・焼土ブロック中量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量、焼土ブロック微量 | | |

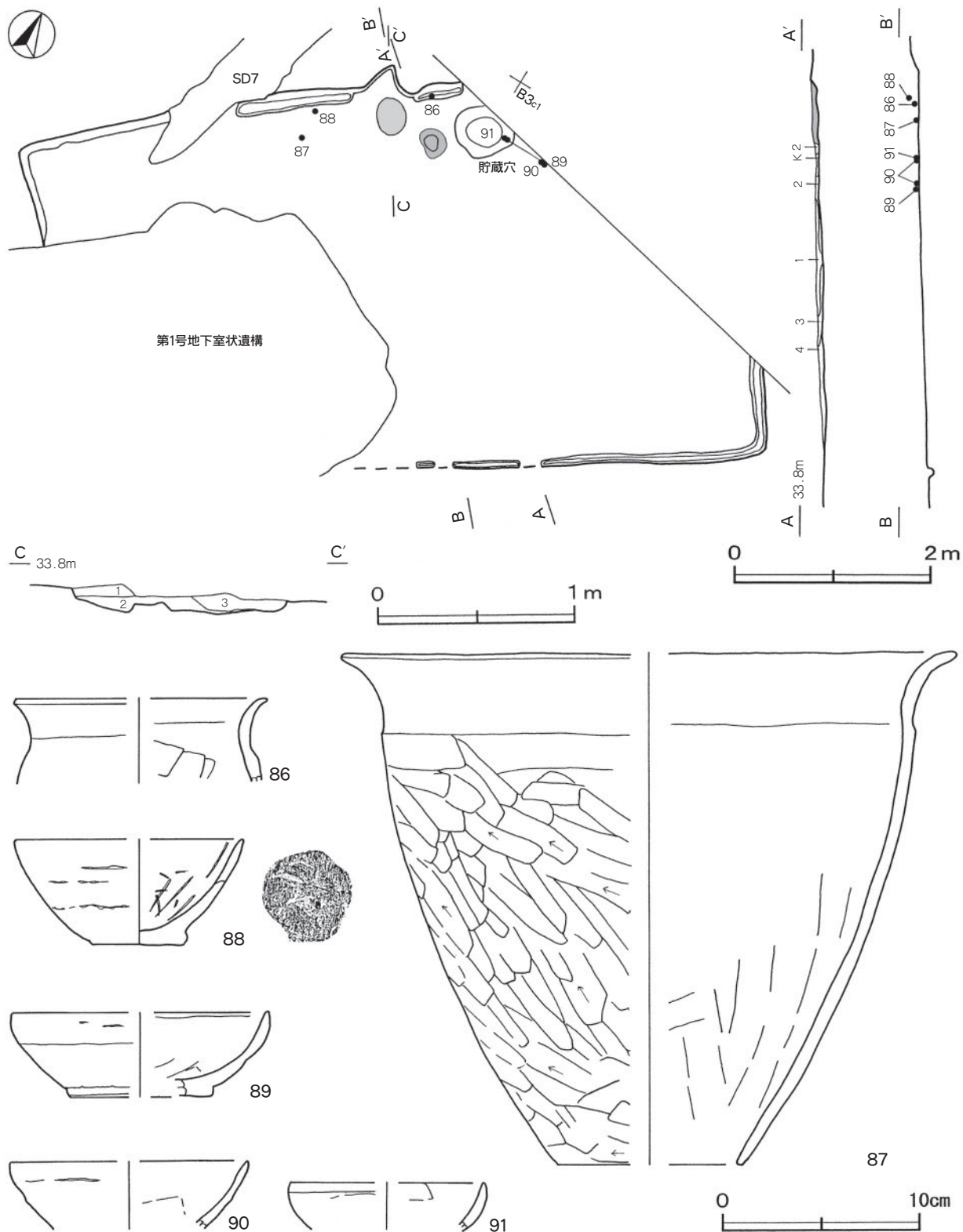
貯蔵穴 竈の北東側に付設されている。長径85cm、短径70cmの楕円形で、底面は中央がややくぼみ、壁は外傾

して立ち上がっている。

覆土 4層に分層される。層厚が薄く、堆積状況は不明である。

土層解説

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子微量 | 3 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量 | 4 黒褐色 ローム粒子微量 |



第58図 第8号住居跡・出土遺物実測図

遺物出土状況 土師器片71点（甕・甔類63，坏類8），流れ込みによる縄文土器片13点，弥生土器片10点が出土している。土師器片は竈付近を中心に出土しており，86・89・90は竈前の床面から出土している。

所見 時期は，出土土器や遺構の形態から後期と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表（第58図）

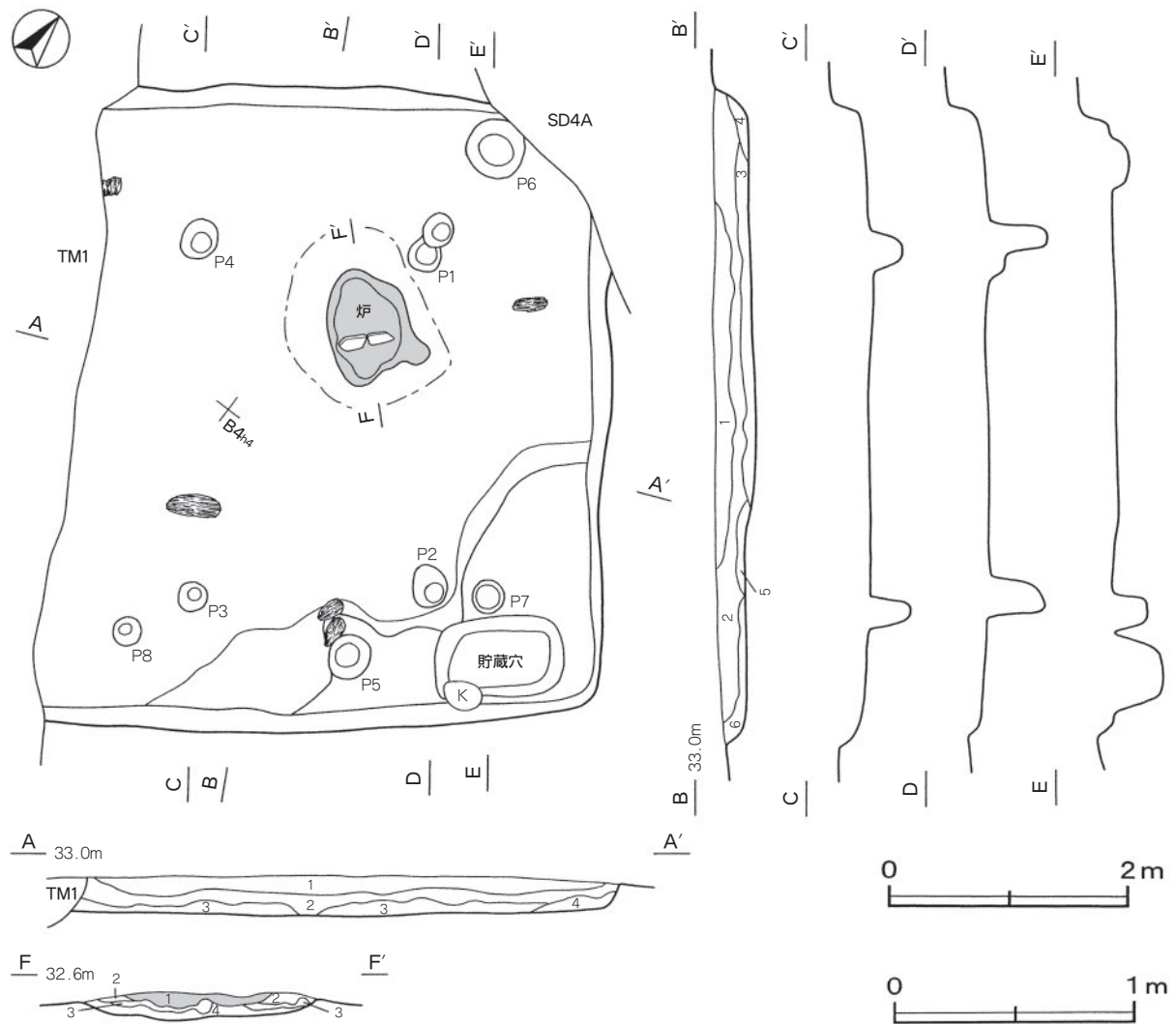
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
86	土師器	甕	[12.6]	(4.3)	—	雲母・長石・石英	灰褐	普通	口縁部横ナデ	竈前床面	
87	土師器	甔	[30.7]	26.1	[9.4]	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部横ナデ 体部外面ヘラ削り 内面ヘラナデ	西部床面	30%
88	土師器	坏	[11.5]	5.3	4.4	石英	明赤褐	普通	体部外面ナデ 内面ヘラナデ	西部床面	45%
89	土師器	坏	[13.0]	4.3	[7.2]	石英	橙	普通	体部外面ナデ 内面ヘラナデ	竈前床面	30%
90	土師器	坏	[12.0]	(3.3)	—	長石	にぶい橙	普通	体部外面ナデ 内面ヘラナデ	竈前床面	20%
91	土師器	坏	[9.8]	(2.4)	—	石英・長石	赤褐	普通	体部外面ナデ 内面ヘラナデ	中央部床面	10%

第10号住居跡（第59・60図）

位置 調査区東部のB4h4区に位置し，標高33.5mの台地の縁辺部に立地している。

重複関係 第1号方形周溝墓と第4A号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南北軸は5.4mで，東西軸は4.7mが確認され，長方形と推測される。主軸方向はN-39°-Wである。壁高は18~28cmで，外傾して立ち上がっている。



第59図 第10号住居跡実測図

床 はほぼ平坦で、炉の周辺が踏み固められている。東コーナー部から一段高くなったテラス状の高まりが確認されている。また、焼土や炭化粒子がほぼ全域に薄く広がっている。

炉 中央部やや北寄りに位置している。長径95cm、短径70cmの楕円形で、床面と同じ高さの地山面を使用した地床炉である。炉床の南東部に炉石が敷設され、炉石及び炉床は火熱を受けて赤変している。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|-------------------|-------|------------------|
| 1 暗赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 3 黒褐色 | ローム粒子・焼土ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | ロームブロック少量、焼土粒子微量 |

ピット 8か所。P1～P4は深さ40～55cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P5は深さ34cmで、炉と向かい合う位置にあることから出入り口施設に伴うピットと考えられる。P6～P8は深さ15～30cmで、性格は不明である。

貯蔵穴 東コーナー部に位置し、長軸105cm、短軸65cmの隅丸長方形で、深さは41cmである。底面は平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

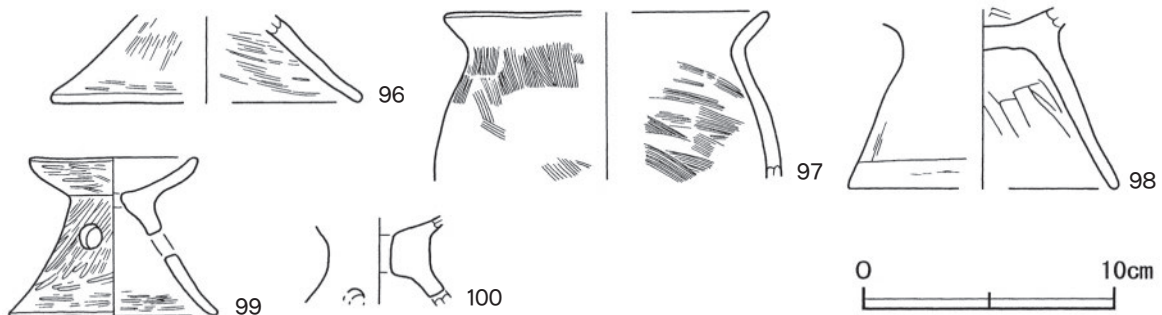
覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・炭化物微量 | 4 暗褐色 | ロームブロック少量、炭化粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子微量 | 5 黒褐色 | ローム粒子・炭化材微量 |
| 3 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物微量 | 6 灰褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片364点（甕・甔類361、高坏・器台類3）、炭化材、流れ込みによる縄文土器片79点、弥生土器片117点が、全域から散在して出土している。96・97は東部の床面から出土している。

所見 時期は、出土土器から前期前半と考えられる。焼土や炭化粒子の広がりから、廃絶に伴う焼失住居である。



第60図 第10号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡出土遺物観察表（第60図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
96	土師器	高坏	—	(3.5)	[12.2]	雲母・長石・石英	にぶい褐	普通	脚部ヘラ磨き	東部床面	
97	土師器	甕	[12.8]	(6.6)	—	長石・石英・針状鉱物	暗褐	普通	口縁部横ナデ 外面炭化物付着	東部床面	10%
98	土師器	台付甕	—	(7.1)	[10.7]	長石・石英	明赤褐	普通	脚部外面ナデ・炭化物付着 内面ヘラナデ	南部下層	
99	土師器	器台	6.6	6.3	8.2	長石・石英	にぶい橙	普通	3孔器受け部内面剥離のため調整不明	東部中層	80% PL10
100	土師器	器台	—	(3.6)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	脚部外面ナデ穿孔	北部中層	

表5 古墳時代堅穴住居跡一覧表

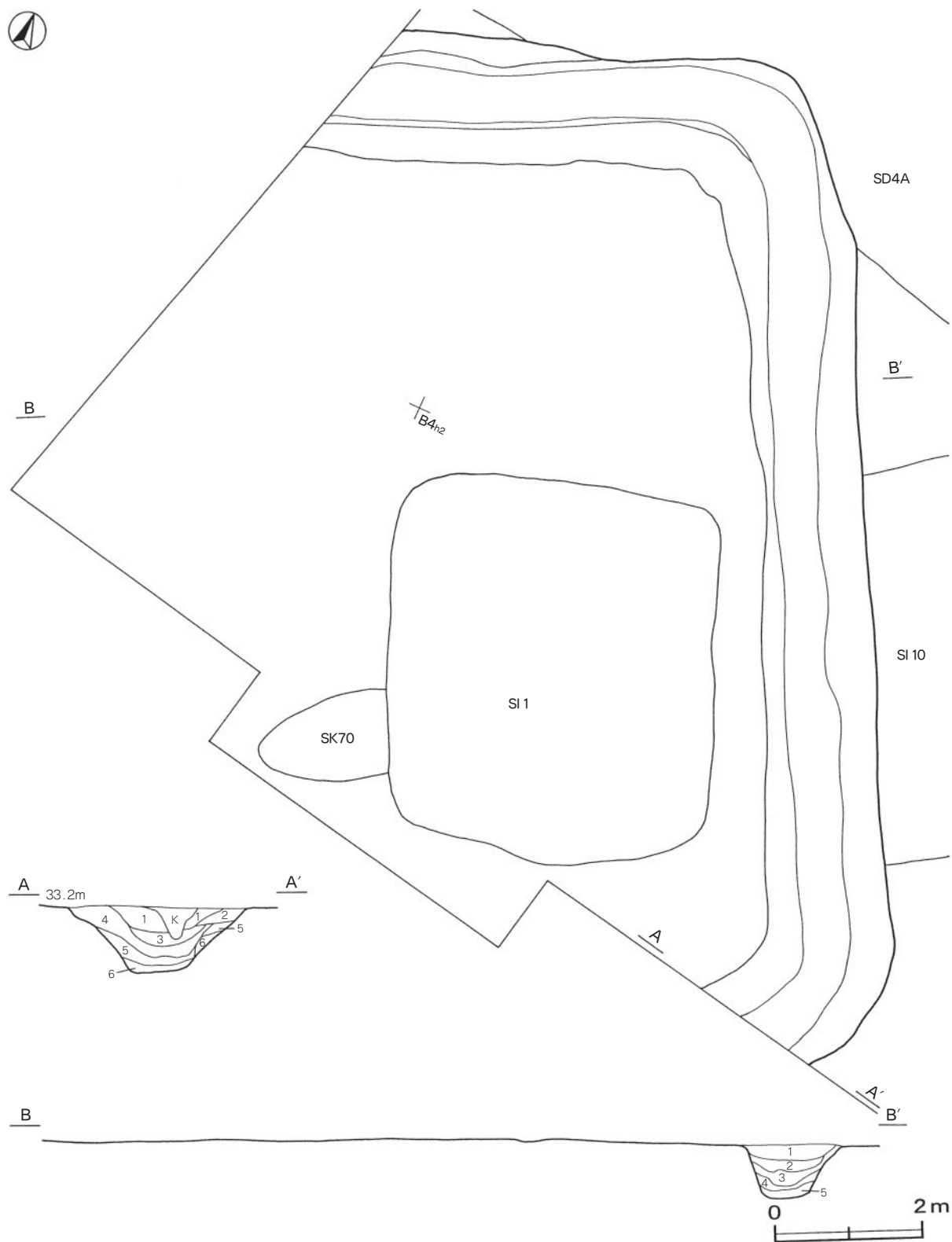
番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設				覆土	主な出土遺物	時代	備 新 旧 関 係 (旧→新)	
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈 貯蔵穴					
1	B 4 h2	N-24°-W	長方形	5.2×4.4	20~28	平坦	—	4	1	15	炉1	—	自然	土師器、弥生土器、勾玉	前期前半	SK70→本跡
4	B 2 b5	N-35°-W	方形	5.1×4.9	5	平坦	全周	2	—	3	炉1	—	人為	土師器、弥生土器、土錘	前期前半	本跡→SD6-SB1
5	B 2 c3	N-45°-W	方形	7.1×6.5	28~36	平坦	全周	4	1	2	炉1	—	自然	土師器	前期前半	SK34-35→本跡→SK18・28
6	B 3 g7	N-25°-W	方形	4.7×4.7	10~28	平坦	全周	4	1	—	竈1	—	自然	土師器、土製支脚	後期後半	SK64→本跡→SK17
8	B 3 c1	N-33°-W	長方形	[9.6]×5.2	—	平坦	一部	—	—	—	竈1	1	不明	土師器	後期	本跡→SD7.第1号地下室状遺構
10	B 4 h4	N-39°-W	[長方形]	5.4×(4.7)	18~28	平坦	—	4	1	3	炉1	1	自然	土師器	前期前半	本跡→TM1,SD4A

(2) 方形周溝墓

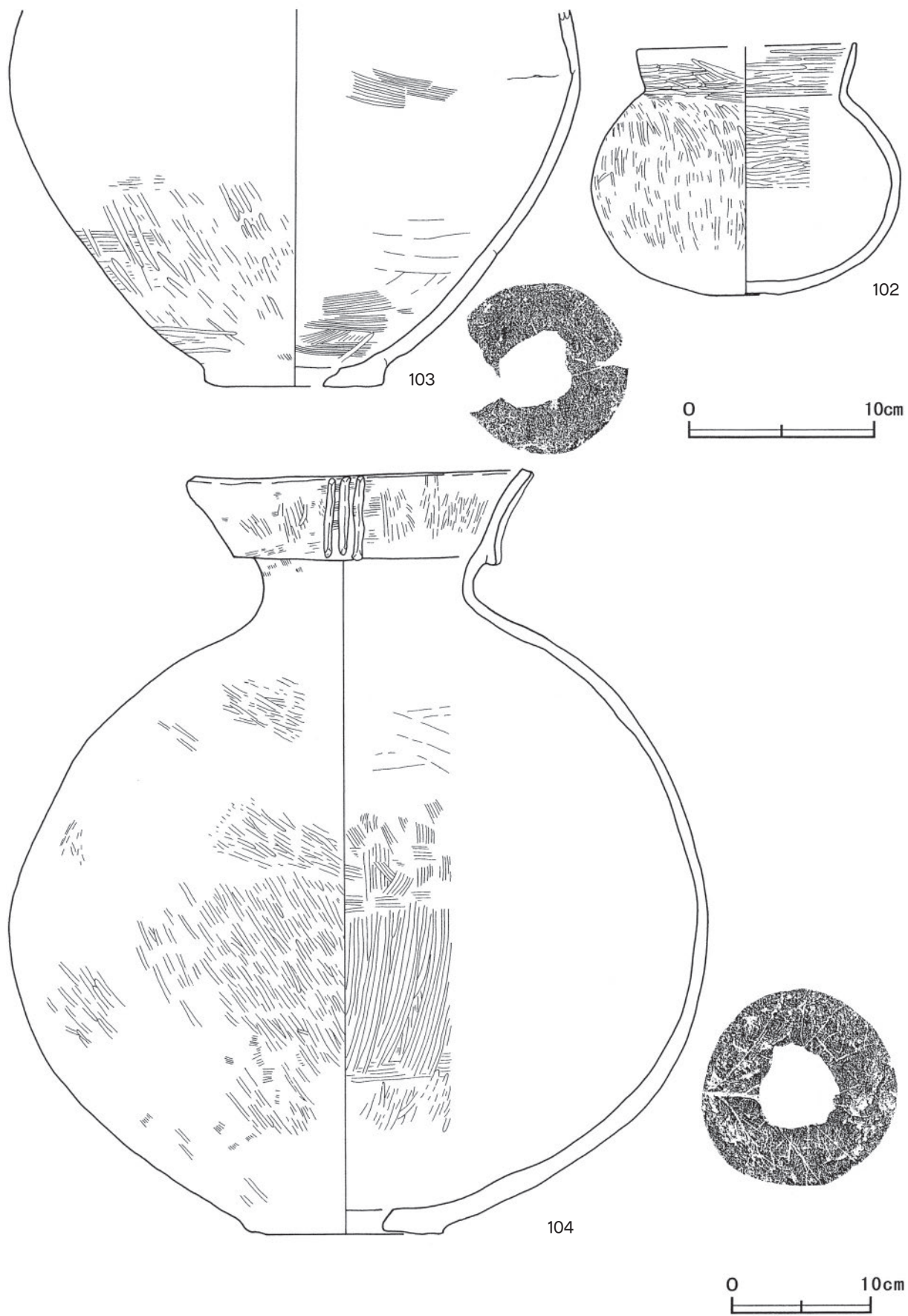
第1号方形周溝墓 (第61・62図)

位置 調査区東部のB4 h2区, 標高33.5mの台地の縁辺部に位置している。

重複関係 第10号住居跡を掘り込み, 第4 A号溝に掘り込まれている。



第61図 第1号方形周溝墓実測図



第62図 第1号方形周溝墓出土遺物実測図

規模と形状 南部と西部が調査区域外に延びているため、確認された規模は、内法が南北軸11.2m、東西軸10.2m、外法が南北軸14.1m、東西軸11.5mで、南東壁を基準にすると、主軸方向はN-25°-Wとなり、隅丸方形又は隅丸長方形と推測される。周溝の深さは72~85cm、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-------------------|--------|---------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | ローム粒子微量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 5 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 3 黒褐色 | ロームブロック微量 | 6 暗褐色 | ローム粒子中量 |

遺物出土状況 土師器片237点（甕・壺類236、高坏類1）、流れ込みによる縄文土器片67点、弥生土器片92点が出土している。遺物は周溝の北コーナー部と北東部からまとまって出土している。102は正位、104は逆位で北東部の覆土下層から出土している。いずれも完形に近い状態で出土しており、周溝付近に据えられていたものが周溝内に流れ込んだと推測される。

所見 時期は、出土土器と重複関係から前期前半と考えられる。重複する第10号住居跡と主軸方向が同じで、時期差もほとんどないと認められることから、同一集落内において居住域から墓域への移動があったことが推測される。

第1号方形周溝墓出土遺物観察表（第62図）

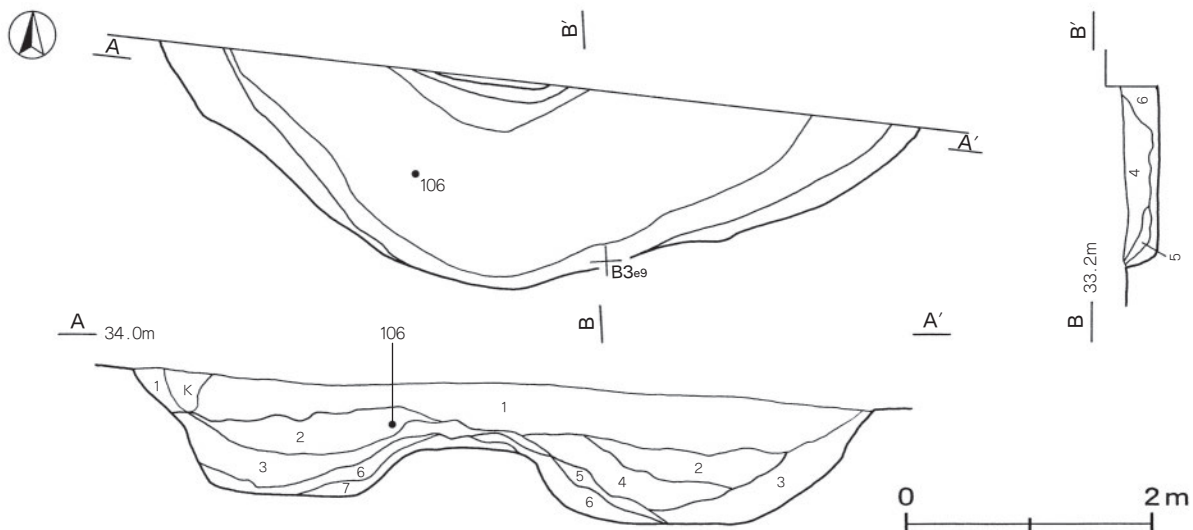
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
102	土師器	壺	[11.9]	13.4	3.6	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部・体部内外面ヘラ磨き	北東部下層	70% PL10
103	土師器	壺	—	(20.3)	9.4	長石・石英	にぶい橙	普通	体部外面ハケ目調整後ヘラ磨き 底部穿孔	北部上層	20%
104	土師器	壺	23.5	54.6	14.0	長石・石英	にぶい橙	普通	口縁部ハケ目調整後棒状浮文貼付 底部穿孔	北東部下層	90% PL9

第2号方形周溝墓（第63・64図）

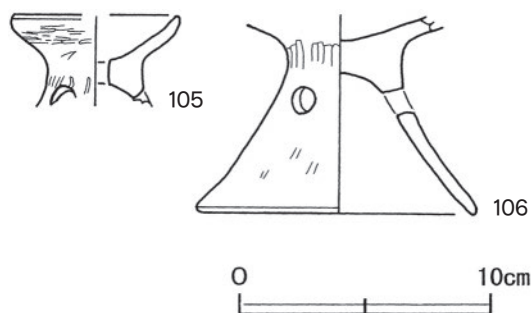
位置 調査区西部のB3 d8区、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているため、確認された規模は、内法が南北軸0.2m、東西軸1.1m、外法が南北軸1.8m、東西軸5.9mである。南東壁を基準にすると、主軸方向はN-28°-Wで、平面形は隅丸方形又は



第63図 第2号方形周溝墓実測図



第64図 第2号方形周溝墓出土遺物実測図

隅丸長方形と推測される。周溝の深さは95~100cm, 底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 極暗褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師器片85点(甕・壺類80, 高坏・器台類5), 流れ込みによる縄文土器片99点, 弥生土器片86点が出土している。106は南コーナー部の覆土中層から出土している。

所見 時期は, 出土土器から前期前半と考えられる。第1号方形周溝墓と主軸方向や形状がほぼ同じであり, 同じ系譜の集団によって築かれたものと推測される。

第2号方形周溝墓出土遺物観察表(第64図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
105	土師器	器台	[6.6]	(3.6)	—	長石・石英	にぶい橙	普通	器受け部・脚部外面ヘラ磨き 内面ナデ3孔	覆土中	25%
106	土師器	高坏	—	(7.9)	[11.0]	長石・石英	橙	普通	脚部外面ヘラ磨き	南部中層	30%

表6 方形周溝墓一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m, 深さはcm)		周溝				主な出土遺物	備考
				内法	外法	壁面	底面	深さ	覆土		
1	B 4 h2	N-25°-W	[隅丸方形・長方形]	(11.2) × (10.2)	(14.1) × (11.5)	外傾	平坦	72~85	自然	土師器	SI10→本跡→SD4A
2	B 3 d8	N-28°-W	[隅丸方形・長方形]	(1.1) × (0.2)	(5.9) × (1.8)	外傾	平坦	95~100	自然	土師器	本跡→SD8

4 中・近世の遺構と遺物

方形竪穴遺構2基と掘立柱建物跡1棟, 地下室状遺構1基, 方形周溝状遺構1基, 溝跡3条, 井戸跡1基, 土坑墓2基, 土坑1基が確認された。以下, 確認された遺構と遺物について記述する。

(1) 方形竪穴遺構

第1号方形竪穴遺構(第65図)

位置 調査区西部のB3 e6区, 標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第13・14・60号土坑を掘り込み, 第4 A・8号溝に掘り込まれている。

規模と形状 竪穴部と張り出し部からなり, 竪穴部は長軸4.8m, 短軸2.5mの長方形で, 主軸方向はN-4°-Eである。壁高は57~65cmで, 直立している。張り出し部は北壁中央部に付設されており, 北部は調査区域外に延びている。規模は上幅0.9m, 下幅0.7m, 深さ10cmほどで, 長さ0.3mが確認されている。底面はほぼ平坦で, 竪穴部との比高は50cmである。

床 ほぼ平坦である。地山面をそのまま床面としており, 全体的に締っている。

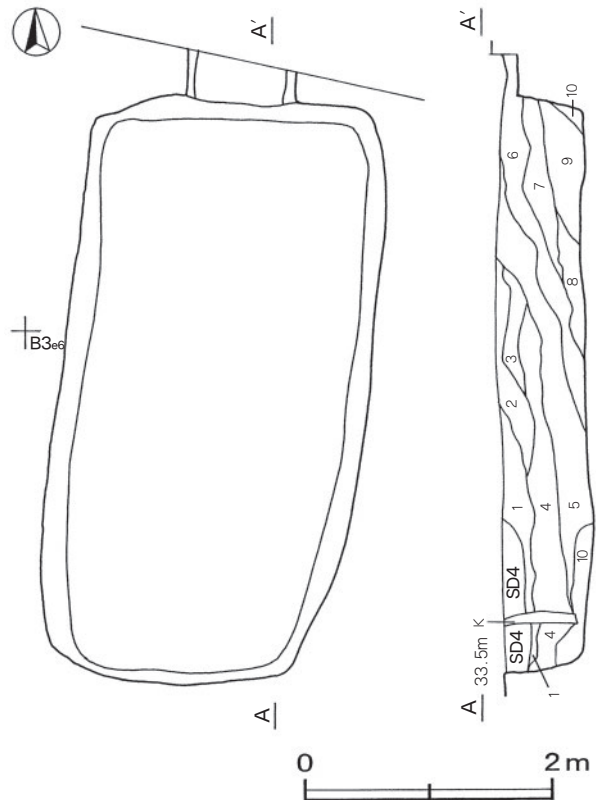
覆土 10層に分層される。各層ともロームブロックを含んだ人為堆積で, 北側から投げ込まれた様相を呈している。

土層解説

- | | | |
|----|------|------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化粒子微量 |
| 2 | 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 3 | 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子微量 |
| 5 | 黒褐色 | ロームブロック・粘土ブロック少量 |
| 6 | 暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子微量 |
| 7 | 極暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 8 | 暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物微量 |
| 9 | 黒褐色 | ロームブロック・鹿沼バミス粒子少量 |
| 10 | 極暗褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |

遺物出土状況 流れ込みによる縄文土器片11点, 土師器片22点が出土している。

所見 時期は, 中世後半に機能していたと想定される第4A号溝に掘り込まれていることから, 中世後半以前と考えられる。また, 張り出し部を堅坑ととらえれば, 地下式墳の可能性も考えられる。



第65図 第1号方形堅穴遺構実測図

第2号方形堅穴遺構 (第66図)

位置 調査区西部のB2c8区, 標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第15号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.1m, 短軸1.9mの方形で, 主軸方向はN-5°-Eである。壁高は16~28cmで, 外傾して立ち上がっている。

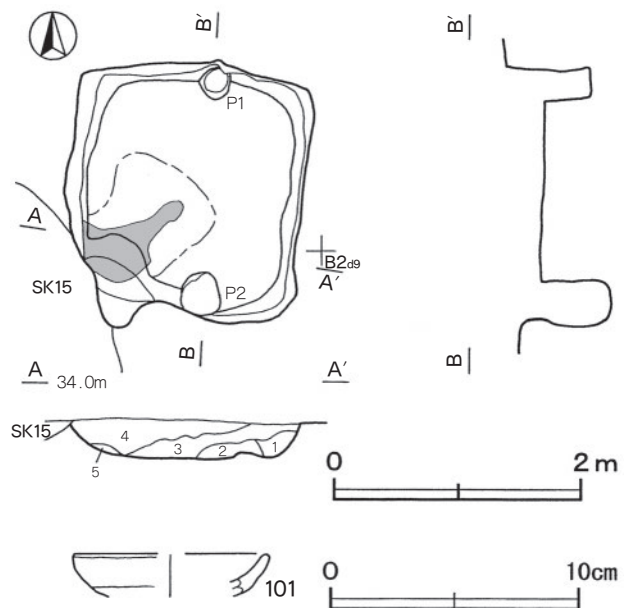
ピット 2か所。P1は深さ40cm, P2は深さ56cmで, 規模と配置から支柱穴と考えられる。

床 ほぼ平坦で, 南西部が踏み固められている。南西コーナー部からはスロープ状の高まりが確認され, 特に硬化していることから, 出入口施設と考えられる。

覆土 5層に分層される。各層ともロームブロックを含み, ブロック状に堆積していることから, 人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | |
|---|-----|--------------------------|
| 1 | 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・粘土ブロック微量 |
| 2 | 黒褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック少量 |
| 3 | 黒褐色 | 粘土ブロック中量, ロームブロック・炭化粒子少量 |
| 4 | 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 5 | 黒褐色 | ローム粒子中量 |



第66図 第2号方形堅穴遺構出土遺物実測図

遺物出土状況 土師質土器片5点(皿), 流れ込みによる縄文土器片8点, 弥生土器片20点, 土師器片12点が出土している。土器片はいずれも細片で, 全体に散在している。101は北東部の覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土土器がいずれも細片のため特定が困難であるが, 土師質土器にロクロ成形が認められないことから, 中世前半に機能していた可能性が考えられる。

第2号方形竪穴遺構出土遺物観察表(第66図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
101	土師質土器	皿	[3.8]	(1.7)	—	精良	にぶい赤褐	普通	手づくね成形	北東部下層	30%

表7 方形竪穴遺構一覧表

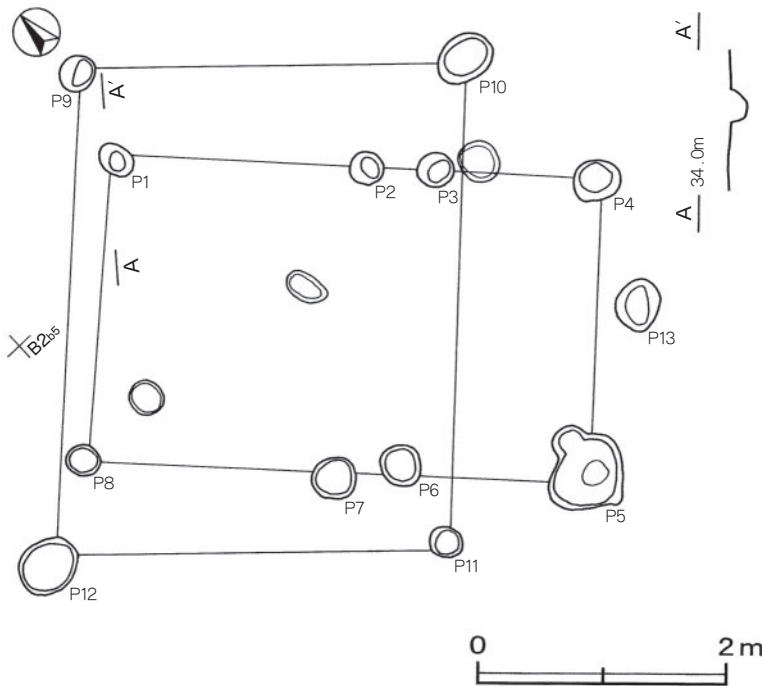
番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時代	備考
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴				
1	B 3 e6	N-4°-E	長方形	4.8×2.5	57~65	平坦	—	—	—	—	—	人為	—	中世	SK13-14-60→本跡→SD4A-8	
2	B 2 c8	N-5°-E	方形	2.1×1.9	16~28	平坦	—	2	—	—	—	人為	土師質土器	中世前半	本跡→SK15	

(2) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第67図)

位置 調査区西部のB 2 b5区で, 標高33.5mの台地の縁辺部に位置している。

重複関係 第4号住居跡を掘り込んでいる。



規模と形状 桁行3間, 梁行1間の建物跡で, 桁行方向はN-45°-Wである。規模は身舎が桁行3.9m, 梁行2.1mで, 桁行の柱間寸法は南から1.5m, 0.6m, 1.8mとなっている。さらに, 建物の北西側を囲むように柱穴4か所が確認されており, 庇又は回廊状の施設と考えられる。

柱穴 いずれも円形で, 深さは5~12cmである。

所見 時期は, 出土土器がないため詳細は不明であるが, 正保年間に作成された宍戸城下図には記載がないことや重複関係から, 中世と考えられる。形状から, 1間社流れ造の神社の可能性もある。

第67図 第1号掘立柱建物跡実測図

(3) 地下室状遺構

第1号地下室状遺構(第68・69図)

位置 調査区西部のB 2 d0区, 標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第8号住居跡, 第4A号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸6.9m, 短軸5.1mの不整長方形で, 主軸方向はN-55°-Eである。壁高は105~135cmで, 外

傾して緩やかに立ち上がっている。

床 やや凹凸がある。硬化面は確認されていない。

ピット 12か所。P 1～P 10は深さ42～68cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。P 11は深さ65cm、P 12は深さ95cmで、配置から補助柱穴の可能性が考えられる。

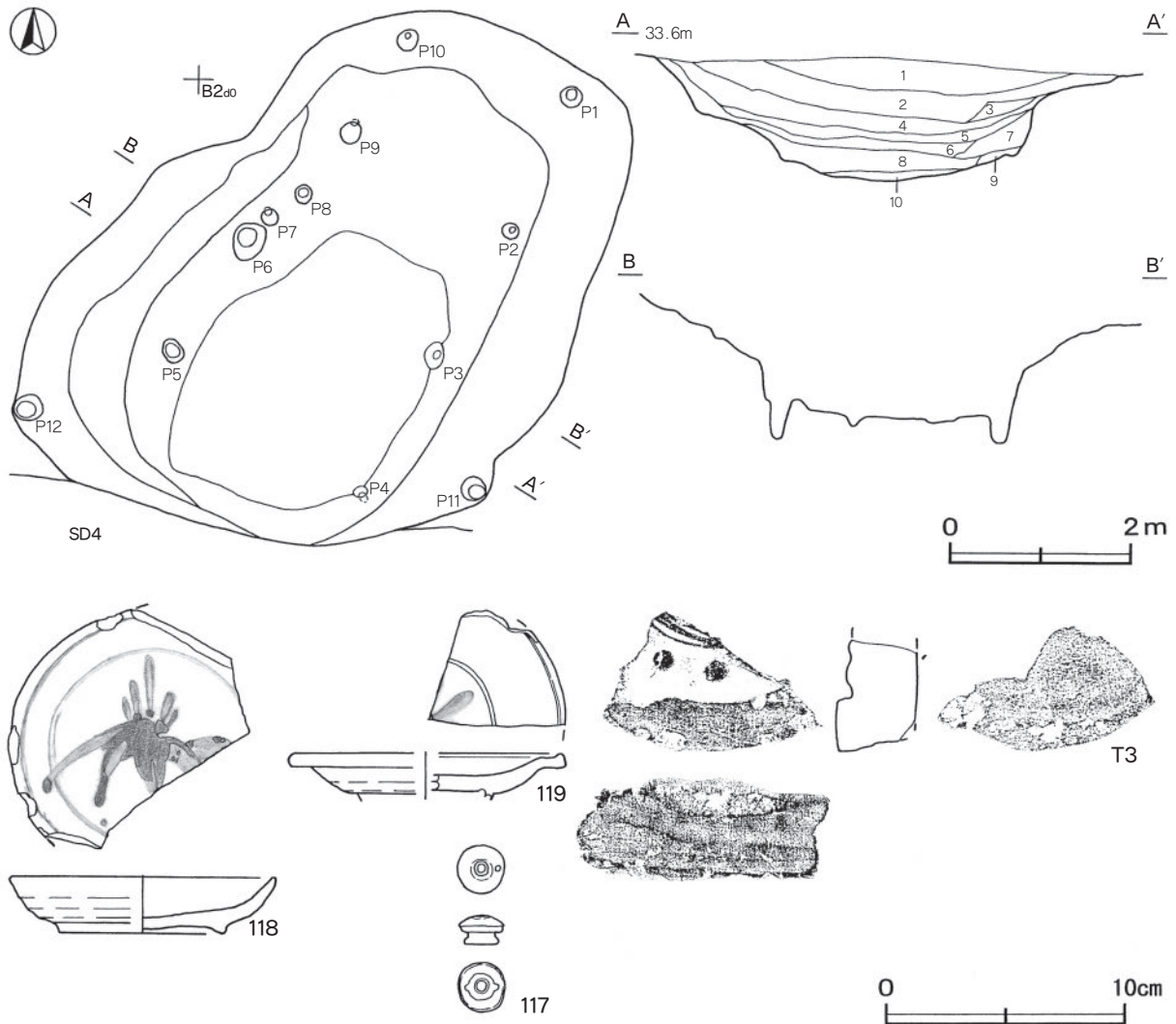
覆土 10層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

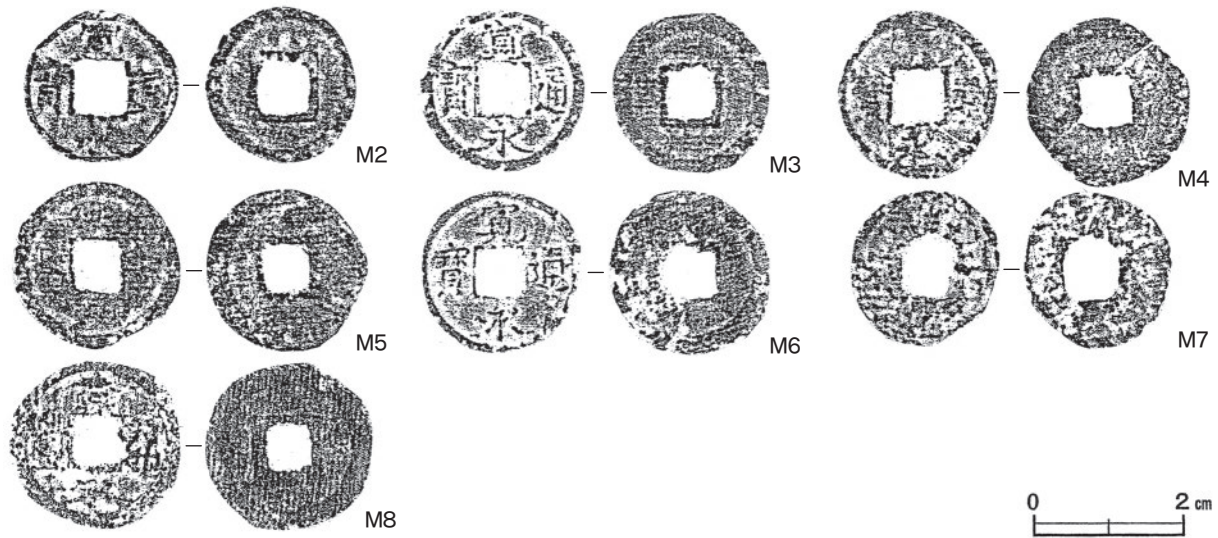
1 黒褐色	ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量	6 黒褐色	ローム粒子少量
2 黒褐色	ローム粒子・炭化粒子微量	7 暗褐色	ローム粒子中量, 鹿沼パミス粒子微量
3 極暗褐色	ローム粒子少量, 炭化粒子微量	8 黒褐色	ローム粒子中量, 焼土粒子微量
4 暗褐色	ローム粒子中量, 炭化物微量	9 暗褐色	ローム粒子中量, 鹿沼パミスブロック少量
5 黒褐色	炭化物・ローム粒子・鹿沼パミス粒子少量, 焼土粒子微量	10 黒色	鹿沼パミス粒子少量, 焼土粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片17点(皿), 陶器片8点(皿2, 碗2, 鉢4), 古銭7点(寛永通宝), 煙管1点, 流れ込みによる弥生土器片6点, 土師器片97点が出土している。遺物は全体から散在して出土しており, 意図して投棄した痕跡は認められない。117～119は覆土下層から出土している。

所見 時期は, 出土土器と重複関係から17世紀以降と考えられる。地山を深く掘り込み, 上屋を構築していた状況から, 室内は冷暗だったことが推測され, 貯蔵用又は醸造用の施設として機能していたと考えられる。



第68図 第1号地下室状遺構・出土遺物実測図



第69図 第1号地下室状遺構出土遺物実測図

第1号地下室状遺構出土遺物観察表（第68・69図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
117	土師質土器	蓋	2.0	1.1	1.6	雲母	橙	普通	平燭の蓋 嵌め込み用の突起2か所	覆土下層	100%油煙付着
118	陶器	鉄絵皿	[11.0]	2.4	7.0	長石釉	灰白	良好	圏線内に蘭竹文 全面施釉	覆土下層	60%瀬戸美濃
119	陶器	鉄絵皿	[11.2]	(2.0)	[5.4]	長石釉	灰黄・淡黄	良好	見込みに重ね焼き痕	覆土下層	20%瀬戸美濃

番号	銭名	径	孔幅	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M2	寛永通宝	2.2	0.8	1.6	銅	1697	新寛永 無背銭 銅一文銭	南部下層	
M3	寛永通宝	2.3	0.7	2.1	銅	1697	新寛永 無背銭 銅一文銭	南部下層	
M4	寛永通宝	2.3	0.7	1.7	銅	1697	新寛永 無背銭 銅一文銭	南部下層	
M5	寛永通宝	2.3	0.7	1.5	鉄	1738	新寛永 無背銭 銅一文銭	南部下層	
M6	寛永通宝	2.3	0.7	1.8	銅	1697	新寛永 無背銭 銅一文銭	南部下層	
M7	不明	2.2	0.9	1.1	銅	—	判読不可	南部下層	
M8	寛永通宝	2.4	0.7	2.7	銅	1636	古寛永 無背銭 銅一文銭	北部覆土中	

番号	種別	径	厚さ	重量	胎土	焼成	特徴	出土位置	備考
T3	軒丸瓦	(8.2)	3.4	158	長石・石英	不良	珠文縁三巴文 圏線に尾が接する。胎芯赤褐色 表面燻し	覆土中層	

(4) 方形周溝状遺構

第1号方形周溝状遺構（TM3・第70図）

位置 調査区西部のB2c6区、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第29・33号土坑、第6号溝に掘り込まれている。

規模と形状 内法が長軸4.8m、短軸4.5m、外法が長軸5.9m、短軸5.5mの隅丸方形で、南西部を基準にすると主軸方向はN-42°-Wである。周溝の深さは8~15cm、底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

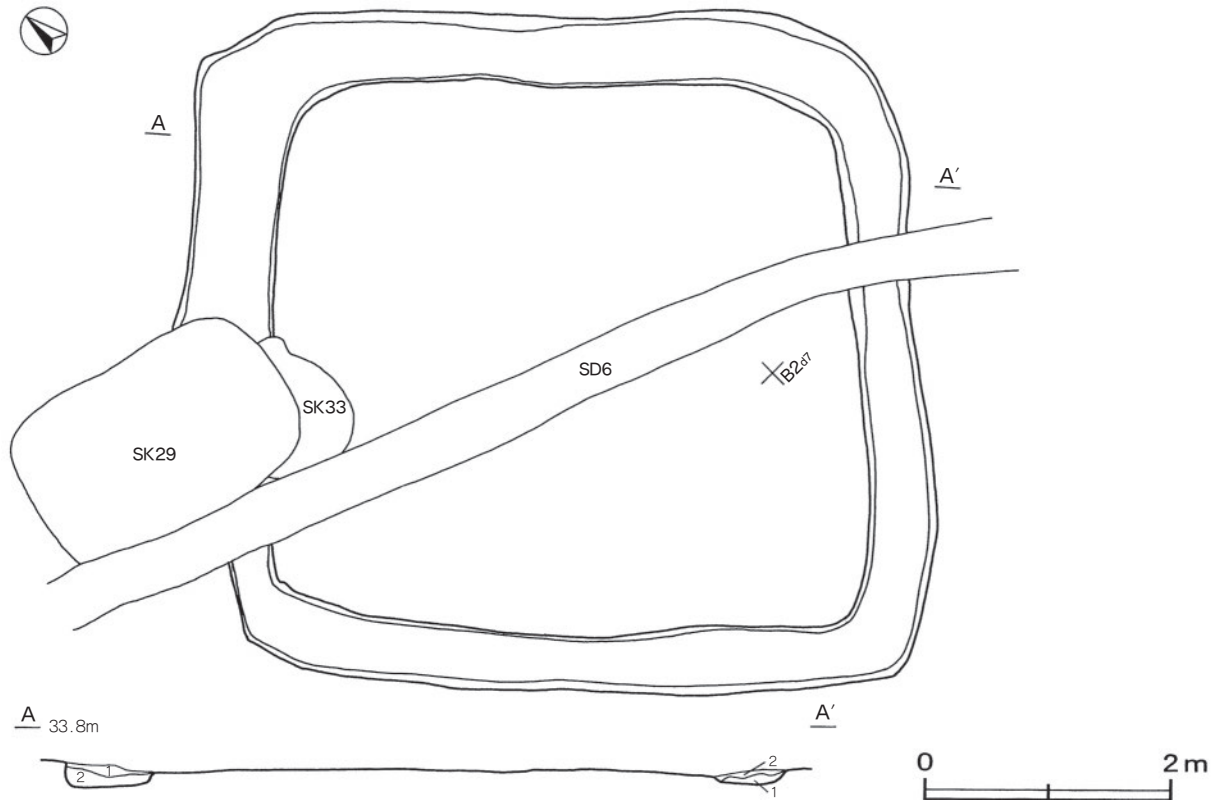
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 極暗褐色 ローム粒子微量

遺物出土状況 流れ込みによる縄文土器片28点、土師器片19点が出土している。

所見 詳細な時期は出土土器がないため不明であるが、正保年間に作成された宍戸城下図では本跡の位置する場所は「畠」として記載されていることから、近世以前と考えられる。形状から、方形周溝墓の可能性も考えられるが、他の方形周溝墓に比べて規模が極めて小さいため、断定することはできない。



第70図 第1号方形周溝状遺構実測図

(5) 溝跡

第4A号溝跡 (第4・71・72図)

位置 調査区中央部のB2d4~B3i7区で、台地を東西に横断するように立地している。

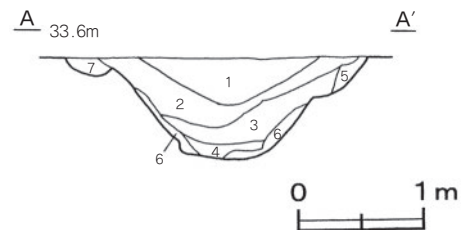
重複関係 第10号住居跡、第1号方形周溝墓、第1号方形竪穴遺構、第11・12・60号土坑を掘り込み、第3・4B・6号溝、第5・8・10・36・39・41~43・57号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 B3i7区から北西方向(N-55°-W)に緩やかに屈曲し、B3g3区から西方向(N-85°-W)に直線的に延びている。確認された長さは99mで、両端ともに調査区域外へ延びている。規模は、上幅1.6~2.0m、下幅0.5~0.8m、深さは75~80cmである。地形の高低に合わせた掘り方がなされ、底面の標高は中央部が高く、縁辺部では低く、その高低差は1.3mである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がっている。また、中央部のB3e2区から、長径3.0m、短径2.0mで、底面からの深さ60cmほどの楕円形の掘り込みが確認されている。さらに、楕円形の掘り込み部分から東側に、上幅0.4~0.5m、下幅0.1~0.2m、深さ15cmの溝が、本跡の南側を並走している。底面は緩やかな弧状を呈しており、形状や配置から溝に伴う堀跡と考えられる。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。最下層である第6層は第4層によって掘り込まれた様相が認められ、堀浚いが行われたことが想定される。

土層解説

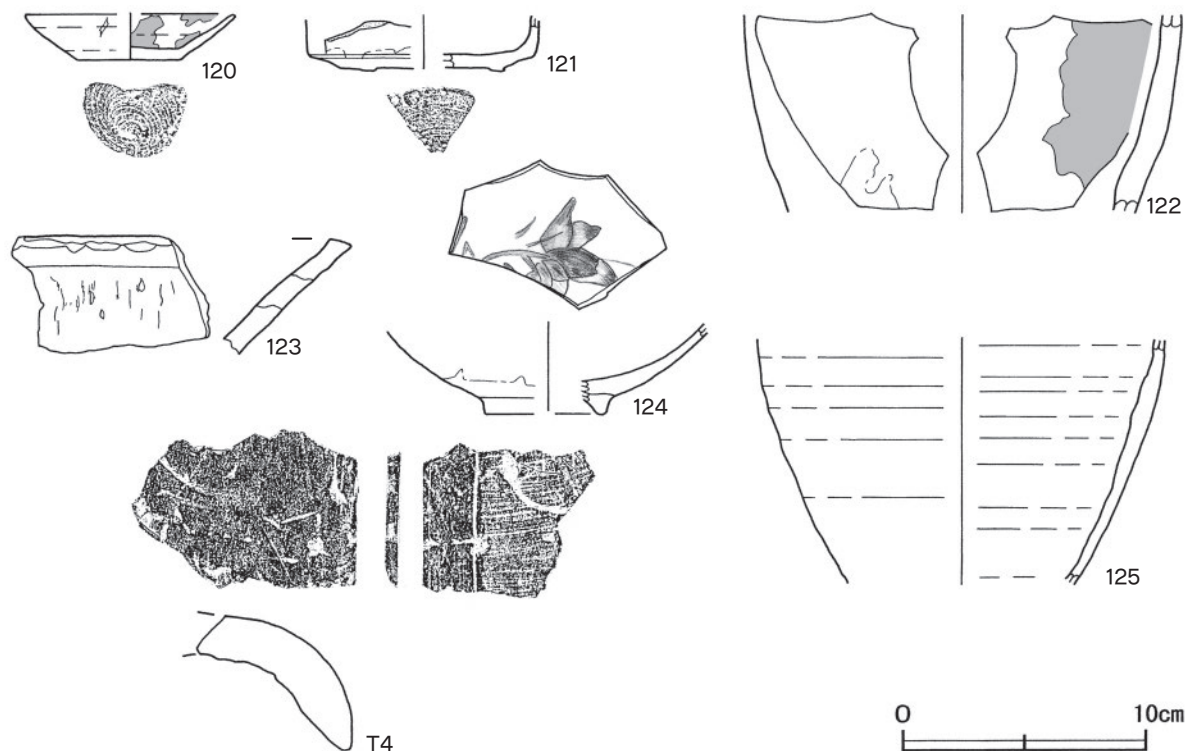
- | | | |
|---|------|----------------------|
| 1 | 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量 |
| 2 | 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |
| 3 | 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 |
| 4 | 極暗褐色 | ローム粒子少量 |
| 5 | 極暗褐色 | ロームブロック中量, 炭化物少量 |
| 6 | 暗褐色 | ローム粒子中量 |
| 7 | 極暗褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子微量 |



第71図 第4A号溝跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片5点(皿1, 鍋4), 陶器片9点(皿3, 鉢3, 瓶2, 香炉1), 流れ込みによる縄文土器片42点, 弥生土器片34点, 土師器片70点が出土している。遺物は全体に散在して出土している。120~122は東部, 124・125は中央部の覆土中から出土している。

所見 時期は, 出土遺物からみて16~17世紀には埋没が始まり, 機能していたのはそれ以前と考えられる。地元には伝わる絵図や伝承, 字名から判断すると, 新善光寺の中心部は当遺跡の南側にあった可能性が高く, 本跡は寺域の北部を区画するための溝と考えられる。堀跡と考えられる小さな溝が南側を並走していることも, 寺の本体が南側に位置していたことを示す傍証といえる。



第72図 第4A号溝跡構出土遺物実測図

第4A号溝跡出土遺物観察表(第72図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
120	土師質土器	小皿	[8.6]	1.9	4.2	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	東部覆土中	50% 漆附着
121	陶器	香炉	—	(2.3)	[6.8]	灰釉	浅黄・オリブ褐	良好	底部回転ヘラ削り 脚部貼り付け	東部覆土中	瀬戸・美濃
122	陶器	瓶子	—	(8.0)	—	石英 灰釉	灰白・灰オリブ	良好	内面に接合の為の指押さえ痕	東部覆土中	古瀬戸 漆附着
123	陶器	片口鉢	—	(4.8)	—	長石・石英	灰黄褐	普通	内面降灰による自然釉附着	西部覆土中	常滑
124	陶器	皿	—	(3.6)	[5.0]	灰釉	にぶい赤褐・灰	良好	砂目積み 鉄絵による草花文	中央部覆土中	15% 唐津
125	磁器	瓶子カ	—	(10.0)	—	白磁	灰白	良好	内面に明瞭な輪積み痕	中央部覆土中	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
T 4	丸瓦	(6.7)	(6.2)	1.9	(136)	雲母・長石・石英	凸面ナデ, 凹面布目痕・吊紐痕	中央部覆土中	

第4B号溝跡(第4・73・74図)

位置 調査区中央部のB3e9~B3f9区, 台地の中央部に位置している。

重複関係 第4A号溝跡を掘り込んでいる。

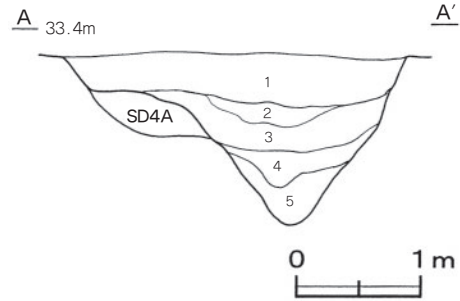
規模と形状 B3f9区から北方向(N-5°-E)に直線的に延び, そのまま調査区域外に延びている。南部は第

4 A号溝に直結しており，確認された長さは5.3mである。規模は，上幅2.0m，下幅0.3m，深さ140cmで，断面形はV字状を呈している。底面は，第4 A号溝の底面よりも60cmほど深く掘り込まれている。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。第4 A号溝の埋没途中に掘り込まれ，最上層の第1層は同時に堆積したものと推測される。

土層解説

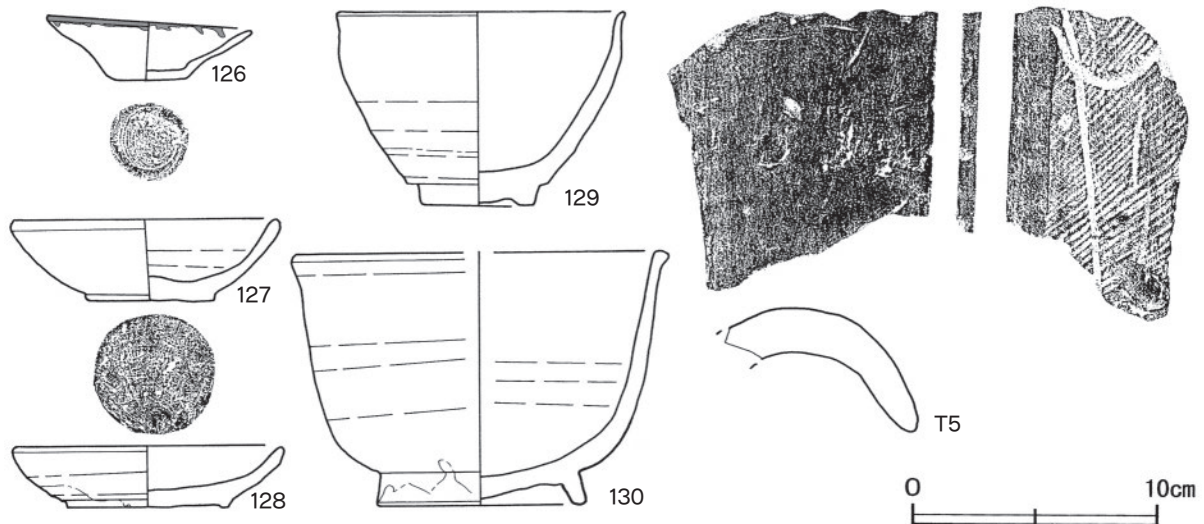
- 1 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量，焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 極暗褐色 ローム粒子少量
- 5 極暗褐色 ロームブロック中量，炭化物少量



第73図 第4 B号溝跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片9点（皿3，鍋6），陶器片7点（皿2，碗1，鉢2，甕2），流れ込みによる縄文土器片72点，弥生土器片19点，土師器片109点が出土している。126～129は覆土下層から出土している。

所見 時期は，出土陶器から17世紀と考えられるが，130が出土していることから18世紀になっても埋没していないことが推測される。正保年間に作成された宍戸城下図には，本跡及び第4 C号溝跡が同様な位置に描かれており，新善光寺の北側に隣接する「畠」を区画している様子がうかがえる。



第74図 第4 B号溝跡出土遺物実測図

第4 B号溝跡出土遺物観察表（第74図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
126	土師質土器	皿	8.3	2.6	3.1	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り 油煙付着	覆土下層	80% PL10
127	土師質土器	皿	10.7	3.4	5.2	雲母・石英	黒	普通	底部回転糸切り後 ヘラナデ 口縁端面取り	覆土下層	60%
128	陶器	皿	10.8	2.5	6.6	長石釉	灰白	良好	削り出し高台 見込みに目跡 志野皿	覆土下層	95% 瀬戸・美濃
129	陶器	天目碗	11.6	8.0	4.5	鉄釉	浅黄・黒	良好	削り出しによる輪高台 底部周辺露胎	覆土下層	95% 瀬戸・美濃 PL10
130	陶器	片口鉢	[14.6]	(10.3)	8.4	鉛釉	灰白・褐	良好	高台周辺無釉 内面に目跡	覆土上層	60% 瀬戸・美濃

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
T 5	丸瓦	(10.6)	(8.1)	1.8	(239)	雲母	凸面ナデ 凹面布目痕・吊紐痕 表面燻し 胎芯褐灰色	覆土中	

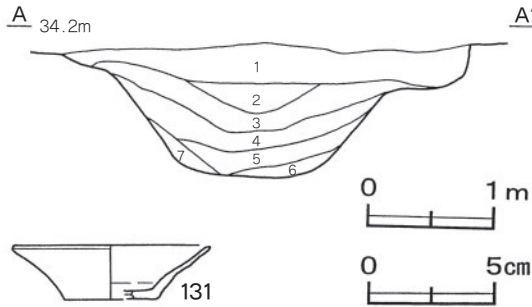
第4 C号溝跡（第4・75図）

位置 調査区西部のA 1 j0～B 1 c0区，台地の縁辺部に位置している。北側は，低地に下る斜面部になっている。

重複関係 第48号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状 B1c0区から北方向(N-5°-E)に直線的に伸び、そのまま調査区域外に伸びている。確認された長さは13.5mで、規模は上幅2.6~3.5m、下幅0.7~1.1m、深さ80~110cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して直線的に立ち上がっている。底面の標高は、北部が20cmほど低くなっており、地形に合わせた掘り方がなされている。

覆土 7層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。



土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 6 黒褐色 ローム粒子少量、鹿沼パミス微量
- 7 暗褐色 ローム粒子中量

遺物出土状況

土師質土器片 9 点(皿), 陶器片 1 点(瓶子), 磁器片 1 点(青磁碗), 流れ込みによる縄文土器片 21 点, 土師器片 18 点が, 全体から散在して出土している。131は覆土下層から出土している。

第75図 第4C号溝跡・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器と遺構の配置から17世紀又はそれ以前と考えられる。遺構の規模や形状が第4A号溝と類似していることや走行方向が直交していること、及び第4B号溝と並走していることなどから、新善光寺の北側に隣接する「畠」を区画していたと推測される。

第4C号溝跡出土遺物観察表(第75図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
131	土師質土器	皿	7.8	2.1	3.8	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	60%

表8 溝跡一覧表

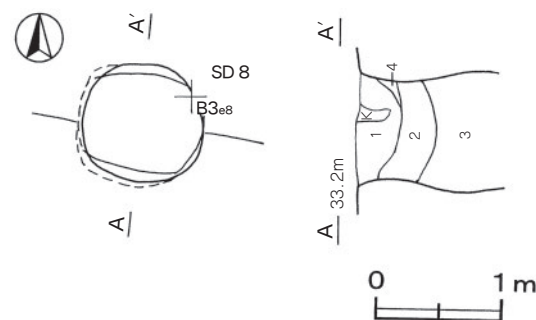
番号	位置	方向	形状	規模				断面形	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
4A	B2d4~B3i7	N-55°-W N-85°-W	直線状・弧状	(99.0)	1.6~2.0	0.5~0.8	75~80	台形状	自然	土師質土器, 陶器	SI10, TMI, SK11・12・60, 1号方形→本跡→SD3・4B・6, SK5・8・10・36・39・41・43・57
4B	B3e9~B3f9	N-5°-E	直線状	(5.3)	2.0	0.3	140	V字状	自然	土師質土器, 陶器	SD4A→本跡
4C	A1j0~B1c0	N-5°-E	直線状	(13.5)	2.6~3.5	0.7~1.1	110~80	台形状	自然	土師質土器, 陶磁器	SK48→本跡

(6) 井戸跡

第1号井戸跡(SK-31・第76図)

位置 調査区西部のB3e7区、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

重複関係 第8号溝に掘り込まれている。



規模と形状 径0.9mほどの円形である。深さ2.0mまで掘り下げたが、以下は湧水のため不明である。壁は、直立している。

覆土 4層に分層される。各層ともロームブロックを含んだ人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック・小礫微量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量

第76図 第1号井戸跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿), 流れ込みによる縄文土器片11点, 弥生土器片1点, 土師器片9点が出土している。いずれも細片で, 散在して出土している。

所見 時期は出土土器が細片のため不明であるが, 遺構の形状から, 境内に位置する墓域との関連が考えられる。

(7) 土坑墓

第3号土坑 (第77図)

位置 調査区西部のB3h9区に位置し, 標高33.5mの台地の平坦部に立地している。第4A号溝の南側に位置し, 第23号土坑と南北に並列している。

規模と形状 径1.0mの円形を呈しており, 深さは70cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は直立している。

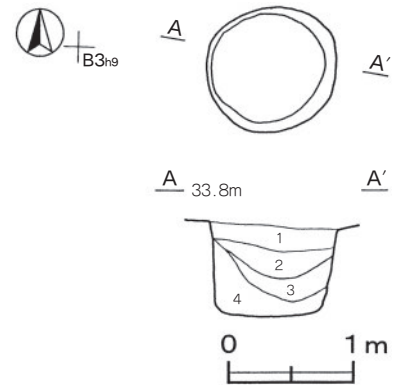
覆土 4層に分層される。各層ともロームブロックを含んだ人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・鹿沼バミス微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土ブロック微量
- 4 黒褐色 ロームブロック・炭化物微量

遺物出土状況 流れ込みによる土師器片1点が出土している。

所見 時期は, 土器が出土していないため不明である。本跡付近は, 中世から近世にかけて存続したとされる新善光寺域内に位置しており, 寺に付属した墓域の一部と考えられる。



第77図 第3号土坑実測図

第23号土坑 (第78図)

位置 調査区西部のB3g9区に位置し, 標高33.5mの台地の平坦部に立地している。第4A号溝の南側に位置し, 第3号土坑と南北に並列している。

規模と形状 径1.3mの円形を呈しており, 深さは40cmである。底面はほぼ平坦で, 壁は直立している。

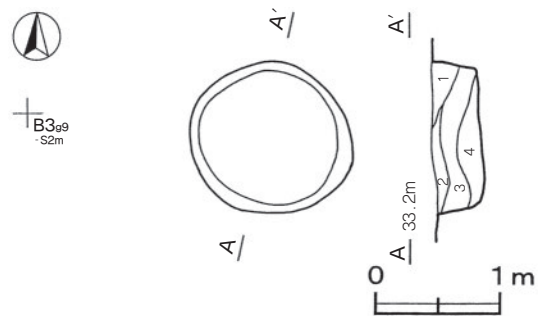
覆土 4層に分層される。各層ともロームブロックを含んだ人為堆積である。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量

所見 時期は, 土器が出土していないため不明である。

本跡付近は, 新善光寺域内に位置しており, 寺に付属した墓域の一部と考えられる。



第78図 第23号土坑実測図

表9 土坑墓一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径	深さ					
3	B3h9	—	円形	1.0×1.0	70	直立	平坦	人為	土師器片	
23	B3g9	—	円形	1.3×1.3	40	直立	平坦	人為	—	

(8) 土坑

第39号土坑 (第79・80図)

位置 調査区東部のB4 h6区, 標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 長径3.9m, 短径2.5mの楕円形を呈しており, 深さは1.3mほどである。底面は凹凸があり, 壁は急な傾斜で立ち上がっている。

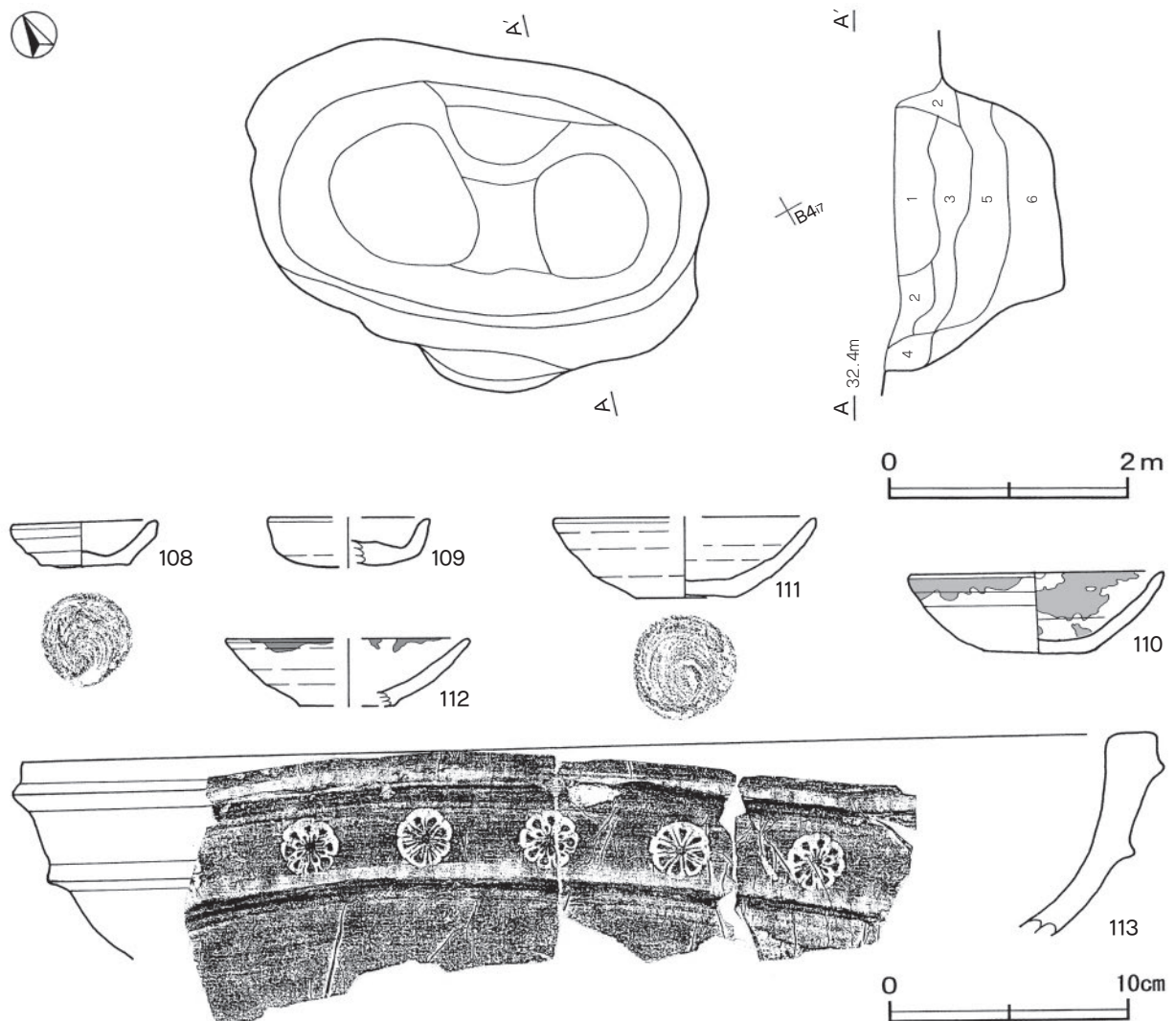
覆土 6層に分層される。各層ともロームブロックを含んだ人為堆積と考えられる。

土層解説

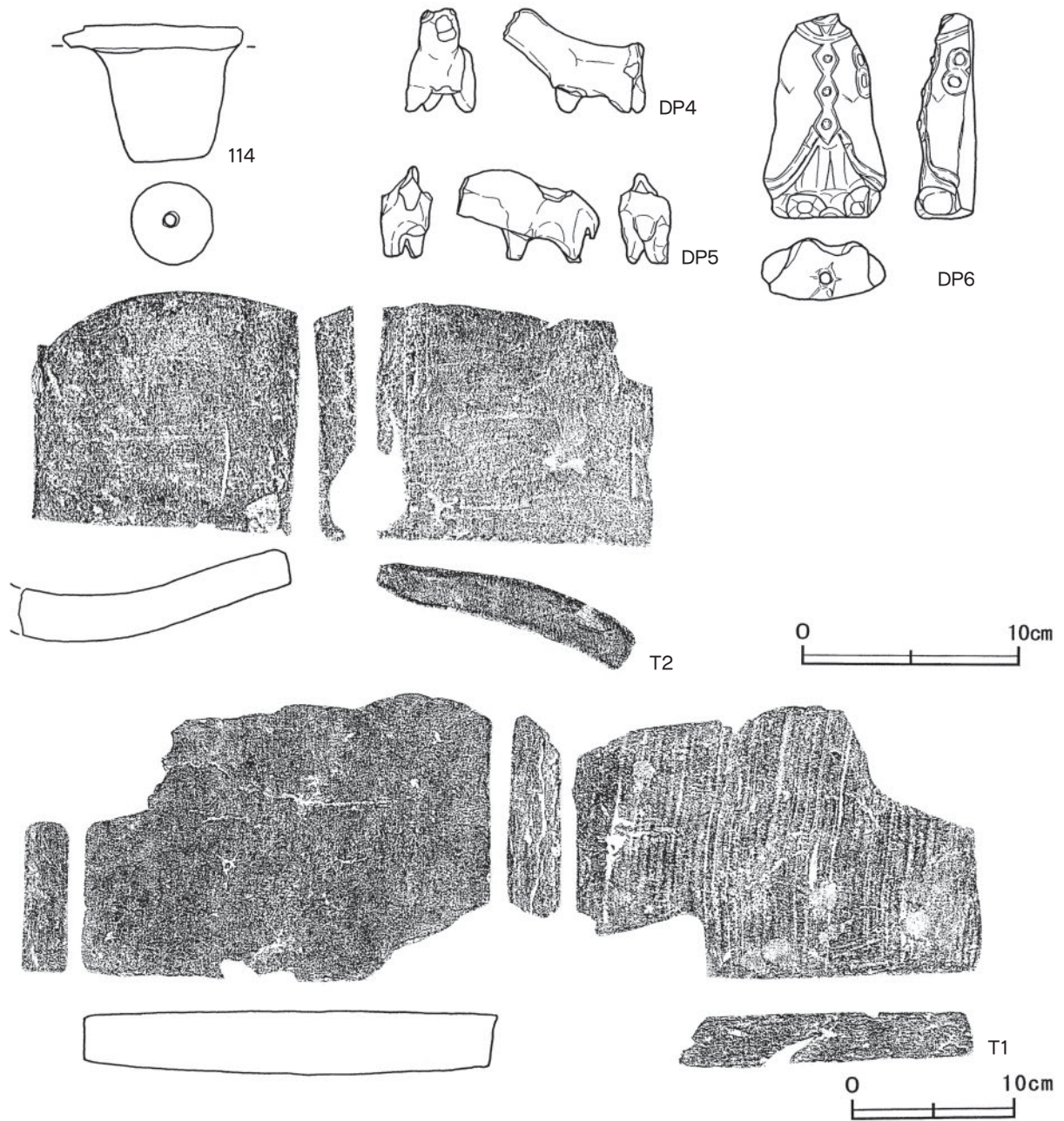
1 灰褐色	ロームブロック・炭化物少量	4 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化粒子微量
2 黒褐色	ロームブロック少量	5 黒褐色	ロームブロック中量, 炭化物微量
3 黒褐色	ロームブロック少量, 炭化粒子微量	6 暗褐色	ロームブロック中量, 炭化物微量

遺物出土状況 土師質土器片7点(皿), 瓦質土器片4点(火鉢), 陶器片2点(常滑甕), 土製品3点(犬形2, 人形1), 埴片398点, 瓦片10点が出土している。埴片と瓦片は覆土下層を中心にまとまって出土しており, 総重量は埴が66.1kg, 瓦が2.9kgである。108~114は覆土下層から出土しており, 投棄された様相を呈している。

所見 時期は, 出土土器から16~17世紀と考えられる。埴・瓦・火鉢・犬形土製品などは新善光寺に関わる遺物の可能性が高いことから, 新善光寺の移転の際に, 廃棄土坑として利用されたと考えられる。



第79図 第39号土坑・出土遺物実測図



第80図 第39号土坑出土遺物実測図

第39号土坑出土遺物観察表（第80図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
108	土師質土器	皿	6.0	1.9	3.7	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	100% PL10
109	土師質土器	皿	[6.6]	2.0	—	石英	橙	普通	手捏ね成形	覆土下層	25%
110	土師質土器	皿	10.6	3.4	4.7	長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り 漆付着	覆土下層	80%
111	土師質土器	皿	[10.8]	3.3	4.3	雲母・針状鉱物	橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	覆土下層	60%
112	土師質土器	皿	[10.1]	2.8	[4.0]	長石	橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り 油煙付着	覆土下層	20%
113	瓦質土器	火鉢	[48.1]	(8.4)	—	長石・石英・針状鉱物	黒褐	普通	菊花文押捺	覆土下層	
114	瓦質土器	火鉢	—	(6.2)	—	長石・石英・針状鉱物	黄灰	普通	脚部ナデ 中空	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
T1	埴	24.6	(17.7)	3.9	(2220)	雲母・長石・石英	表面ナデ裏面に指頭痕 胎芯は灰色	覆土下層	
T2	平瓦	(11.0)	(12.5)	2.1	(470)	雲母・長石・石英	凹面ナデ凸面は凹型台圧痕 胎芯灰色	覆土下層	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
DP4	土人形	(6.6)	3.2	4.8	(52.0)	長石・針状鉱物	頭部・脚部欠損 犬形 ナデにぶい黄橙色	覆土下層	80% PL10
DP5	土人形	6.6	2.4	3.2	(40.9)	長石・針状鉱物	頭部・脚部欠損 馬形 ナデにぶい黄橙色	覆土下層	70% PL10
DP6	土人形	(9.5)	5.7	2.8	(107.9)	雲母・長石・石英	頭部欠損 南蛮人物像 中空型起こし 橙色	覆土下層	80% PL10

5 その他の遺構と遺物

時期不明の竪穴住居跡2軒、溝跡10条、土坑45基が確認された。以下、確認された竪穴住居跡について記述し、土坑については平面図、溝跡については断面図を掲載する。

(1) 竪穴住居跡

第2号住居跡（第81図）

位置 調査区東部のB4 i5区、標高32.5mの台地の縁辺部に位置している。

重複関係 第3号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南部が調査区域外に延びているため、東西軸2.8m、南北軸2.5mが確認されただけであり、方形又は長方形と推測される。主軸方向は、 $N-42^{\circ}-W$ である。壁高は45~48cmで、外傾して立ち上がっている。壁溝が、確認された壁際を巡っている。

床 地山面をそのまま床面としている。遺存部分が少なく、その他は不明である。

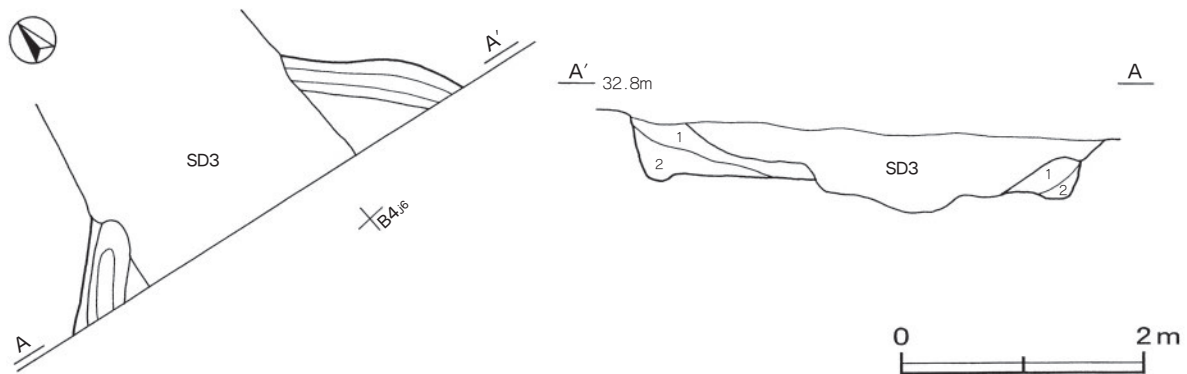
覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

土層解説

1 極暗褐色 ローム粒子少量

2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量

所見 時期は、土器が出土していないため、不明である。



第81図 第2号住居跡実測図

第3号住居跡（第82図）

位置 調査区西部のB3 f3区、標高33.5mの台地の平坦部に位置している。

規模と形状 南部が調査区域外に延びているため、詳細は不明であるが、東西軸は3.3m、南北軸は5.9mの長楕円形と推測される。主軸方向は $N-41^{\circ}-E$ である。壁高は40cmほどで、外傾して立ち上がっている。

床 ほぼ平坦で、ほぼ全域が踏み固められており、特に中央部が硬化している。

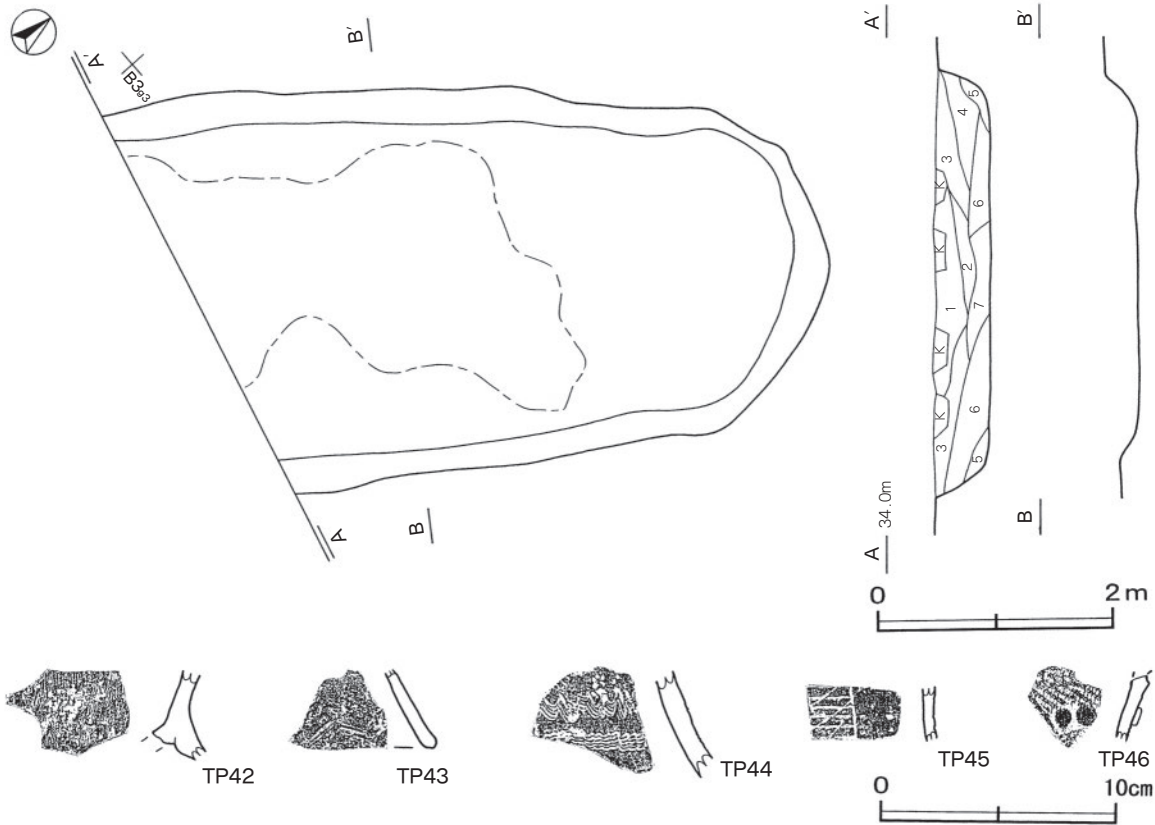
覆土 7層に分層される。各層ともロームブロックを含んだ人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量 | 5 暗褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ロームブロック少量 | 6 黒褐色 | ロームブロック少量, 焼土ブロック・炭化粒子微量 |
| 3 黒色 | ロームブロック微量 | 7 暗褐色 | ロームブロック中量 |
| 4 黒褐色 | ロームブロック少量, 炭化粒子微量 | | |

遺物出土状況 弥生土器片27点(壺), 土師器片102点(甕類98, 高坏類4)が出土している。土器片はいずれも細片で, 全域に散在した状態で出土しており, 流れ込みによるものと考えられる。

所見 時期は, 判断できる土器が出土していないため, 不明である。



第82図 第3号住居跡・出土遺物実測図

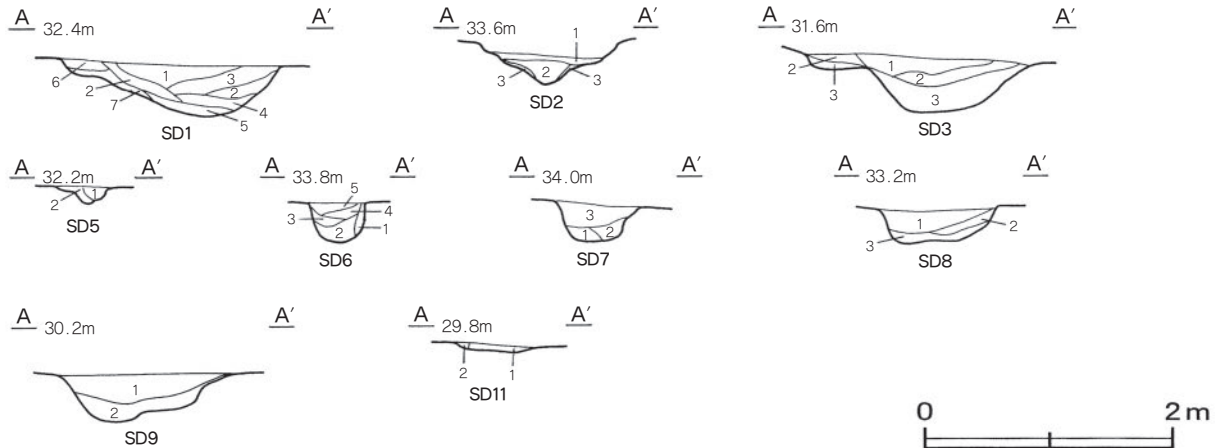
第3号住居跡出土遺物観察表(第82図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
TP42	土師器	台付甕	長石・石英・針状鉱物	にぶい橙	普通	脚部内面ナデ	南部覆土中	
TP43	土師器	台付甕	長石・石英・針状鉱物	橙	普通	脚部内外面ハケ目調整	南部覆土中	
TP44	弥生土器	壺	石英	にぶい黄橙	普通	頸部櫛歯状工具(5本)による波状文	南部覆土中	
TP45	弥生土器	壺	石英	にぶい黄橙	普通	頸部斜格子文	南部覆土中	
TP46	弥生土器	壺	赤色粒子	にぶい橙	普通	上位原体押圧 附加糸一種縄文施文後 ボタン状の瘤貼付	南部覆土中	

表10 時期不明の竪穴住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時代	備 新 旧 関 係 (旧→新)	考 察
								主柱穴	出入口	ピット	炉・竈	貯蔵穴					
2	B 4 15	N-42°-W	[方形長方形]	(2.8)×(2.5)	45~48	平坦	一部	—	—	—	—	—	自然	—	—	本跡→SD3	
3	B 3 13	N-41°-E	[長楕円形]	(5.9)×3.3	40	平坦	—	—	—	—	—	—	人為	弥生土器, 土師器	—		

(2) 溝跡



第83図 第1～3・5～9・11号溝跡土層図

第1号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量
- 6 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量

第2号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 灰褐色 ロームブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第3号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック少量

第6号溝跡土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第5号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第7号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量

第8号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量

第9号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量

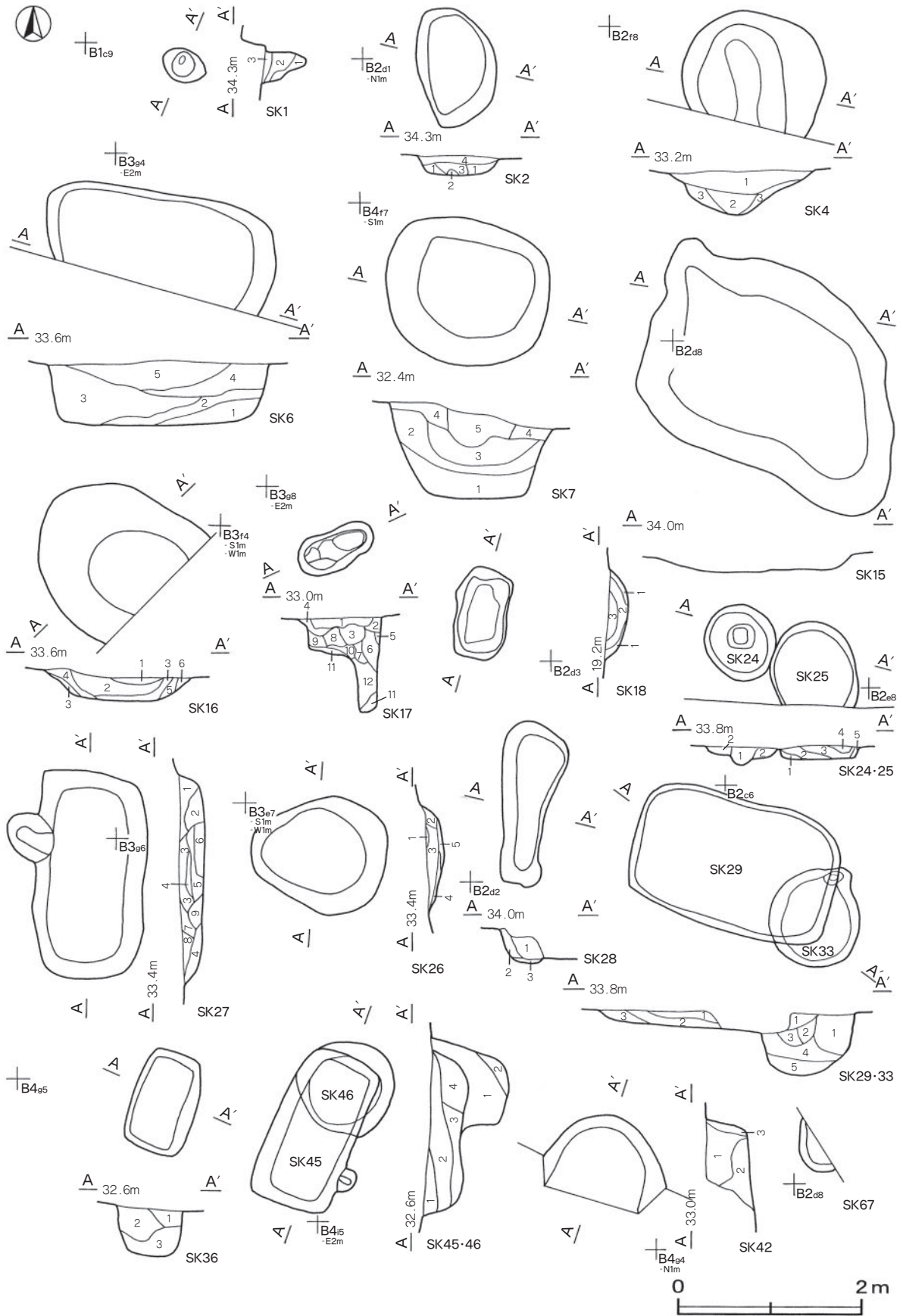
第11号溝跡土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量

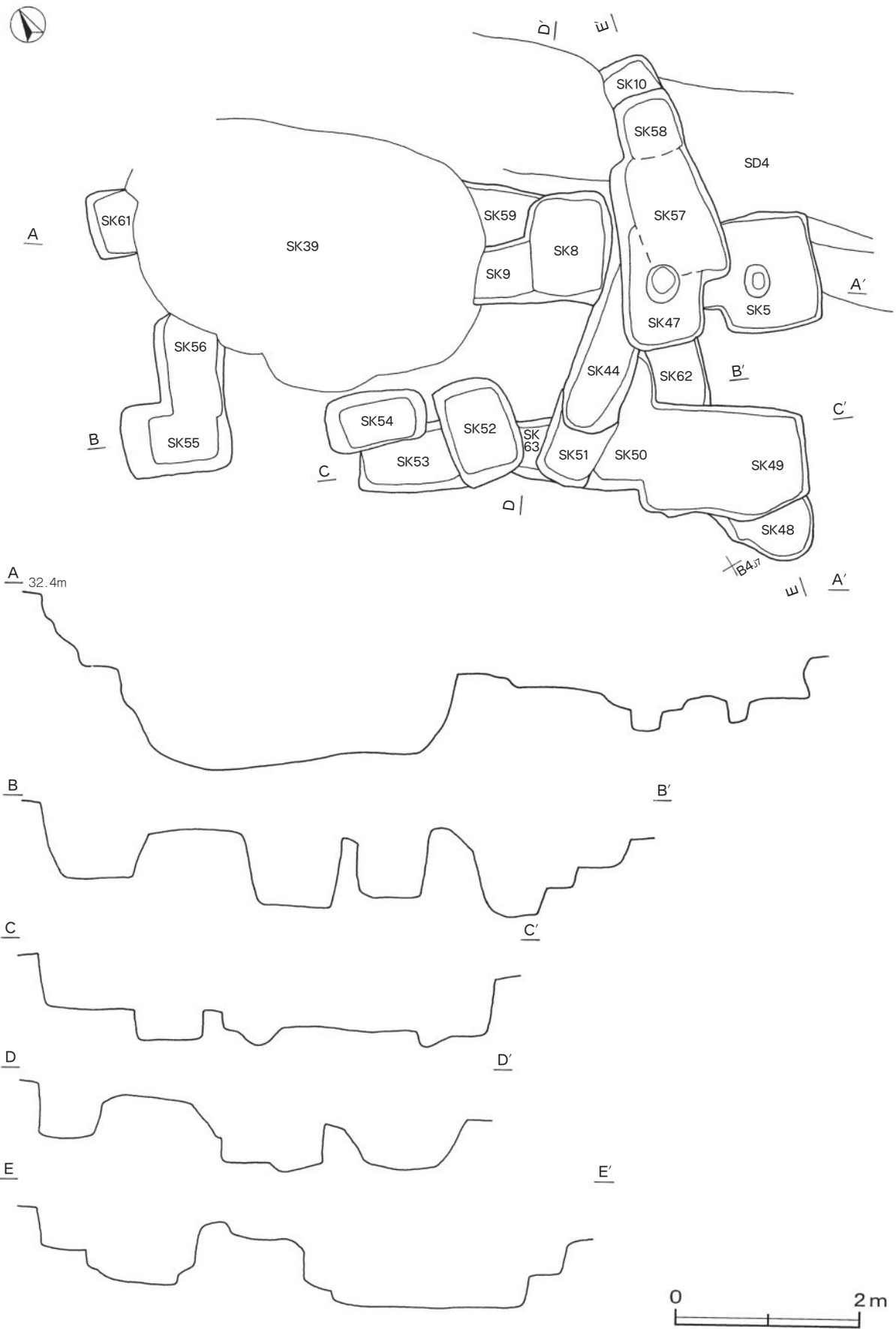
表11 その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面形	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
1	B4f4~B4g7	N-70°-W	直線状	14.2	1.3~1.7	0.5~0.6	40	U字状	自然	縄文土器, 弥生土器, 土師器	本跡→SK36・41
2	B3c2~B3d3	N-85°-W	直線状	4.9	1.0~1.1	0.2~0.3	25	台形状	自然	縄文土器, 弥生土器, 土師器	SI9A→本跡
3	B4i5~B4f6	N-4°-E	直線状	14.1	1.4~2.0	0.9~1.3	42	U字状	自然	弥生土器, 土師器	SI2→本跡
5	A1i7~B1a6	N-15°-E	直線状	8.9	0.3~1.4	0.1~0.8	15	U字状	自然	縄文土器	
6	B2b2~B2e8	N-72°-W N-18°-E	L字状	28.5	0.6~0.8	0.2~0.3	32	U字状	自然	縄文土器, 弥生土器, 土師器, 瀬戸美濃系陶器	SK30,SD4A,第1号方形周溝状遺構→本跡
7	B2b0~B2c0	N-5°-E	直線状	3.5	0.5~0.6	0.2~0.3	30	U字状	自然	土師器, 瓦質土器, 笠間系陶器	SI8→本跡
8	B3d6~B3e9	N-85°-W	直線状	10.3	0.9~1.0	0.5~0.6	27	U字状	自然	縄文土器, 土師質土器	TM3.第1号方形堅穴遺構→本跡
9	B4f8~B4j0	N-32°-E N-44°-W	弧状	19.0	0.8~1.2	0.4~0.6	38	U字状	自然	土師器, 笠間系陶器	
10	B4i9~B4h0	N-30°-E	直線状	6.0	0.3~0.8	0.1~0.4	-	U字状	自然	土師質土器, 笠間系陶器	
11	B4j9~B4h0	N-40°-E N-2°-E	弧状	8.6	0.6~0.9	0.3~0.4	4	U字状	自然	縄文土器, 弥生土器	

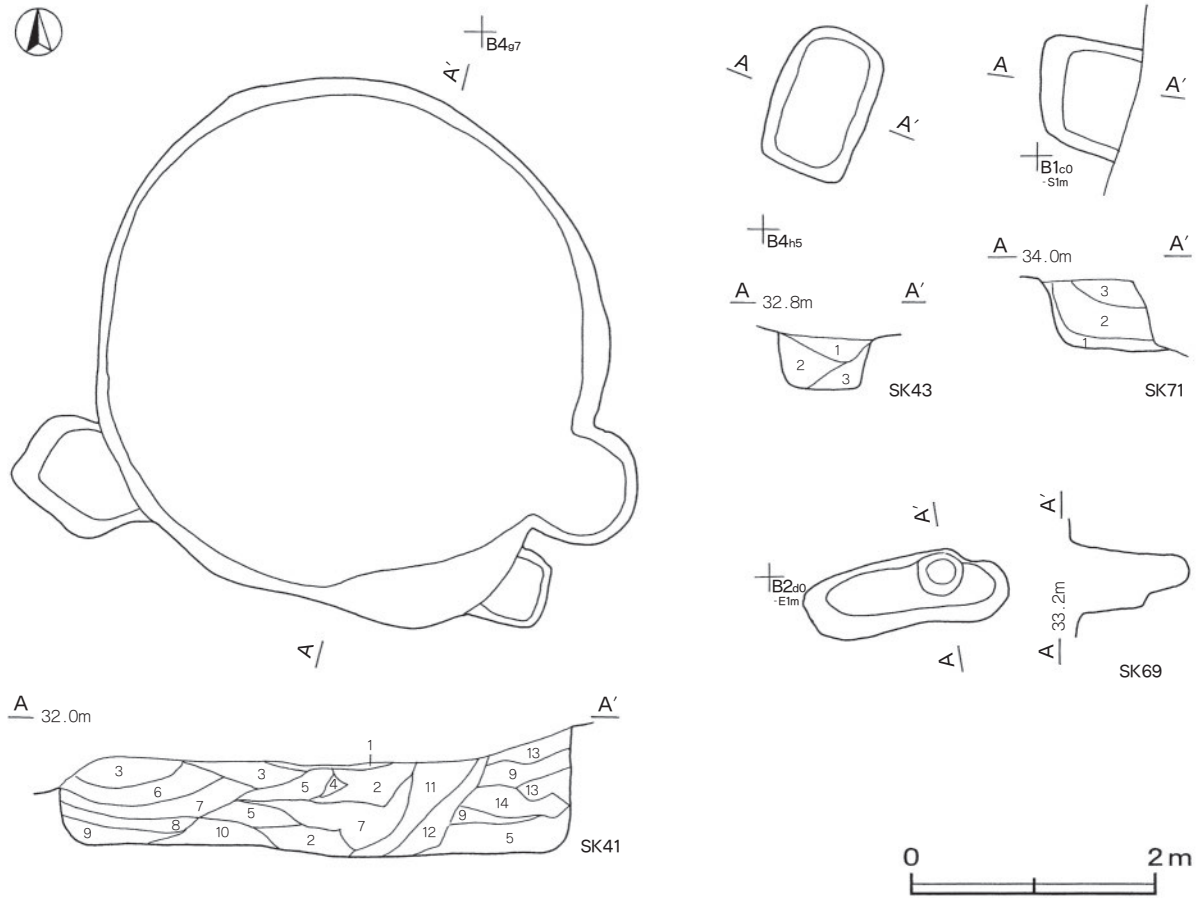
(3) 土坑



第84図 その他の土坑実測図(1)



第85図 その他の土坑実測図(2)



第86図 その他の土坑実測図(3)

第1号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量

第2号土坑土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量

第4号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第6号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

第7号土坑土層解説

- 1 黒褐色 炭化物・ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黄褐色 粘土ブロック多量
- 4 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子・鹿沼バミス微量

第16号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量
- 5 褐色 ローム粒子中量
- 6 灰褐色 ローム粒子中量

第17号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・炭化物微量
- 2 灰褐色 ローム粒子少量, 焼土ブロック・炭化物微量
- 3 黒褐色 ローム粒子・焼土ブロック・炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ロームブロック少量
- 6 黒褐色 ロームブロック微量
- 7 黒褐色 ローム粒子少量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化物微量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子少量
- 10 黒褐色 ローム粒子微量
- 11 暗褐色 ローム粒子中量
- 12 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第18号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ローム粒子微量

第24号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量

第25号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子少量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量

第26号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ロームブロック多量

第27号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 灰褐色 ロームブロック少量, 粘土ブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量
- 4 灰褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ローム粒子微量
- 6 暗褐色 ロームブロック少量
- 7 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 8 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子微量
- 9 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量

第28号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量

第29号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 焼土粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

第33号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量
- 2 極暗褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック微量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量
- 5 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量

第36号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量

第42号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第41号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・細礫・鹿沼バミス微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・炭化粒子・細礫・砂粒微量
- 3 褐色 ロームブロック多量, 砂粒少量, 細礫微量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量
- 5 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子・砂粒微量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量
- 7 暗褐色 ロームブロック少量, 細礫・鹿沼バミス微量
- 8 灰黄褐色 砂粒多量, 粘土粒子少量, 鹿沼バミス微量
- 9 にぶい黄褐色 砂粒少量, ローム粒子・鹿沼バミス微量
- 10 にぶい黄褐色 ローム粒子少量, 細礫・砂粒微量
- 11 褐灰色 ロームブロック・鹿沼バミス・細礫・砂粒微量
- 12 灰褐色 ローム粒子少量, 鹿沼バミス・細礫・砂粒微量
- 13 褐色 ローム粒子中量, 鹿沼バミス少量, 砂粒微量
- 14 暗灰黄色 砂粒中量, 粘土粒子少量, ローム粒子・炭化粒子・鹿沼バミス微量

第43号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量

第45号土坑土層解説

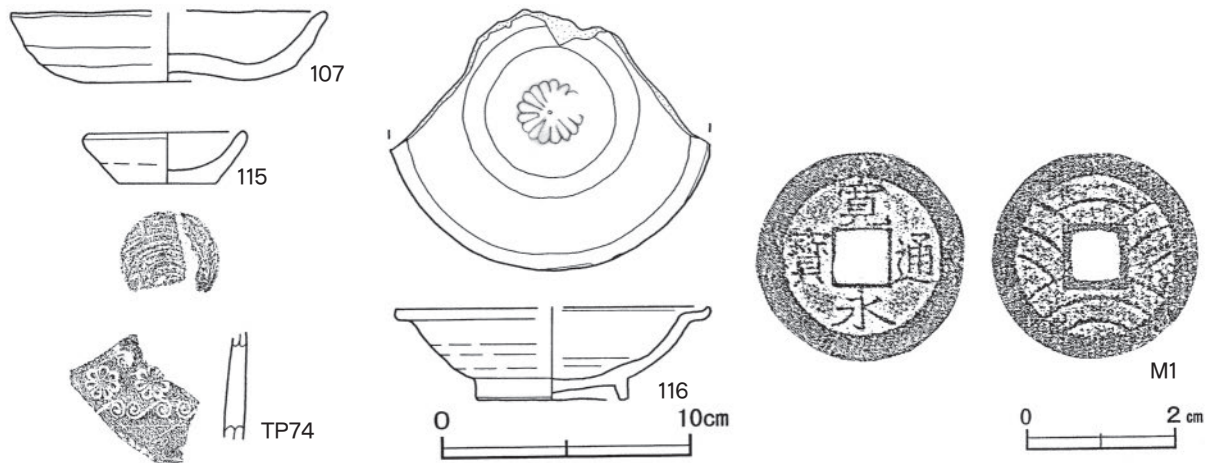
- 1 褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 灰褐色 ロームブロック中量
- 4 黒褐色 ロームブロック微量

第46号土坑土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック中量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量

第71号土坑土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック微量
- 2 黒褐色 ローム粒子微量
- 3 黒褐色 ロームブロック少量



第87図 第15・25・41・54号土坑出土遺物実測図

その他の土坑出土遺物観察表 (第87図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
107	土師質土器	皿	[12.6]	2.9	-	赤色粒子	にぶい橙	普通	手捏ね成形	SK25覆土中	20%
115	土師質土器	皿	6.2	2.1	3.9	雲母・長石	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	SK41覆土中	70%
116	陶器	折縁皿	[12.7]	3.6	6.2	鉄釉	灰白・灰褐	良好	内面凸部釉拭き取り 菊花文押捺	SK41覆土中	90% 瀬戸・美濃
TP74	瓦質土器	火鉢	-	(4.3)	-	雲母	黒褐	普通	菊花状の印花文	SK54覆土中	

番号	器種	径	孔幅	重量	初鋳年	材質	特徴	出土位置	備考
M1	寛永通宝	2.8	0.7	4.0	1769	真鍮	新寛永4文銭 背十一波	SK15覆土中	100%

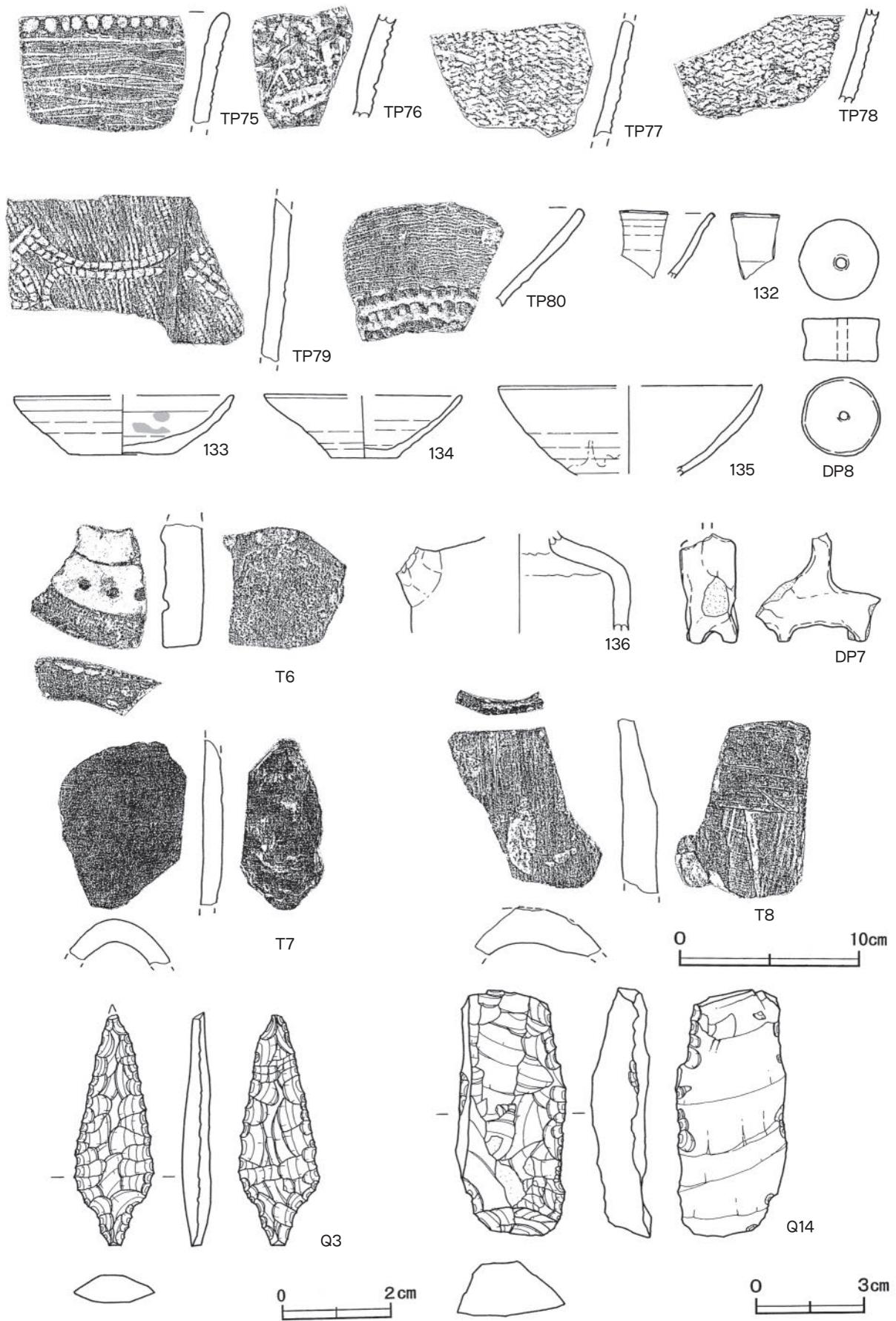
表12 その他の土坑一覧表

番号	位 置	長径(軸)方向	平面形	規模(m, 深さはcm)		壁 面	底 面	覆 土	主な出土遺物	備 考
				長径(軸)×短径(軸)	深さ					
1	B 1 c9	N-72°-W	楕円形	0.5 × 0.4	44	直立	皿状	自然	土師器, 陶器	
2	B 2 c1	N-3°-W	楕円形	1.3 × 0.9	20	外傾	平坦	人為	—	
4	B 2 f8	N-0°	[楕円形]	1.6 × (1.2)	48	緩斜	皿状	自然	縄文土器, 陶器	
5	B 4 i7	N-28°-E	長方形	1.3 × (1.1)	50	直立	平坦	人為	土師器, 縄文土器, 陶器	
6	B 3 g4	N-76°-W	長方形	2.5 × (1.0)	65	直立	平坦	人為	縄文土器	
7	B 4 f7	N-74°-W	楕円形	1.8 × 1.6	100	外傾	平坦	人為	土師器, 陶器	
8	B 4 h7	N-28°-E	長方形	1.2 × 0.9	92	直立	凹凸	人為	縄文土器	
9	B 4 i6	N-67°-W	[長方形]	(0.6) × 0.6	80	直立	平坦	人為	土師質土器, 陶器	
10	B 4 h7	N-0°	[長方形]	0.6 × (0.4)	35	直立	平坦	人為	—	
15	B 2 d8	N-36°-W	楕円形	3.6 × 2.3	18	緩斜	平坦	自然	縄文土器, 土師器	第2号方形竅穴→本跡
16	B 3 f3	N-52°-W	[楕円形]	(1.6) × 1.6	25	緩斜	平坦	自然	縄文土器	
17	B 3 g8	N-62°-E	楕円形	0.9 × 0.4	105	直立	凹凸	人為	土師器	SI6→本跡
18	B 2 c2	N-14°-E	長方形	1.0 × 0.5	20	外傾	平坦	人為	縄文土器	SI5→本跡
24	B 2 d7	N-0°	円形	0.9 × 0.8	20	外傾	凹凸	人為	土師器	
25	B 2 d7	N-0°	楕円形	0.9 × 0.9	15	外傾	平坦	人為	土師質土器, 陶器	
26	B 3 e7	N-78°-W	楕円形	1.5 × 1.2	22	緩斜	凹凸	人為	—	
27	B 3 g5	N-0°	長方形	2.3 × 1.2	25	外傾	平坦	人為	縄文土器, 土師器	
28	B 2 c2	N-2°-E	長方形	1.8 × 0.5	32	外傾	平坦	人為	土師器	SI5→本跡
29	B 2 c6	N-68°-W	長方形	2.2 × 1.4	15	緩斜	平坦	自然	縄文土器, 土師器	SK30-33→本跡
33	B 2 c6	N-0°	円形	1.1 × 1.0	65	直立	皿状	人為	—	SK30→本跡→SK29
36	B 4 g5	N-20°-E	長方形	1.1 × 0.7	50	直立	平坦	人為	縄文土器, 陶器	SD4A→本跡
41	B 4 g6	N-0°	円形	4.3 × 4.2	75	直立	平坦	人為	土師質土器, 陶器	SD1-4A→本跡
42	B 4 f3	N-0°	[円・楕円形]	1.3 × (0.9)	46	直立	平坦	人為	—	SD4A→本跡
43	B 4 g5	N-23°-E	長方形	1.2 × 0.8	45	直立	平坦	人為	—	
44	B 4 i6	N-50°-E	長方形	(1.8) × 0.6	95	直立	平坦	人為	須恵器	
45	B 4 h5	N-22°-E	長方形	1.9 × 0.9	40	外傾	平坦	人為	—	SK46→本跡
46	B 4 h5	N-0°	円形	1.1 × 1.0	83	直立	平坦	人為	—	本跡→SK45
47	B 4 i7	N-23°-E	長方形	(1.4) × 0.9	65	直立	平坦	人為	—	
48	B 4 i7	N-15°-W	楕円形	(1.2) × 0.8	43	直立	平坦	人為	—	
49	B 4 i7	N-54°-W	長方形	1.8 × 1.2	78	直立	平坦	人為	—	
50	B 4 i6	N-38°-E	[長方形]	(1.6) × (0.6)	65	直立	平坦	人為	—	
51	B 4 i6	N-50°-E	長方形	(0.9) × 0.7	95	直立	皿状	人為	—	
52	B 4 i6	N-5°-E	長方形	1.2 × 0.8	80	直立	平坦	人為	—	
53	B 4 i6	N-70°-W	長方形	(1.1) × 0.8	60	直立	平坦	人為	—	
54	B 4 i6	N-70°-W	長方形	1.1 × 0.6	80	直立	平坦	人為	鉄釘	
55	B 4 h5	N-68°-W	長方形	1.2 × 0.8	85	直立	平坦	人為	—	
56	B 4 h5	N-23°-E	長方形	1.1 × 0.7	81	直立	平坦	人為	—	
57	B 4 i7	N-23°-E	長方形	1.6 × 1.0	68	直立	平坦	人為	—	
58	B 4 i7	N-8°-E	方形	0.7 × 0.6	75	直立	平坦	人為	—	
59	B 4 h6	N-48°-W	[長方形]	(0.9) × (0.6)	55	直立	平坦	人為	—	
61	B 4 h6	N-70°-W	[長方形]	0.8 × (0.5)	80	直立	平坦	人為	—	
62	B 4 i7	N-19°-E	[長・方形]	(0.7) × (0.6)	35	緩斜	平坦	人為	—	
63	B 4 i6	N-58°-W	[長・方形]	0.6 × (0.4)	60	直立	平坦	人為	—	
67	B 2 c8	N-0°	[楕円形]	(0.6) × (0.3)	25	外傾	平坦	—	陶器	
69	B 2 d0	N-87°-E	楕円形	1.6 × 0.6	92	直立	皿状	—	—	SI8→本跡
71	B 1 c0	N-85°-W	[長・方形]	0.9 × (0.8)	55	直立	平坦	自然	—	本跡→SD4C

(4) 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物観察表 (第88図)

番号	種 別	器 種	胎 土	色 調	焼 成	文 様 の 特 徴	出土位置	備 考
TP75	縄文土器	深鉢	赤色粒子	にぶい褐	普通	口唇部押圧, 横方向の平行沈線	TM1覆土中	前期後半
TP76	縄文土器	深鉢	長石	明赤褐	普通	平行沈線文内にキザミ目, 瘤状貼付文・円形刺突文	東部表土	前期前半
TP77	縄文土器	深鉢	石英	にぶい褐	普通	地文に組紐	SK38下層	前期前半
TP78	縄文土器	深鉢	石英	にぶい褐	普通	地文に組紐	SK20覆土中	前期前半
TP79	縄文土器	深鉢	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	単節縄文地文 結節沈線文により文様描出	TM2周溝内	中期中葉
TP80	弥生土器	壺	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	口縁部櫛歯状工具(5本)による波状文 隆帯貼付	西部表土	後期後葉



第88図 遺構外出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
132	磁器	皿	—	(3.7)	—	白磁	灰白	良好	口縁端部釉掻き落とし	東部表土	
133	土師質土器	皿	[12.0]	3.3	6.0	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	東部表土	60% 漆付着
134	土師質土器	皿	[10.8]	3.5	3.7	雲母・長石・石英	橙	普通	ロクロナデ 底部回転糸切り	西部表土	50%
135	陶器	平碗	[14.6]	(4.9)	—	灰釉	浅黄・橙	良好	ロクロナデ 釉浸け掛け	表採	10% 古瀬戸
136	陶器	水注	—	(5.5)	—	灰釉	灰黄・オリブ黄	普通	輪積み痕	西部表採	15% 古瀬戸

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	特徴	出土位置	備考
T 6	軒丸瓦	—	(13.2)	2.2	(132)	雲母	珠文縁三巴文 表面燻し 胎芯灰褐色	西部表土	
T 7	鳥衾	(9.3)	(5.5)	0.9	(82)	長石・赤色粒子	凸面丁寧なナデ 凹面布目痕 表面燻し 胎芯にぶい褐色	西部表土	
T 8	丸瓦	(9.6)	(6.8)	1.8	(151)	長石・赤色粒子	凸面ナデ 凹面布目痕・吊紐痕 胎芯にぶい赤褐色	西部表土	

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q 3	有舌尖頭器	4.3	1.5	0.5	3.0	メノウ	両面調整 丁寧な押圧剥離 基部に茎を有する	SI5覆土中	
Q14	削器	6.9	3.1	1.9	41.6	チャート	側縁に連続した丁寧な剥離調整	西部表土	

番号	種別	器種	長さ	幅	高さ	胎土	重量	特徴	出土位置	備考
DP7	土製品	馬か	(7.0)	3.3	(5.9)	雲母・針状鉱物	(61.5)	手握ね にぶい黄褐色 頭部欠損	SI9覆土中	PL10
DP8	土製品	紡錘車	4.4	4.4	2.4	雲母・長石・石英	57.5	孔径0.5cm ナデ 無文	東部表土	100%

第4節 まとめ

1 新善光寺について

調査によって得られた資料は、掘立柱建物跡1棟や廃棄土坑1基、溝跡1条など少ない。そこで、寺の創建に関わる資料について概観し、新善光寺が建立された背景を確認した上で、調査成果と照らし合わせながら、新善光寺の様相に迫りたい。

(1) 新善光寺と宍戸氏

・『しょうさんぞんあみだにょらいえんぎ聖三尊阿弥陀如来縁起』に見られる新善光寺

筑西市（旧明野町）松原所在の新善光寺が所蔵する『聖三尊阿弥陀如来縁起』¹⁾によると、新善光寺を開山したのは解意阿弥陀仏観鏡という僧で、小田氏・宍戸氏の祖である八田知家の子と記されている。解意阿弥陀仏が没した後は、同じ宍戸氏を出自とする僧等によって代々受け継がれており、新善光寺は宍戸氏の菩提寺として存在していたようである。

・善光寺如来への信仰

ここでは、本尊である善光寺式阿弥陀三尊像をもとに、当時の信仰の様子を確認しておきたい。本尊は善光寺式阿弥陀三尊像であり²⁾、脇侍の菩薩像も含め三仏全体に一つの光背を有する一光三尊形式をとるものである。善光寺如来への信仰の高まりは、鎌倉時代から急速に盛んになったとされており³⁾、県内では22体の善光寺様式の仏像が確認されている⁴⁾。その内、本跡と関連する事項をまとめたのが、表13である。

ここで注目したいのは、表が示している年代と、宍戸氏が当地に本拠を据えて勢力の充実・拡大に力を注いでいた時期が重なることである。『宍戸氏系図』（第90図）には、4代目である家時が「山尾（山野宇）」と称していたことが併記されており、少なくともこの時期には山尾郷⁵⁾、すなわち現在の宍戸地区を拠点としていたことが分かる。従って、「友部町史」で指摘されているように、本尊は善光寺信仰の高まりを背景にした精神的な紐帯としての仏像とも考えられ、それを祀るための新善光寺であったと推測される。

以上のことから、新善光寺の創建は、鎌倉時代である可能性が高いと考えられる。

表13 常陸における善光寺如来とその関係資料

寺名	所在地	特記事項
浄真寺	土浦市	善光寺式阿弥陀如来像 弘長元年(1261)7月銘
上加賀田の大日堂	笠間市	大日如来像 文永11年(1275)小田時知が新善光寺に寄進する銘有 上加賀田は宍戸地区の西側に隣接
浄乗寺	笠間市	阿弥陀如来像 善光寺式の中尊 鎌倉中期の作風 旧友部町に所在
万福寺	石岡市	善光寺式阿弥陀三尊像 永仁3年(1295)3月18日 常陸国茨城郡次城村佛國山新善光寺の銘
祇園寺	水戸市	善光寺式阿弥陀三尊像 鎌倉時代末期の作風
信願寺	水戸市	善光寺式阿弥陀三尊像 鎌倉時代末期の作風
『沙石集』	-	無住道暁が弘安年間(1279~1283)に執筆「不断念仏堂に一光三尊を安置」小田氏と太田善光寺がモデルか



第89図 阿弥陀三尊像(「友部百年史」より)

・その後の新善光寺

『続常陸遺文』所収の「常陸国中富有仁等人数注文」⁶⁾によると、15世紀には新善光寺は「山尾道場」と呼ばれ、宍戸氏の保護を受けていたことや2名の阿弥陀仏と称する僧がいたことが知られている。

その後、文禄元年(1592年)に、新善光寺の本体は宍戸氏の移転と共に筑西市(旧明野町)海老ヶ島へ移っていった。しかし、故地となった宍戸地区にも、規模は縮小しながら同名の新善光寺が存続することになった。江戸時代には海老ヶ島へ移った新善光寺の末寺として、明治4年の火災によって焼失するまで存続することになった。

(2) 遺跡周辺の様相

当調査区の南側には、「如諦山廣嶋院新善光寺墓地」と記された門柱の建つ墓地がある。墓地内には、僧侶の墓と思しき無縫塔1基が存在している。この墓地の南西部には、宍戸氏の一族である一木氏によって江戸時代に建立された八田知家と宍戸家政の五輪塔があり、周囲には宝篋印塔や大小の五輪塔の部材がまとめて重ねられている。さらに、これらの供養塔の西側には、如体大権現が祀ってあったとされる基壇状の高まりと柘植の古木が確認されている。この地は宍戸城本丸から見て南西に位置し、付近では最も標高の高いところである。掲示板には、「城の西の鬼門に、鬼門除けとして祀ったと伝えられる」と記されており、こうした信仰上の重要な地点に寺が建立されたことは想像に難くない。

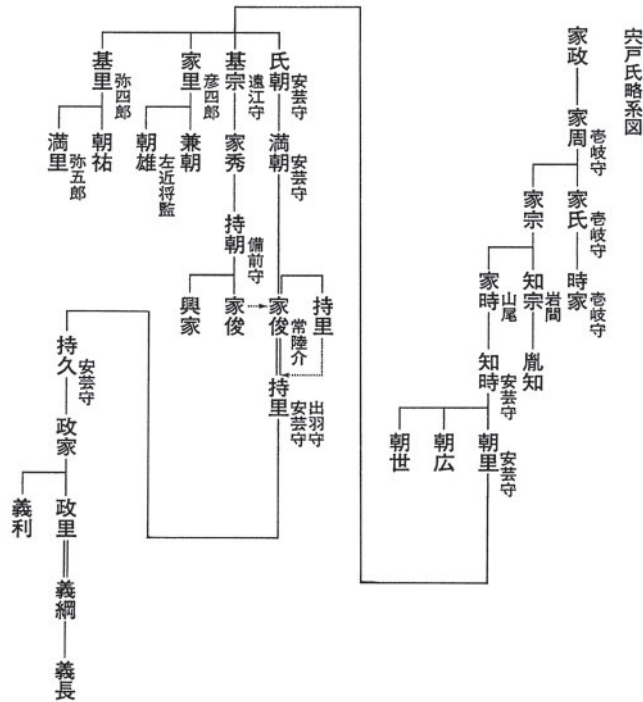
以上のように、寺の存在を思わせるものが、当調査区の南側に点在していることが分かる。従って、当調査区の南側に新善光寺が存在していた可能性が高い。

(3) 調査成果に見る新善光寺

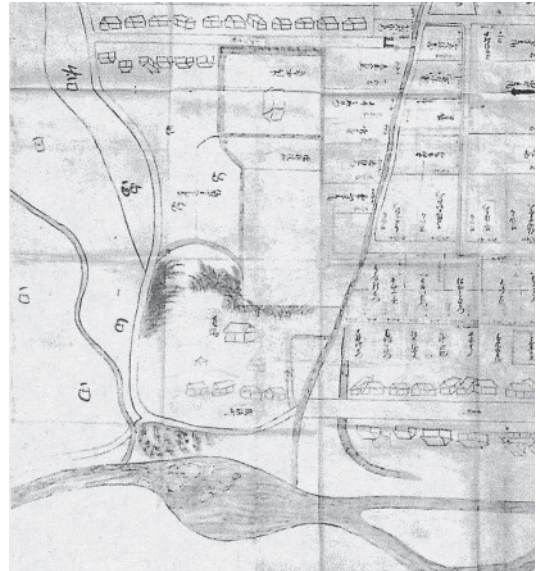
新善光寺が中世前半には建立されていたこと、寺域は当調査区の南側を中心に展開していたらしいこと、及び宍戸氏と密接な関わりがあることなどを確認したところで、次に当調査区で確認された遺構と遺物について見ていきたい。

・大溝と掘立柱建物跡について

南北に伸びる舌状の台地を東西に横切るように、第4A号溝が確認されている。長さ99m、上幅1.6~1.8m、

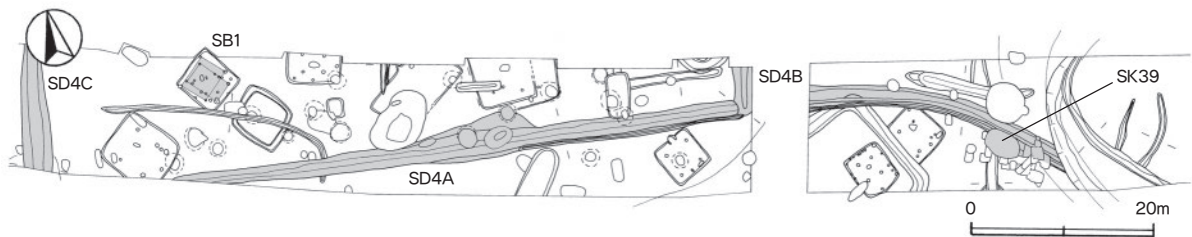


第90図 宍戸氏系図（「友部町史」より）



第91図 宍戸城下絵図（東北大学附属図書館蔵）

周辺小字名一覧			
千裁	馬場	西田	寺内
道場淵	女躰後	新善光寺	



第92図 中世遺構配置図

下幅0.5~0.8mで、両端とも調査区域外に延びている。また、中央部から、長径3.0m、短径2.0m、深さ1.4mの楕円形状に大きく掘り込まれた部分が確認されている。溝は、この中央部の掘り込みを境にして東西で様相が異なり、東部だけ小溝が南側を並走している。小溝は形状と配置から堀跡と考えられ、南に存在していた寺の境内を区画していたと考えられる。一方、西部からは、堀の痕跡は確認されていない。溝単独、あるいは生垣や土塁などとの組み合わせによって区画されていたと推測される。出土した土器や陶器は、16~17世紀の様相を示している。遺物の総量は14点と調査面積に比して極めて少ないが、寺の北側の区画溝に当たり、しかも堀が並存していたという状況を考慮すれば妥当と思われる。

ここで問題となるのが、楕円形の掘り込みの性格である。性格を示す痕跡は確認されなかったが、溝のほぼ中央に位置していることや掘り込みを境にして溝の様相が異なることから、ここに裏門が付設され、橋が架けられていたと想定したい。境内からこの楕円形の掘り込み部分を通って寺外に出ると、左手には1間社流れ造の神社と想定される第1号掘立柱建物跡が位置している。寺に神社が付属するのは通例であり、出土遺物は無かったものの、この建物が寺と同時期に機能していた可能性は高いと思われる。門と想定した掘り込み部分から神社までの距離は約30mで、この空白部分が参道に相当し、参道は概ね溝と平行に走っていたと推測される。

また、調査区の東部（境内の北東隅部）からは、廃棄土坑と想定される第39号土坑が確認されている。出土遺物から中世末と考えられ、新善光寺が海老ヶ島へ移転する時期とほぼ同じである。その後も、寺域が維

持されていたことを踏まえると、廃棄土坑は邪魔にならない境内の北東隅という場所がふさわしいと考えられる。

当調査区の中央部と西部からは、第4A号溝と直交するように走行する第4B・4C号溝が確認されている。特に第4B号溝は、正保年間に作成された宍戸城下図に同様の溝が描かれており、新善光寺の北側に隣接する「畠」を区画していた様子が見えてくる。また、絵図には、新善光寺の想定地に「道場」と記されているのが確認される。15世紀に「道場」と呼ばれていたことは先に確認した通りであり、新善光寺が近世に存在していたことはほぼ間違いないことといえる。

以上のように、当遺跡で確認された第4A号溝を新善光寺の北縁の区画溝と想定し、若干の考察を進めてきた。寺の本体は依然不明のままであるが、見方を変えるならば、寺の北端部を調査できたことによって、寺域を確定することが可能になったといえる。寺域は北端を第4A号溝、南端を舌状台地の先端部までとし、推定される面積は12,000㎡ないしそれ以上となる。この敷地面積は、北側に隣接する清水寺や近世宍戸藩主秋田氏の菩提寺である龍徳院と比べても遜色のないものである。

・出土遺物に見る新善光寺について

新善光寺に関わる遺物として、白磁壺・皿、青磁碗、古瀬戸瓶子・水注・平碗、常滑片口鉢・甕、土師質土器皿（灯明皿を含む）、瓦質土器火鉢、犬形土製品、瓦、埴などがある。白磁壺（第72図）は、四耳壺の体部片の可能性があり、筑西市（旧協和町）小栗寺山廃寺跡出土の白磁四耳壺（13世紀後半）を彷彿させるものである。白磁皿（第88図）はいわゆる口禿皿で、同時期の所産であろう。古瀬戸瓶子（第72図）・水注（第88図）は、器形や釉調から藤沢編年の前期様式の可能性が高い。土師器皿（第87図）は、つくば市島名前野東遺跡の方形居館（13世紀後半から14世紀初頭）から大量に出土した土師器皿に類似している。これらの遺物が示す年代は13世紀後半から14世紀前半と考えられ、新善光寺の創建に関わる遺物と見なすことができる。また、常滑片口鉢（第72図）は赤羽・中野編年の8型式（14世紀後半）、古瀬戸平碗（第88図）は後期様式（15世紀代）に該当し、近世になると瀬戸・美濃系天目茶碗や絵唐津碗、鉛釉が施された瀬戸・美濃系片口などが少量見られる程度になる。

廃棄土坑と想定される第39号土坑からは、瓦・埴・灯明皿・犬形土製品が出土している。瓦の出土は少なく、わずかに10点だけである。叩き目がなく、ナデ調整を主体としたもので、桜川市（旧岩瀬町）松田古墳群から出土したものと類似していることから、室町期のものであることが分かる⁷⁾。埴は総重量で66.1kgが出土しており、1枚を2.5kg程度と想定すると、少なくとも26枚以上の埴が確認されたことになる。これらは堂内の床面に敷かれていたものと考えられ、一方、瓦は出土量の少なさや丸瓦が主体であること、及び鳥龕（第88図）の出土などから、屋根の一部にのみ瓦を葺き、大棟の両端には鬼瓦を有していたことが想定される。犬形土製品（第80図）は大阪城跡や吉川元春館跡から出土したものが著名で、県内では守谷城跡からの出土例が報告されている。概して城館跡からの出土が多く、時期は16世紀後半が主体である。上流階級のみが持つものとする説⁸⁾や安産のための祭祀具であるとする説⁹⁾があるものである。

以上のように、出土遺物では、特に中世前半期の優品を確認することができた。武家社会において、四耳壺・水注・梅瓶の三器種は特に珍重され、伝世されるものである点を考慮するならば、これらの遺物は武家社会の庇護を受けた寺院の存在、すなわち宍戸氏の菩提寺としての善光寺の姿をうかがうことができる。境内の北側には塀を伴った大きな溝を巡らし、広い境内には屋根の一部に瓦を葺いた茅葺の御堂が点在していたのであろう。堂宇の一部には「道場」にふさわしく埴の敷かれたものが存在し、薄暗い室内には灯明が焚かれ、先に触れた善光寺式阿弥陀三尊像の尊顔が浮かび上がっていたのかもしれない。

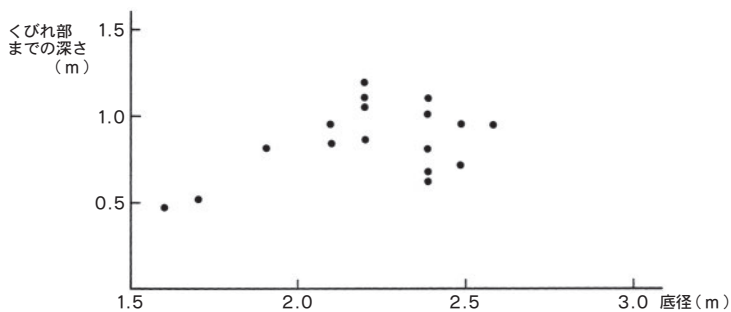
2 縄文時代のフラスコ状土坑について

(1) 出土土器について

当遺跡で出土した土器は、阿玉台式土器を主体としている。阿玉台式土器の口縁部には平口縁と波状口縁があり、口縁部文様帯には区画文が配され、隆帯に沿って複列の結節沈線文が施されている（第15図TP14，第37図51）。中には、隆帯による区画のみのものや、結節沈線文を添わせないもの、平行波状沈線文を施すもの（第25図30，第28図35）も見られる。胴部にはヒダ状圧痕やキザミ痕が施されるもの（第10図TP8，第30図41），隆帯を垂下させ、そこに結節沈線文を添わせるものがある。また、区画文の多段化構成や三角形区画文，胴部文様帯下端の隆帯区画など勝坂式的要素を取り入れたもの（第6図3，第8図12，第17図20），外反する口縁部に縄文原体圧痕を施したものとや細い円形竹管によって刺突文を加えた大木7b式的要素を取り入れたもの（第7図TP3，第13図14），地文に縄文を施し，隆帯や沈線，結節沈線文によって上下対称弧線文やX字状文などの文様を描出するもの（第13図TP12，第88図TP79）などがある。以上のような様相から，近年の発掘成果¹⁰⁾を元に，阿玉台Ⅱ式期と判断することができる。

(2) フラスコ状土坑の形態について

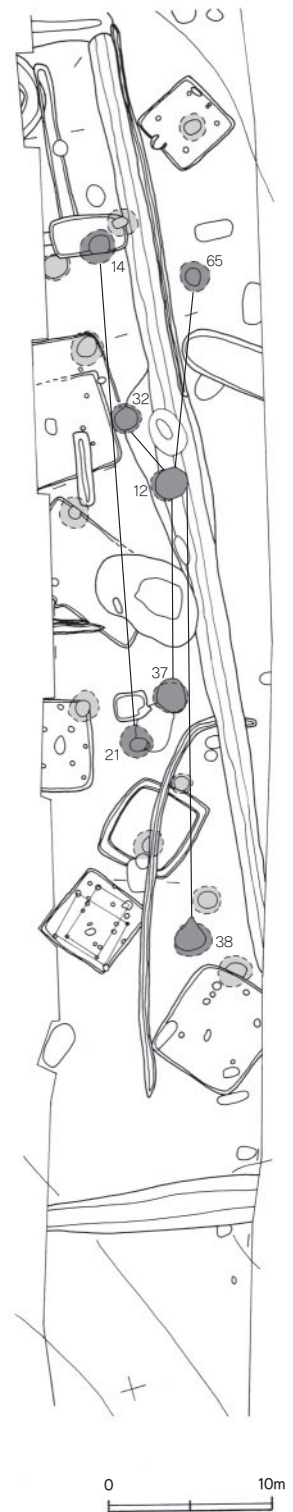
確認された17基のフラスコ状土坑は，当遺跡中央部の東西50m，南北15mの範囲に群をなして確認されている。従って，これらの土坑群の密集地帯を貯蔵域として，当調査区の北側，南側のいずれかに居住域を想定することができる。北関東では貯蔵穴の群在化は阿玉台Ⅲ式期からみられる傾向にある¹¹⁾が，それよりも若干早い時期に造営されたことになる。個々の土坑は，第93図が示すように，一見すると形状に統一がないように見受けられる。しかし，いずれもソフトローム層を開口部，ハードローム層を括れ部，鹿沼層を底面としている点で共通している。硬いハードローム層で屈曲し，もろい鹿沼層で平坦面を作ることは，地山の性質を上手く利用した結果ともいえ，括れ部から底面までの深さは，鹿沼層の上位に堆積するハードローム層の厚さと相関関係にあることが分かる。



第93図 底部からくびれ部までの深さと底径の比率

(3) 土器の出土状況

次に，これらの土坑から出土した土器の接合関係や同一土器の出土状況について見てみたい。第12図15は第



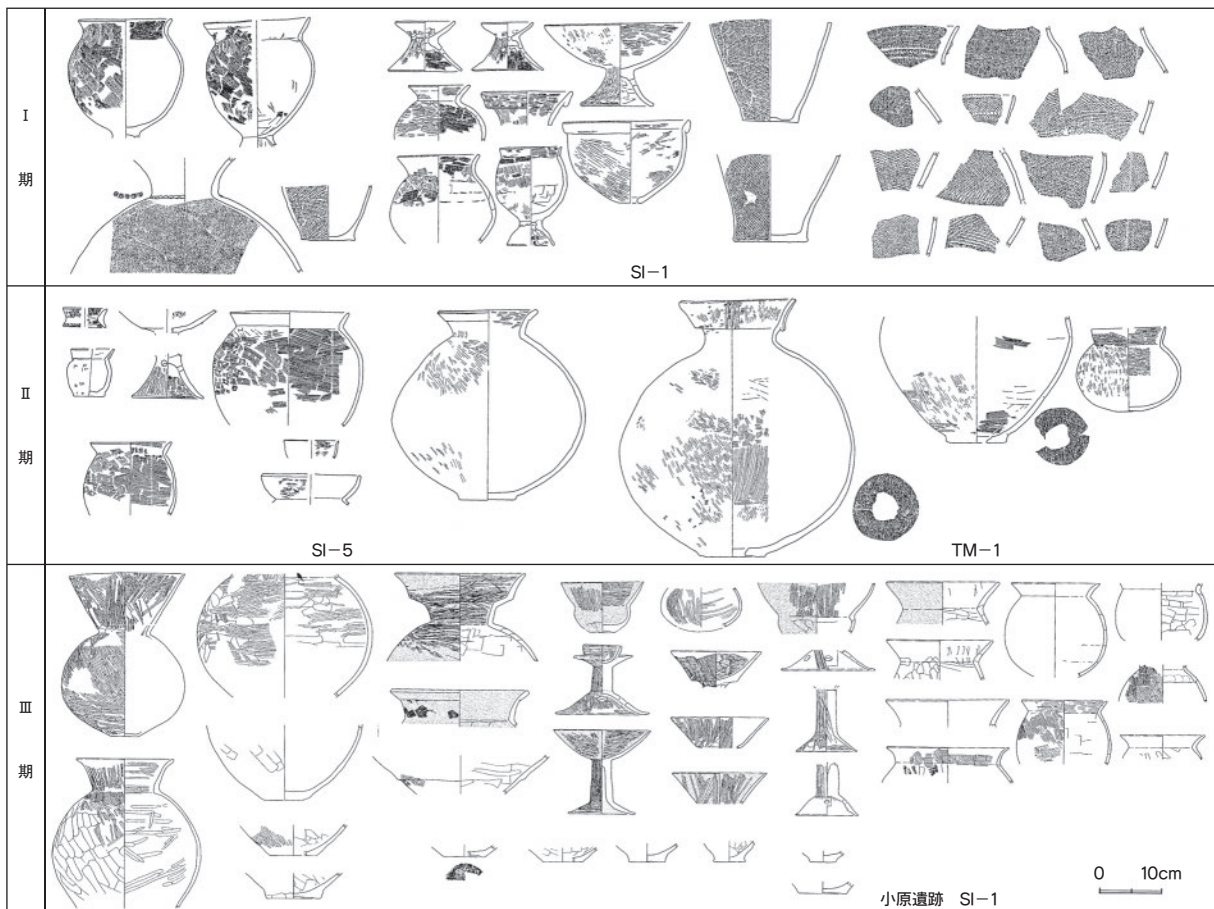
第94図 フラスコ状土坑配置図

14号土坑と第21号土坑から出土した破片が接合したもので、土坑間の距離は約30mである。また、第32・37・38・65号土坑から出土した土器片（TP24・TP25・TP29・TP30・TP31・TP35）は、胎土や文様の特徴から、第12号土坑から出土した土器片（TP3・TP5）と同一個体と考えられるものである。第32・37・38・65号土坑同士では、同一土器は出土していないことから、この関係を線で結ぶと、第12号土坑を中心に放射状を示すことになる（第94図）。これらの土坑について、覆土の堆積状況を見ると、第32・37・38・65号土坑が自然堆積なのに対して、放射状の線の中心にある第12号土坑だけが人為堆積と判断されている。土坑の廃絶に当たっては、自然に放置される場合と人為的に埋め戻される場合があり、後者の場合には、危険防止と儀礼行為のいずれかが想定される。今回の調査事例では、放射状の線の中心にある土坑だけが人為堆積を示しており、このことから儀礼的行為が行われた可能性を考えたい。第12号土坑からは多量の土器が出土した一方、第32・37・38・65号土坑は出土土器が少ないこと、第38号土坑から出土した深鉢片（第28図37）は赤彩されており、特殊な器と考えられることなどもその理由として挙げられる。また、当遺跡から石棒が単体で出土していることも集落内で集団による祭祀行為が行われていたことを示唆するもの¹²⁾であり、こうした状況から、当遺跡に居住していた集団によって、土坑の廃絶に伴う儀礼的な行為が執り行われた可能性を指摘しておきたい。

3 古墳時代前期の集落と方形周溝墓について

(1) 土器の様相

当遺跡では、2期の変遷を辿ることができる。小原遺跡¹³⁾の事例を加えると、旧友部町域では3期の変遷が確認され、図に示すと以下の通りとなる。



第95図 古墳時代前期土器変遷図

I期は第1号住居跡の土器群を指標とし、台付甕、壺、甑、高坏、器台、十王台式土器広口壺からなり、南関東系とされる弥生土器壺が若干含まれている。平底甕や小形丸底埴が見られないことを特徴としている。

II期は第5号住居跡と第1号方形周溝墓の土器群を指標とし、二重口縁壺や椀、ミニチュア土器が組成に加わるようになる。I期と比較して、明確な形態変化は見られないが、第1号方形周溝墓が第1・10号住居跡を掘り込んでいることや平底の土器甕が組成に加わること、及び弥生土器が組成から欠落していることなどを根拠としている。また、第1号方形周溝墓から出土した土器群は、第5号住居跡のものと同様の様相が異なるが、104と同一個体と見られる土師器壺片が第5号住居跡の床面から出土していることを踏まえて、同時期と判断した。第1号方形周溝墓から出土した底部穿孔の壺は口縁部に棒状浮文が貼り付けられた極めて大形の製品で、より目立つ、飾られた土器といえ、集落で通常使用される土器群とは本質的に異なるものと考えられる。また、79・103・104は装飾壺の文様が消失したものと判断され、同じ澗沼川流域に位置している綱山遺跡の第118号住居跡からは同様の二重口縁壺と脚部の下位が屈曲する中空柱状の高坏が共伴していること¹⁴⁾を考慮して、I期より後出的と判断できる。

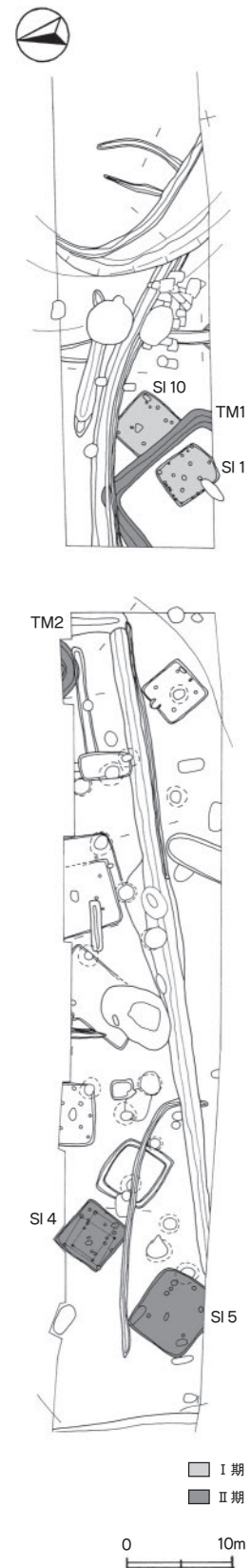
III期は小原遺跡第1号住居跡の土器群を指標とし、東海系高坏に代わって畿内系高坏が組成の主体となる時期である。

(2) 集落の動向

調査によって得られた資料は廃絶時の様子を示したものであり、従って住居の廃絶に伴ってどのような行為が行われたかを念頭に置いて、集落の動向について触れてみたい。I期の集落は、第1号住居跡への土器の大量投棄をもって収束している。出土した土師器片997点、弥生土器片414点の中には残存率が高いものが目に付き、又1軒分の土器の量を超えていることから、集団による土器廃棄儀礼が行われたものと推測される。中央部の覆土中層から水晶製の勾玉が出土している点は、象徴的である。

II期は第5号住居を中心展開している。住居の規模が傑出していることのみならず、他の住居で見られない二重口縁壺が中央部の床面から据え置かれた状態で出土していることもふまえて、方形周溝墓の築造に深く関わった住居と想定したい。方形周溝墓は調査区の東部に築造されている。第1号方形周溝墓はI期に該当する第10号住居跡を避けるように、また先に触れた第1号住居跡を墳丘内に取り込むように築造されており、しかもこれらの遺構の主軸方向がすべて揃っていることが確認されている。このことから、方形周溝墓の築造者の意識の中には前代の居住域が残存していたと理解でき、I期からII期への連続性をうかがわせる。

以上のように、当調査区の東部は、同一系譜の集団によって居住域から墓域へと転換したことが想定され、その切り替えに当たっては、I期で確認した第1号住居跡への土器の大量投棄が一定の役割を担っていたの



第96図 古墳時代前期遺構配置図

ではないかと推測される。

(3) 列島史からみた集落の位置付け

比田井克仁氏が分析しているように¹⁵⁾、前期初頭はそれぞれの地理的条件や歴史的背景によって、地域ごとに特徴のある土器様式が展開される時期である。当遺跡周辺は平口縁ハケ目調整による台付甕を主体としていることや、共伴する弥生土器は広口壺のみで、高坏が器種構成から欠落していることなど、いくつかの特徴が認められる。在地の弥生人にとって東海や南関東からもたらされる文化や情報は高度で新鮮なものに映ったに違はなく、高坏や器台などの供献土器とそれに付随する祭祀形態を始めとして、新たな文化を貪欲に吸収していったのではないだろうか。当該期は、土器に見られる非連続性から、支配と被支配を含めた急激な時代の変革期と見られがちである。しかし、少なくとも旧友部町域においては、土器の移動に象徴される文化の伝播と「倭国大乱」に象徴される政治的影響力は本質的に別物であり、土師器と弥生土器の共伴事例から推測されるのは、平和的な接触の中で徐々に高度な文化を取り入れていったのではないかということである。Ⅱ期には、方形周溝墓という墓制を含め、底部を穿孔された2個一対の土師器壺の出土など葬送儀礼にも積極的に対応していくことになる。土器の組成から弥生土器は払拭され、結果として「西から東へ」という文化の流れに沿う形となって表れている。Ⅲ期は当遺跡では確認されていないが、小原遺跡の例に見られるように、土器様相が畿内系土器を主体として均一化する時期であり、地域性の収束と共に4世紀が終わり、古墳の築造が本格化する古墳時代中期へと時代は移っていくことになる。

註)

- 1) 木村信吉『新善光寺の由来と謎』中和印刷 1994年11月
- 2) 現在、教住寺が所蔵している。
- 3) 友部町史編さん委員会『友部町史』友部町 1990年3月
霞ヶ浦町郷土資料館『祈りの造形－中世霞ヶ浦の金工品－』霞ヶ浦町郷土資料館 2000年10月
- 4) 茨城県立歴史館『茨城の仏像－茨城県内社寺所蔵美術工芸品の調査研究－』茨城県立歴史館 1997年
茨城県立歴史館『茨城の仏教遺宝－みほとけの情景とまなざし－』茨城県立歴史館 2004年10月
- 5) 山尾郷とは、笠間市南西部一帯（旧友部町南西部から旧笠間市南東部）を含んだ地域で、当遺跡の所在する宍戸地区も含まれている。
- 6) 友部町史編さん委員会『友部町史』友部町 1990年3月
- 7) 比毛君男「資料紹介 常陸中世寺院遺跡採取の瓦」『土浦市立博物館紀要』第15号 土浦市立博物館 2005年3月
- 8) 安芸穂子「掘り出された人形」『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会 2000年8月
- 9) 岩本芳幸「吉川元春館跡に見るまじない」『中世遺跡調査研究報告 第2集 吉川元春館跡の研究』広島県教育委員会 2001年3月
- 10) 野田良直・川又清明・吹野富美夫・浅野和久「宮後遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第188集 茨城県教育財団 2002年3月
和田清典・吹野富美夫・浅野和久・荒蒔克一郎・駒澤悦郎「宮後遺跡2」『茨城県教育財団文化財調査報告』第240集 2005年3月
塚本師也「比川台遺跡」『栃木県埋蔵文化財調査報告』第128集 栃木県文化振興事業団 1992年3月
塚本師也「茨城県北部域に於ける縄文時代中期中葉の土器の一様相」『領域の研究－阿久津久先生還暦記念論集』2003年4月
- 11) 後藤信祐・江原英「栃木県における縄文時代集落の諸様相」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会 2001年12月
- 12) 谷口康浩「石棒の象徴的意味－縄文時代の親族社会と祖先祭祀－」『國學院大學考古学資料館紀要』第21輯 2005年3月
- 13) 服部敬史他「小原遺跡」『県営畑地総合整備事業小原地内北区平成15年度調査報告』友部町小原遺跡発掘調査会 2004年3月
- 14) 荒蒔克一郎・田中幸夫「綱山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第243集 2005年3月
- 15) 比田井克仁『関東における古墳出現期の変革』雄山閣出版 2001年7月

第4章 宍戸城跡

第1節 遺跡の概要

宍戸城跡は、水田の広がる平坦な沖積低地に立地している。調査区は、この水田地内に東西長150m、南北長20mほどに設定され、調査面積は2,913㎡である。今回の調査によって、中世末から近世初頭にかけての遺構と遺物が確認された。検出された遺構は、掘立柱建物跡17棟、堀跡5条、溝跡5条、井戸跡7基、池跡3か所、土坑21基、ピット群4か所、柱穴列跡3条である。

遺物は、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に30箱が出土している。主な出土遺物は、土師質土器（皿・鍋・播鉢）、瓦質土器（火鉢・香炉・播鉢）、陶磁器（碗・皿・播鉢・壺・茶入・水指・香炉・徳利）、土製品（土人形・鈴）、木器・木製品（杓子・櫛・曲物・下駄・鋏・灯明台・箸・敷居・柱材・将棋駒）、漆器（碗・蓋・箱）、石製品（硯）、金属器・金属製品（鋏・釘・煙管・小柄）、古銭などである。

第2節 基本層序

調査区中央部のB2b0区にテストピットを設定し、基本土層（第97図）の堆積状況の観察を行った。テストピットの観察結果は、以下の通りである。

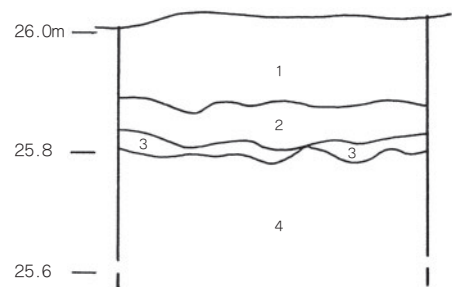
第1層は、黒色を呈する耕作土層で、砂粒と鉄分を微量含んでいる。層厚は20～32cmである。

第2層は、黒褐色を呈する粘土質の黒色土層で、鉄分を微量含んでいる。層厚は9～15cmである。

第3層は、暗褐色を呈する粘土層への斬移層で、黄色粘土粒子を少量含んでいる。層厚は2～6cmである。

第4層は、にぶい黄褐色を呈する黄色粘土層である。下層が湧水により未掘のため、本来の層厚は不明である。

遺構は、第2層上面で確認されている。



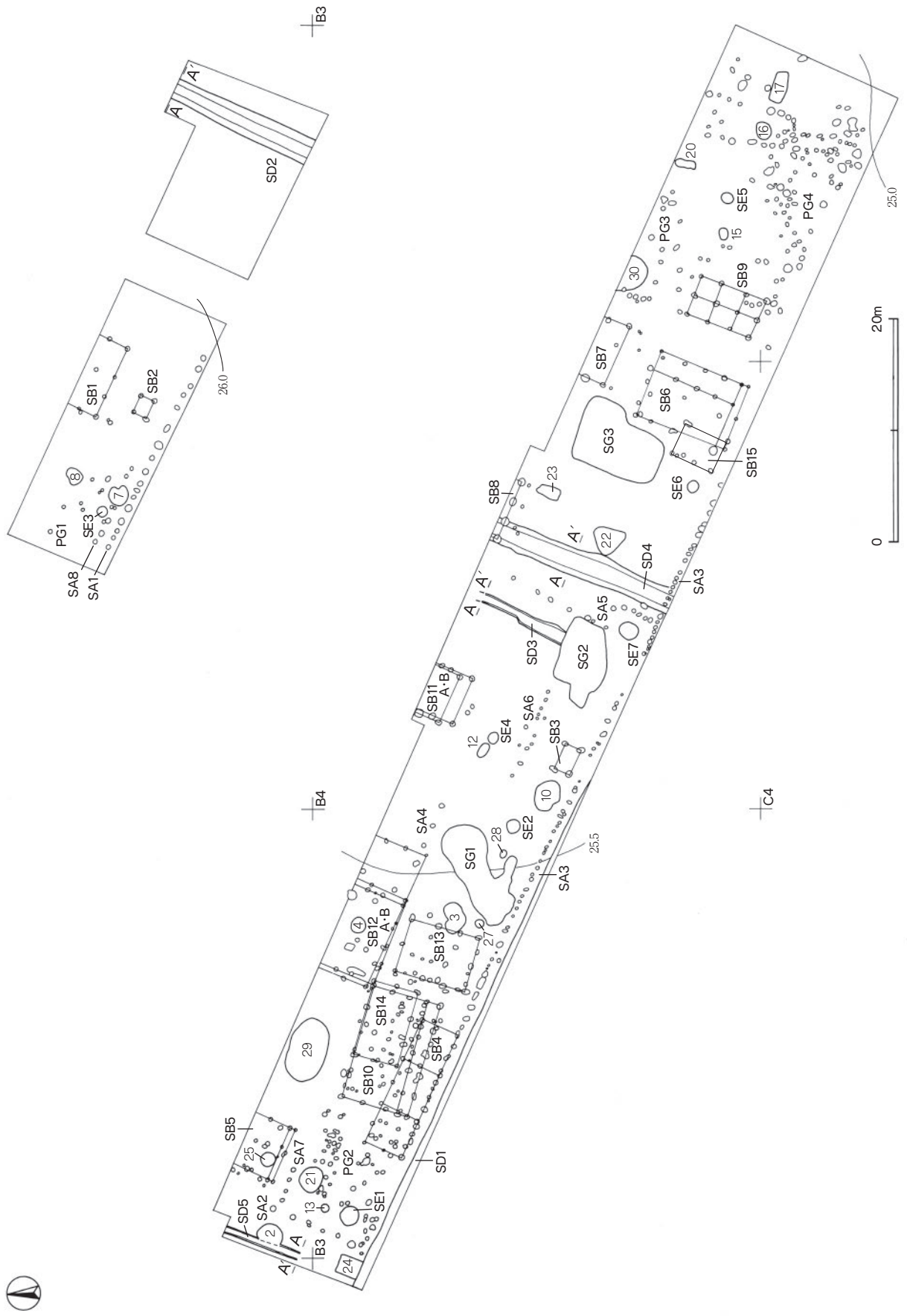
第97図 基本土層図

第3節 遺構と遺物

掘立柱建物跡17棟、堀跡5条、溝跡5条、井戸跡7基、池跡3か所、土坑21基、ピット群4か所、柱穴列跡3条が確認されている。正保年間に作成された宍戸城下図には、当遺跡付近が武家屋敷群を形成していた様子が描かれており、今回報告する遺構の大半は絵図が示す武家屋敷群の一部と考えられる。また、17世紀後半には当遺跡付近一帯は宍戸城の破却と共に水田化され、現在に至っているため、確認された遺構がそのまま廃城当時の様子を示すものとして貴重な資料といえる。

以下、確認された遺構と遺物について記述する。

1 掘立柱建物跡

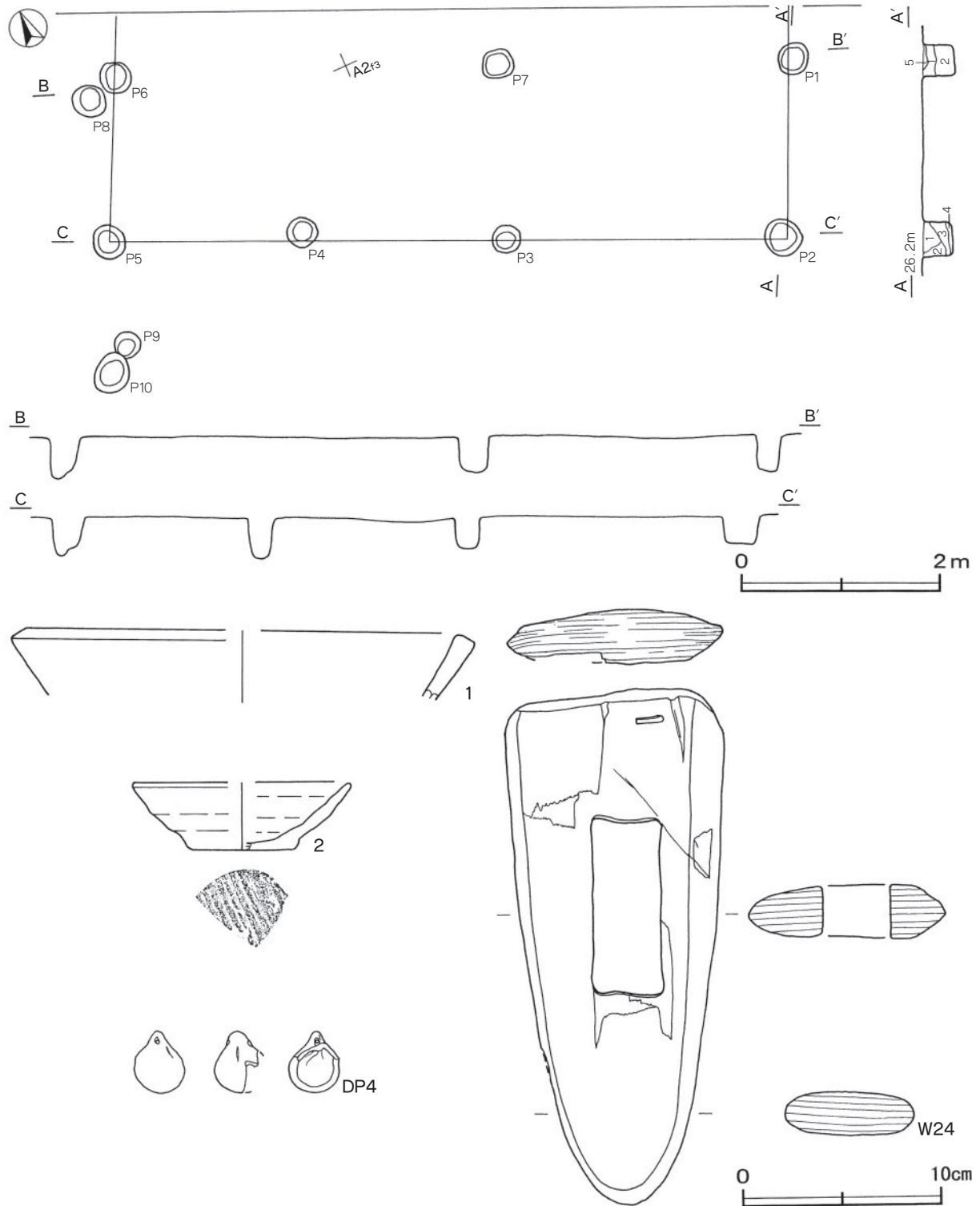


第98図 宍戸城跡遺構全体図

第1号掘立柱建物跡（第99図）

位置 調査区西部のA 2 f3区で、標高26.0mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 北側部分が調査区域外に延びているため、桁行は3間で、梁行は1間が確認されている。側柱建物で、確認された規模は桁行6.8m、梁行1.8mである。桁行方向はN-65°-Wで、東部には内部を仕切するための支柱又は東柱が付設されており、空間の使い分けがなされていたことが推測される。桁行の柱間寸法は、支柱



第99図 第1号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

又は東柱を境にして東部が2.7m、西部が2.0mと異なる間尺が使用されており、梁行は1.8mを基調としている。
柱穴 いずれも円形で、深さは26～40cmである。

土層解説

1 灰褐色	粘土質黒色土多量, 砂粒・礫少量, 粘土粒子微量	4 にぶい黄褐色	ローム粒子多量, 粘土質黒色土少量
2 灰黄褐色	粘土質黒色土多量, 粘土粒子少量	5 にぶい黄褐色	ローム粒子・砂粒中量, 礫微量
3 暗褐色	粘土質黒色土多量, 粘土粒子少量		

遺物出土状況 土師質土器片14点（皿3, 播鉢2, 鍋9）, 瓦質土器片5点（播鉢）, 瀬戸・美濃系陶器片6点（皿）, 土製品1点（鈴）, 木器1点（鋏）, 炭化種子18点（桃）が出土している。1はP1, DP4は遺構確認面から出土している。

所見 時期は、桁行方向が正保年間に作成された宍戸城下図に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられる。柱間寸法に6尺, 7尺, 9尺を用いて柱穴が整然と並んでいることから、主屋又はそれに準じる建物と想定される。

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第99図）

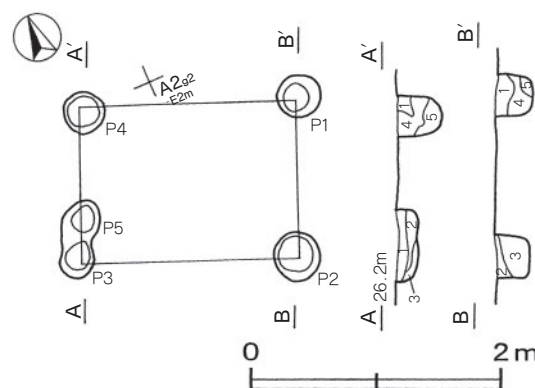
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
1	土師質土器	鉢	[21.8]	(3.3)	—	雲母・針状鉱物	橙	普通	無文	P1内	
2	土師質土器	皿	[10.6]	3.4	[5.4]	雲母	にぶい橙	普通	底部板目状圧痕	確認面	25%

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土・材質	特徴	出土位置	備考
DP4	土製品	鈴	3.1	2.6	—	(5.9)	長石・石英	ナア明赤褐色 上端を穿孔	確認面	
W24	木器	鋏	25.9	11.0	2.8	(111)	コナラ属コナラ節	着柄用の長方形の孔有り 追衽目	確認面	90% PL15

第2号掘立柱建物跡（第100図）

位置 調査区西部のA2g2区で、標高26.0mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 桁行・梁行共に1間の建物である。桁行は1.8m、梁行は1.2mで、桁行方向はN-64°-Wである。



柱穴 いずれも円形で、深さは20～38cmである。

土層解説

1 灰黄褐色	粘土質黒色土・砂粒・粘土粒子少量
2 黒褐色	粘土質黒色土・粘土粒子少量, 砂粒微量
3 暗褐色	粘土質黒色土中量, 粘土粒子少量, 砂粒微量
4 オリーブ黄色	粘土粒子多量, 砂粒少量, 礫微量
5 灰オリーブ色	粘土粒子中量, 砂粒少量, 粘土質黒色土微量

所見 時期は、桁行方向が第1号掘立柱建物跡と一致していることから、17世紀前半と考えられ、形状から門跡と想定される。

第100図 第2号掘立柱建物跡実測図

第3号掘立柱建物跡（第101図）

位置 調査区東部のB4f2区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 桁行・梁行共に1間の建物である。桁行は2.4m、梁行は1.5mで、桁行方向はN-66°-Wである。

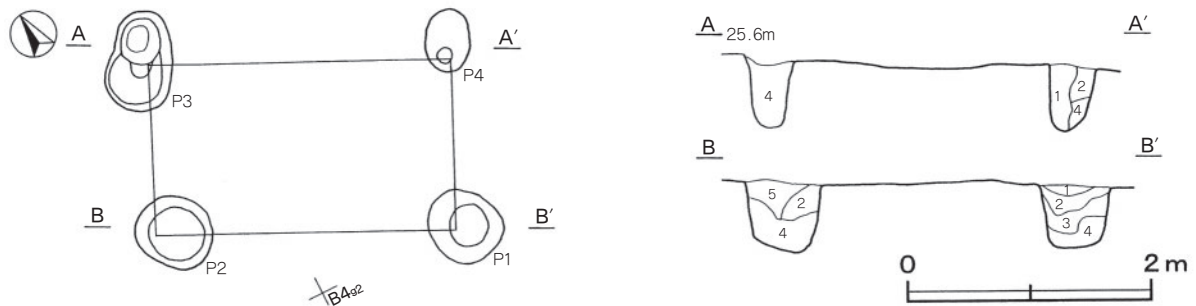
柱穴 P1・P2は円形, P3・P4は楕円形で、深さは50～52cmである。柱痕は第1層が相当し、推測される柱の径は20cmほどである。埋土部分には、径5～10cmの細礫が充填されている。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|----------|------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 粘土質黒色土・砂粒・粘土粒子少量 | 4 オリーブ黄色 | 粘土粒子多量, 砂粒少量, 細礫微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土質黒色土・粘土粒子少量, 砂粒微量 | 5 灰オリーブ色 | 粘土粒子中量, 砂粒少量, 粘土質黒色土微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土質黒色土中量, 粘土粒子少量, 砂粒微量 | | |

遺物出土状況 土器片は出土していない。細礫は重量にしてP1から2.2kg, P2から12.2kg, P3から21.8kg, P4から10.4kgが確認されており, 柱を固定するために使用されたものと想定される。

所見 時期は, 桁行方向が宍戸城下図に記された区画と一致していることから, 17世紀前半と考えられる。塀跡から1.2mほど奥まって位置していることや, 桁行・梁行共に1間の構造であること, 柱穴を礫で固定していることなどから, 薬医門形式の門跡と考えられる。



第101図 第3号掘立柱建物跡実測図

第4号掘立柱建物跡 (第102・103図)

位置 調査区東部のB3c5区で, 標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

重複関係 第3号塀に掘り込まれている。

規模と形状 桁行6間, 梁行2間の側柱建物である。桁行が12.0m, 梁行が3.6mで, 桁行方向はN-65°-Wである。柱間寸法は, 桁行が1.9m, 梁行が1.8mを基調とし, 桁行中央部の2間が2.4mと広がっている。内部は柱穴によって2間毎に区切られ, 建物全体を3か所に仕切る構造となっている。

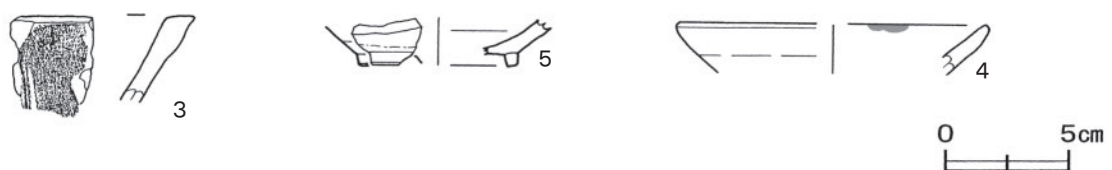
柱穴 いずれも円形で, 深さは10~22cmである。柱痕は第4・7層が相当し, 推定される柱の径は10cmほどである。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|-------|--------------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土質黒色土多量, 砂粒・粘土粒子微量 | 5 黒褐色 | 粘土質黒色土多量, 粘土粒子少量 |
| 2 褐灰色 | 粘土質黒色土中量, 粘土粒子・砂粒少量 | 6 褐灰色 | 粘土質黒色土・粘土粒子中量, 礫少量, 砂粒微量 |
| 3 暗褐色 | 粘土粒子多量, 砂粒少量, 粘土質黒色土微量 | 7 黒色 | 粘土質黒色土多量 |
| 4 暗褐色 | 粘土粒子中量, 砂粒・粘土質黒色土微量 | | |

遺物出土状況 土師質土器片5点(皿2, 挿鉢3), 唐津系陶器片1点(碗)が出土している。3はP1, 4はP2, 5はP10から出土している。

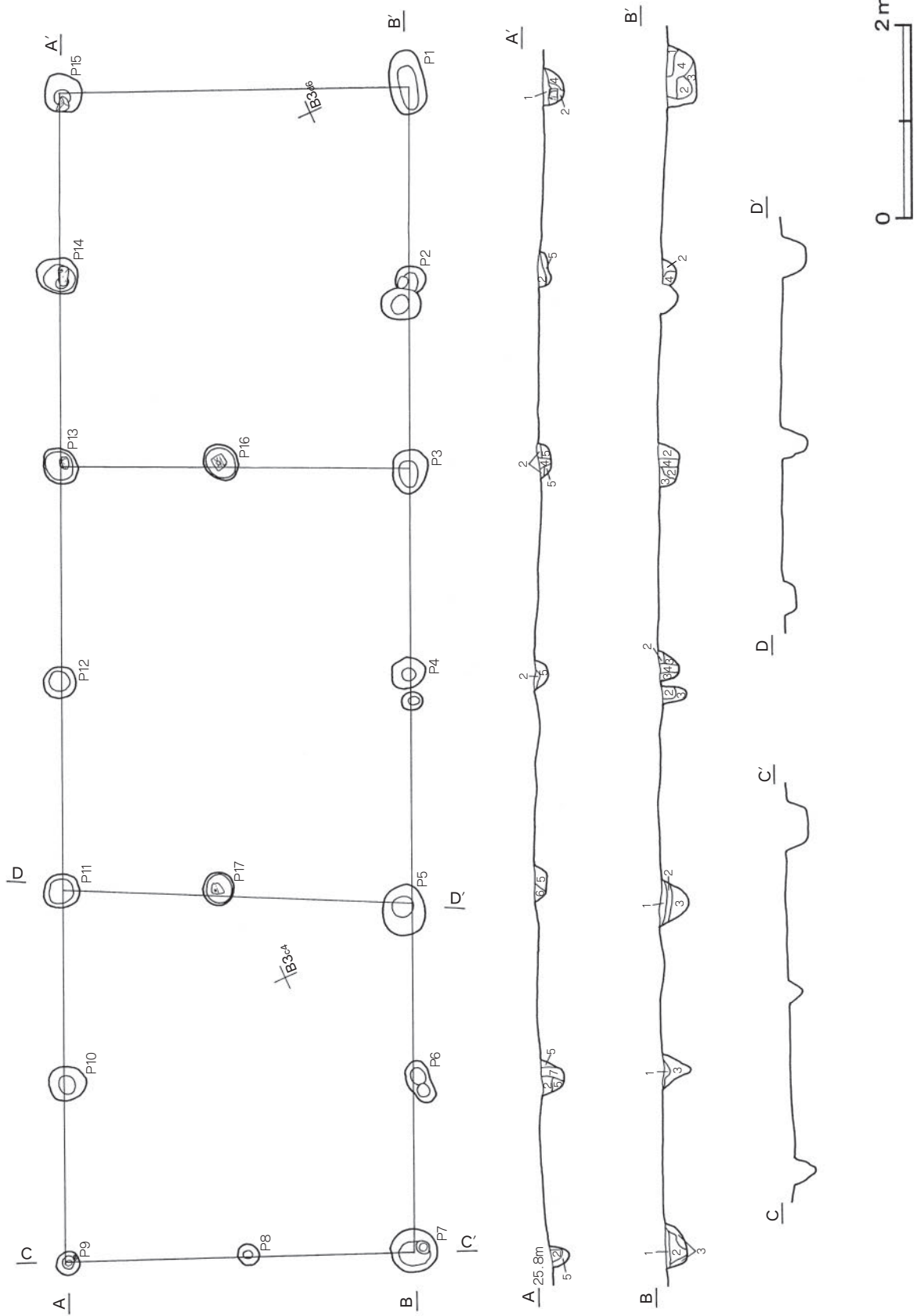
所見 時期は, 桁行方向が宍戸城下図に記された区画の方向と一致していることや出土土器から, 17世紀前半と考えられ, 長屋門又は屋敷の区画を兼ねた長屋風建物と想定される。第4号塀に掘り込まれていることから, 武家屋敷が整備された初期の段階では本跡が屋敷を区画し, その後塀によって区画されたと考えられる。



第102図 第4号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第103图 第4号掘立柱建物跡実測图



第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第102図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
3	土師質土器	播鉢	—	(3.1)	—	雲母	暗褐	普通	播り目2条以上	P1内	
4	土師質土器	皿	[14.0]	(1.7)	—	雲母・針状鉱物	褐灰	普通	ロクロ成形 口縁部油煙付着	P2内	
5	陶器	碗	—	(1.9)	[6.4]	長石	橙・灰オーブ	良好	高台周辺露胎	P10内	唐津

第5号掘立柱建物跡（第104図）

位置 調査区東部のA3i3区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 北側が調査区域外に延びているため、桁行は3間で、梁行は1間が確認された側柱建物である。確認された規模は、桁行4.8m、梁行2.1mで、南側と西側には庇が付設されている。桁行方向はN-65°-Wで、柱間寸法は桁行が1.8m、梁行が2.0mを基調とし、桁行の中央部が0.9mと狭くなっている。南部の庇の柱間寸法は2.4mで、身舎と庇の間隔は0.45mである。西部の庇の柱間寸法は南から2.45m、0.45mで、身舎と庇の間隔は0.6mである。また、西部の遺構確認面からは、黒色土が薄く均一に広がって確認されており、よく締まっていることから、土間の痕跡と考えられる。

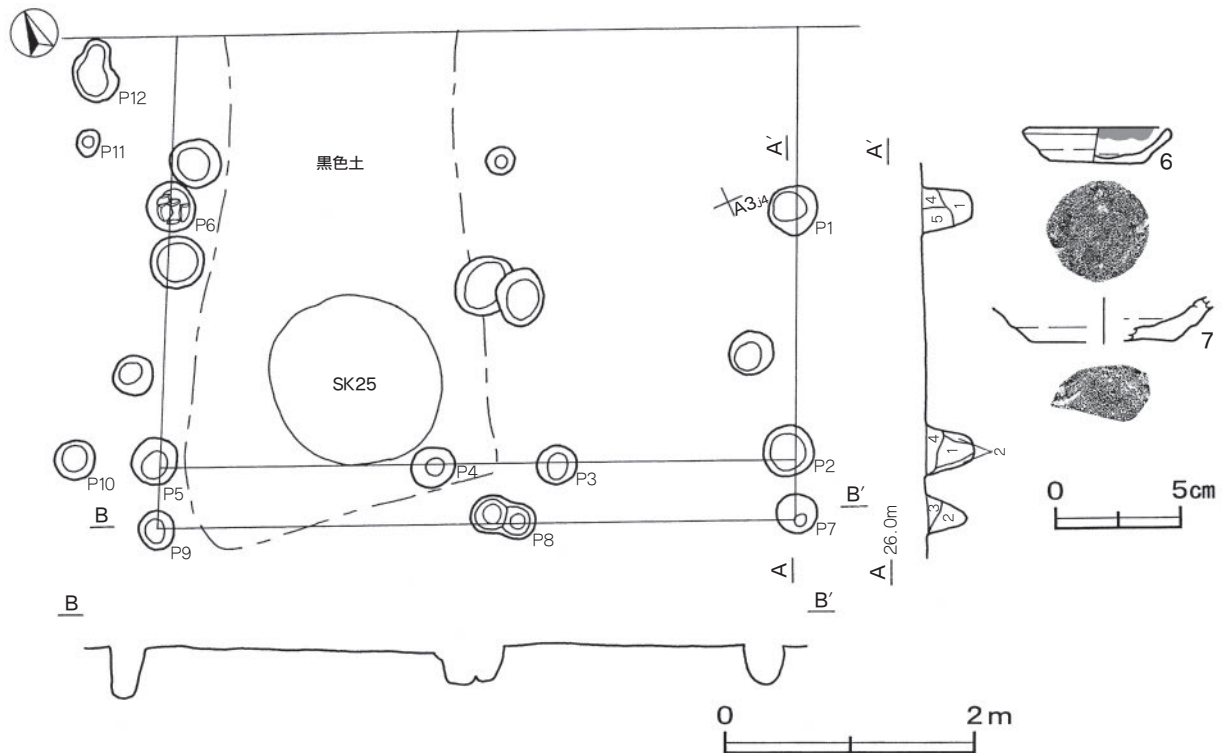
柱穴 いずれも円形で、深さは25～38cmである。

土層解説

- | | | |
|---------|--------------------------|-------------------------------|
| 1 褐灰色 | 粘土質黒色土多量, 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量 | 粒子微量 |
| 2 灰黄褐色 | 粘土質黒色土多量, 粘土粒子少量 | 4 灰黄褐色 粘土質黒色土中量, 粘土粒子少量, 砂粒微量 |
| 3 ぶい黄褐色 | 粘土質黒色土・粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化 | 5 黒色 炭化粒子・粘土質黒色土中量, 粘土粒子微量 |

遺物出土状況 土師質土器片4点（皿）が出土している。6はP10, 7はP2から出土している。

所見 時期は、桁行方向が宍戸城下図に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられる。西部に土間の痕跡と推定される黒色土の広がり方が認められることから、台所又は勝手口などの機能を持った施設が存在していたことが考えられる。



第104図 第5号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

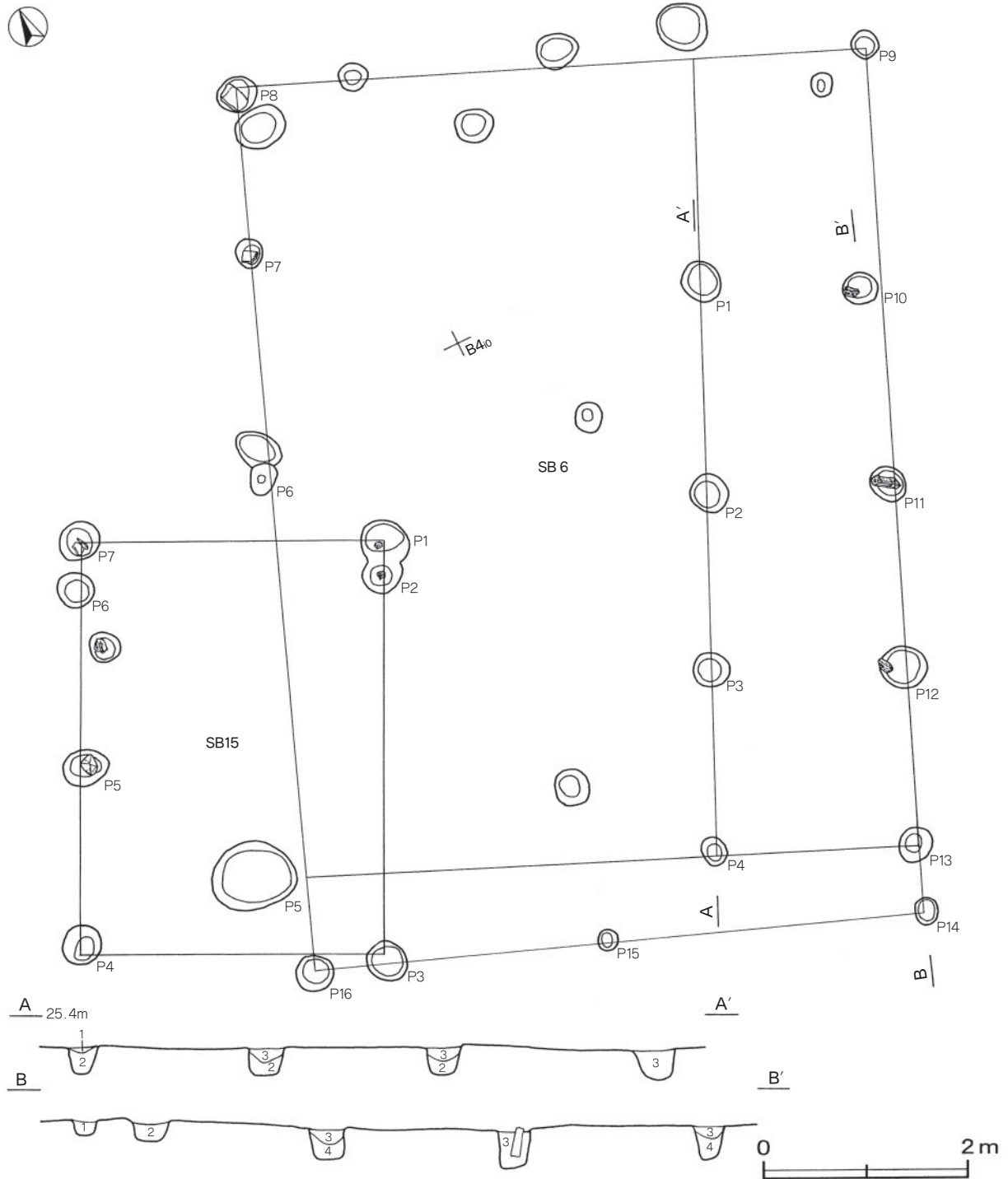
第5号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第104図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
6	土師質土器	皿	5.6	1.5	4.2	雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 油煙付着	P10内	
7	土師質土器	皿	—	(1.8)	[5.8]	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	P2内	

第6号掘立柱建物跡（第105・106図）

位置 調査区東部のB 4 i0区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

重複関係 第15号掘立柱建物跡と重複している。しかし、柱穴の重複は見られず、新旧関係は不明である。



第105図 第6・15号掘立柱建物跡実測図

規模と形状 桁行4間、梁行1間の側柱建物で、桁行7.5m、梁行6.0mの身舎の南側に庇状の施設が付設されている。桁行方向はN-22°-Eで、柱間寸法は桁行が1.8mと2.1m、梁行が1.9mを基調としている。身舎と庇状の施設の間隔は0.7mである。また、庇状の可能性のある施設部分は、ピット3か所で構成されており、3.0mの間隔で整然と並んでいる。

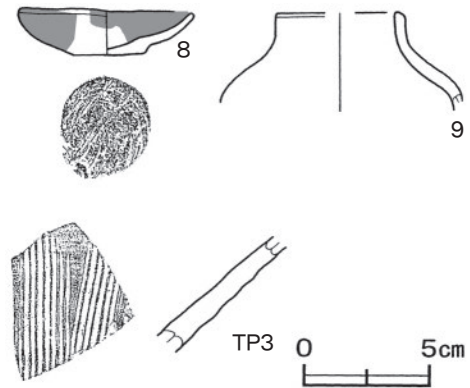
柱穴 いずれも円形で、深さは15~30cmである。

土層解説

- 1 暗褐色 青灰色粘土粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 青灰色粘土粒子少量、砂粒微量
- 3 褐灰色 青灰色粘土粒子多量、砂粒少量
- 4 褐灰色 青灰色粘土粒子多量

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿)、瓦質土器片2点(壺)、瀬戸・美濃系陶器片1点(播鉢)、炭化種子8点(桃3、椎5)が出土している。9はP12から出土している。

所見 時期は、桁行方向が宍戸城下図に記された区画と一致していることから、17世紀と考えられる。建物の規模が小さく、主屋から離れていることから、倉庫又は奉公人の詰所的な機能が想定される。



第106図 第6号掘立柱建物跡出土遺物実測図

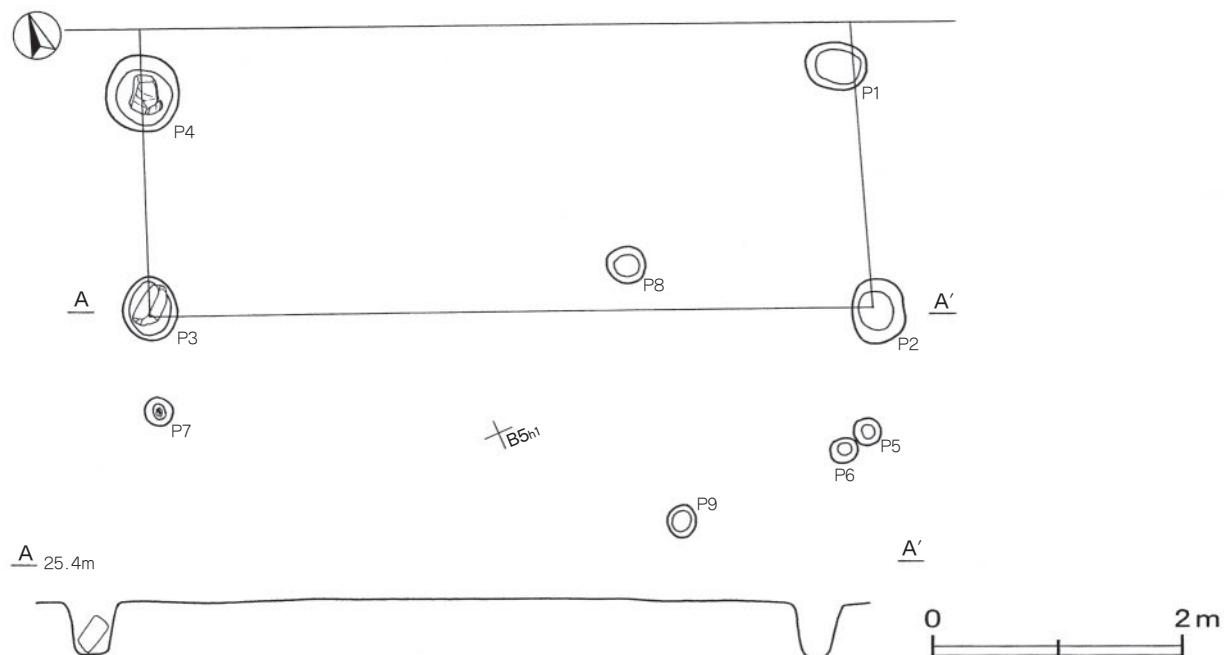
第6号掘立柱建物跡出土遺物観察表 (第106図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
8	土師質土器	皿	6.8	1.9	2.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 油煙付着	確認面	100%
9	瓦質土器	壺	[5.0]	(3.9)	—	雲母・長石	暗灰黄	普通	ナデ無文	P12内	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
TP3	陶器	播鉢	精良	にぶい赤褐	良好	無釉 8条1単位の播り目	P2内	

第7号掘立柱建物跡 (第107図)

位置 調査区東部のB 4 g0区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。



第107図 第7号掘立柱建物跡実測図

規模と形状 北側部分が調査区域外に延びているため、桁行・梁行共に1間が確認されただけである。確認された規模は桁行5.7m、梁行1.8mで、桁行方向はN-65°-Wである。

柱穴 いずれも円形で、深さは42~55cmである。P3では斜位、P4では底面に据え置かれた状態で、根石が確認されている。いずれも長軸30cm、短軸20cmほどの長方形で、厚さ15cmほどの板状の石である。

所見 時期は、桁行方向が宍戸城下図に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられる。柱穴の規模や根石が使用されている状況から、主屋と想定され、東西方向に間口を広くとる構造から見て、玄関部分と考えられる。

第8号掘立柱建物跡（第108図）

位置 調査区東部のB4e7区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外に延びているため、東西方向に柱穴4か所が確認されただけである。柱穴の規模や構造から見て、大形の建物が想定されることから、確認された部分は梁行と考えられ、桁行方向はN-25°-Eである。梁行の長さは5.4mで、柱間寸法は2.0mである。

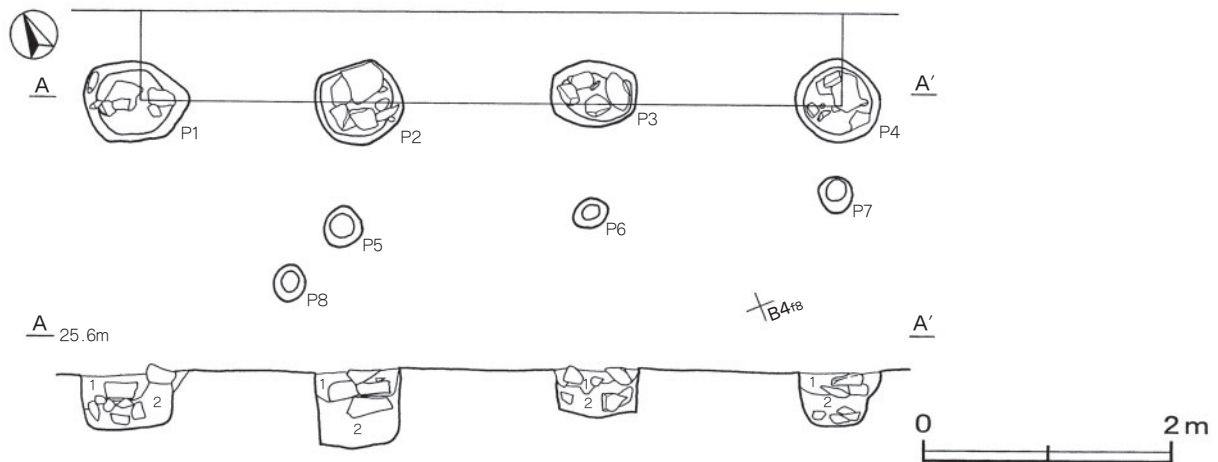
柱穴 いずれも円形で、深さは38~58cmである。各柱穴には細礫が充填されており、柱の固定に使用されたと考えられる。

土層解説

1 灰黄褐色 粘土質黒色土多量、砂粒少量、細礫微量 2 黒褐色 粘土質黒色土少量、細礫・砂粒微量

遺物出土状況 瓦質土器片3点（播鉢）が出土している。

所見 時期は、桁行方向が宍戸城下図に記された区画の方向と一致していることから、17世紀前半と考えられる。柱穴に細礫を充填して柱を固定する構造の建物は、門や主屋が中心であることから、主屋の南縁部と想定される。



第108図 第8号掘立柱建物跡実測図

第9号掘立柱建物跡（第109・110図）

位置 調査区東部のB5j2区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 桁行3間、梁行2間の総柱建物である。桁行が6.0m、梁行が3.6mで、桁行方向はN-26°-Eである。柱間寸法は、桁行が2.0m、梁行が1.8mである。

柱穴 いずれも円形で、深さは30~45cmである。P1~P3・P9からは、樹皮がついたままの丸材（松）の基

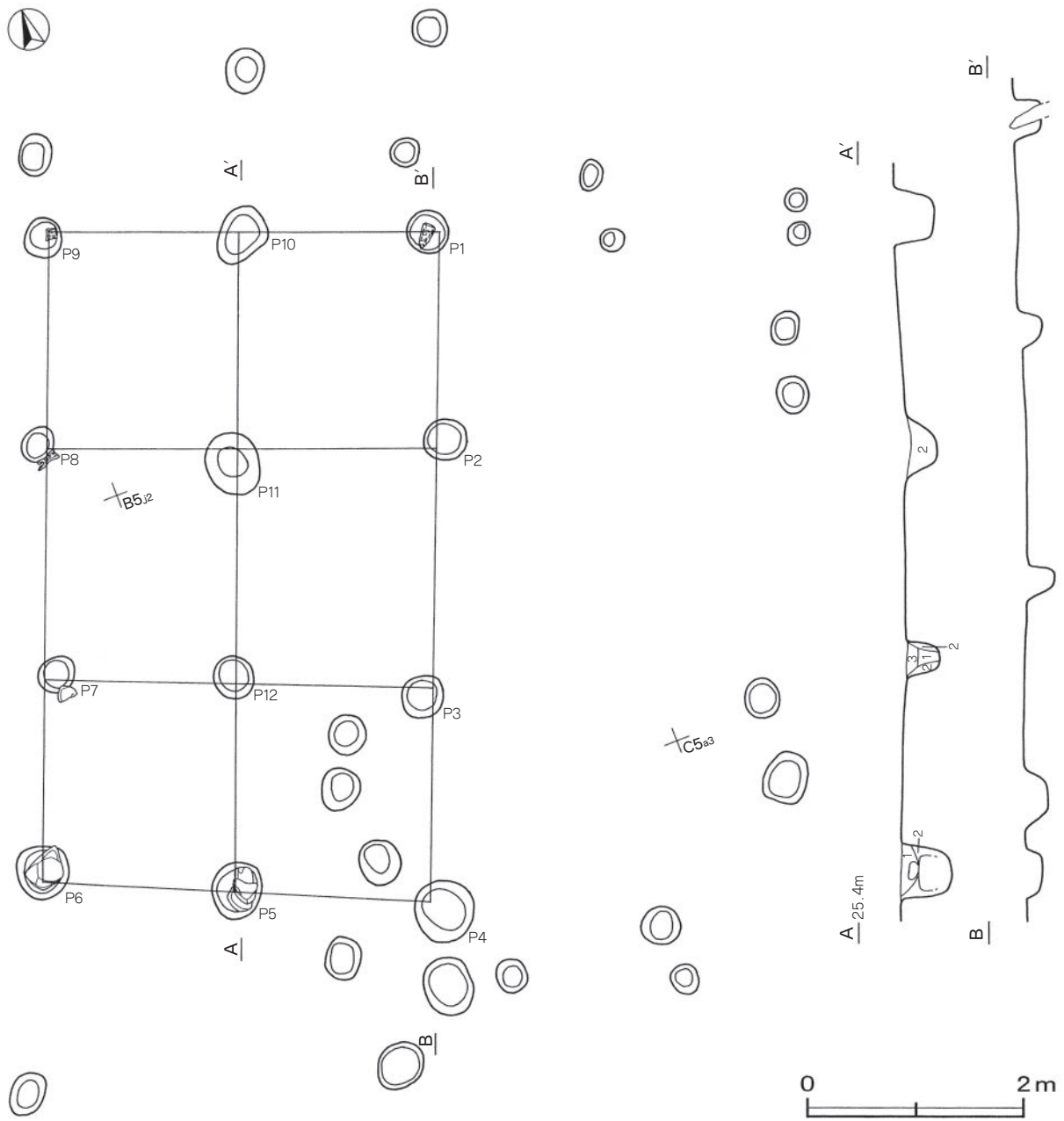
部が据えられた状態で確認されている。また、P5・P6の中層からは根石と考えられる板状の石が出土している。

土層解説

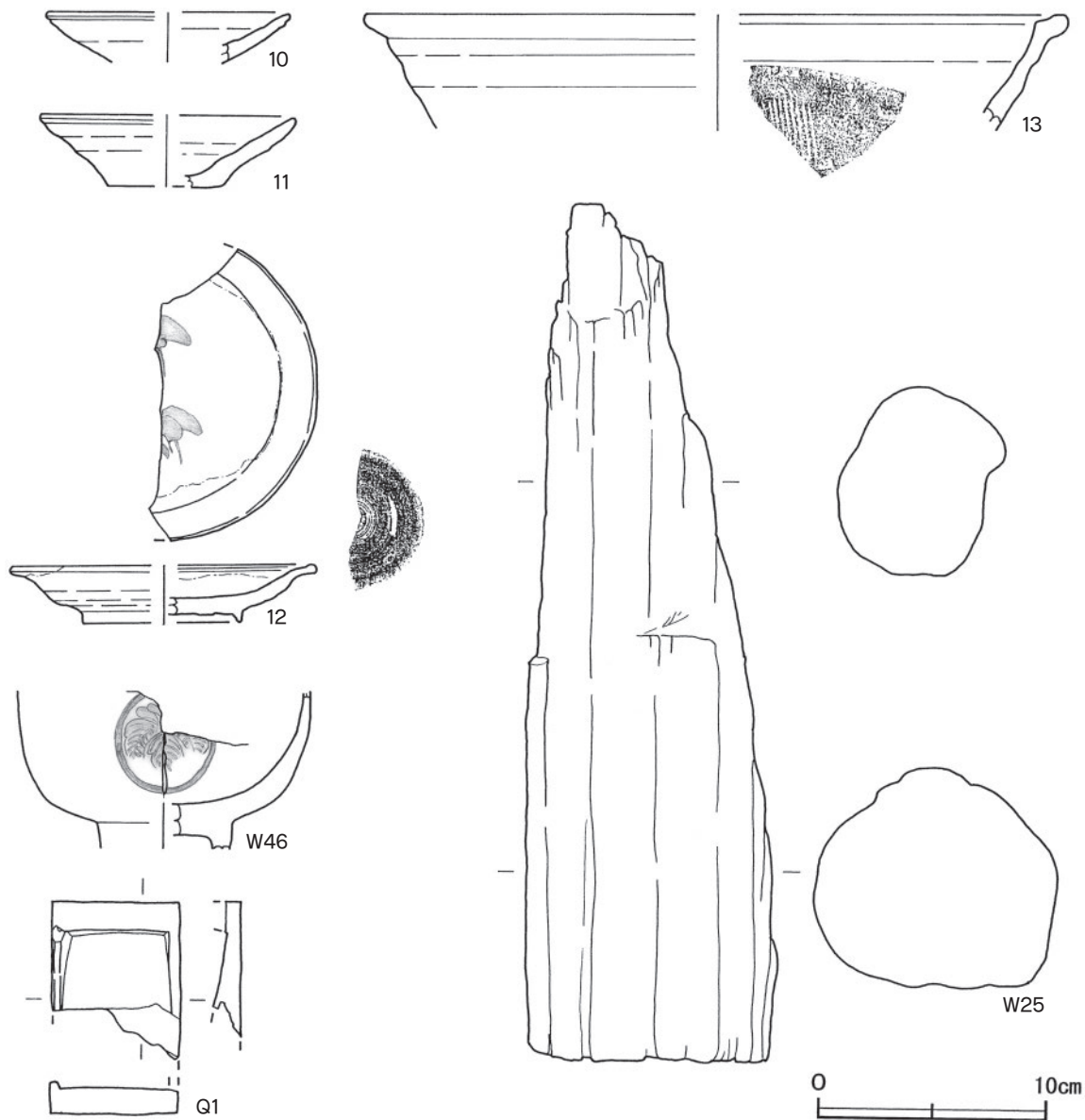
- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 黒褐色 粘土質黒色土多量, 礫少量, 砂粒微量 | 3 黒褐色 粘土質黒色土・砂粒中量, 礫少量 |
| 2 黒褐色 粘土質黒色土多量, 砂粒・礫微量 | |

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿), 瀬戸・美濃系陶器片3点(皿2, 播鉢1), 漆器4点(椀), 石製品1点(硯), 炭化種子6点(桃)が出土している。12はP10から出土している。

所見 時期は、桁行方向が宍戸城下図に記された区画の方向と一致していることから、17世紀前半と考えられる。総柱式の構造をとる唯一の建物であり、倉庫として機能していたと推測される。



第109図 第9号掘立柱建物跡実測図



第110図 第9号掘立柱建物跡出土遺物実測図

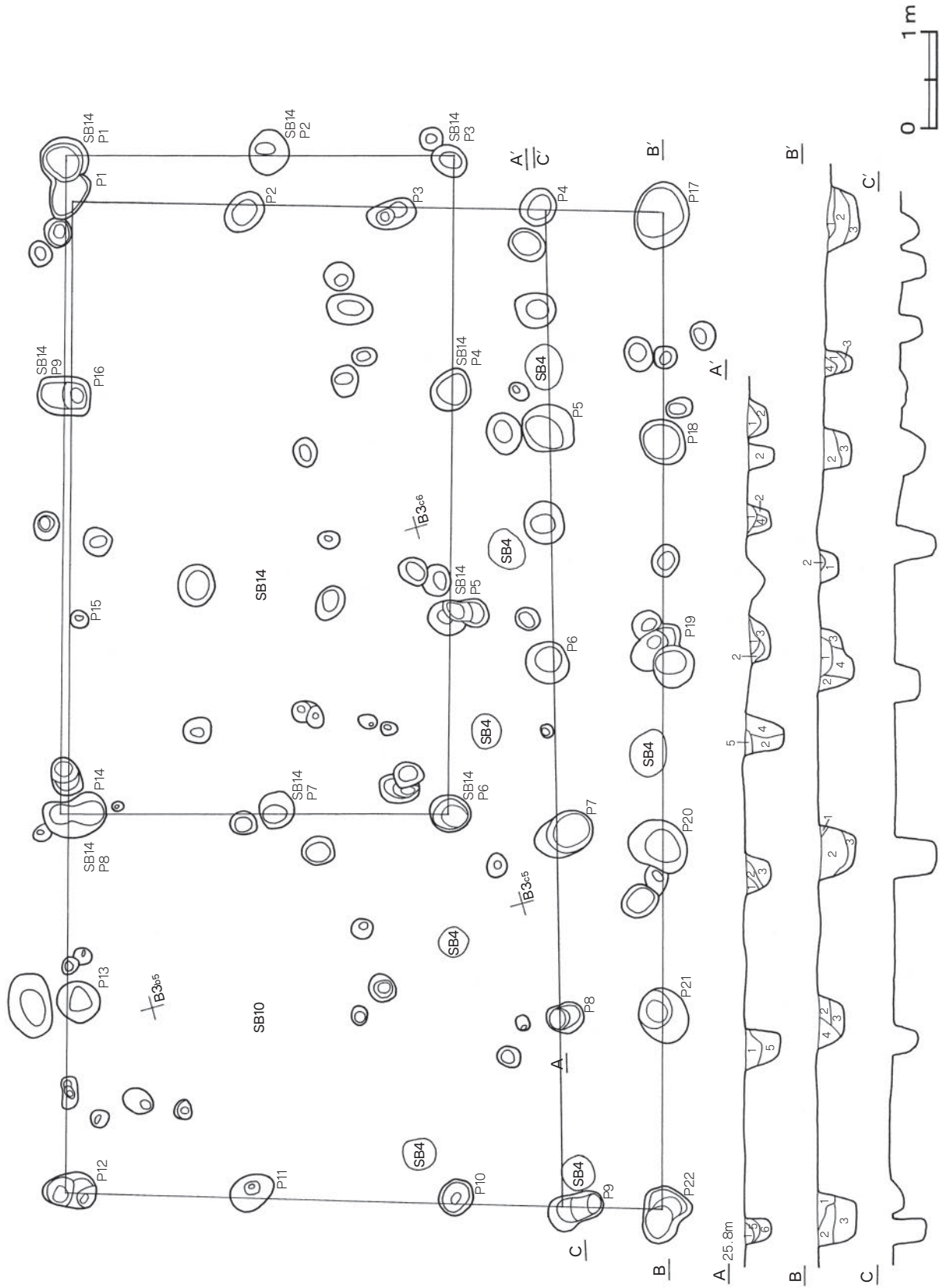
第9号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第110図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
10	土師質土器	皿	[10.4]	(2.2)	—	雲母・長石・石英	にぶい・黄橙	普通	ロクロ成形	確認面	
11	土師質土器	皿	[12.2]	3.1	[6.2]	雲母・長石	にぶい・黄橙	普通	ロクロ成形 底部摩滅	確認面	
12	陶器	折縁皿	[13.2]	2.6	[7.0]	長石 長石釉・ 緑釉	灰白・緑・ 黒褐	良好	蘭竹文 見込みに重ね焼き痕 青織部	P10内	50% 瀬戸・ 美濃
13	陶器	播鉢	[30.5]	(5.0)	—	石英 鉄釉	灰黄・褐灰	良好	播り目9条以上	確認面	瀬戸・美濃

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q1	石製品	碗	(6.8)	5.6	1.4	(67.1)	粘板岩	墨堂欠損 墨縁一部残存 硯背丁寧な研磨	確認面	
W25	木材	柱	(37.3)	11.0	9.7	(1910)	クリ科	丸材 平底 表皮残存	P1内	
W46	漆器	碗	—	(7.1)	—	(125.8)	トチノキ科 トチノキ属	外面黒漆 内面朱漆 金泥による丸に葛文	P12内	PL15

第10号掘立柱建物跡（第111・112図）

位置 調査区東部のB 3 b5区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。



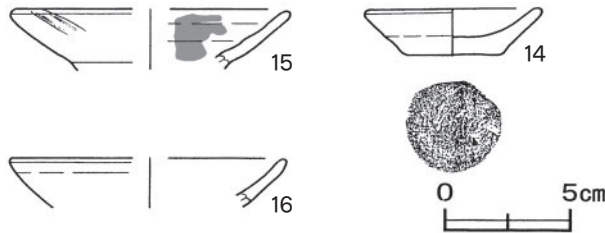
第111図 第10・14号掘立柱建物跡実測図

規模と形状 桁行5間，梁行3間の側柱建物で，身舎の南側に庇が付設されている。身舎の桁行は10.3m，梁行は5.0mで，桁行方向はN-75°-Eである。桁行と庇の柱間寸法は西部の3間が2.0m，東部の2間が2.4mで，梁行は2.0mを基調としている。また，身舎と庇の間隔は1.2mである。

柱穴 いずれも円形で，深さは25～42cmである。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|----------|----------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土質黒色土中量，黄色粘土粒子・砂粒少量 | 4 暗褐色 | 黄色粘土粒子中量，粘土質黒色土・砂粒少量 |
| 2 黒褐色 | 粘土質黒色土・砂粒中量，黄色粘土粒子少量 | 5 にぶい黄褐色 | 黄色粘土粒子多量，粘土質黒色土・砂粒微量 |
| 3 暗褐色 | 黄色粘土粒子中量，粘土質黒色土少量，砂粒微量 | 6 黒色 | 粘土質黒色土多量，黄色粘土粒子・砂粒微量 |



遺物出土状況 土師質土器片14点（皿13，鍋1）が出土している。14・15はP19，16はP17から出土している。

所見 時期は，桁行方向が宍戸城下図に記された区画と一致していないことから，秋田氏によって武家屋敷が整備される以前の16世紀と考えられる。当遺跡における最大規模の建物跡で，中世後半に当地を

第112図 第10号掘立柱建物跡出土遺物実測図

治めていた宍戸氏又は佐竹氏に関わる建物と推測される。

第10号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第112図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
14	土師質土器	皿	6.9	1.9	3.8	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	P19内	80%
15	土師質土器	皿	[10.8]	(2.4)	—	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形 油煙付着	P19内	20%
16	土師質土器	皿	[10.8]	(1.9)	—	雲母・赤色粒子	浅黄橙	普通	ロクロ成形	P17内	

第11A・B号掘立柱建物跡（第113図）

位置 調査区東部のB 4c3区で，標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 同じ構造の建物跡2棟が南北に0.9mほど位置をずらして確認されている。規模や構造を維持しつつ，若干移動して建て替えが行われたものと推定され，南側に位置する建物跡をA，北側に位置する建物跡をBとして記述する。A・B共に北側部分が調査区域外に伸びているため，桁行と梁行は1間が確認されただけである。確認された規模は桁行が4.5m，梁行はAが2.1m，Bが2.0mで，桁行方向はN-65°-Wである。

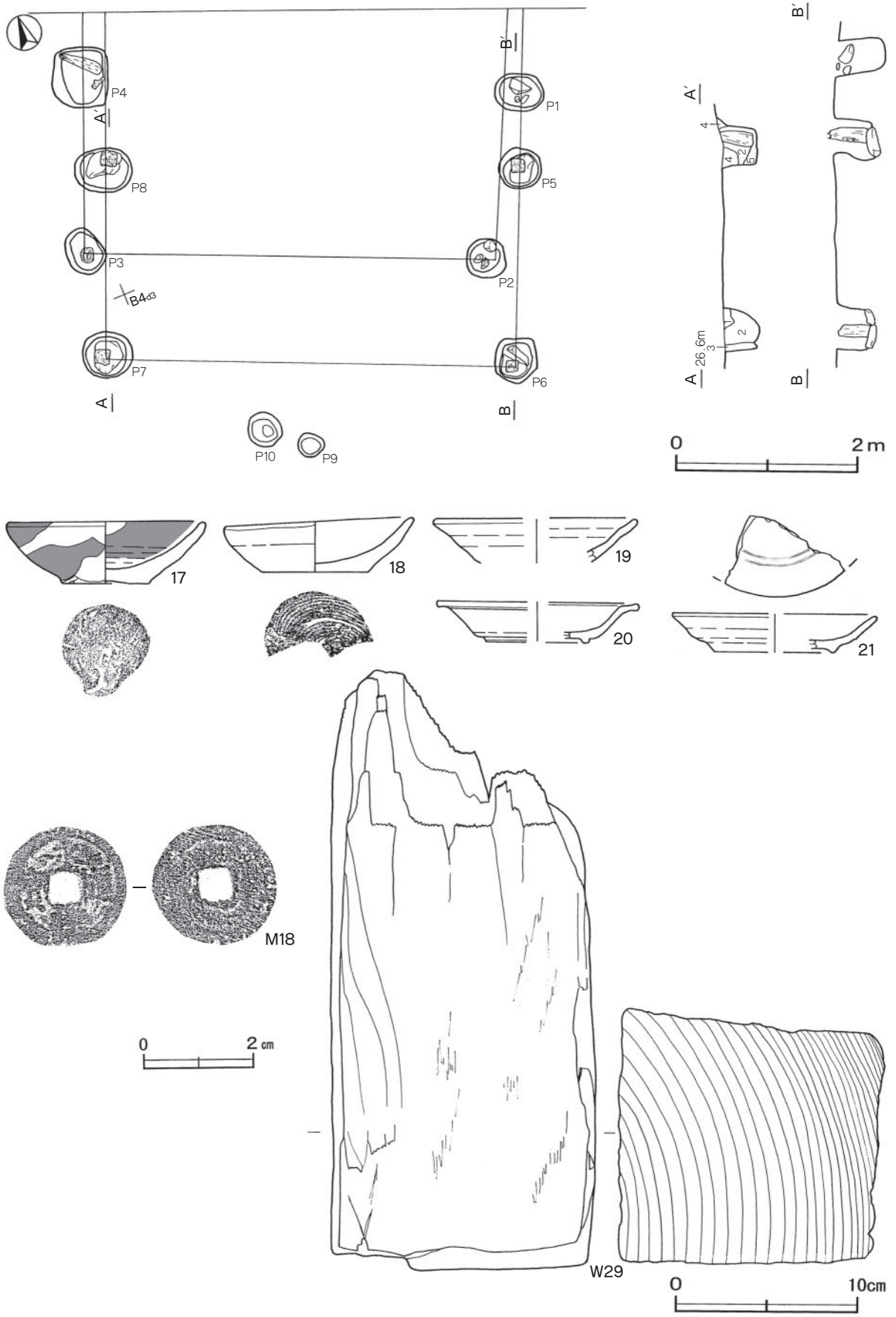
柱穴 いずれも円形で，深さは42～50cmである。Aの柱穴から径15cmほどの丸材，Bの柱穴から一辺が12～15cmの角材が確認されている。また，いずれの柱穴からも板状の根石が確認されている。

土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|----------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土質黒色土・黄色粘土粒子中量，砂粒少量 | 4 暗褐色 | 黄色粘土粒子多量，粘土質黒色土少量，砂粒微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土質黒色土中量，黄色粘土粒子・砂粒少量 | 5 オリーブ黒色 | 暗灰色粘土粒子多量，粘土質黒色土・砂粒微量 |
| 3 黒褐色 | 粘土質黒色土多量，砂粒少量，黄色粘土粒子微量 | | |

遺物出土状況 Aから土師質土器片2点（皿），柱材，Bから土師質土器片1点（皿），瀬戸・美濃系陶器片1点（皿），古銭1点，遺構確認面から土師質土器片1点（皿），瀬戸・美濃系陶器3点（皿）が出土している。17・18はBのP2，M18はP4，21はAのP5，W29はP7，19は遺構確認面から出土している。

所見 時期は，A・B共に桁行方向が宍戸城下図に記された区画の方向と一致していることから，17世紀前半と考えられる。柱穴の規模や構造が他の建物に比べて傑出しており，主屋の一部と考えられる。また，丸材から角材への転換が妥当と考えられることから，BからAへ建て替えられたと推定される。



第113図 第11A・B号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

第11A・B号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第113図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
17	土師質土器	皿	10.6	3.5	4.8	雲母・針状鉱物	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 油煙付着	P2内	60%
18	土師質土器	皿	10.3	3.0	5.6	雲母・針状鉱物	明赤褐	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	P2内	50%
19	土師質土器	皿	[10.8]	(2.3)	—	雲母・長石・石英	橙	普通	ロクロ成形	確認面	
20	陶器	折縁皿	[11.0]	2.2	[5.6]	精良 灰釉	白・灰黄	不良	削り出し高台	P1内	30%
21	陶器	鉄絵皿	[11.2]	2.0	[6.7]	長石 長石釉	灰白・灰白	良好	鉄絵による界線2条 貫入	P5内	20%

番号	種別	銭種	径	孔幅	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M18	古銭	永楽通寶	2.3	0.6	1.6	銅	1408	明銭 無背銭	北部下層	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	樹種	特徴	出土位置	備考
W29	木材	柱	(32.7)	14.5	13.9	アカマツ	芯をはずした削り出し 四角柱 底面は平坦	P7内	

第12A・B号掘立柱建物跡（第114・115図）

位置 調査区東部のB 3 b8区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 規模や構造を維持しつつ、同位置で建て替えが行われていることが確認されており、一方をA、もう一方をBとして記述する。北側部分が調査区域外に延びているため、桁行はAが5間、Bが4間、梁行はA・B共に1間が確認されただけであり、いずれも側柱式の構造をとっている。確認された規模は、Aの桁行が9.6m、Bの桁行が7.8m、梁行はA・B共に3.4mで、桁行方向はAがN-65°-W、BがN-63°-Wである。柱間寸法は、桁行がA・B共に中央部で1.8m、東部と西部で2.1mを基調とし、梁行は南から2.1m、1.5mとなっている。A・Bの新旧関係は、柱穴の重複が見られないため、不明である。

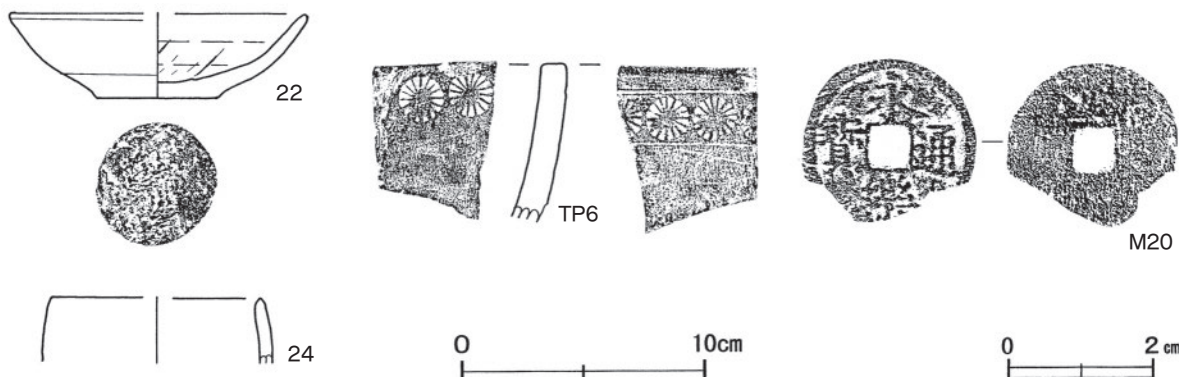
柱穴 いずれも円形で、深さは12~26cmである。

土層解説

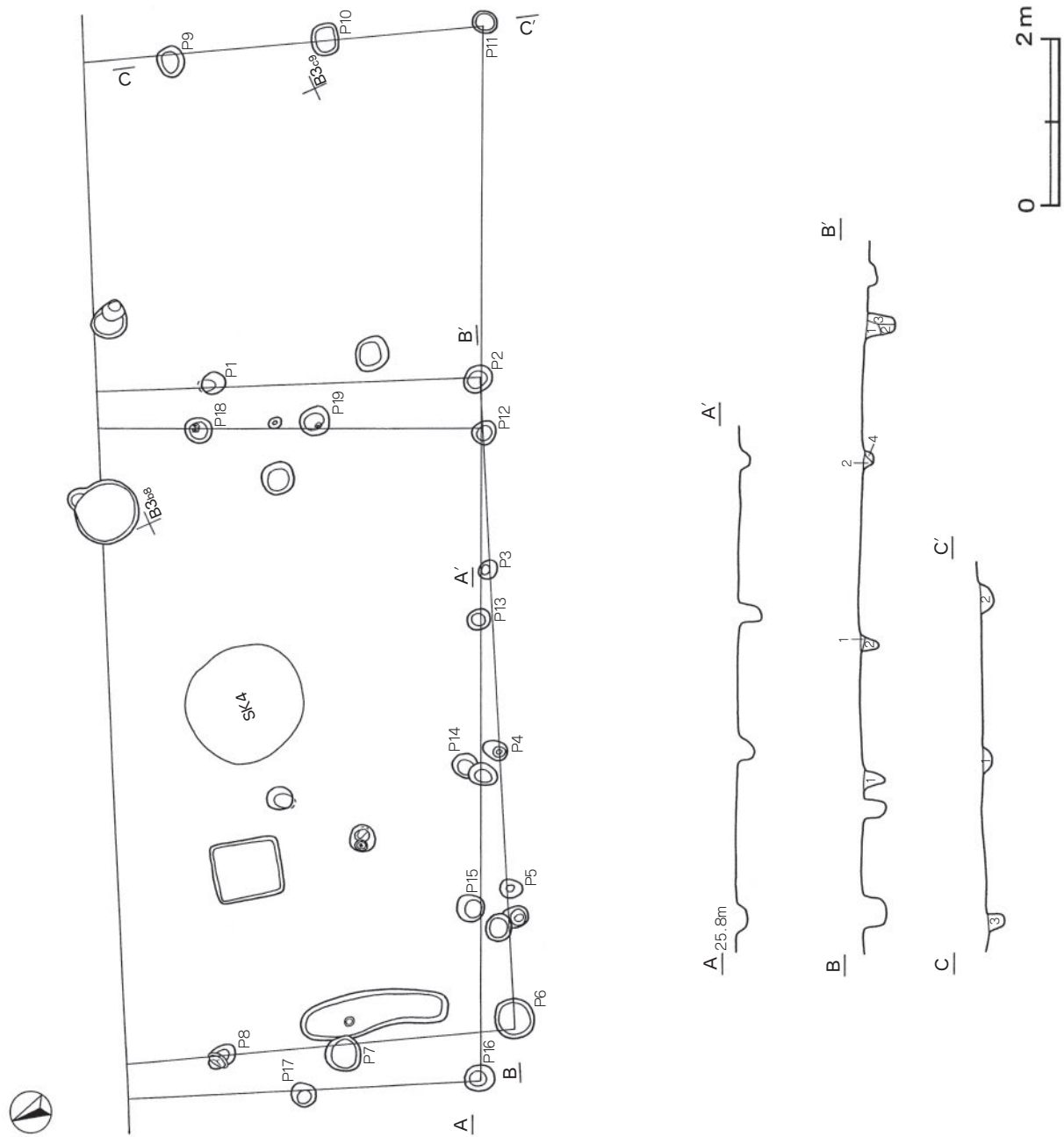
- | | | | |
|-------|--------------------------------|--------|------------------------------|
| 1 暗褐色 | 粘土質黒色土中量、白色粘土粒子少量、ロームブロック・砂粒微量 | 3 灰黄褐色 | 粘土質黒色土・白色粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量 |
| 2 黒褐色 | 粘土質黒色土中量、白色粘土粒子少量、砂粒微量 | 4 黒褐色 | 粘土質黒色土多量、白色粘土粒子・砂粒微量 |

遺物出土状況 Aから土師質土器片2点（皿）、磁器片1点（青花碗）、Bから土師質土器片1点（皿）、瀬戸・美濃系陶器片2点（碗）、遺構確認面から土師質土器片12点（皿1、鍋11）、瓦質土器片1点（火鉢）、瀬戸・美濃系陶器片3点（皿2、碗1）、古銭1（永楽通寶）が出土している。22はAのP1、24はBのP10、TP6はP2、M20は遺構確認面から出土している。

所見 時期は、A・B共に桁行方向が宍戸城下図に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられ、短期間で建て替えられたと推測される。



第114図 第12A・B号掘立柱建物跡出土遺物実測図



第115図 第12A・B号掘立柱建物跡実測図

第12A・B号掘立柱建物跡出土遺物観察表（第114図）

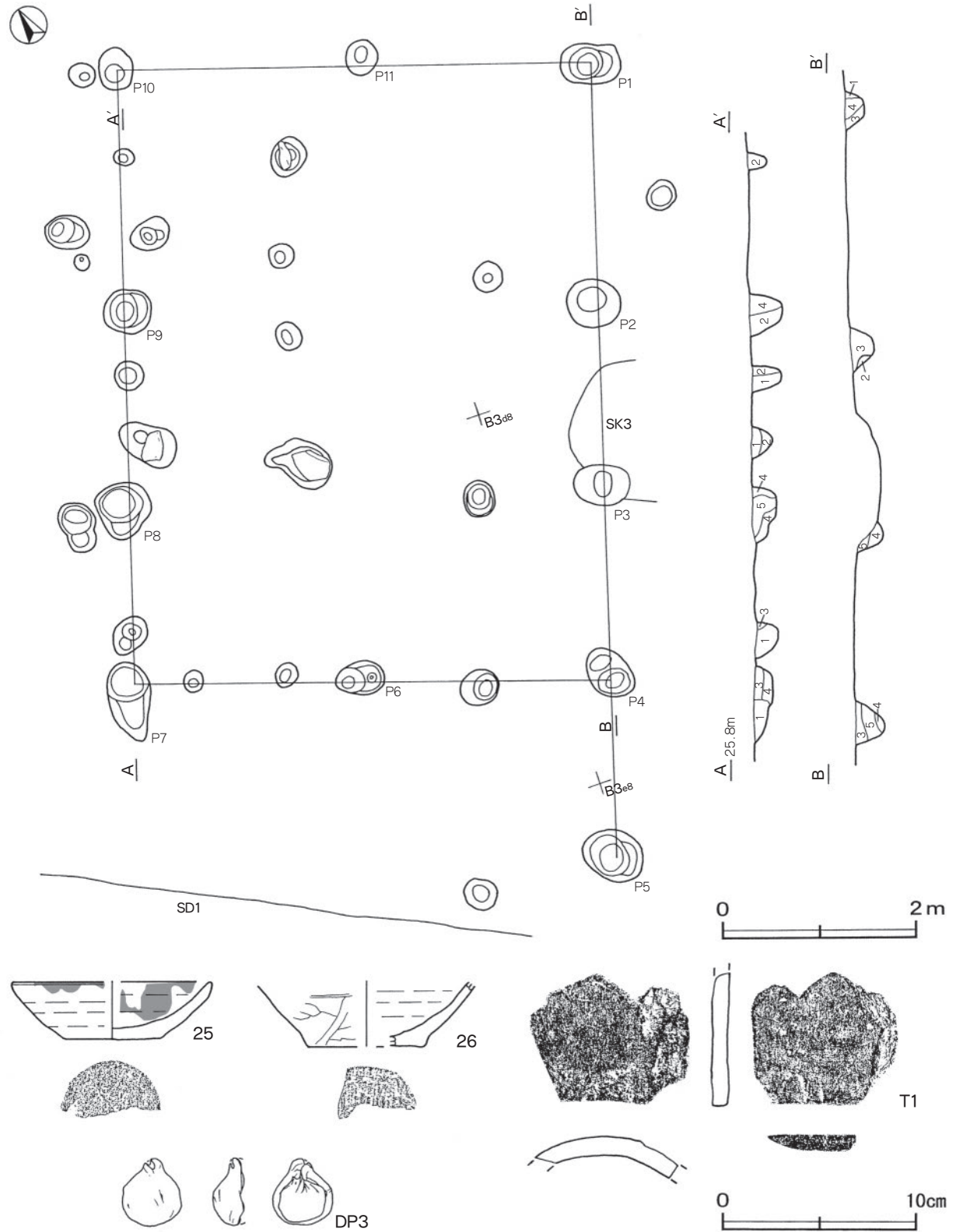
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
22	土師質土器	皿	[12.0]	3.5	5.0	雲母・赤色粒子	橙	普通	ロク口成形 底部回転糸切り	P1内	50%
24	陶器	碗	[8.6]	(2.7)	—	雲母	灰白・灰白	良好	貫入 志野茶碗	P10内	瀬戸・美濃

番号	種別	銭種	径	孔幅	重量	材質	初鑄年	特徴	出土位置	備考
M20	古銭	永楽通寶	2.5	0.6	1.5	銅	1408	明銭 無背銭	遺構確認面	

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
TP6	瓦質土器	火鉢	雲母・長石	黄灰	普通	内外面菊花文押捺	P15内	

第13号掘立柱建物跡（第116図）

位置 調査区東部のB 3 d7区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。第10号掘立柱建物跡の東側に隣接している。



第116図 第13号掘立柱建物跡・出土遺物実測図

重複関係 南部が第1号溝に掘り込まれている。

規模と形状 南部が第1号溝に掘り込まれているために、梁行は2間で、桁行は4間が確認されている。側柱建物で、確認された規模は桁行7.8m、梁行4.8mである。桁行方向はN-17°-Eで、柱間寸法は桁行2.0m、梁行2.4mを基調とし、桁行北部の1間は2.4mと広がっている。また、建物内部から、規模の小さな柱穴が桁行方向と同一方向に列をなして2条確認されており、東柱又は建て替えに伴う別の建物が存在していた可能性が考えられる。

柱穴 いずれも円形で、深さは28～45cmである。

土層解説

1	黒褐色	粘土質黒色土中量, 黄色粘土粒子・砂粒少量	4	暗褐色	黄色粘土粒子中量, 粘土質黒色土・砂粒少量
2	黒褐色	粘土質黒色土・砂粒中量, 黄色粘土粒子少量	5	にぶい黄褐色	黄色粘土粒子多量, 粘土質黒色土・砂粒微量
3	暗褐色	黄色粘土粒子中量, 粘土質黒色土少量, 砂粒微量			

遺物出土状況 土師質土器片7点(皿), 土製品1点(鈴), 瓦片1点が出土している。25はP1, 26はP7から出土している。

所見 時期は、桁行方向が宍戸城下図に記された区画と一致しておらず、武家屋敷群が整備される以前の16世紀と考えられる。桁行方向が隣接する第10号掘立柱建物跡と直交し、建物同士の間隔が柱間寸法と同じ1.8mになっていることから、同時期に存在したことも考えられ、その想定に従えば、分棟型の建物と考えられる。

第13号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第116図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
25	土師質土器	皿	[10.2]	2.9	5.0	雲母・針状鉱物	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 油煙付着	P1内	45%
26	土師質土器	皿	—	(3.3)	[6.0]	雲母・長石・石英	橙	普通	ロクロ成形 底部板目状圧痕	P7内	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	胎土	特徴	出土位置	備考
DP3	土製品	鈴	3.5	3.1	—	長石・石英	ナデにぶい黄橙色 上端に孔	確認面	50%
T1	瓦	丸瓦	(6.8)	(7.9)	0.9	長石・石英	黒褐色 燻し	P7内	

第14号掘立柱建物跡(第111図)

位置 調査区東部のB 3 b6区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

重複関係 第10号掘立柱建物跡に掘り込まれている。

規模と形状 桁行3間、梁行2間の側柱建物である。桁行6.8m、梁行4.2mで、桁行方向はN-74°-Wである。柱間寸法は桁行・梁行共に2.1mを基調とし、桁行の中央部が2.4mと広がっている。

柱穴 いずれも円形で、深さは45～66cmである。

所見 時期は、桁行方向が宍戸城下図に記された区画と一致していないことから、武家屋敷が整備される以前の16世紀と考えられる。桁行方向が重複する第10号掘立柱建物と同一であり、本建物から第10号掘立柱建物へ建て替えられたことが想定される。

第15号掘立柱建物跡(第105図)

位置 調査区東部のB 4 i9区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

重複関係 第6号掘立柱建物跡と重複しているが、柱穴同士の重なりがないため、新旧関係は不明である。

規模と形状 桁行2間、梁行1間の側柱建物で、北側に庇が付設されている。桁行は3.6m、梁行は3.0mで、桁行方向はN-23°-Eである。桁行の柱間寸法は1.8mで、身舎と庇の間隔は、0.3mである。

柱穴 いずれも円形で、深さは22～28cmである。

所見 時期は、桁行方向が宍戸城下図に記された区画と一致していることから、17世紀前半と考えられる。門跡を除くと、最も小形の建物で、納屋などの施設と想定される。

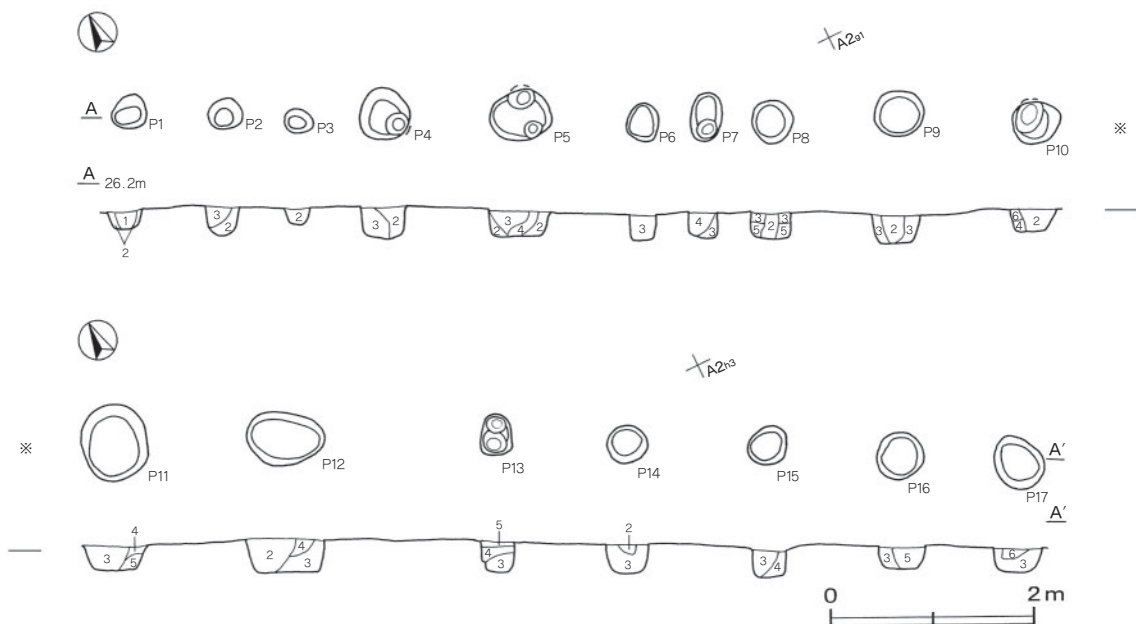
表14 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数			規 模		桁行柱間 (m)	梁行柱間 (m)	柱 穴 (cm)				出土遺物	備 考 (調査番号)
			桁 × 梁(間)	桁 × 梁(m)	面積(m ²)	構造	柱穴数			平面形	深さ				
1	A 2 f3	N - 65° - W	3 × (1)	6.8 × (1.8)	(12.2)	2.7, 2.0	1.8	側柱	10	円形	26 ~ 40	土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 土鈴, 鍬先, モモ	SB1		
2	A 2 g2	N - 64° - W	1 × 1	1.8 × 1.2	2.2	1.8	1.2	側柱	5	円形	20 ~ 38	—	SB2		
3	B 4 f2	N - 66° - W	1 × 1	2.4 × 1.5	3.6	2.4	1.5	側柱	4	円形・楕円形	50 ~ 52	礫	SB3		
4	B 3 c5	N - 65° - W	6 × 2	12.0 × 3.6	43.2	1.9, 2.4	1.8	側柱	19	円形	10 ~ 22	土師質土器, 陶器	本跡 → SA3		
5	A 3 i3	N - 65° - W	3 × (1)	4.8 × (2.1)	10.1	1.8, 0.9	2.0	側柱・庇	19	円形	25 ~ 38	土師質土器	SB5		
6	B 4 i0	N - 22° - E	4 × (2)	7.5 × 6.0	45.0	1.8, 2.1	1.9	側柱・庇	25	円形	15 ~ 30	土師質土器, 瓦質土器, モモ, シイ	旧 SB6		
7	B 4 g0	N - 65° - W	1 × (1)	5.7 × (1.8)	(10.3)	5.7	1.8	側柱	9	円形	42 ~ 55	根石	旧 SB6		
8	B 4 e7	N - 25° - E	(1) × 3	— × 5.4	—	—	2.0	—	8	円形	38 ~ 58	瓦質土器	SB8		
9	B 5 j2	N - 26° - W	3 × 2	6.0 × 3.6	21.6	2.0	1.8	総柱	34	円形	30 ~ 45	土師質土器, 陶器, モモ	SB9		
10	B 3 b5	N - 75° - E	5 × 3	10.3 × 5.0	51.5	2.0, 2.4	2.0	側柱・庇	78	円形	25 ~ 42	土師質土器	SB10		
11A	B 4 c3	N - 65° - W	(1) × (1)	(4.5) × (2.1)	(9.5)	4.5	2.1	側柱	5	円形	42 ~ 50	土師質土器	旧 SB11		
11B	B 4 c3	N - 65° - W	(1) × (1)	(4.5) × (2.0)	(9.0)	4.5	2.0	側柱	5	円形	42 ~ 50	土師質土器, 陶器	旧 SB11		
12A	B 3 b8	N - 65° - W	5 × (1)	9.6 × (3.4)	(26.5)	1.8, 2.1	2.1, 1.5	側柱	12	円形	12 ~ 26	土師質土器	旧 SB12		
12B	B 3 b8	N - 63° - W	4 × (1)	7.8 × (3.4)	(26.5)	1.8, 2.1	2.1, 1.5	側柱	8	円形	12 ~ 26	土師質土器, 瓦質土器, 陶磁器, 古銭	旧 SB12		
13	B 3 d7	N - 17° - E	(4) × 2	(7.8) × 4.8	(37.4)	2.4, 2.0	2.4	側柱	31	円形	28 ~ 45	土師質土器	本跡 → SD1		
14	B 3 b6	N - 74° - W	3 × 2	6.8 × 4.2	28.6	2.1, 2.4	2.1	側柱	9	円形	45 ~ 66	—	旧 SB10		
15	B 4 i9	N - 23° - E	2 × 1	3.6 × 3.0	10.8	1.8	3.0	側柱・庇	8	円形	22 ~ 28	—	旧 SB6		

2 堀跡

第1号堀跡 (第117・118図)

位置 調査区西部の A 1 f9 ~ A 2 h3区で、標高26.0mの低地の平坦部に位置している。



第117図 第1号堀跡実測図

規模と形状 A 2 h3区から北西方向 (N-65°-W) に直線的に伸び、長さ19mが確認されている。柱間寸法は、1.35mを基調とし、P12とP13の間は2.1mと広がっている。また、P1・P3・P7は同じ列上に不規則に配されており、建て替え又は補修が行われたものと考えられる。

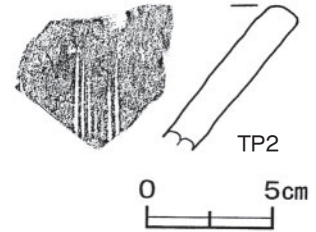
柱穴 円形で、深さは20~32cmである。

土層解説

1 灰 色	砂粒多量, 細礫少量	4 黄 灰 色	粘土質黒色土中量, 砂粒少量
2 オリーブ黒色	粘土質黒色土・細礫・砂粒少量	5 暗 灰 黄 色	粘土質黒色土中量, 砂粒少量
3 黒 褐 色	粘土質黒色土中量, 砂粒少量, 細礫微量	6 オリーブ黒色	粘土質黒色土・砂粒中量

遺物出土状況 瓦質土器片1点(播鉢)が出土している。

所見 時期は、位置が宍戸城下図に記された屋敷境と一致することから、17世紀前半と考えられ、屋敷の南側を区画した堀跡と想定される。第1~4号堀跡はいずれも現在の地割と一致しており、当時の区画が現在まで利用されている状況がうかがえる。



第118図 第1号堀跡出土遺物実測図

第1号堀跡出土遺物観察表 (第118図)

番号	種 別	器種	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴	出土位置	備 考
TP2	瓦質土器	播鉢	雲母・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	7条1単位の播り目	P11内	

第2号堀跡 (第119図)

位置 調査東部のB 3 a1~A 3 j2区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 B 3 a1区から北東方向 (N-25°-E) に直線的に伸び、長さ8.2mが確認されている。柱間寸法は1.5mを基調としており、北端部のP5・P6間は1.8mと広がっている。

柱穴 円形で、深さは15~32cmである。

土層解説

1 黒 褐 色	粘土質黒色土多量, 砂粒少量, 白色粘土粒子微量	3 黒 褐 色	粘土質黒色土中量, 白色粘土粒子少量
2 暗 褐 色	粘土質黒色土多量, 砂粒微量	4 灰 黄 褐 色	粘土質黒色土多量, 白色粘土粒子・砂粒微量

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)が出土している。

所見 時期は、位置が宍戸城下図に記された屋敷境と一致することから、17世紀前半と考えられ、屋敷を区画した堀跡と想定される。

第3号堀跡 (第120図)

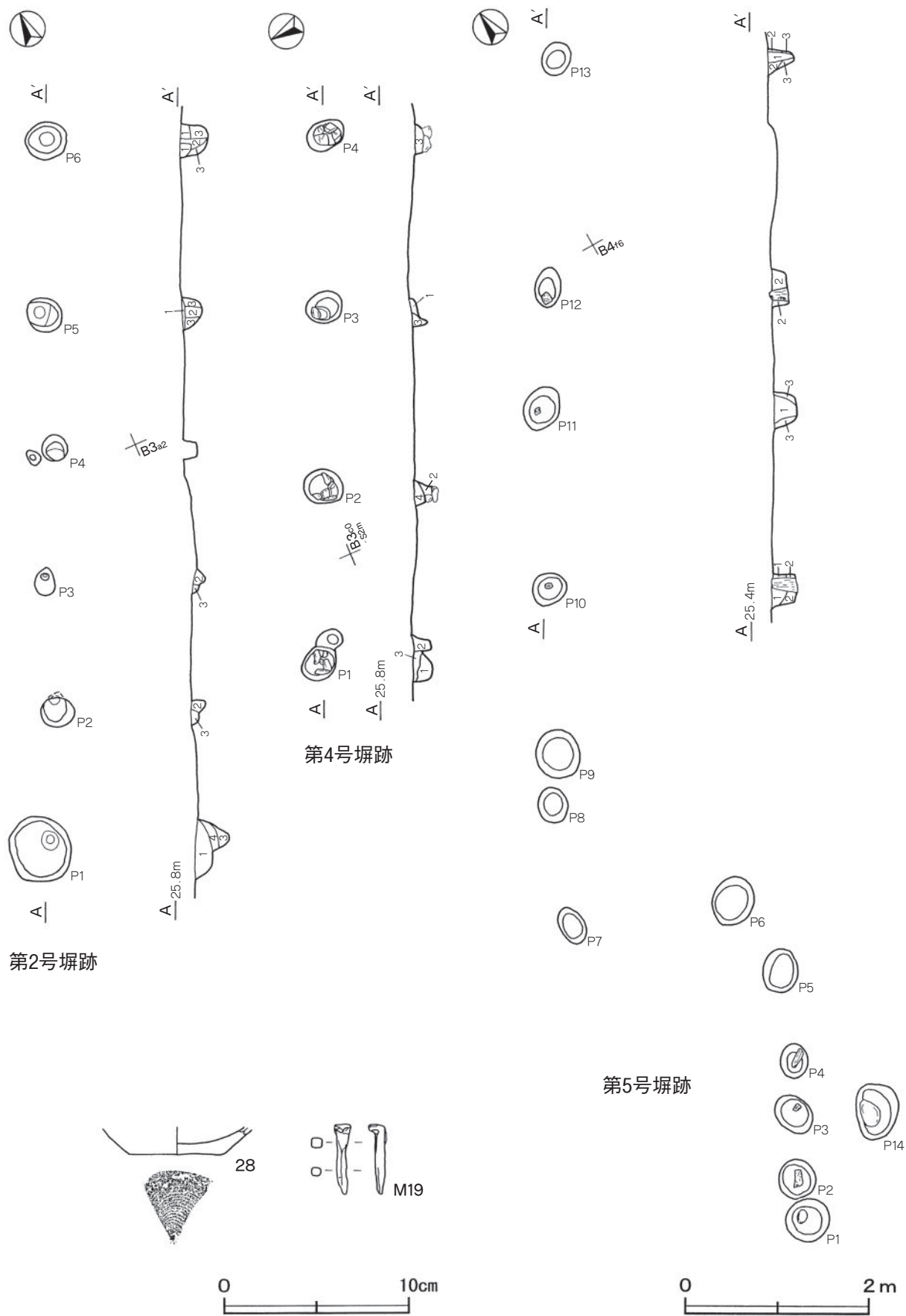
位置 調査区東部のB 3 b1~B 4 j8区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 B 3 f9区から北西方向 (N-65°-W) に直線的に伸び、長さ77mが確認されている。B 3 b2区から幅6m、B 4 g2区とB 4 h3区から幅4mほどの空白部分が確認されており、この部分に屋敷内への出入り口施設が存在していたことが推測される。柱間寸法は不規則であるが、B 4 g2~B 4 g3区から1.35mの間隔で並ぶ部分が認められており、4.5尺を基準尺に用いて、複数回の建て替えが行われたことが考えられる。

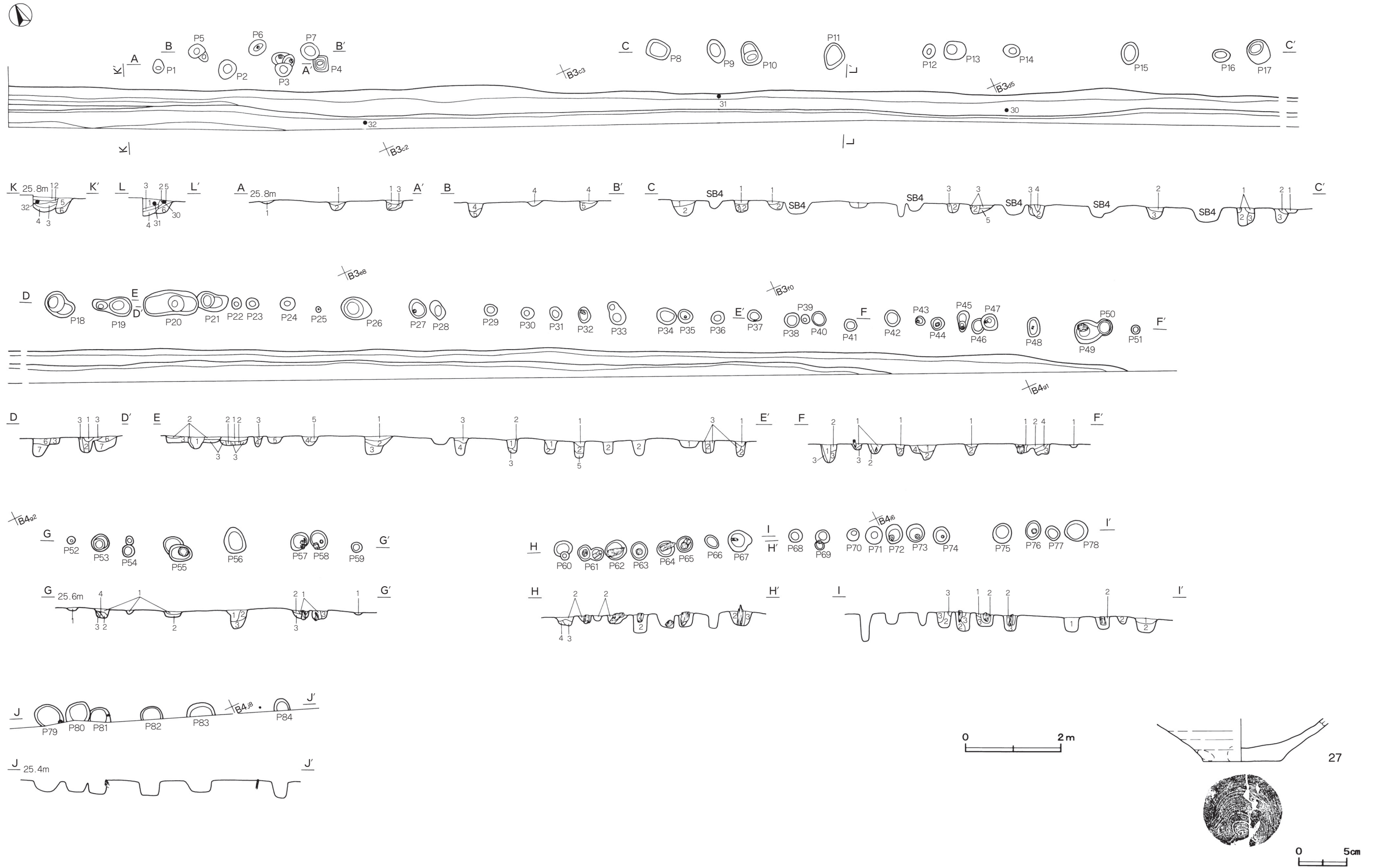
柱穴 いずれも円形である。深さは20~36cmを基本とし、深さ10cmほどの柱穴が不規則に混在している。

土層解説

1 黒 褐 色	粘土質黒色土多量, 砂粒少量, 黄色粘土粒子微量	5 にぶい黄褐色	黄色粘土粒子中量, 粘土質黒色土少量
2 黒 褐 色	粘土質黒色土多量, 黄色粘土粒子・砂粒少量	6 暗 褐 色	粘土質黒色土・黄色粘土粒子少量, 砂粒微量
3 暗 褐 色	粘土質黒色土中量, 黄色粘土粒子少量, 砂粒微量	7 暗 褐 色	黄色粘土粒子少量, 粘土質黒色土・砂粒微量
4 灰 黄 褐 色	黄色粘土粒子多量, 粘土質黒色土少量		



第119图 第2·4·5号掘迹·第4·5号掘迹出土遗物实测图



第120図 第3号堀跡・第1号溝跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片2点(挿鉢)、炭化種子2点(桃)が出土している。27はP7から出土している。
所見 時期は、宍戸城下図に記された屋敷境と一致することから、17世紀前半と考えられ、屋敷の南側を区画した塀跡と想定される。

第3号塀跡出土遺物観察表(第120図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徵	出土位置	備考
27	土師質土器	鉢	—	(4.5)	8.0	雲母・針状鉱物	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	P7内	

第4号塀跡(第119図)

位置 調査東部のB3c9～B4c1区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。
規模と形状 B4c1区から北西方向(N-65°-W)に直線的に伸び、長さ5.7mが確認されている。柱間寸法は1.8mを基調としている。
柱穴 円形で、深さは18～25cmである。各柱穴には、径10cmほどの細礫が充填されている。

土層解説

1 暗褐色	粘土質黒色土中量、白色粘土粒子少量、ロームブロック・砂粒微量	3 黒褐色	粘土質黒色土中量、焼土ブロック・炭化物・白色粘土粒子・砂粒微量
2 灰黄褐色	粘土質黒色土・白色粘土粒子・砂粒少量、ロームブロック微量	4 褐色	焼土ブロック・白色粘土粒子少量、炭化物・砂粒微量

遺物出土状況 鉄釘1点がP4内から出土している。
所見 時期は、宍戸城下図に記された屋敷境と一致することから、17世紀前半と考えられ、屋敷地内の空間を仕切った内塀と想定される。

第4号塀跡出土遺物観察表(第119図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
M19	釘	(3.7)	1.0	0.9	(2.5)	鉄	断面方形 頭部は叩き出しによる頭巻釘	P4内	

第5号塀跡(第119図)

位置 調査東部のB4h5～B4e6区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。
規模と形状 B4h5区から北東方向(N-25°-E)に直線的に伸び、B4g5区で北西方向にクランク状に屈曲し、再びB4e6区まで北東方向に伸びており、長さ15mが確認されている。柱間寸法は1.2mと1.8mが不規則に混在しており、異なる間尺を用いて建て替えが行われたことが想定される。
柱穴 円形で、深さは15～27cmである。

土層解説

1 暗褐色	粘土質黒色土・黄色粘土粒子中量、砂粒少量	3 にぶい黄褐色	黄色粘土粒子多量、粘土質黒色土微量
2 黒褐色	粘土質黒色土多量、黄色粘土粒子・砂粒微量		

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿)が出土している。28はP5から出土している。
所見 時期は、宍戸城下図に記された区画と方向が一致することから、17世紀前半と考えられ、屋敷境の塀又は屋敷内の内塀と考えられる。

第5号塀跡出土遺物観察表(第119図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徵	出土位置	備考
28	土師質土器	皿	—	(1.5)	[5.0]	雲母・針状鉱物	明褐	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	P5内	

表15 堀跡一覧表

番号	位置	走行方向	長さ(m)	柱間寸法(m)	柱 穴			出土遺物	備考 (調査番号)
					柱穴数	平面形	深さ		
1	A 1 f9 ~ A 2 h3	N - 65° - W	(19.0)	1.35	17	円形	20 ~ 32	瓦質土器	SA1
2	B 3 a1 ~ A 3 j2	N - 25° - E	(8.2)	1.5, 1.8	6	円形	15 ~ 32	土師質土器	SA2
3	B 3 b1 ~ B 4 j8	N - 65° - W	(77.0)	(1.35)	84	円形	20 ~ 36	土師質土器, モモ	旧 SA3 ~ 6
4	B 3 c9 ~ B 4 c1	N - 65° - W	(5.7)	1.8	4	円形	18 ~ 25	礫	旧 SB12
5	B 4 h5 ~ B 4 e6	N - 25° - E	15.0	1.2, 1.8	14	円形	15 ~ 27	土師質土器	旧 SB8

3 溝跡

第1号溝跡 (第120・121図)

位置 調査区東部のB 2 b0~B 4 g1区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 B 4 g1区から北西方向(N - 65° - W)に直線的に伸び、長さ49mが確認されている。上幅0.6m, 下幅0.3m, 深さ30cmで、断面はU字状を呈している。埋没がかなり進行した段階で、位置を南に若干ずらして掘り直しが行われている。

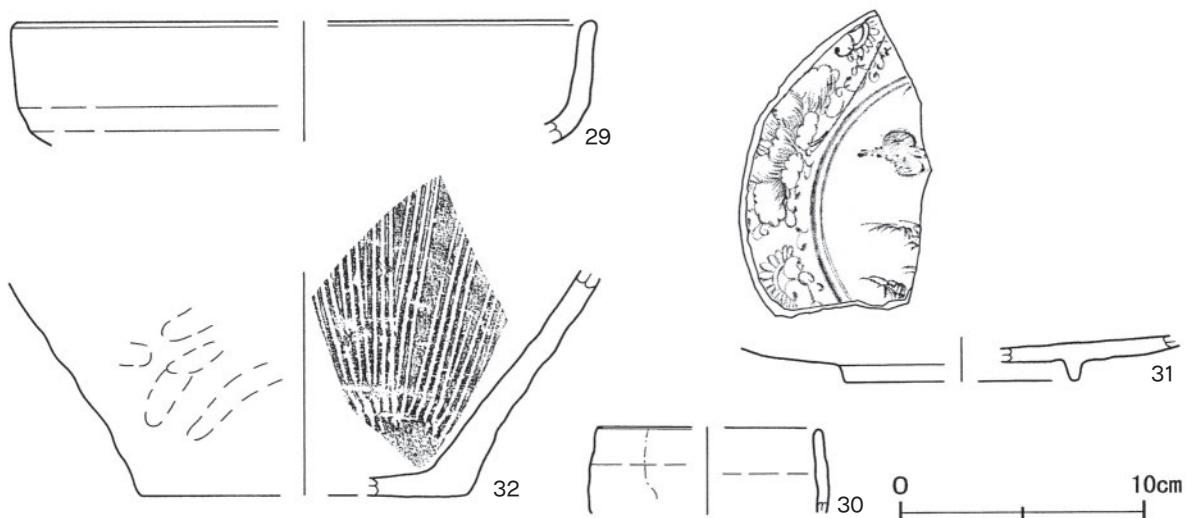
覆土 6層からなる。レンズ状に堆積した自然堆積である。第1~4層が新たに掘り直された後の覆土で、第5・6層がそれ以前の覆土である。

土層解説

- | | | | |
|--------|------------------------|-------|------------------------|
| 1 灰黄褐色 | 粘土質黒色土中量, 砂粒少量, 炭化粒子微量 | 4 黒褐色 | 粘土質黒色土中量, 砂粒少量, 炭化粒子微量 |
| 2 暗褐色 | 粘土質黒色土中量, 砂粒少量 | 5 暗褐色 | 粘土質黒色土中量, 砂粒少量, 炭化粒子微量 |
| 3 黒褐色 | 粘土質黒色土中量, 砂粒微量 | 6 暗褐色 | 粘土質黒色土中量, 黄色粘土粒子・砂粒少量 |

遺物出土状況 土師質土器片7点(皿5, 播鉢2), 瓦質土器片8点(播鉢6, 火鉢2), 瓦片4点, 瀬戸・美濃系陶器片12点(皿8, 碗3, 播鉢1), 唐津系陶器片1点(碗), 丹波系陶器片1点(播鉢), 肥前系磁器片1点(染付大皿)が全域に散在して出土している。30~32は西部の覆土上層から出土している。

所見 時期は、出土陶磁器から17世紀前半と考えられる。位置が穴戸城下図に記された道路跡と一致することや第3号堀跡の南側を並走していることなどから、道路に付設された側溝跡と想定される。本跡の南側は現在も道路として利用されており、当時の区画が現在まで利用されていることがうかがえる。



第121図 第1号溝跡出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表（第121図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
29	陶器	大鉢	[23.6]	(5.0)	—	長石 長石釉	浅黄・灰白	良好	ロクロ成形無文志野	中央部中層	瀬戸・美濃
30	陶器	筒形碗	[9.2]	(3.5)	—	精良 長石釉・鉄釉	褐灰・黒褐	良好	外面釉掛け分け	西部上層	瀬戸・美濃
31	磁器	皿	—	(1.8)	[9.6]	精良 透明釉	灰白・青	良好	鳥草花文 牡丹唐草 高台に砂目付着	西部上層	20% PL16
32	陶器	播鉢	—	(9.1)	[13.4]	長石 無釉	にぶい橙	良好	播り目4条1単位 内底面播り目無し	西部上層	信楽か

第2号溝跡（第98・122図）

位置 調査区西部のA 2 h9～A 2 j8区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 A 2 j8区から北東方向（N-25°-E）に直線的に伸び、長さ12mが確認されている。規模は上幅2.2m、下幅0.8m、深さ60cmである。底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。

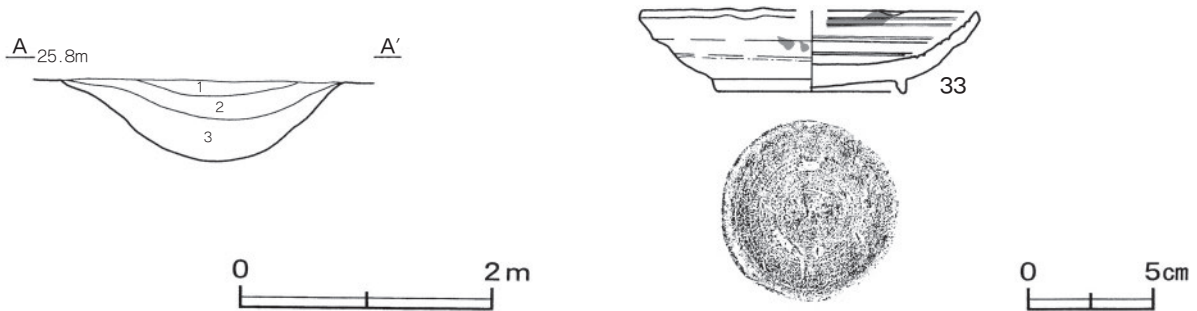
覆土 3層からなる。レンズ状に堆積した自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 粘土質黒色土中量、砂粒少量、炭化粒子微量
- 2 黒褐色 粘土質黒色土多量、砂粒少量、礫微量
- 3 オリーブ黒色 粘土質黒色土多量、砂粒少量

遺物出土状況 土師質土器片3点（皿）、瓦質土器片2点（火鉢）、瀬戸・美濃系陶器片3点（皿）、常滑系陶器片1点（大甕）が全域に散在して出土している。33は南部の覆土中から出土している。

所見 時期は、宍戸城下図に記された屋敷境と一致することから、17世紀前半と考えられ、屋敷の区画溝として機能していたと考えられる。



第122図 第2号溝跡・出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表（第122図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
33	陶器	輪花皿	[13.2]	3.3	7.5	精良 長石釉	淡黄・灰白	良好	2条1単位の圈線を3段に配置 油煙付着	覆土中	瀬戸・美濃 PL14

第3号溝跡（第98・123図）

位置 調査区東部のB 4 f4～B 4 d5区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

重複関係 南端部が第2号池跡と連結しており、土層断面からは明確な新旧関係が確認されていないことから、同時期に機能していた可能性が考えられる。

規模と形状 B 4 f4区から北東方向（N-25°-E）に直線的に伸び、長さ8.2mが確認されている。規模は上幅0.7～1.4m、下幅0.5～1.1mで、南部ほど広がっており、深さは40cmである。底面はほぼ平坦で、壁は急な傾斜で立ち上がっている。

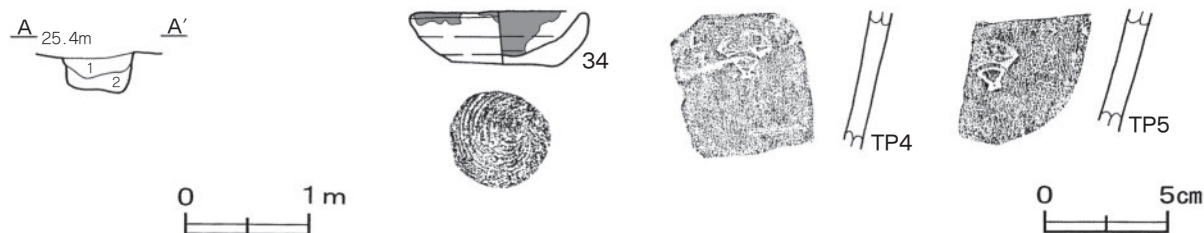
覆土 2層からなる。粘土ブロックを含んだ人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 粘土質黒色土多量, 黄色粘土ブロック・焼土粒子・砂粒少量, 炭化粒子微量
 2 黒褐色 粘土質黒色土中量, 黄色粘土ブロック・砂粒少量, 焼土粒子・炭化粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片7点(皿), 瓦質土器片4点(火鉢2, 播鉢2), 瀬戸・美濃系陶器片3点(皿)が出土している。34は北部の覆土中から出土している。

所見 時期は, 走行方向が宍戸城下図に記された区画の方向と一致していることから, 17世紀前半と考えられる。土層観察から流水の痕跡は確認されていないが, 南部ほど広がる形状から見て, 池に導水した施設の可能性が考えられる。



第123図 第3号溝跡・出土遺物実測図

第3号溝跡出土遺物観察表 (第123図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
34	土師質土器	皿	6.8	2.2	4.2	長石・針状鉱物	赤褐	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 油煙付着	北部覆土中	100%
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考			
TP4	瓦質土器	火鉢	長石・石英	灰	普通	扇文押捺	覆土中				
TP5	瓦質土器	火鉢	長石・石英	灰	普通	扇文押捺	覆土中				

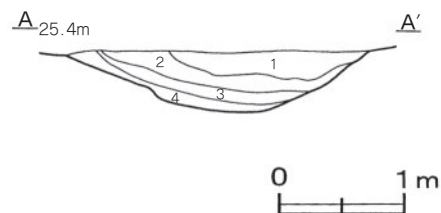
第4号溝跡 (第98・124図)

位置 調査区東部のB 4 i5~B 4 e7区で, 標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

重複関係 第8号掘立柱建物と第3号堀に掘り込まれている。

規模と形状 北部が調査区域外に伸びているため, 長さ17mが確認されただけである。B 4 i5区から北東方向(N-25°-E)に直線的に伸び, 規模は上幅2.4m, 下幅1.0m, 深さ50cmほどで, 断面はU字状を呈している。

覆土 4層からなる。各層とも粘土ブロックを含んだ人為堆積である。



土層解説

- 1 黒褐色 粘土質黒色土多量, 黄色粘土ブロック・砂粒少量, 炭化物微量
 2 暗褐色 黄色粘土ブロック中量, 粘土質黒色土少量
 3 暗褐色 黄色粘土ブロック・粘土質黒色土中量
 4 黒色 粘土質黒色土多量, 黄色粘土ブロック・砂粒少量

遺物出土状況 土師質土器片3点(皿)が出土している。

第124図 第4号溝跡実測図

所見 時期は, 宍戸城下図に見られる区割りとは走行方向が一致していることから, 17世紀前葉と考えられる。重複関係や土層観察から, 武家屋敷が整備された初期の段階で, 区画溝として機能した後, 屋敷地の変更や建て替えに伴って埋め戻されたものと推測される。

第5号溝跡 (第98・125図)

位置 調査区東部のA 2 j0~A 3 i1区で, 標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 北部が調査区域外に伸びているため、長さ7mが確認されただけである。A 2 j0区から北東方向(N-25°-E)に直線的に伸び、規模は上幅0.7m, 下幅0.5m, 深さ20cmで、断面はU字状を呈している。

覆土 3層からなる。各層とも焼土ブロックを含んでおり、人為堆積と考えられる。

土層解説

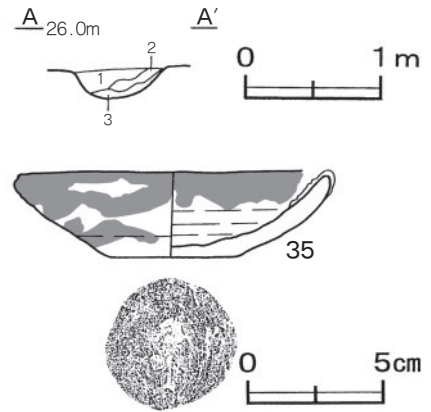
- 1 黒褐色 粘土質黒色土多量, 砂粒少量, 焼土ブロック・炭化物・細礫微量
- 2 黒褐色 粘土質黒色土中量, 砂粒少量, 焼土ブロック・細礫微量
- 3 灰黄褐色 砂粒中量, 粘土質黒色土少量, 焼土ブロック・細礫微量

遺物出土状況 土師質土器片3点(皿)が出土している。35は北部の覆土中層から出土している。

所見 時期は、位置が宍戸城下図に見られる屋敷の境界部分に当たることから、17世紀前半と考えられ、屋敷の区画溝として機能していたと考えられる。

第5号溝跡出土遺物観察表(第125図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
35	土師質土器	皿	11.3	3.2	4.9	長石・針状鉱物	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 油煙付着	覆土中	100% PL14



第125図 第5号溝跡・出土遺物実測図

表16 溝跡一覧表

番号	位置	方向	形状	規模				断面形	覆土	主な出土遺物	備考 (調査番号)
				長さ(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)				
1	B 2 b0 ~ B 4 g1	N - 65° - W	直線状	(49.0)	0.6	0.3	30	U字状	自然	土師質土器, 瓦質土器, 瓦, 陶磁器	SD1
2	A 2 h9 ~ A 2 j8	N - 25° - E	直線状	(12.0)	2.2	0.8	60	台形状	自然	土師質土器, 瓦質土器, 陶器	SD2
3	B 4 f4 ~ B 4 d5	N - 25° - E	直線状	(8.2)	0.7~1.4	0.5~1.1	40	台形状	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶器	SD3
4	B 4 i5 ~ B 4 e7	N - 25° - E	直線状	(17.0)	2.4	1.0	50	U字状	人為	土師質土器	SD4
5	A 2 j0 ~ A 3 i1	N - 25° - E	直線状	(7.0)	0.7	0.5	20	U字状	人為	土師質土器	SD5

4 井戸跡

第1号井戸跡(第126図)

位置 調査区東部のB 3 a1区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

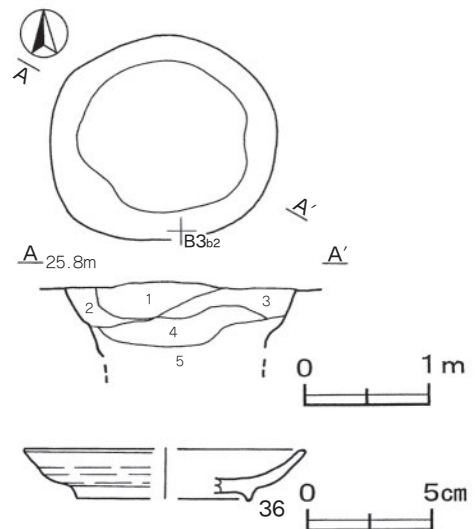
規模と形状 径1.8mの円形である。深さ40cmまで掘り下げたが、湧水のため、以下は不明である。壁は、外傾している。

覆土 5層に分層される。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

土層解説

- 1 ぶい赤褐色 粘土質黒色土中量, 細礫少量, 炭化粒子・砂粒微量
- 2 灰黄褐色 粘土質黒色土多量, 白色粘土粒子少量
- 3 灰黄褐色 粘土質黒色土中量, 炭化粒子・砂粒少量
- 4 暗褐色 粘土質黒色土中量, 白色粘土粒子・砂粒少量
- 5 黒褐色 砂粒中量, 粘土質黒色土・白色粘土粒子・細礫少量

遺物出土状況 瀬戸・美濃系陶器片1点(皿)が出土している。36は覆土中から出土している。



第126図 第1号井戸跡・出土遺物実測図

所見 時期は、出土陶器から17世紀前半と考えられ、遺構の配置から、屋敷地に伴った井戸跡と推測される。

第1号井戸跡出土遺物観察表（第126図）

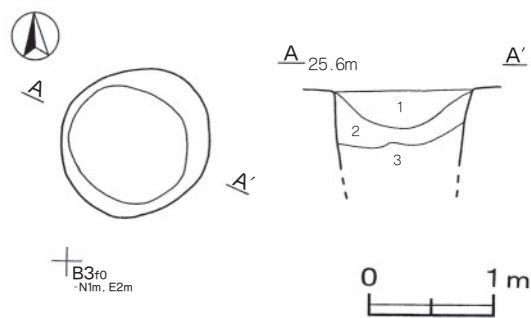
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
36	陶器	丸皿	[11.4]	2.0	[7.0]	精良灰釉	淡緑・灰白	良好	削り出し高台 全面施釉	覆土中	

第2号井戸跡（第127・128図）

位置 調査区東部のB 3 e0区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 径1.2mの円形である。深さ70cmまで掘り下げたが、湧水のため、以下は不明である。壁は、ほぼ直立している。

覆土 3層に分層される。各層とも細礫を含んだ不自然な堆積状況から、人為堆積と考えられる。



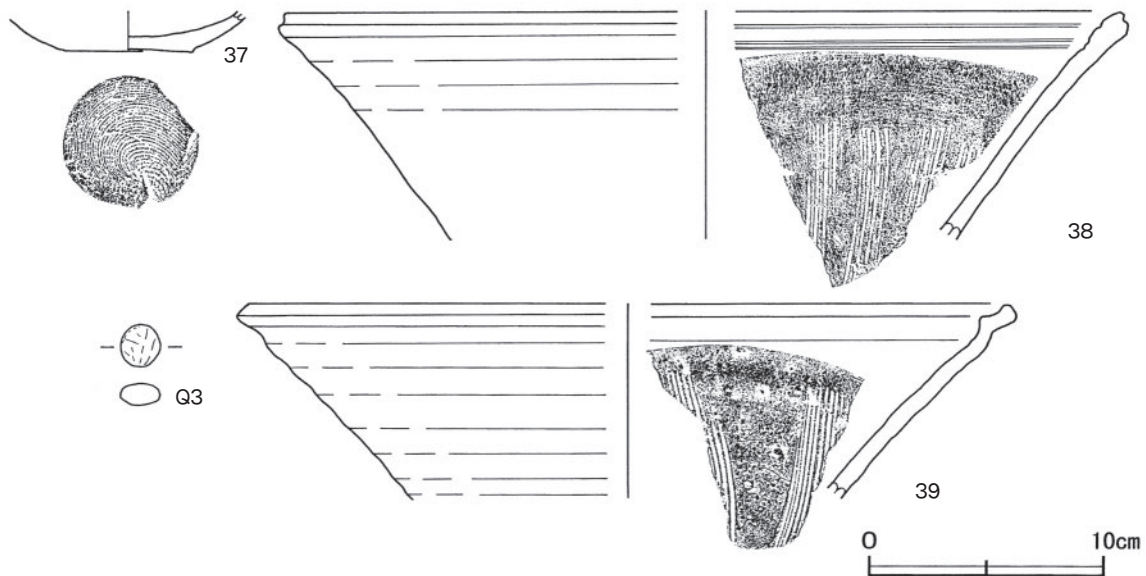
土層解説

- 1 暗灰黄色 粘土質黒色土多量, 細礫少量, 白色粘土粒子微量
- 2 黒褐色 粘土質黒色土多量, 細礫・白色粘土粒子少量
- 3 黒褐色 粘土質黒色土多量, 細礫少量

遺物出土状況 土師質土器片1点(皿), 瓦質土器片1点(播鉢), 瀬戸・美濃系陶器片3点(播鉢), 唐津系陶器片1点(碗), 石製品1点(基石)が出土している。37～39・Q3は、いずれも覆土中層から出土している。

第127図 第2号井戸跡実測図

所見 時期は、出土陶器から17世紀前半と考えられ、遺構の配置から、屋敷地に伴った井戸跡と推測される。



第128図 第2号井戸跡出土遺物実測図

第2号井戸跡出土遺物観察表（第128図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
37	土師質土器	皿	—	(1.7)	5.4	雲母・針状鉱物	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	覆土中	30%
38	陶器	播鉢	[35.6]	(9.6)	—	長石 焼締	にぶい黄橙	良好	口縁端部に沈線1条	覆土中	丹波か
39	陶器	播鉢	[32.4]	(8.2)	—	長石 鉄釉	灰白・にぶい赤褐	良好	ロクロ成形	覆土中	瀬戸・美濃

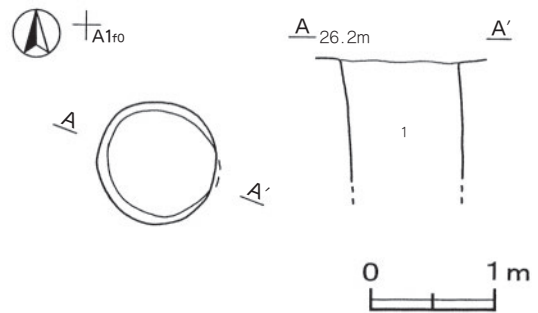
番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
Q3	石製品	基石	1.8	1.7	1.0	4.2	粘板岩	小礫を転用	覆土中	

第3号井戸跡 (第129図)

位置 調査区西部のA 1 f0区で、標高26.0mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 径1.0mの円形である。深さ105cmまで掘り下げたが、湧水のため、以下は不明である。壁は、直立している。

覆土 単一層である。細礫を含む人為堆積と考えられる。



第129図 第3号井戸跡実測図

土層解説

1 灰 色 細礫・砂粒中量, 粘土質黒色土少量

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿), 瓦質土器片1点(播鉢)が出土している。

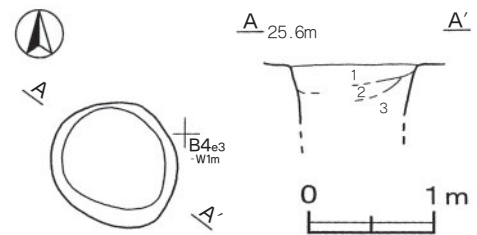
所見 時期は、遺構の配置から屋敷地に伴った井戸跡と推測されることから、17世紀前半と考えられる。

第4号井戸跡 (第130図)

位置 調査区東部のB 4 e2区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 径1.0mの円形である。深さ50cmまで掘り下げたが、湧水のため、以下は不明である。壁は、直立している。

覆土 土層面が調査途中で崩落してしまったため、部分的に3層を確認しただけである。各層とも細礫を含んでおり、人為堆積と考えられる。



第130図 第4号井戸跡実測図

土層解説

1 黄 灰 色 粘土質黒色土・細礫・砂粒少量, 炭化物微量 3 灰 黄 褐色 粘土質黒色土・細礫・砂粒中量
2 黒 褐 色 細礫中量, 粘土質黒色土少量, 砂粒微量

所見 時期は、第11号掘立柱建物の前面に位置していることから、近世以前と考えられる。

第5号井戸跡 (第131図)

位置 調査区東部のB 5 j4区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

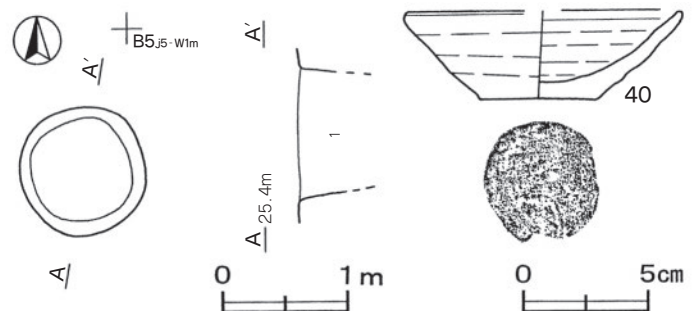
規模と形状 径1.0mの円形である。深さ35cmまで掘り下げたが、湧水のため、以下は不明である。壁は、直立している。

覆土 単一層である。細礫を含んでおり、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 黒 褐 色 粘土質黒色土多量, 細礫中量, 黄色粘土粒子微量

遺物出土状況 土師質土器片2点(皿)が出土している。40は覆土中から出土している。



第131図 第5号井戸跡・出土遺物実測図

所見 時期は、出土土器から17世紀前半と考えられ、屋敷地に伴った井戸跡と推測される。

第5号井戸跡出土遺物観察表（第131図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
40	土師質土器	皿	[10.9]	3.5	4.8	雲母・長石・石英	橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り・板目状圧痕	覆土中	50%

第6号井戸跡（第132図）

位置 調査区東部のB 4 i8区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 径1.1mの円形である。深さ35cmまで掘り下げたが、湧水のため、以下は不明である。壁は、直立している。

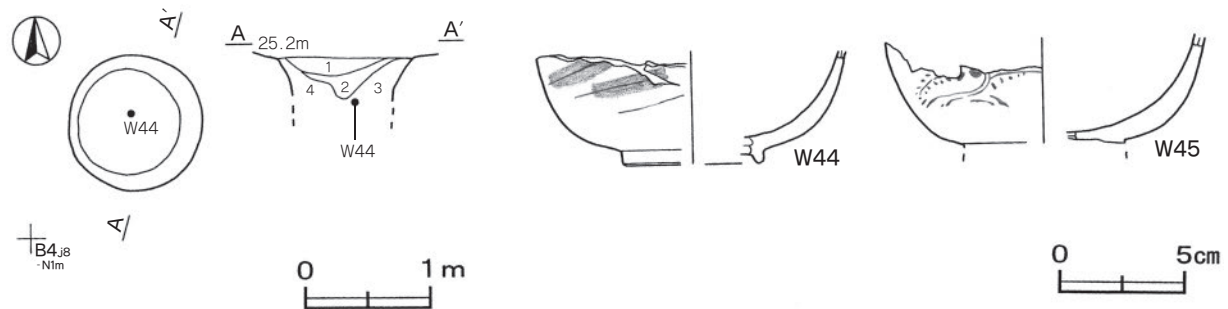
覆土 4層に分層される。各層とも細礫を含んでおり、人為堆積と考えられる。

土層解説

1 灰黄褐色	粘土質黒色土・黄色粘土粒子中量、細礫少量	3 黒褐色	粘土質黒色土多量、細礫少量
2 暗褐色	粘土質黒色土中量、黄色粘土粒子少量、細礫・砂粒微量	4 暗褐色	粘土質黒色土多量、青灰色粘土粒子・細礫・砂粒少量

遺物出土状況 瀬戸・美濃系陶器片1点（皿）、漆器2点（椀）が出土している。W44は覆土中層から出土している。

所見 時期は、屋敷地に伴った井戸跡と推測されることから、17世紀前半と考えられる。



第132図 第6号井戸跡・出土遺物実測図

第6号井戸跡出土遺物観察表（第132図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W44	漆器	椀	—	(4.5)	[5.6]	(26.6)	トチノキ科トチノキ属	外面黒漆 内面朱漆 朱と黄で短冊文	覆土中層	
W45	漆器	椀	—	(4.2)	—	(99.6)	ブナ科ブナ属	外面黒漆 内面朱漆 朱漆で草花文 高台剥離	覆土中層	50% PL15

第7号井戸跡（第133図）

位置 調査区東部のB 4 h5区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 径1.6mの円形に掘り込んだ後、黄色粘土や青灰色粘土、黒色土を互層に充填して、径0.7mの円形に構築している。深さ70cmまで掘り下げたが、湧水のため、以下は不明である。

覆土 10層に分層される。第1～6層は覆土に相当し、ブロック状の堆積状況を示した人為堆積と考えられる。

第7～10層は埋土で、互層になっている。

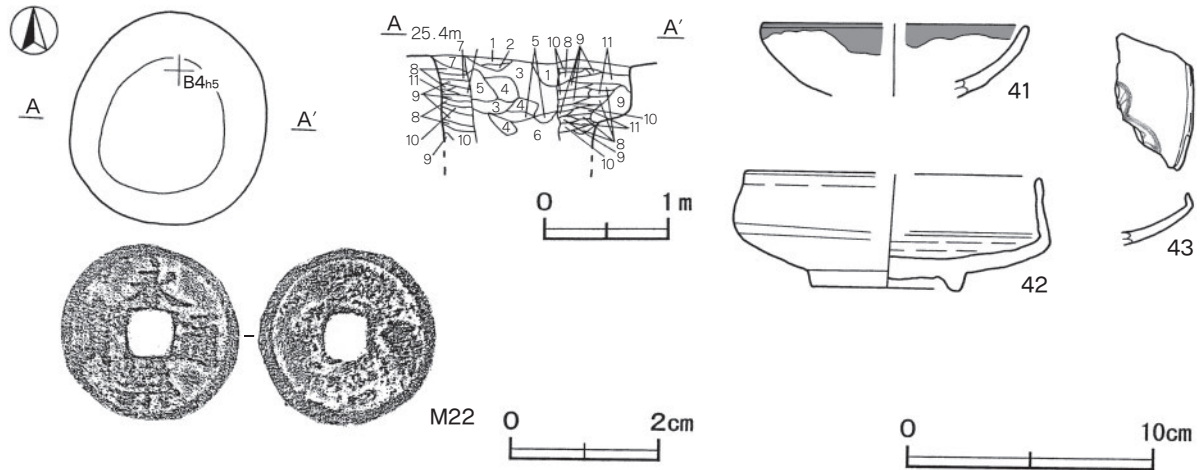
土層解説

1 黒褐色	粘土質黒色土多量、焼土粒子・炭化粒子・黄色粘土粒子・青灰色粘土粒子・砂粒少量	3 暗灰黄色	粘土質黒色土・黄色粘土粒子中量、青灰色粘土粒子少量、砂粒微量
2 暗褐色	粘土質黒色土多量、焼土粒子少量	4 黒色	粘土質黒色土多量
		5 暗灰黄色	粘土質黒色土・黄色粘土粒子中量

- 6 黒褐色 粘土質黒色土多量, 黄色粘土粒子・青灰色粘土粒子・砂粒少量
- 7 黒褐色 粘土質黒色土多量, 黄色粘土粒子少量
- 8 暗灰黄色 黄色粘土粒子中量, 粘土質黒色土少量
- 9 暗灰黄色 青灰色粘土粒子多量, 黄色粘土粒子少量
- 10 黒褐色 粘土質黒色土中量, 黄色・青灰色粘土粒子少量
- 11 暗灰黄色 黄色粘土粒子多量, 青灰色粘土粒子少量

遺物出土状況 土師質土器片4点(皿), 瓦質土器片4点(挿鉢), 瀬戸・美濃系陶器片5点(皿), 古銭1点(永楽通寶), 炭化種子1点(桃)が出土している。41~43は西部の覆土中から出土している。

所見 時期は, 屋敷地に伴った井戸跡と推測されることから, 17世紀前半と考えられる。掘り方を有する状況から, 埋土部分の崩落を防ぐための井戸枠が存在していたと想定されるが, 木材等は確認されていない。



第133図 第7号井戸跡・出土遺物実測図

第7号井戸跡出土遺物観察表(第133図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
41	土師質土器	皿	[10.8]	(2.9)	—	針状鉱物	明赤褐	普通	ロクロ成形 油煙付着	西部覆土中	10%
42	陶器	向付	[11.8]	4.6	[5.9]	精良 長石釉	灰白	良好	体部下位の釉は縮まり 鮫肌状を呈する。	西部覆土中	60% PL14
43	陶器	向付	—	(2.1)	—	精良 長石釉	にぶい褐	良好	鉄絵による草文 赤織部	西部覆土中	瀬戸・美濃

番号	種別	銭種	径	孔幅	重量	材質	初铸年	特	徴	出土位置	備考
M22	古銭	永楽通寶	2.5	0.6	2.6	銅	1408	明銭	無背銭	確認面	

表17 井戸跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m. 深さはcm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (調査番号)
				長径×短径	深さ					
1	B 3 a1	—	円形	1.8×1.8	(40)	外傾	—	人為	陶器	旧 SK1
2	B 3 e0	—	円形	1.2×1.2	(70)	直立	—	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 基石	旧 SK5
3	A 1 f0	—	円形	1.0×1.0	(105)	直立	—	人為	土師質土器, 瓦質土器	旧 SK6
4	B 4 e2	—	円形	1.0×1.0	(50)	直立	—	人為	—	旧 SK11
5	B 5 j4	—	円形	1.0×1.0	(35)	直立	—	人為	土師質土器	旧 SK18
6	B 4 i8	—	円形	1.1×1.1	(35)	直立	—	人為	陶器, 漆器椀	旧 SK19
7	B 4 h5	—	円形	0.7×0.7	(70)	直立	—	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 古銭, モモ	旧 SK26

5 池跡

第1号池跡(第134図)

位置 調査区東部の B 3 d9区で, 標高25.5mの低地の平坦部に位置している。第12号掘立柱建物跡の南東に位

置し、西側には第27号土坑、東側には第28号土坑が隣接している。

規模と形状 長径9.7m、短径4.0mの不整楕円形で、南部には長径3.0m、短径0.8mの楕円形の張り出し部分が認められる。長径方向はN-56°-Eで、深さは45cmほどである。底面はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がっている。底面は粘土層を掘り込んでおり、自然に湧水している。

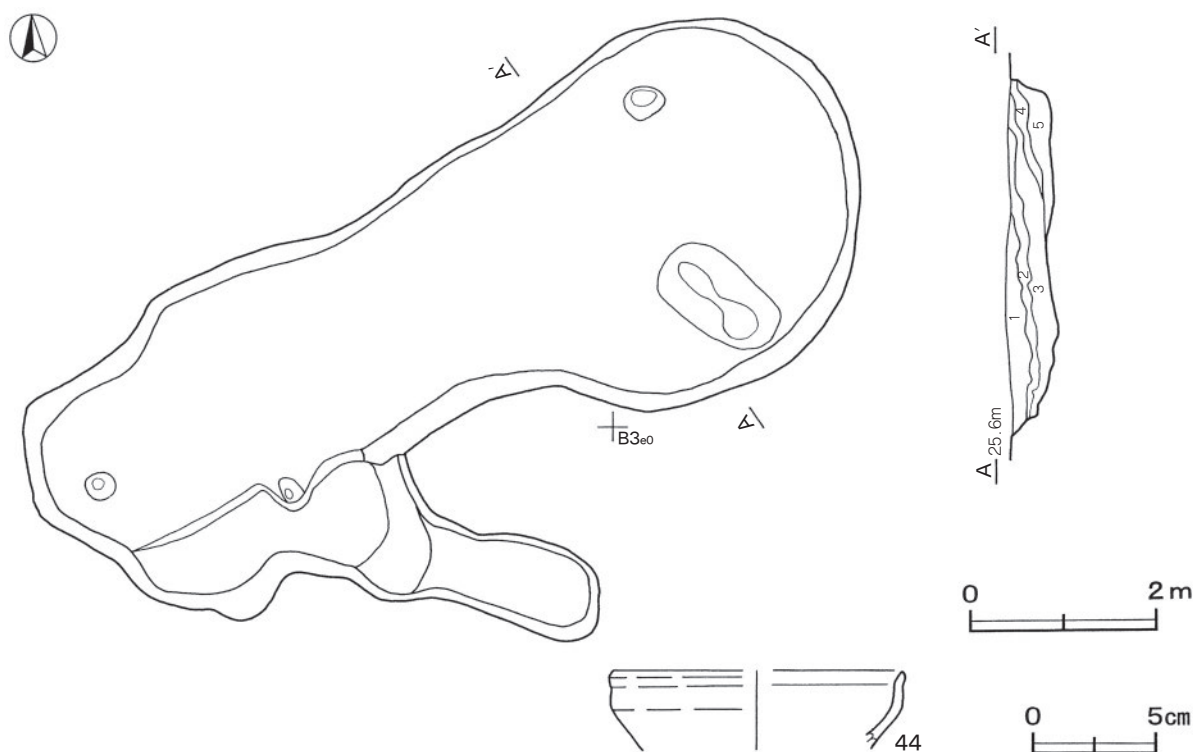
覆土 5層からなる。第1～3層は粘土ブロックや細礫を含んだ人為堆積で、レンズ状に堆積した第4・5層を掘り込んでいる。第4・5層が自然堆積した後、掘り直され、廃絶時に埋め戻されたものと想定される。

土層解説

- | | | | |
|---------|---------------------------|-------|------------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土質黒色土多量、黄色粘土ブロック・細礫・砂粒少量 | 4 黒色 | 粘土質黒色土多量、砂粒微量 |
| 2 にぶい褐色 | 黄色粘土ブロック多量、細礫・砂粒少量 | 5 灰褐色 | 黄色粘土粒子多量、砂粒少量、粘土質黒色土微量 |
| 3 黒褐色 | 粘土質黒色土多量、黄色粘土ブロック中量、細 | | |

遺物出土状況 土師質土器片7点（皿）、瓦質土器片10点（播鉢）、瀬戸・美濃系陶器片3点（皿1、碗2）、白磁片1点（碗）、炭化種子12点（桃）が出土している。44は南部の覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器と陶器から、17世紀前半と考えられる。主屋の可能性のある第12号掘立柱建物跡の南東にあたることや隣接して植木跡と想定される第27・28号土坑が位置していることなどから、屋敷内に設けられた庭園の一部を構成していたと考えられる。



第134図 第1号池跡・出土遺物実測図

第1号池跡出土遺物観察表（第134図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
44	陶器	天目茶碗	[11.6]	(3.2)	—	精良灰釉	暗オリーブ・灰白	良好	外面にわずかにヘラ削り痕	南部覆土中	瀬戸・美濃

第2号池跡（第135・136図）

位置 調査区東部のB 4 g4区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

重複関係 第3号溝が北部中央で連結している。土層断面からは明確に新旧関係が確認されないことから、同時期に機能していたことも考えられる。

規模と形状 長径8.4m, 短径4.4mの不整楕円形で, 長径方向はN-78°-Wである。南東部・南西部・北西部からは, 壁が内側に向かって三角形状に入り込む部分が認められ, 景観に変化を持たせるための造詣的な意匠と考えられる。壁は急な傾斜で立ち上がっている。深さ60cmまで掘り下げたが, 以下は湧水のため不明である。

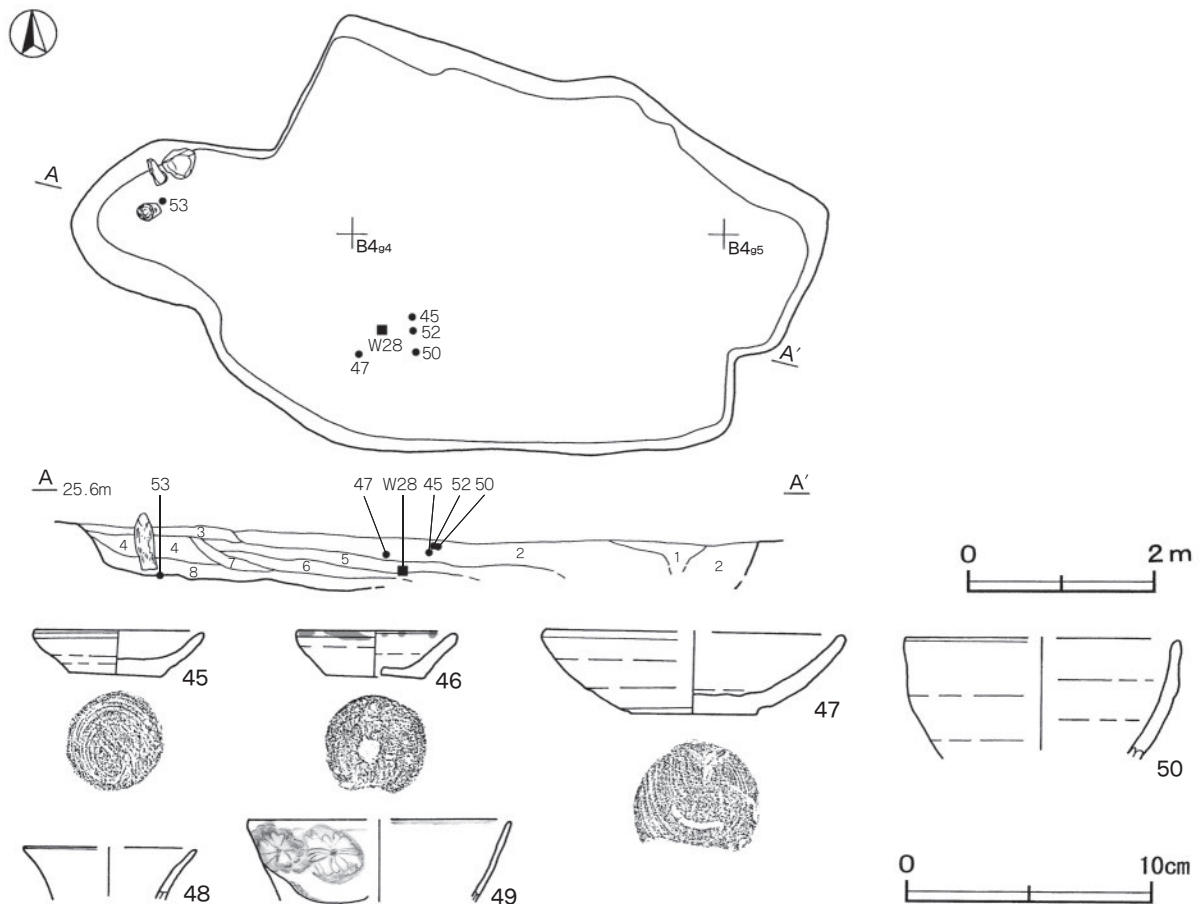
覆土 下部が未掘のため, 8層だけが確認されている。第1~7層は粘土ブロックや細礫を含んでいることから人為堆積と考えられ, 自然堆積した第8層の上位に堆積している。覆土下層や中層から陶磁器や木製品がまわって出土しており, 廃絶時に廃棄を伴って埋め戻されたものと推測される。

土層解説

1 暗褐色	黄色粘土ブロック多量, 砂粒中量, 細礫少量	5 黒褐色	黄色粘土ブロック・細礫少量, 砂粒微量
2 黒褐色	細礫・砂粒少量, 黄色粘土ブロック微量	6 灰オリーブ色	青灰色粘土ブロック中量, 細礫・砂粒少量
3 黒褐色	黄色粘土ブロック・砂粒少量, 細礫微量	7 オリーブ黒色	青灰色粘土ブロック中量, 細礫・砂粒少量
4 褐灰色	細礫少量, 黄色粘土ブロック・砂粒微量	8 オリーブ黒色	青灰色粘土粒子多量, 粘土質黒色土少量

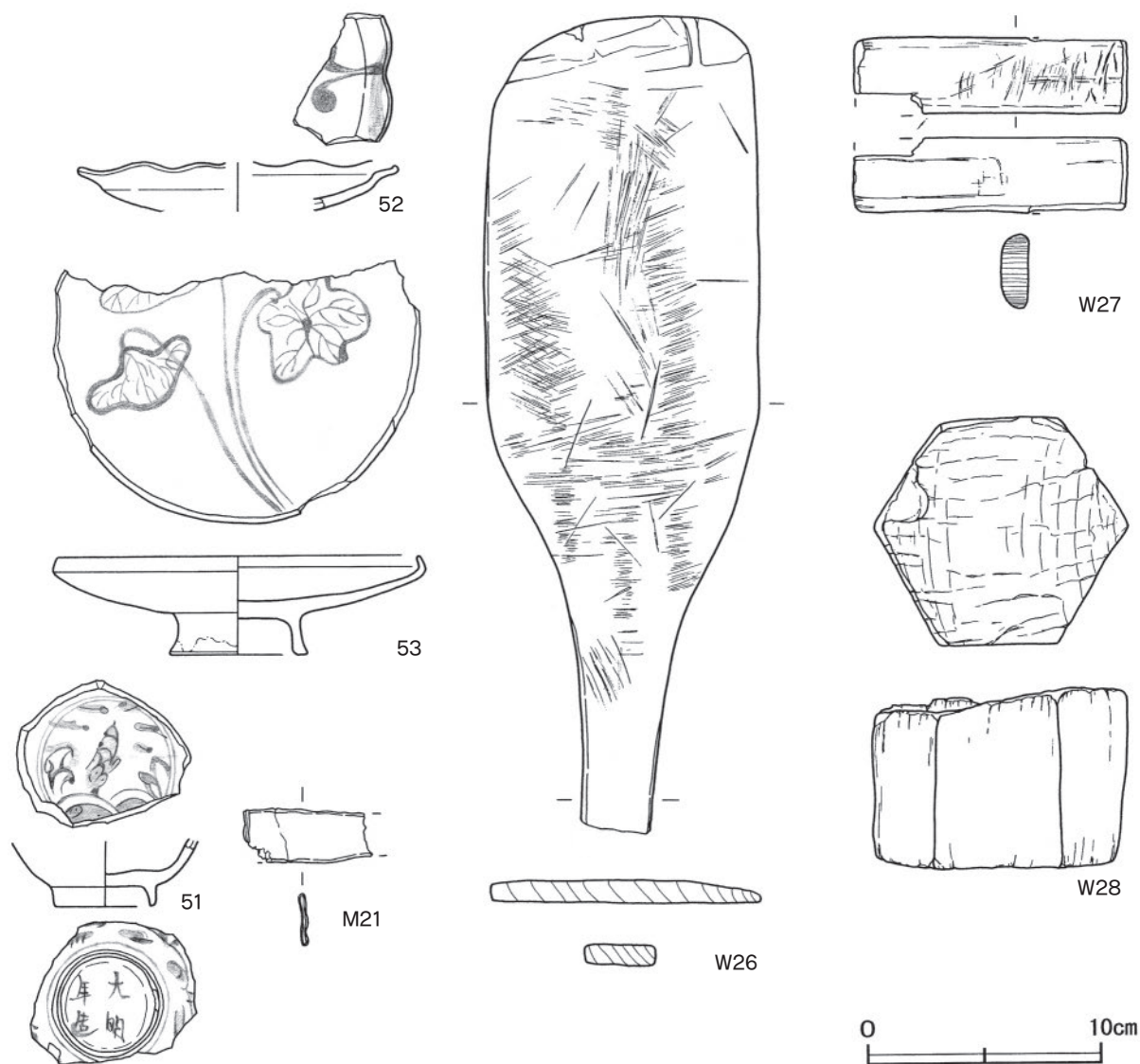
遺物出土状況 土師質土器片37点 (皿20, 播鉢・鍋17), 瓦質土器片5点 (播鉢), 瀬戸・美濃系陶器片4点 (皿2, 碗1, 播鉢1), 唐津系陶器片3点 (皿2, 碗1), 磁器片4点 (白磁碗1, 青花碗2, 青花皿1), 木器・木製品9点 (杓子1, 椀1, 蓋2, 柄1, 柱材1, 不明3), 炭化種子16点 (桃) が全域に散在した状態で出土している。53は西部の底面から, W28は南部の覆土中層から, 45・47・50・52は南部の覆土上層からそれぞれ出土している。

所見 時期は, 出土陶磁器から17世紀前半と考えられる。中国製磁器が散見され, 肥前系磁器は確認されていないことや, 瀬戸・美濃系陶器に混じって唐津系陶器が散見されることなど, 近世初頭における陶磁器の流通



第135図 第2号池跡・出土遺物実測図

の様相をうかがうことができる。



第136図 第2号池跡・出土遺物実測図

第2号池跡出土遺物観察表 (第135・136図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
45	土師質土器	皿	6.8	2.0	3.7	雲母・針状鉱物	明赤褐	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	南西部上層	100%
46	土師質土器	皿	6.4	1.9	4.0	雲母・針状鉱物	にぶい橙	普通	底部回転糸切り・穿孔 油煙付着	西部覆土中	95% PL15
47	土師質土器	皿	[12.0]	3.4	5.1	雲母・針状鉱物	灰黄褐	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	南西部上層	50%
48	白	磁 碗	[7.0]	(2.1)	—	精良 透明釉	灰白・灰白	良好	端反	覆土中	
49	青	花 碗	[10.6]	(3.4)	—	精良 透明釉	白・青	良好	外面菊花文 内面界線 破断面漆繋ぎ痕	覆土中	10% PL16
50	陶 器	天目茶碗	[11.2]	(4.6)	—	長石 鉄釉	明赤灰・黒褐	良好	ロクロ成形	南西部上層	15% 瀬戸・美濃
51	青	花 碗	—	(1.9)	2.8	精良 透明釉	白・青	良好	銘「大明年造」	覆土中	20% PL16
52	陶 器	向付	[13.6]	(2.1)	—	精良 灰釉	黒褐・黒褐	良好	内面蔓唐草文カ	南西部上層	10% 唐津
53	陶 器	向付	15.6	4.2	5.8	精良 長石釉	にぶい褐	良好	草文 破断面に漆繋ぎ痕 赤織部	西部底面	70% PL14・16

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
M21	金属製品	煙管	(3.7)	1.5	0.2	(1.7)	真鍮	吸口 板状に潰れる。	覆土中	
W26	木 器	杓子	34.9	11.6	0.9	317	アスナロ	柁目 表面に筋状の削痕 組板に転用カ	覆土中	PL15
W27	木 器	柄	11.8	3.1	1.1	(12.3)	ヒノキ	柁目 内面に茎部の痕跡 包丁又小刀の柄カ	覆土中	
W28	木 材	柱	7.5	10.8	9.8	386	クリ科	芯をはずした削り出し 六角柱の一部	南西部中層	

第3号池跡 (第137~139図)

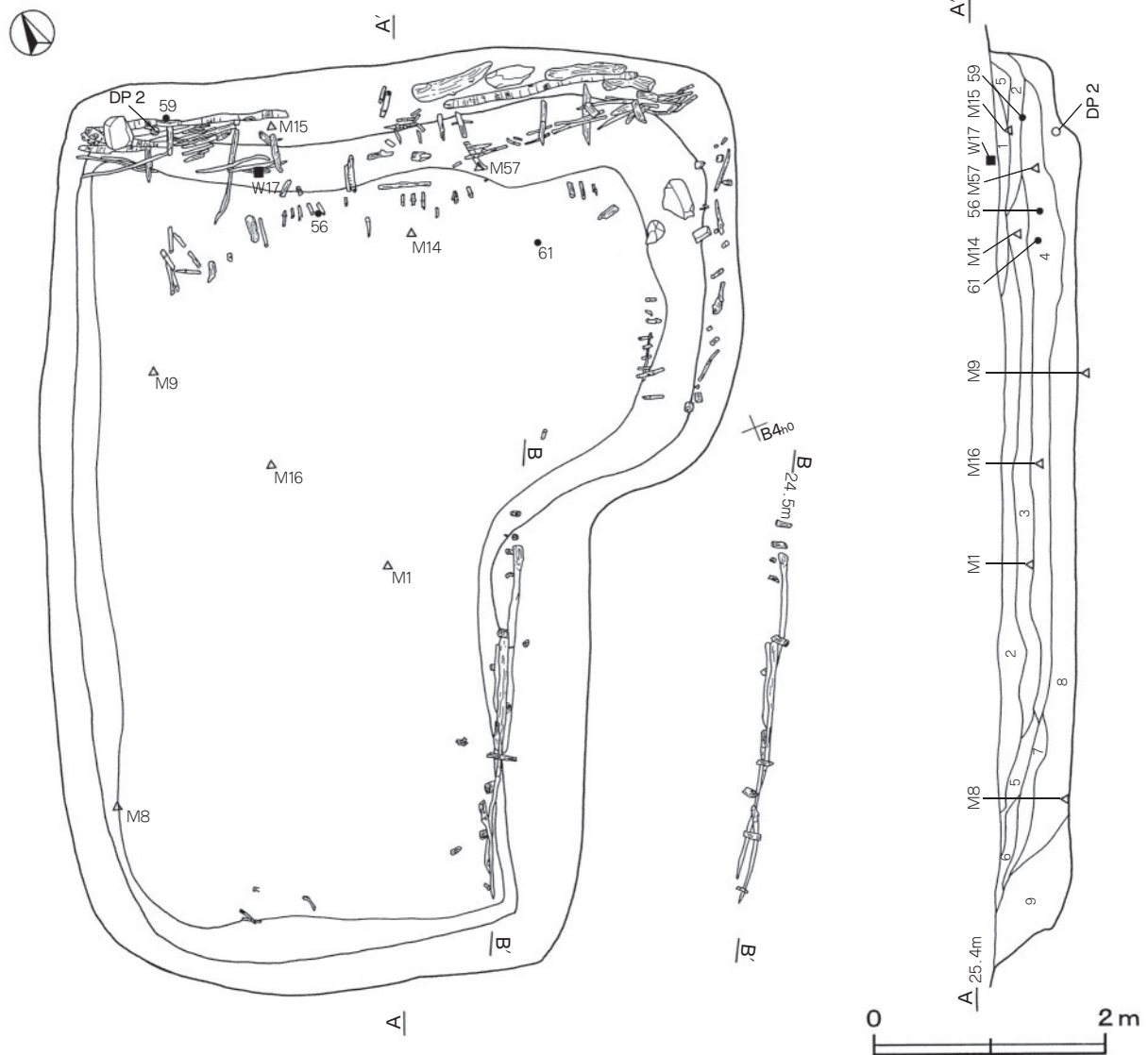
位置 調査区東部のB 4 g9区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 長軸8.0m、短軸4.5mの長方形の北東部に、長軸3.8m、短軸2.0mの長方形が張り出したL字状で、長軸方向はN-25°-Eである。深さは72cmで、底面はやや凹凸があり、壁は外傾して立ち上がっている。底面は粘土層を掘り込んでおり、自然に湧水している。北部と東部の壁際から、竹や木材を杭にして、その間に細い竹や木材を用いて交互に編み込んだ護岸施設が確認されている。

覆土 9層からなる。レンズ状を呈しているが、各層とも粘土ブロックや細礫を含んでいることから、人為堆積と考えられる。北部の下層や中層から陶磁器や木製品がまとまって出土しており、廃絶時に廃棄を伴った埋め戻しが行われたものと推測される。

土層解説

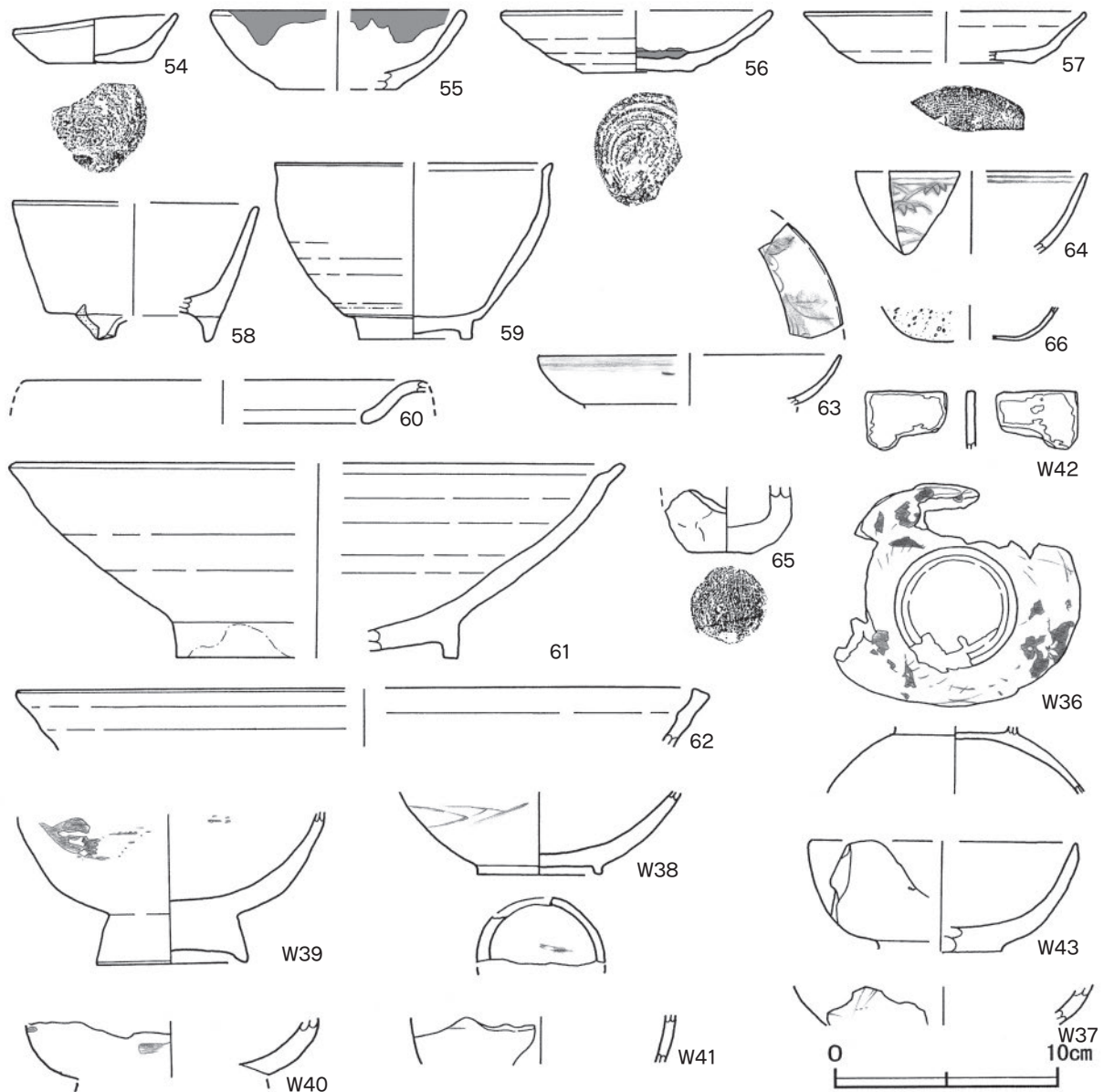
- | | | | |
|--------|-------------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | 砂粒中量, 細礫少量, 黄色粘土ブロック微量 | 6 黒褐色 | 黄色粘土ブロック・砂粒少量, 炭化物・細礫微量 |
| 2 黒褐色 | 黄色粘土ブロック・砂粒少量, 炭化物・細礫微量 | 7 褐灰色 | 砂粒中量, 黄色粘土ブロック少量 |
| 3 黒褐色 | 細礫・砂粒少量, 黄色粘土ブロック・炭化物微量 | 8 黒褐色 | 黄色粘土ブロック・炭化物・細礫・砂粒少量 |
| 4 黒褐色 | 細礫・砂粒少量, 黄色粘土ブロック・炭化物微量 | 9 黒褐色 | 砂粒中量, 黄色粘土ブロック・細礫少量 |
| 5 灰黄褐色 | 黄色粘土ブロック中量, 細礫・砂粒微量 | | |



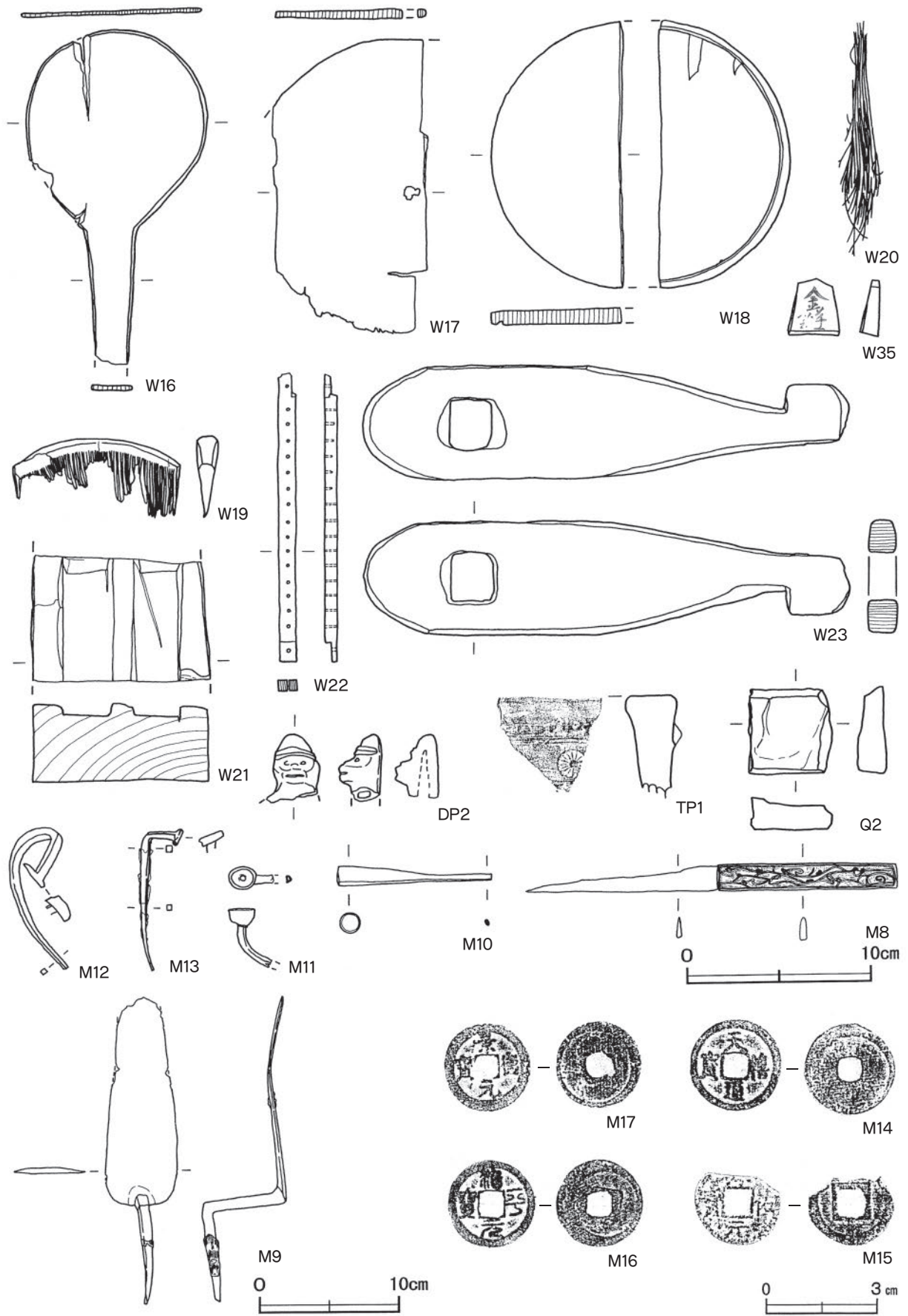
第137図 第3号池跡実測図

遺物出土状況 土師質土器片144点（皿94，鍋・播鉢48，焼塩壺1，香炉1），瓦質土器片3点（香炉2，火鉢1），瀬戸・美濃系陶器片23点（皿12，碗6，水指1，香炉1，播鉢2，壺1），唐津系陶器片2点（碗，皿），磁器片8点（青花6，肥前系2），不明陶器片1点，ガラス片1点，鉄器・鉄製品6点（小柄1，鋸1，煙管2，釘2），古銭4点（北宋銭），木器・木製品68点（杓子1，箸1，蓋6，下駄1，筆先カ1，櫛1，敷居1，不明56），漆器11点（椀），炭化種子77点（桃50，胡桃1，松5，椿8，不明13），動物遺体1点（水生昆虫カ）が出土している。これらの出土遺物は北部からまとまって出土しており，北側から投棄された様相を示している。56・57・59・61は北部の覆土中層，M14は北東部の覆土中層，M15・W17は北部の覆土上層，M9は北部の底面，M16は中央部の覆土中層，M17は北部の覆土下層，M8は南西部の底面から出土している。

所見 時期は，出土陶磁器から17世紀前半と考えられる。付近に導水施設は見当たらないが，底面は粘土層を掘り込んでおり，自然湧水で十分まかなえたものと推測される。炭化種子の出土量では桃が傑出し，他の遺構においても同じような状況が確認されていることから，植木・食用・祭祀用など，桃が当時の武家社会の嗜好に合うものであった様子がうかがえる。



第138図 第3号池跡出土遺物実測図(1)



第139図 第3号池跡出土遺物実測図(2)

第3号池跡出土遺物観察表 (第138・139図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徵	出土位置	備考
54	土師質土器	皿	7.1	2.3	4.2	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	覆土中	50%
55	土師質土器	皿	[11.2]	3.5	[5.2]	長石・針状鉱物	明赤褐	普通	ロクロ成形 内面油煙付着	覆土下層	25%
56	土師質土器	皿	[12.0]	2.8	5.0	雲母・針状鉱物	灰褐	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 油煙付着	北部中層	20%
57	土師質土器	皿	[12.6]	2.3	[8.1]	石英	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	北東部中層	20%
58	瓦質土器	香炉	[10.8]	6.1	[7.8]	雲母	灰黄褐	普通	無文	覆土下層	20%
59	陶器	天目茶碗	[12.4]	7.8	5.0	赤色粒子 鉄釉	にぶい黄・黒	良好	削り出し高台 高台周辺露胎	北部中層	60% 瀬戸・美濃
60	陶器	水指	[12.9]	(1.9)	—	赤色粒子 灰釉	にぶい黄 黄灰	良好	わずかに貫入	北部覆土中	美濃伊賀
61	陶器	鉢	[27.0]	8.7	[12.6]	精良 鉄釉	暗褐・褐灰	良好	高台に砂目痕	北東部中層	20% 唐津
62	陶器	播鉢	[30.6]	(3.0)	—	赤色粒子 鉄釉	にぶい黄 黒	良好	播り目不明	北部覆土中	瀬戸・美濃
63	青花	皿	[13.6]	(2.3)	—	精良 透明釉	灰白・青	良好	外面界線 内面果実文	覆土中	PL16
64	青花	碗	[10.4]	(3.7)	—	精良 透明釉	灰白・青	良好	外面竹篋文 内面界線	覆土中	PL16
65	土師質土器	焼塩壺	—	(3.0)	—	長石	にぶい橙	普通	外面剥離 内面布目痕	覆土中	
66	ガラス	不明	—	(1.6)	[5.9]	—	透明・緑色	良好	密な気泡	覆土中	PL16

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特 徴	出土位置	備考
M8	鉄製品	小柄	20.2	1.3	0.4	34.9	鉄・銅	波濤文	西部下層	100% PL16
M9	鉄製品	鍔	22.1	5.1	0.5	120	鉄	元首鍔 握り部に木質残存	北部底面	100% PL15
M10	金属製品	煙管	8.3	1.1	1.1	5.1	真鍮	吸口	覆土中	100%
M11	銅製品	煙管	(2.4)	1.3	—	(2.9)	銅	雁首 脂返しは大きく湾曲	中央部中層	
M12	鉄製品	釘	14.1	1.5	0.9	11.9	鉄	断面方形 頭部は叩き出しによる頭巻釘	覆土中	100% PL15
M13	鉄製品	釘	9.4	1.4	0.3	5.8	鉄	断面方形 頭部は叩き出しによる頭巻釘	覆土中	100% PL15
DP2	土製品	土人形	(3.6)	(3.0)	2.4	(13.3)	長石・石英	猿 体部欠損 中空 型作り にぶい橙色	北部中層	
Q2	石製品	硯	(4.7)	(4.5)	(1.7)	(58.6)	頁岩	墨堂の一部が残存 長方硯か 砥石の可能性も有り	覆土中	

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	材質	特 徴	出土位置	備考
W16	木製品	杓子	(18.1)	9.8	0.3	ブナ科ブナ属	柾目 両面黒漆塗 一木作り 断面は直線状	覆土下層	
W17	木製品	不明	(15.8)	(8.5)	0.5	スギ	柾目 板状 両面炭化物付着 鍋類の蓋か	北東部上層	
W18	木製品	曲物	14.4	(7.2)	0.9	ヒノキ	柾目 側板をはめ込むための溝を巡らせる。	覆土下層	
W19	木製品	櫛	9.1	4.3	1.2	イスノキ	板目 棟は緩やかな弧状を呈する。	北部下層	
W20	木製品	不明	(12.6)	—	—	—	細い繊維質を束ねる。筆先か	覆土中	
W21	木材	敷居	(6.8)	9.6	4.3	アカマツ	板目 深さ0.6cmの溝2条 人為的に切断されている。	覆土下層	
W22	木製品	不明	15.5	1.0	0.7	スギ	割材 小孔が規則的に並ぶ 鳥籠か	覆土下層	
W23	木製品	自在鉤	26.5	6.1	1.6	ヒノキ	柾目 方形の嵌め込み穴	覆土下層	
W35	木製品	駒	3.0	2.9	1.1	イチイ科カヤ属	墨書「金将」	北東部中層	100% PL15
W36	漆器	蓋	—	(3.0)	—	ブナ科ブナ属	内外面黒漆 高台内黒漆 黒漆による草花文	北部中層	70% PL15
W37	漆器	椀	—	(1.8)	—	ブナ科ブナ属	外面黒漆 内面朱漆 朱漆による文様	北部中層	
W38	漆器	椀	—	(3.7)	5.7	ブナ科ブナ属	外面黒漆 内面朱漆 朱漆による文様	北部中層	
W39	漆器	椀	—	(6.7)	6.6	ブナ科ブナ属	内外面黒漆 朱漆による文様	北東部中層	30% PL15
W40	漆器	椀	—	(2.5)	—	ブナ科ブナ属	外面黒漆 内面朱漆 朱漆による文様若干残存	北部上層	
W41	漆器	椀	—	(2.1)	—	ブナ科ブナ属	外面黒漆 内面朱漆	覆土下層	
W42	漆器	箱膳	(3.7)	(2.6)	0.5	ヒノキ科アスナロ属	内外面黒漆	覆土中	
W43	漆器	椀	[12.1]	5.0	—	ブナ科ブナ属	外面黒漆 内面朱漆 高台剥離	覆土下層	30%

番号	種別	銭種	径	孔幅	重量	材質	初鑄年	特 徴	出土位置	備考
M14	古銭	天禧通寶	2.5	0.6	3.3	銅	1017	北宋銭 無背銭	北東部中層	
M15	古銭	嘉祐元寶	2.3	0.7	1.2	銅	1056	北宋銭 無背銭	北部上層	
M16	古銭	治平元寶	2.4	0.6	3.1	銅	1064	北宋銭 無背銭	中央部中層	
M17	古銭	景德元寶	2.3	0.7	2.5	銅	1004	北宋銭 無背銭	北部下層	

表18 池跡一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (調査番号)
				長径×短径	深さ					
1	B3 d9	N-56°-E	不整楕円形	9.7×4.0	45	外傾	凹凸	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 白磁, モモ	旧SK9
2	B4 g4	N-78°-W	不整楕円形	8.4×4.4	(60)	外傾	—	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶磁器, 杓子, 柄, 蓋, 柱材, 不明木製品, 漆器椀	旧SK14
3	B4 g9	N-25°-E	長方形・L字状	8.0×4.5	72	外傾	平坦	人為	土師質土器, 瓦質土器, 陶磁器, ガラス, 小柄, 鍔, 釘, 煙管, 古銭, 杓子, 箸, 蓋, 下駄, 櫛, 敷居, 不明木製品, モモ, クルミ, マツ, ツバキ, 不明炭化種子	旧SX3

6 土坑

第29号土坑 (第140~144図)

位置 調査区東部のA3j5区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

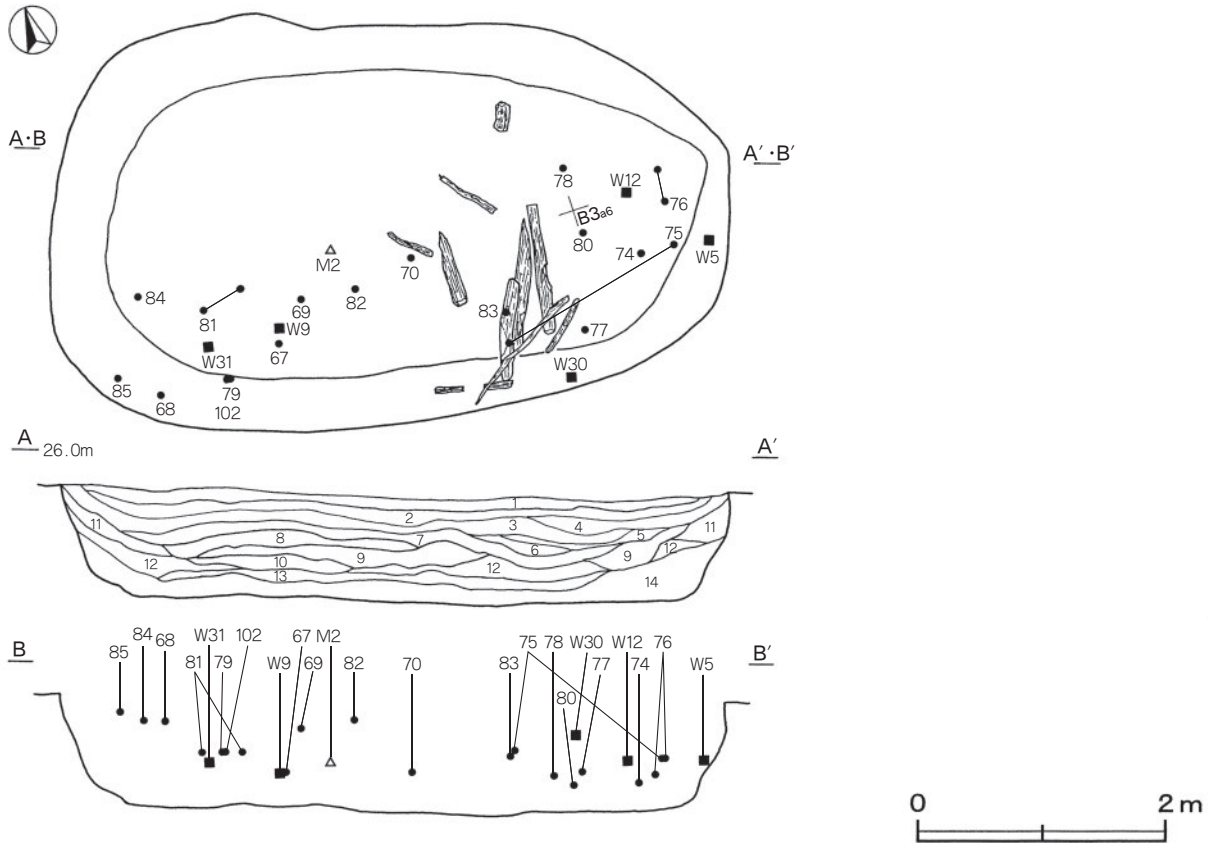
規模と形状 長径5.3m, 短径3.5mの楕円形で、長径方向はN-67°-Wである。深さは85cmで、底面はやや凹凸があり、壁は急な傾斜で立ち上がっている。

覆土 14層からなる。水平な堆積状況を示した自然堆積と考えられる。各層とも層厚が薄く、細礫や砂粒を含んでいることや、層毎の色調が明確に分離していること、及び付近一帯が湿地帯であることから、埋没過程において水の働きが強く関与したと推測される。

土層解説

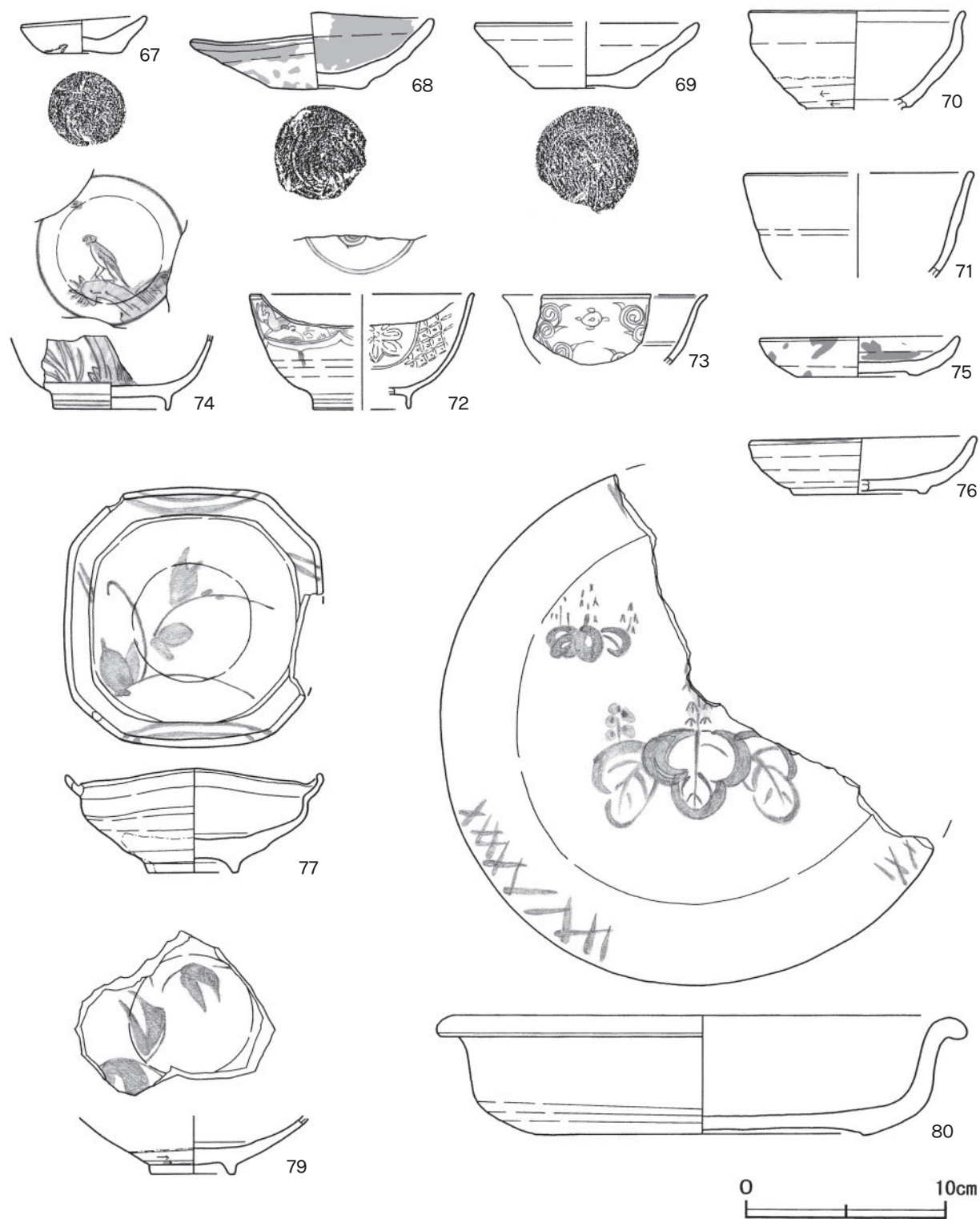
1 黒褐色	粘土質黒色土多量, 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量, 細礫微量	7 褐灰色	砂粒多量, 粘土質黒色土・細礫少量, 黄色粘土粒子微量
2 黒褐色	粘土質黒色土多量, 砂粒中量, 焼土ブロック・炭化粒子・黄色粘土粒子少量, 細礫微量	8 黒褐色	粘土質黒色土中量, 細礫・砂粒・黄色粘土粒子少量
3 暗褐色	黄色粘土粒子多量, 砂粒少量, 粘土質黒色土・細礫微量	9 褐灰色	粘土質黒色土中量, 砂粒・黄色粘土粒子少量, 細礫微量
4 にぶい黄褐色	砂粒多量, 粘土質黒色土少量, 黄色粘土粒子・細礫微量	10 灰黄褐色	粘土質黒色土中量, 砂粒少量, 細礫微量
5 灰黄褐色	砂粒中量, 粘土質黒色土・黄色粘土粒子・細礫少量	11 灰黄褐色	砂粒中量, 粘土質黒色土・細礫少量, 黄色粘土粒子微量
6 黒褐色	砂粒中量, 粘土質黒色土・黄色粘土粒子・細礫少量	12 褐灰色	砂粒多量, 粘土質黒色土中量, 細礫少量
		13 黒褐色	粘土質黒色土多量, 砂粒少量, 細礫微量
		14 黒色	粘土質黒色土多量, 砂粒少量, 細礫微量

遺物出土状況 土師質土器片30点 (皿26, 挿鉢1, 鍋3), 瓦質土器片10点 (挿鉢8, 火鉢2), 瀬戸・美濃系陶器片65点 (皿28, 碗・向付25, 挿鉢5, 徳利1, 茶入1, 壺3, 香炉1, 不明1), 唐津系陶器片10点 (皿3, 碗・向付5, 徳利1, 火入カ1), 磁器片33点 (青花碗32, 肥前系碗1), その他の陶器片2点 (挿鉢, 茶入), 鉄器・

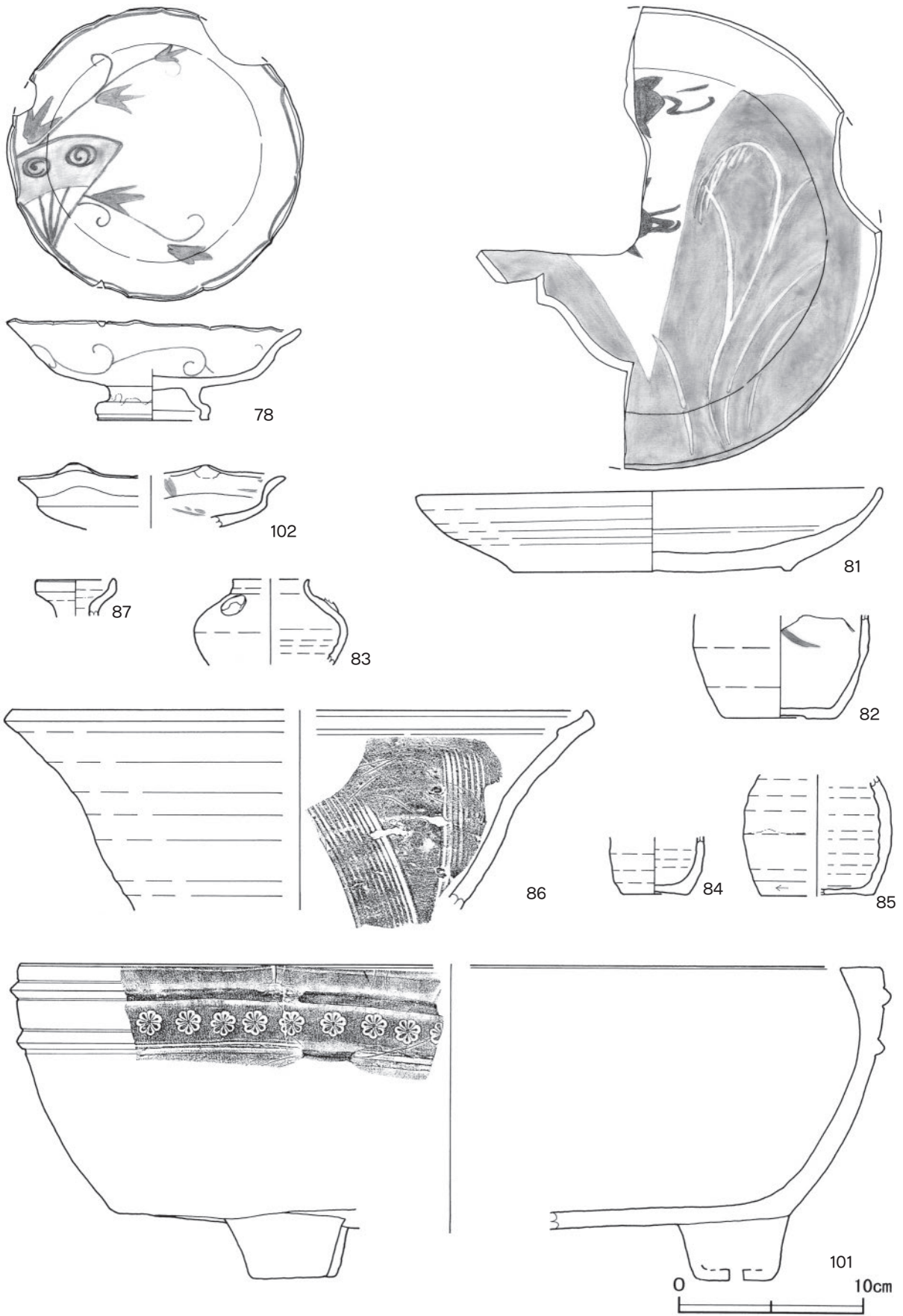


第140図 第29号土坑実測図

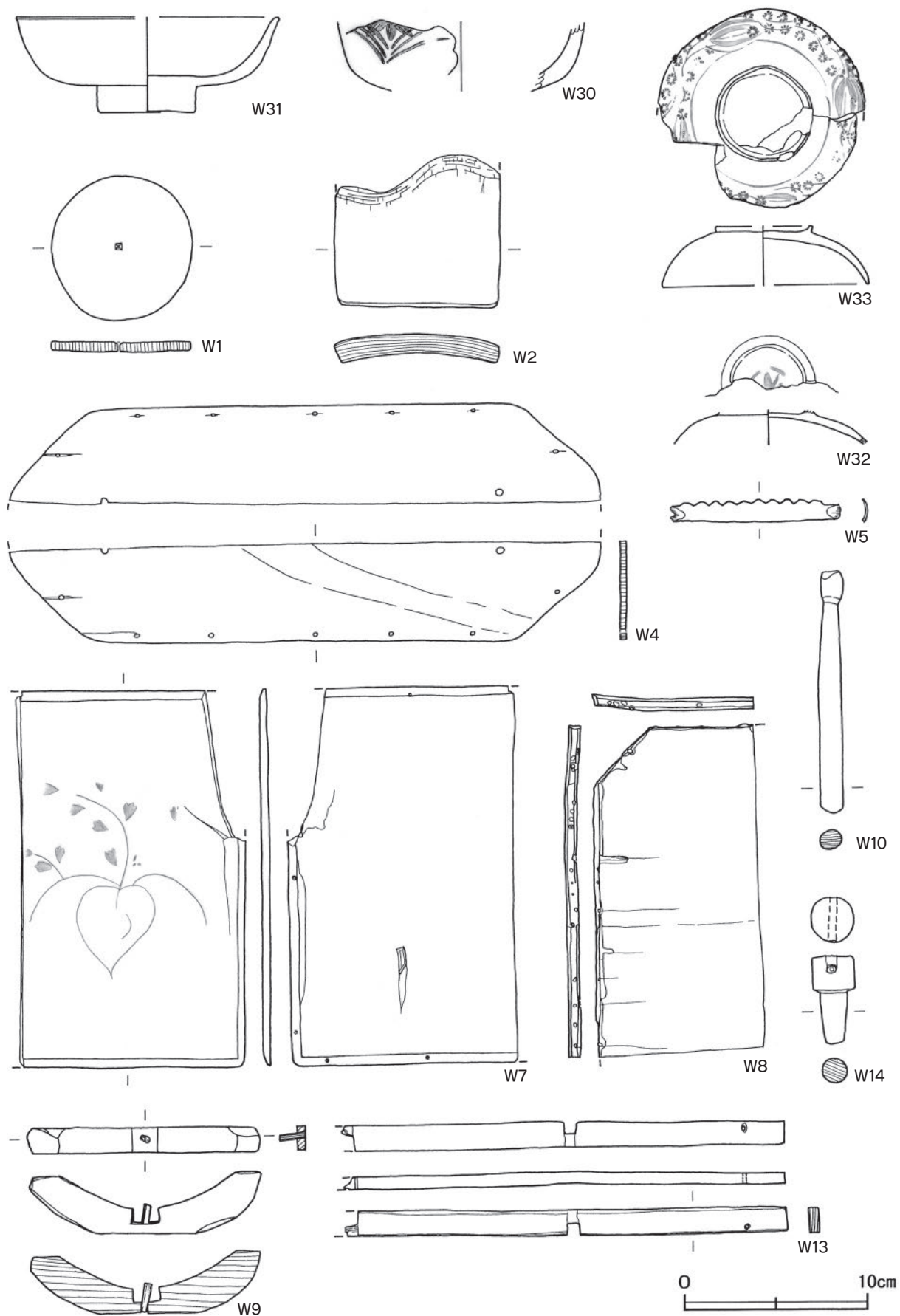
鉄製品 3 点 (釘 1, 火箸 1, 不明 1), 金箔片 2 点, 古銭 2 点, 木器・木製品 52 点 (椀 11, 灯明台 1, 下駄 4, 蒲
 鉾板 1, 折敷 1, 蓋 6, 箸 19, 敷居 1, 不明 8), 炭化種子 34 点 (桃 31, 胡桃 1, 松 1, 栗 1) が出土している。67・
 79・81・101・W31 は南西部の覆土下層から中層, 70・M2 は中央部の覆土下層, 74・76~78・80 は東部の覆
 土下層, 75・83・W30 は南東部の覆土中層からそれぞれ出土している。



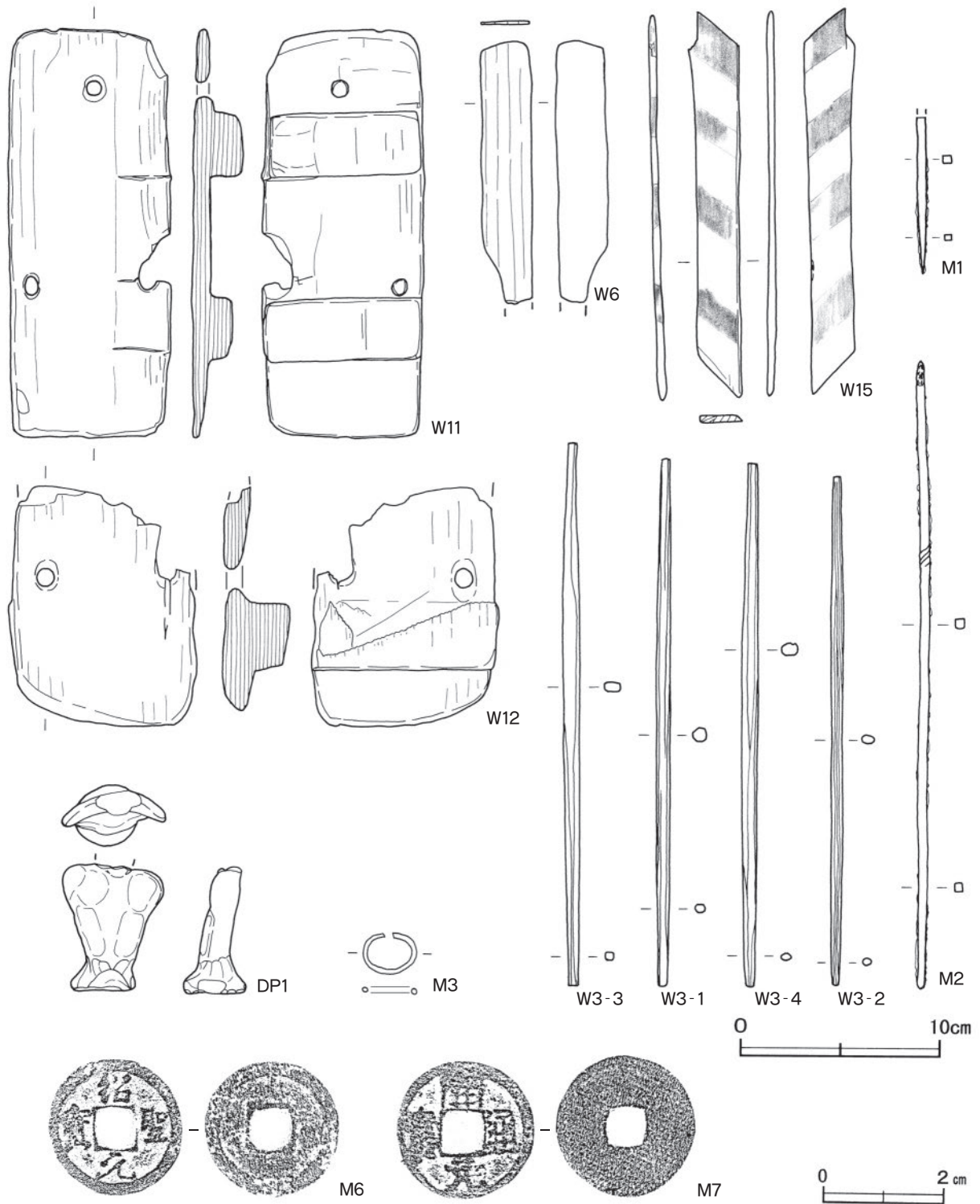
第141図 第29号土坑出土遺物実測図(1)



第142図 第29号土坑出土遺物実測図(2)



第143图 第29号土坑出土遗物实测图(3)



第144図 第29号土坑出土遺物実測図(4)

所見 時期は、出土陶器から17世紀中葉と考えられ、多量の生活用具が出土している状況から武家屋敷群の廃絶に伴う廃棄土坑と想定される。茶入や向付などは茶の湯とそれに伴う懷石料理に使用されたと考えられ、当時の武家社会の生活の一端をうかがうことができる。

第29号土坑出土遺物観察表 (第141~144図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徵	出土位置	備考
67	土師質土器	皿	6.2	1.8	3.8	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り	南部下層	80%
68	土師質土器	皿	11.8	3.8	4.7	雲母	にぶい褐	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 漆付着	南部上層	100% PL15
69	土師質土器	皿	[11.0]	3.3	5.0	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り・板目状圧痕	南部上層	40%
70	陶器	天目茶碗	10.6	(4.9)	—	精良 鉄釉	にぶい橙・褐	良好	高台周辺露胎 内底面に擦痕	中央部下層	70% PL14
71	陶器	丸碗	[11.4]	(5.2)	—	精良 長石釉	暗灰黄・灰黄	良好	貫入	覆土下層	15% 瀬戸・美濃
72	青花	碗	[11.0]	5.8	[4.7]	精良 透明釉	白・青	良好	外面馬文染付 内面菊花文・七宝繋ぎ浮文	覆土下層	15%
73	青花	碗	[10.2]	(3.5)	—	精良 透明釉	白・青	良好	外面雲珠文・界線 内面界線	覆土中	20% PL16
74	青花	碗	—	(3.7)	5.8	精良 透明釉	白・青	良好	外面草文 内面鳥文	東部下層	40% PL16
75	陶器	丸皿	9.9	2.1	6.0	精良 長石釉	灰白	良好	削り出し高台 油煙付着	南東部中層	95% PL14
76	陶器	丸皿	11.3	2.9	6.7	精良 長石釉	灰黄・灰白	良好	削り出し高台 貫入 油煙付着	東部下層	60% PL14
77	陶器	向付	12.6	5.2	4.4	精良 灰釉	明赤褐・灰白	良好	鉄絵による草花文 高台周辺無釉	南東部下層	95% 唐津・14・16
78	陶器	皿	16.0	5.1	6.0	精良 長石釉	灰白・黒	良好	鉄絵による草花文・扇文 志野織部	東部下層	95% PL14・16
79	陶器	向付	—	(2.9)	4.2	精良 灰釉	暗赤褐・灰黄褐	良好	鉄絵による草花文 高台周辺無釉	南西部中層	25% 唐津
80	陶器	大鉢	24.8	5.9	16.5	精良 長石釉	灰白・灰白	良好	鉄絵による桐文 松垣文 貫入 志野	東部下層	60% PL14・16
81	陶器	大皿	25.0	4.5	15.0	精良 長石釉	灰白・黒・灰	良好	釉掻き落としによる草文 灰志野	南西部中層	55% PL14・16
82	陶器	徳利	—	(5.6)	6.2	精良 長石釉	灰白・灰白	良好	鉄絵 底部外面施釉 貫入 志野	中央部上層	瀬戸・美濃
83	陶器	茶入	[4.0]	(4.6)	—	精良 鉄釉	にぶい黄・黒	良好	耳部欠損 内外面施釉	南東部中層	20% 瀬戸・美濃
84	陶器	茶入	—	(3.1)	3.7	長石 釉不明	明赤褐	良好	底部回転糸切り	西部上層	20% 京焼カ
85	陶器	徳利	—	(6.5)	6.2	長石 灰釉	にぶい赤褐・黄褐	良好	体部ロクロナデ 朝鮮唐津	南西部上層	30% 唐津
86	陶器	播鉢	[31.2]	(10.3)	—	長石 鉄釉	暗褐・灰白	良好	播り目 11 条以上	北部上層	瀬戸・美濃
87	陶器	徳利	4.4	(2.0)	—	精良 緑釉	緑・淡黄	良好	ロクロナデ 織部	北部下層	瀬戸・美濃
101	瓦質土器	火鉢	[46.5]	17.0	—	赤色粒子	黒	普通	2条の突起間に菊花文押捺	覆土中	
102	陶器	向付	[14.2]	(2.8)	—	精良 灰釉	暗赤褐・褐灰	良好	鉄絵による草花文	南西部中層	唐津

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	胎土・材質	特 徴	出土位置	備考
DP1	土製品	人形	(6.4)	5.2	3.1	(48.7)	雲母・長石・石英	頭部欠損 ナデ 灰黄褐色	北部上層	70%
M1	鉄製品	火箸	(7.8)	0.5	0.5	(6.7)	鉄	断面方形 先端が尖る。	覆土中	PL15
M2	鉄製品	火箸	31.3	0.5	0.5	35.6	鉄	断面方形 握り部木質付着 中位が捻れる。	中央部下層	100%
M3	鉄製品	不明	2.7	2.1	0.3	2.5	真鍮	鍍金 断面円形 リング状 把手カ	覆土中	100%
W1	木製品	蓋カ	7.7	7.7	0.6	6.9	ヒノキ	榎目 中央に小孔	覆土下層	100%
W2	木製品	桶	(8.2)	9.0	1.6	(22.9)	ヒノキ	板目 緩やかに湾曲 上部焼失	覆土下層	
W3-1	木製品	箸	26.4	0.7	0.7	2.8	スギ	割材 白木 両端が細くなる 断面八角形	覆土中層	
W3-2	木製品	箸	25.5	0.6	0.5	1.4	スギ	割材 白木 両端が細くなる 断面楕円形	覆土中層	
W3-3	木製品	箸	27.2	0.9	0.5	3.6	スギ	割材 白木 両端が細くなる 断面隅丸長方形	覆土中層	
W3-4	木製品	箸	26.2	0.8	0.6	2.7	スギ	割材 白木 両端が細くなる 断面楕円形	覆土中層	
W4	木製品	折敷	32.1	(5.4)	0.4	(19.9)	ヒノキ	榎目 隅切 周辺に釘穴	覆土中	
W5	木製品	鬼卸	9.3	1.2	0.3	(0.9)	竹	一端に三角形に刻み 両端を斜めに削る。	東部中層	
W6	木製品	蒲鉾板	(13.1)	2.7	0.1	(1.8)	ヒノキ	榎目 柄部分欠損 下半部の一方を弧状に削る。	覆土下層	
W7	漆器	蓋カ	20.4	(12.3)	0.5	(51.2)	ヒノキ	追榎目 内外面黒漆塗 外面に草花文 内面に釘穴・剥離痕	覆土中	
W8	漆器	三方カ	(18.0)	(9.2)	0.7	(51.5)	ヒノキ	板目 内外面黒漆塗 隅切型 側面に釘穴	北部覆土中	
W9	木製品	灯明台	12.6	3.3	1.4	9.1	モミ属	追榎目 装着部に木釘残存	南部下層	
W10	木製品	柄カ	(13.1)	1.5	1.2	(3.5)	ヒノキ	削り出し 断面円形 ばち形を呈する。	覆土中	
W11	木器	下駄	20.5	8.1	2.6	(51.1)	カツラ属	榎目 一木造り 連歯下駄	北部下層	
W12	木器	下駄	(12.0)	9.4	3.5	(68.0)	マツ属複雑管束亜属	一木造り 連歯下駄 鼻緒穴2カ所残存	東部中層	
W13	木製品	不明	(24.2)	1.5	0.6	(7.8)	スギ	板目 木材を組み合わせるためのホゾ有り 障子の棧カ	覆土下層	
W14	木製品	不明	4.8	2.5	1.8	7.1	ヒノキ	削り出し 頭部に小孔穿孔 栓カ	覆土中	
W15	木製品	不明	19.3	2.5	0.3	3.9	ヒノキ	追榎目 墨による文様 破魔矢の一部カ	覆土下層	
W30	漆器	碗	—	(3.7)	—	(25.8)	トチノキ科トチノキ属	外面黒漆 内面朱漆 朱漆による菖蒲文	南東部中層	
W31	漆器	碗	[14.2]	5.1	5.1	(81.8)	ブナ科ブナ属	内外面黒漆 無文	南西部下層	70%
W32	漆器	蓋	—	(1.9)	—	(18.4)	ブナ科ブナ属	内外面黒漆 高台内に朱漆による文様	覆土下層	
W33	漆器	蓋	[5.3]	3.3	[11.2]	(44.1)	ブナ科ブナ属	外面黒漆 内面朱漆 朱漆による草花文	覆土下層	80% PL15

番号	種別	銭種	径	孔幅	重量	材質	初铸年	特 徴	出土位置	備考
M6	古銭	紹聖元寶	2.3	0.7	1.9	銅	1094	北宋銭 無背銭	北部下層	
M7	古銭	開元通寶	2.4	0.7	3.4	銅	621	唐銭 無背銭	北部下層	

第30号土坑（第145図）

位置 調査区東部のB 5 h3区で、標高25.5mの低地の平坦部に位置している。

規模と形状 北側部分が調査区域外に延びているため、東西径1.7m、南北径0.9mが確認されただけであり、円形又は楕円形と推測される。長径方向はN-5°-Eで、深さは22cmである。底面は皿状を呈し、壁は底面から緩やかに外傾して立ち上がっている。底面は粘土層を掘り込み、自然に湧水している。

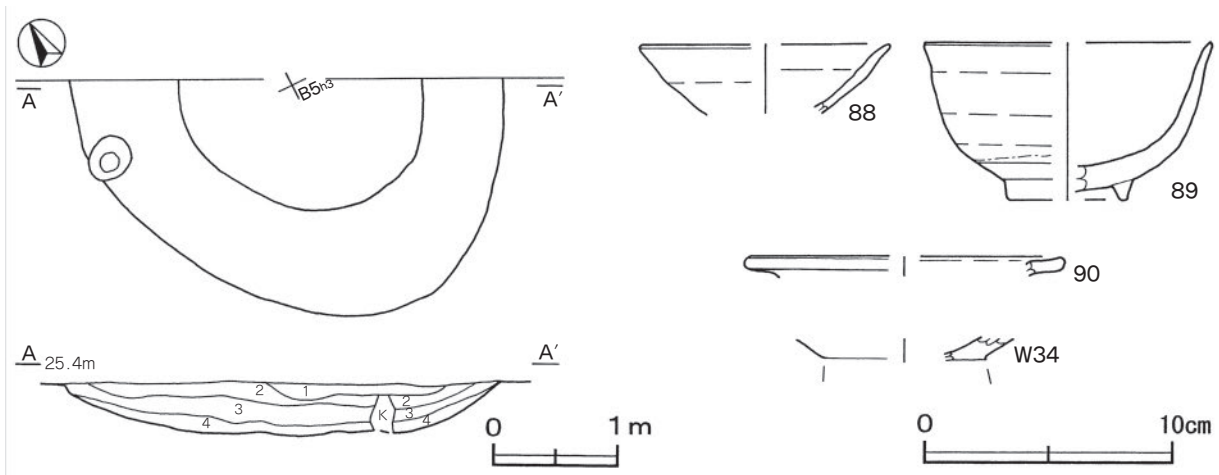
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------------------|-------|------------------|
| 1 黒褐色 | 粘土質黒色土多量, 炭化粒子少量, 焼土粒子・黄色粘土粒子微量 | 3 黒褐色 | 粘土質黒色土多量, 炭化粒子少量 |
| 2 黒褐色 | 粘土質黒色土多量, 炭化粒子・砂粒少量, 黄色 | 4 黒色 | 粘土質黒色土多量 |

遺物出土状況 土師質土器片6点（皿），瓦質土器片5点（播鉢），瀬戸・美濃系陶器片3点（皿2，碗1），丹波系陶器片1点（播鉢），磁器片2点（青花碗，青磁碗），漆器1点（椀）が全域に散在して出土している。88・90は南部，89・W34は北部の覆土中から出土している。

所見 時期は，出土土器や陶器から17世紀前半と考えられる。性格については不明である。



第145図 第30号土坑・出土遺物実測図

第30号土坑出土遺物観察表（第145図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
88	土師質土器	皿	[10.2]	(2.7)	—	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	ロクロ成形	南部覆土中	20%
89	陶器	丸碗	[11.5]	6.3	[4.7]	精良鉄釉	灰白・黒	良好	貼付高台 高台周辺露胎	北部覆土中	30% 瀬戸・美濃
90	陶器	折縁皿	[12.6]	(0.8)	—	精良灰釉	灰白・緑	良好	ロクロナデ	南部覆土中	瀬戸・美濃

番号	種別	器種	口径	器高	底径	重量	材質	特徴	出土位置	備考
W34	漆器	椀	—	(0.9)	—	(12.5)	ブナ科ブナ属	外面黒漆 内面朱漆 高台剥離	北部覆土中	

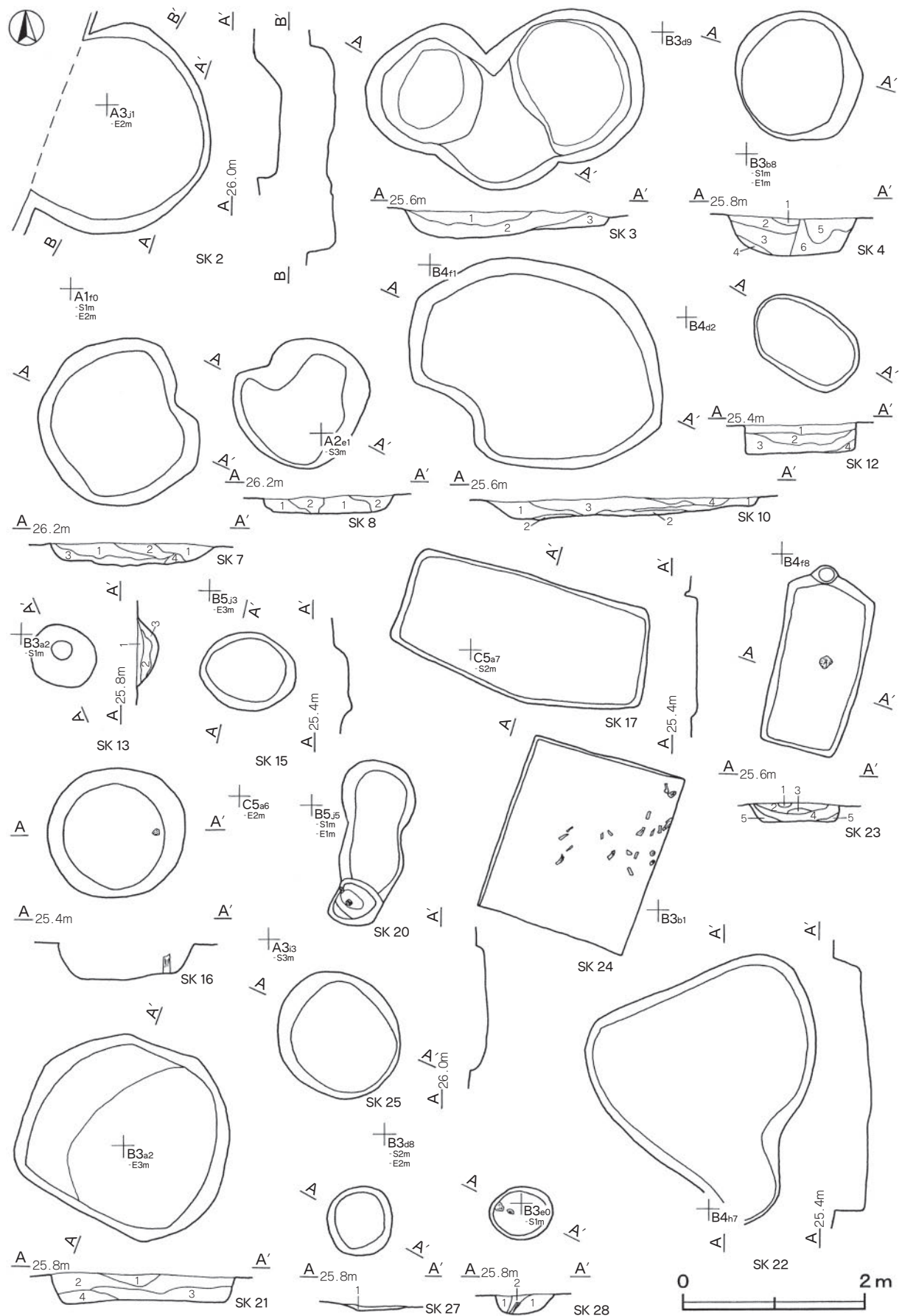
以下，その他の土坑について，平面図と土層断面図で記載する。第10・22・27・28号土坑は不整円形を呈した浅い土坑で，底面からは極小な木根が刺さったような状態で確認されていることから，門や池に隣接して植えられた庭木跡と考えられる。

第3号土坑土層解説

- 1 灰黄褐色 黄色粘土ブロック・細礫少量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 黄色粘土ブロック中量, 細礫少量
- 3 にぶい黄褐色 黄色粘土ブロック多量, 細礫・砂粒微量

第7号土坑土層解説

- 1 灰オリーブ色 黄色粘土粒子中量, 粘土質黒色土少量
- 2 暗オリーブ色 黄色粘土粒子・砂粒少量, 細礫微量
- 3 灰オリーブ色 黄色粘土粒子中量, 砂粒微量
- 4 オリーブ褐色 黄色粘土ブロック中量, 砂粒微量



第146図 その他の土坑実測図

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ロームブロック・粘土質黒色土少量, 青灰色粘土粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック中量, 青灰色粘土粒子少量
- 3 極暗褐色 ロームブロック・炭化物・粘土質黒色土少量
- 4 暗褐色 ロームブロック・粘土質黒色土少量
- 5 極暗褐色 粘土質黒色土中量, 炭化粒子・青灰色粘土粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 黒褐色 粘土質黒色土多量, 青灰色粘土粒子微量

第8号土坑土層解説

- 1 灰オリーブ色 黄色粘土粒子多量, 砂粒微量
- 2 オリーブ黒色 黄色粘土粒子多量, 砂粒微量

第10号土坑土層解説

- 1 黒褐色 黄色粘土粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 黄褐色 黄色粘土粒子多量, 砂粒微量
- 3 黒褐色 粘土質黒色土少量, 細礫微量
- 4 黄褐色 黄色粘土粒子中量, 砂粒微量

第12号土坑土層解説

- 1 褐色 黄色粘土粒子多量, 砂粒微量
- 2 褐色 黄色粘土粒子多量
- 3 暗褐色 黄色粘土粒子・炭化粒子多量, 粘土質黒色土少量
- 4 褐色 黄色粘土粒子多量, 砂粒少量

第13号土坑土層解説

- 1 黒褐色 黄色粘土粒子・砂粒少量
- 2 にぶい黄褐色 ロームブロック少量, 砂粒微量
- 3 黒褐色 粘土質黒色土中量, 砂粒少量

第21号土坑土層解説

- 1 褐色 黄色粘土粒子多量, 粘土質黒色土少量
- 2 黒褐色 粘土質黒色土中量, 黄色粘土粒子少量
- 3 暗褐色 黄色粘土粒子中量, 粘土質黒色土少量
- 4 黒褐色 粘土質黒色土多量, 炭化粒子・黄色粘土粒子少量

第23号土坑土層解説

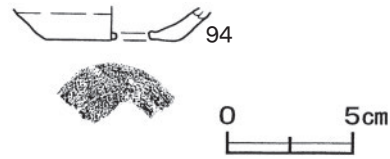
- 1 暗褐色 焼土粒子・粘土質黒色土・砂粒少量
- 2 黒褐色 青灰色粘土粒子・粘土質黒色土中量
- 3 黒褐色 粘土質黒色土多量, 炭化粒子・黄色粘土粒子少量
- 4 灰褐色 黄色粘土粒子多量, 青灰色粘土粒子少量
- 5 暗褐色 黄色粘土粒子中量, 青灰色粘土粒子少量

第27号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土質黒色土多量

第28号土坑土層解説

- 1 黒褐色 粘土質黒色土多量
- 2 黒褐色 粘土質黒色土多量, 黄色粘土粒子少量, 炭化粒子微量



第147図 第2号土坑出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表 (第147図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徵	出土位置	備考
94	土師質土器	皿	—	(1.4)	[5.2]	雲母	にぶい橙	普通	底部回転糸切り・穿孔灯明具に転用カ	覆土中	20%

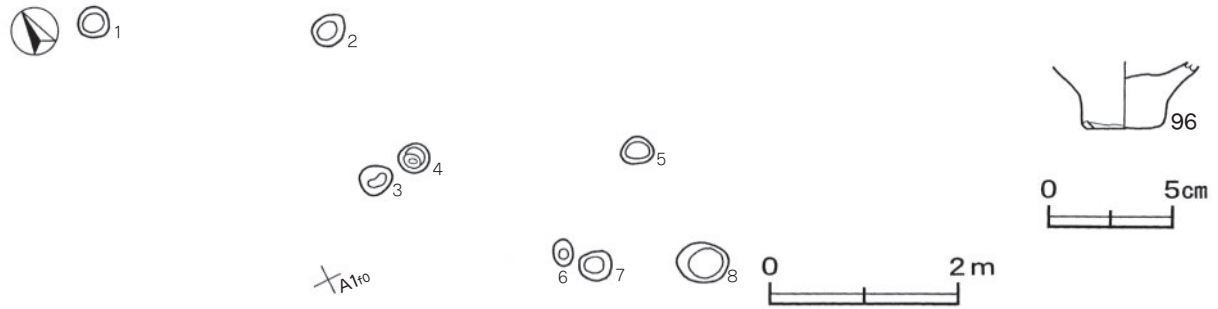
表19 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模(m, 深さはcm)		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 (調査番号)
				長径×短径	深さ					
2	A 3 j1	—	[円形]	2.3×(1.9)	32	直立	凹凸	自然	土師質土器	SK2
3	B 3 d8	N-85°-E	双円形	3.0×1.7	28	直立	平坦	自然	—	SK3
4	B 3 b8	—	円形	1.5×1.4	39	直立	皿状	人為	—	SK4
7	A 1 f0	N-22°-W	不整長方形	1.8×1.6	26	外傾	凹凸	人為	—	SK7
8	A 1 e0	N-22°-E	不整円形	0.9×0.9	18	外傾	平坦	人為	—	SK8
10	B 4 f1	N-61°-W	不整楕円形	3.0×2.3	22	外傾	平坦	人為	—	SK10
12	B 4 d2	N-60°-W	楕円形	1.2×0.8	31	直立	平坦	自然	—	SK12
13	B 3 a2	—	円形	0.7×0.7	24	外傾	皿状	自然	—	SK13
15	B 5 j3	N-82°-W	楕円形	1.1×0.9	14	外傾	平坦	人為	—	SK15
16	C 5 a6	—	円形	1.5×1.4	39	外傾	平坦	人為	—	SK16
17	C 5 a7	N-78°-W	長方形	2.8×1.3	10	直立	平坦	人為	—	SK17
20	B 5 i5	N-4°-E	長楕円形	1.8×0.8	18	緩斜	平坦	不明	—	SK20
21	B 3 a2	N-58°-W	隅丸方形	2.2×2.0	26	外傾	平坦	自然	—	SK21
22	B 4 g7	N-28°-W	隅丸三角形	2.7×2.5	38	直立	平坦	自然	—	SK22
23	B 4 f8	N-18°-E	長方形	2.0×1.0	20	直立	平坦	人為	—	SK23
24	B 3 a1	—	—	—	—	—	—	—	木根	SK24・植木跡
25	A 3 i3	N-0°	円形	1.4×1.3	17	外傾	平坦	人為	—	SK25
27	B 3 d8	—	楕円形	0.8×0.7	6	緩斜	皿状	自然	—	SK27・植木跡
28	B 3 e0	—	楕円形	0.7×0.6	20	外傾	平坦	人為	—	SK28・植木跡
29	A 3 j5	N-67°-W	楕円形	5.3×3.5	85	外傾	凹凸	自然	土師質土器, 瓦質土器, 陶磁器, 釘, 火箸, 金箔, 古銭, 漆器椀, 灯明台, 下駄, 折敷, 蓋, 箸, 敷居, モモ, マツ, クルミ, クリ	SX1
30	B 5 h3	N-5°-E	[円形・楕円形]	1.7×(0.9)	22	緩斜	皿状	自然	土師質土器, 瓦質土器, 陶器, 漆器椀	SX2

7 ピット群

各ピットは円筒状を呈しており, 柱穴跡と考えられるが, 配列が不揃いのため上屋構造を復元するまでには

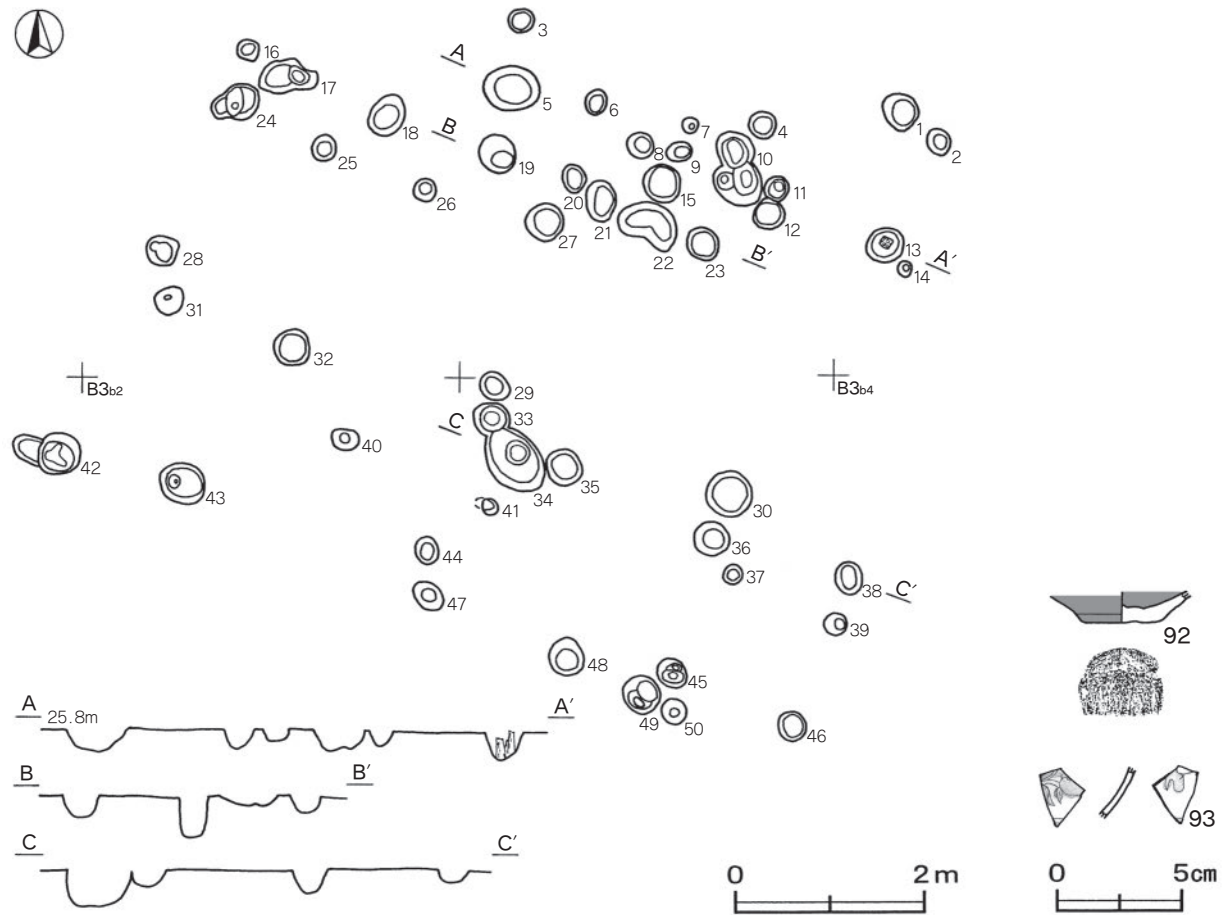
至らなかったものを記載する。以下、平面図（第148～152図）を記載する。



第148図 第1号ピット群・出土遺物実測図

第1号ピット群出土遺物観察表（第148図）

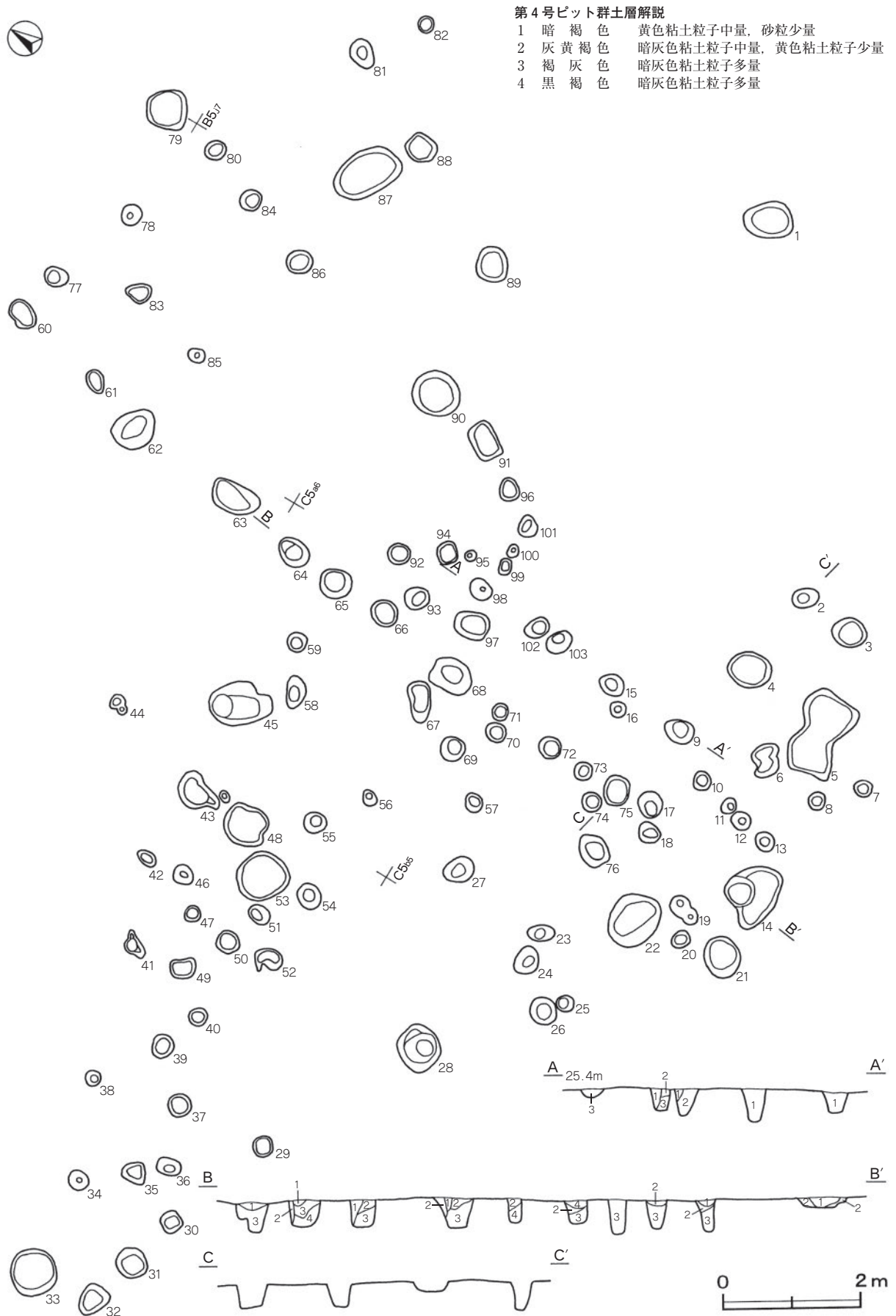
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
96	土師質土器	皿	—	(2.6)	3.1	雲母・赤色粒子	橙	普通	柱状高台 破断面摩滅	P1 覆土中	20%



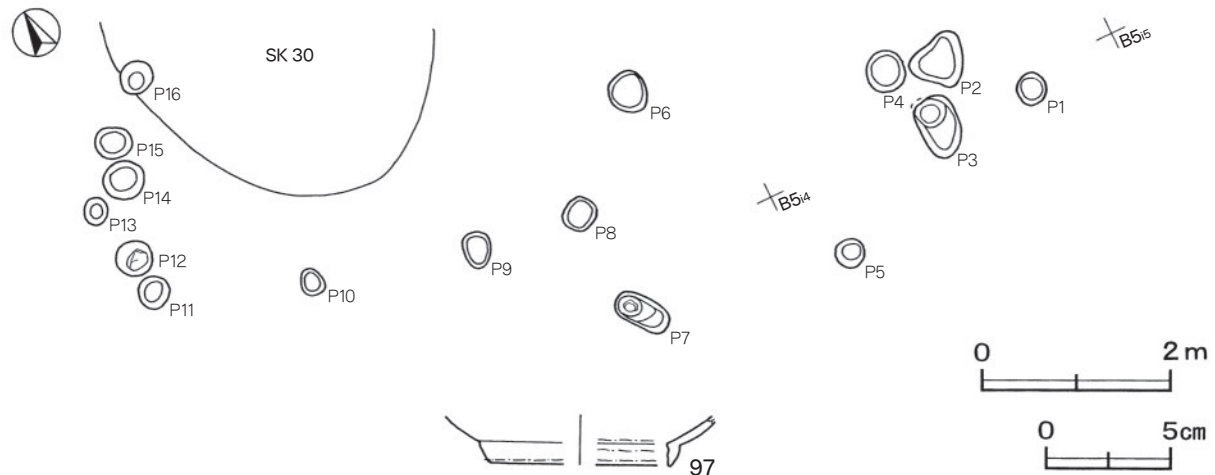
第149図 第2号ピット群・出土遺物実測図

第2号ピット群出土遺物観察表（第149図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
92	土師質土器	皿	—	(1.4)	3.2	雲母・石英	にぶい黄褐	普通	ロクロ成形 底部回転糸切り 油煙付着	P 2内	10%
93	青花	碗	—	(2.1)	—	精良透明釉	白・青	良好	植物文	確認面	PL16



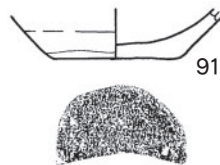
第150図 第4号ピット群実測図



第151図 第3号ピット群・出土遺物実測図

第3号ピット群出土遺物観察表 (第151図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
97	白磁	碗	—	(2.0)	[7.3]	精良透明釉	灰白・灰白	良好	畳付け付近釉薬掻き落とし	P3覆土中	



第152図 第4号ピット群出土遺物実測図

第4号ピット群出土遺物観察表 (第152図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法・文様の特徴	出土位置	備考
91	土師質土器	皿	—	(2.0)	4.8	雲母・長石・石英	にぶい橙	普通	ロクロ成形	確認面	20%

表20 ピット群一覧表

番号	位置	範囲	柱穴数	柱穴形状	径(cm)	深さ(cm)	主な出土遺物	備考(調査番号)
1	A 1 e9 ~ A 1 f0	6.9×2.9	8	円形	18 ~ 56	12 ~ 36	土師質土器	PG1
2	B 3 a4 ~ B 3 b1	10.1×7.7	50	円形・楕円形	14 ~ 74	12 ~ 40	土師質土器, 磁器	旧 PG2・SB13
3	B 5 h2 ~ B 5 i4	10.2×3.2	16	円形・楕円形	24 ~ 62	16 ~ 28	磁器	旧 SB9
4	B 5 i7 ~ C 5 a5	18.2×13.5	103	円形・楕円形	12 ~ 112	14 ~ 48	土師質土器	旧 SB7・9

8 柱穴列跡

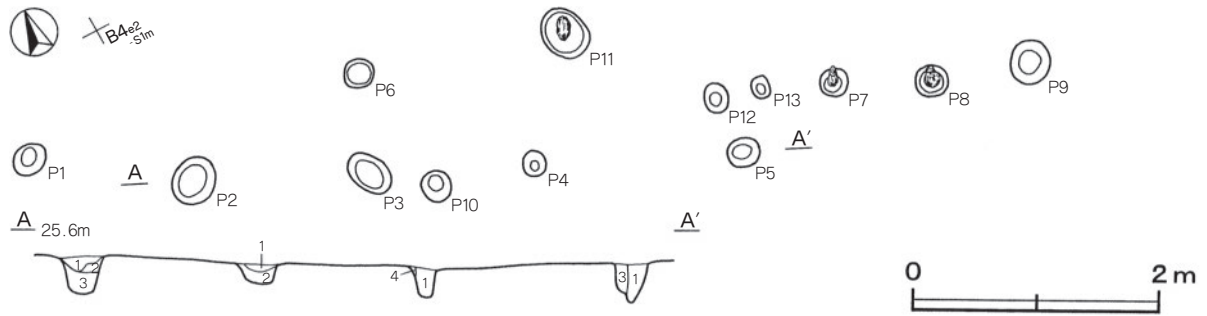
3か所の柱穴列跡が確認されている。時期は、宍戸城下図に記された区画と方向が一致することから、17世紀前半と考えられる。柱穴の並びが不規則なことから、垣など、前庭の意匠を凝らした施設の可能性が考えられる。以下、平面図(第153~155図)を記載する。

第1号柱穴列跡土層解説 (SA-6)

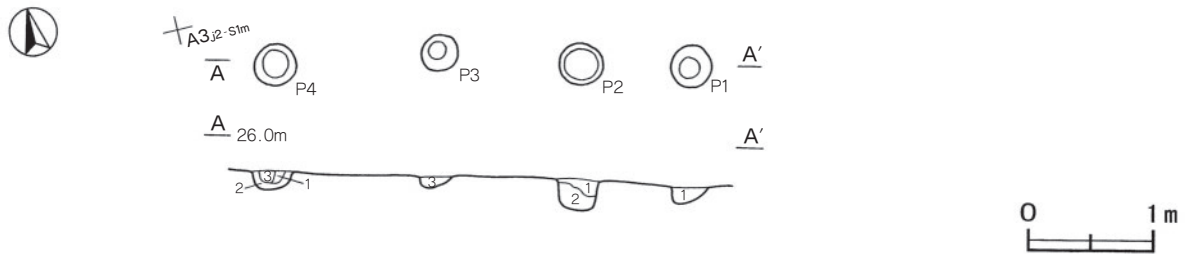
- 1 黒褐色 粘土質黒色土・黄色粘土粒子中量, 細礫・砂粒少量
- 2 黒褐色 粘土質黒色土中量, 黄色粘土粒子・細礫・砂粒少量
- 3 黒褐色 粘土質黒色土多量, 砂粒少量, 黄色粘土粒子・細礫微量
- 4 暗褐色 黄色粘土粒子多量, 粘土質黒色土少量, 細礫・砂粒微量

第2号柱穴列跡土層解説 (SA-7)

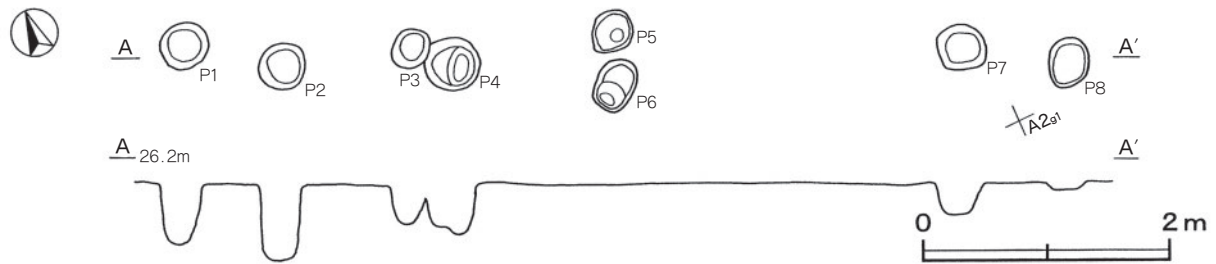
- 1 褐灰色 粘土質黒色土多量, 焼土粒子・炭化粒子・砂粒少量
- 2 灰黄褐色 粘土質黒色土多量, 白色粘土粒子少量, 砂粒微量
- 3 にぶい黄褐色 粘土質黒色土・白色粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量



第153図 第1号柱穴列跡実測図 (SA6)



第154図 第2号柱穴列跡実測図 (SA7)

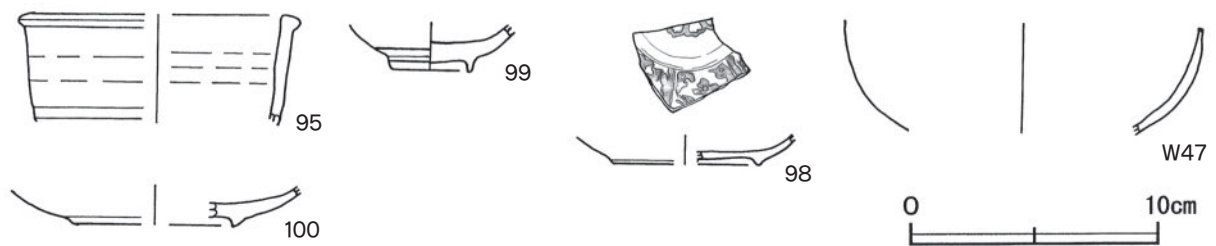


第155図 第3号柱穴列跡実測図 (SA8)

表21 柱穴列跡一覧表

番号	位置	走行方向	長さ(m)	柱間寸法(m)	柱 穴			出土遺物	備考 (調査番号)
					柱穴数	平面形	深さ		
1	B 4 e1 ~ B 4 f3	N - 65° - W	5.5	不定	13	円形	16 ~ 20	—	旧 SB11
2	A 3 j2	N - 25° - E	3.8	不定	4	円形	10 ~ 24	—	旧 SB5
3	A 1 f9 ~ A 2 f1	N - 67° - W	7.5	不定	8	円形	10 ~ 65	—	旧 PG2

9 遺構外出土遺物



第156図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表（第156図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・釉薬	色調	焼成	手法・文様の特徵	出土位置	備考
95	陶器	香炉	[10.0]	(4.4)	—	精良鉄釉	浅黄橙・黒褐	良好	ロクロ成形無文	西部表土	瀬戸・美濃
98	青花	皿	—	(1.2)	[5.9]	精良透明釉	灰白・青	良好	花文カ	東部表土	
99	青花	碗	—	(1.9)	3.2	精良透明釉	灰白・青	良好	高台周辺に界線	東部表土	漳州窯系
100	白磁	皿	—	(1.6)	[6.4]	精良透明釉	灰白・灰白	良好	無文全面施釉	東部表土	

番号	種別	器種	口径	器高	底径	材質	特徴	出土位置	備考
W47	漆器	椀	—	(4.4)	—	ニレ科ケヤキ属	外面黒漆 内面朱漆 その他に別個体の破片4点有り その他はブナ科ブナ属	東部確認面	

第4節 まとめ

1 はじめに

JR水戸線宍戸駅の南西に広がる水田地帯は、かつては武家屋敷であった。今回の調査における最大の成果は、眼前に広がるのどかな田園風景からは想像もつかない武家屋敷群が、現在の地割とほぼ一致した状況で確認されたこと、及び1645年の廃城後に水田化されたため土地に大きな改変がなく、当時の様子がそのままの状態で見守られていたことにある。このことにより、これまで推測の域を脱し得なかった宍戸城の全体像が、かなりの精度で復元可能となった。以下、確認された遺構と遺物を概観しながら、当時の武家社会の生活の一端に迫り、併せて宍戸城の復元を試みたい。

2 宍戸城の歴史

宍戸城は、中世常陸における名族である宍戸氏によって築かれたとされているが、その年代については明らかでない。宍戸氏の没落後、関が原の戦いを経て、慶長7年（1602年）に秋田実季^{あきたさねすえ}が出羽から宍戸に入部してきた¹⁾。宍戸城はこの秋田氏によって近世城郭としての体裁を整えられることになったが、正保2年（1645年）には陸奥三春への国替えを命じられたため、近世宍戸城はわずか半世紀ほどで姿を消すことになった²⁾。その後、武家屋敷の大部分が水田化されたことは、第2章第2節で述べたとおりである。

3 現在の地割と一致する遺構群

確認された遺構群の大半は、主軸方向をN-75°-W、あるいはN-25°-Wとしている。この方位は、正保年間に作成された「宍戸城下図」（第159図）に記された屋敷群の区画方向と一致している。残念ながら、道路の新設に伴う限られた調査範囲のため、屋敷の中心となるべき主屋の様相は不明であるが、屋敷境を巡る第1・3号堀跡が確認されたことにより、屋敷の南端を確定することができた。これらの堀には、第1号溝が並走していることが確認されている。この小さな溝は道路に伴う側溝跡とみてほぼ間違いなく、従ってこの溝の南には道路の存在を想定することができる。そして、正にこの道路の推定場所に現代の道路が通っているのである。

(1) 掘立柱建物跡

確認された17棟の建物は、建て替えと想定されているものは別にして、構造や規模がすべて異なっている。このことは、屋敷毎に内部の建物が異なり、独自の構造をとっていたことを示している。一般に、武家屋敷は家禄に応じて建物の規模や門の形式など様々な規制が働いていたとされるが、近世初頭にはこうした規制が緩かったか、あるいは規制の範囲内においては各自の裁量が許されていたことが分かる。

門跡と想定されるのは第3号掘立柱建物跡で、1間×1間の構造から薬医門と考えられる。柱穴には、総重量46.6kgの細礫が充填されていた。門は塀と共に武家屋敷としての格式を内外に示すための重要な要素であり、特に堅牢な施設が必要とされたのであろう。根固め石の存在から、建物としての規模は小さくとも、より重厚な上屋が想定される。第2号掘立柱建物跡も1間×1間であり、同様の施設の可能性があるが、規模が第3号掘立柱建物跡に比べて貧弱なため、薬医門と断定するにはやや躊躇するものである。また、第4号掘立柱建物跡は6間×2間の横長の建物で、第3号塀跡と連結していることから、長屋門又は屋敷の区画を兼ねた長屋風の建物と考えられる。

主屋の可能性のあるのは、第1・7・8・11・12号掘立柱建物跡である。いずれも北側部分が調査区域外に延びているために、全容は不明である。第7・11号掘立柱建物跡は、柱穴に根石が据えられていることや、柱材として太い角材が使用されていること、1間×1間で東西方向の間口が広いことなどから、玄関部分の可能性はある。この想定に従えば、玄関部分は主屋から突出しており、主屋と玄関部分は別屋根だったと考えられる。各地に現存する武家屋敷をみると、玄関には千鳥破風や唐破風が好んで使用されており、この部分が家の格式と強く関わるものであったことが分かる。また、種々の資料から、近世前半には中世武家住宅の系譜に連なる「中門」なる呼名が残存していたことが明らかにされており³⁾、主屋と小さな中門廊との組み合わせによる中門造りの可能性も考えられる。

第1・12号掘立柱建物跡は柱穴が整然と並んだ規格性の高い建物で、屋敷内の奥まった位置にあることから、主屋の可能性はあるが、柱穴が貧弱であるために断定はしがたく、屋敷全体を把握できない現段階においては、その性格付けについては保留したい。その他の建物は、倉庫や詰所、納屋などであり、ここでは改めて取り上げない。また、桁行方向の異なる第10・13・14号掘立柱建物跡は、秋田氏が入封する以前の宍戸氏や佐竹氏に関わる建物と推測され、柱間寸法や出土遺物から、近世宍戸城が整備される直前の様相を示したものと判断される。

これらの建物はすべて掘立柱であり、礎石建のものはない。柱間寸法は6尺5寸と6尺が多く見られ、その他の尺度も混在して見られる。中世末の建物跡と推測した第10・13号掘立柱建物跡は6尺5寸を採用しており、これらの建物がいわゆる織豊期の所産と判断するならば、京間（6尺5寸）を使用する都との関連も推測される⁴⁾。その他の建物には6尺を基準とするものが多く見受けられ、京間（6尺5寸）から田舎間・江戸間（6尺）へ転換が図られていく過渡期と考えられなくもない。

建物の復元には、角柱や敷居、障子の棧など建築部材の出土を参考にしたい。一般に、掘立柱建物といえば素朴な外観をイメージするが、こうした部材の出土から、現在の住まいの祖形となる間取りが存在していたことがうかがわれる。また、廃棄土坑である第29号土坑から出土した金箔2片は、襖や屏風、欄間などを飾った部材とも考えられ、興味深い。

(2) 屋敷の区割り

今回の調査範囲からは主屋が明確に確認されていないため、厳密に屋敷の区割りを復元することは困難である。また、屋敷境に土塁や生垣を使用した場合には、調査でその痕跡を確認することは容易ではない。そこで、遺構全体図に宍戸城下図に記された屋敷区割りを重ね合わせる作業を通して、区割りの復元を試みると、およそ第157図ようになる。なお、アミフセの有無が屋敷の範囲を示している。

宍戸城下図に記された各屋敷に付記されている「二十四□」「十四□」「十七□」（□は判読不明）という文字は東西方向の間数を表しているものと考えられる。この絵図は、正保元年（1641年）に幕府が諸大名に命じて作成させたもので、指示の一つに「侍町、小路割並間数の事」とあることから、各屋敷の間数



第157図 屋敷区割想定図

を記したものとみてほぼ間違いはない。この数字は、南北方向にも付記されており、「十八□」と判読することができる。すなわち、絵図では間口が二十四間、十四間、十七間、奥行が十八間の屋敷区割りとなっており、各屋敷は間口と奥行きが数値的に差の少ない短冊形となっている。また、今回の調査区域は南北幅が約15mであることから、各屋敷の南半分を調査したことになる。

調査の結果、主屋に関してはわずかにその痕跡を確認できただけであるが、前庭部分については門や池、植木、井戸などが配されていた様子を知ることができた。このことにより、屋敷内は南北を二分した使い分けがなされており、南に池や植木などの前庭部を配し、北に主屋などの居住施設を配した、いわゆる「前庭型」の屋敷構成をとっていたことが明らかになった。各屋敷の境は土塁や生垣によって区画されていたと推測され、遺構のない帯状の空白部分がこれに相当するものと思われる。また、池跡や井戸跡が各屋敷に1基ずつ配されていたことが分かる。

ここで問題となるのが、調査で得られた遺構配置の中に、必ずしも絵図に示された配置と一致しない遺構が存在することである。例えば、第4号掘立柱建物跡は二つの屋敷にまたがって確認されている。第4号掘立柱建物跡は、前述した通り、長屋門或いは区画を兼ねた長屋風建物と想定されるものであり、二つの屋敷にまたがって存在することはあり得ないものである。近世以前の建物と考えるならば問題はないが、出土遺物や桁行方向から17世紀代の可能性がより強く、従って事実と矛盾が生じることになる。しかし、屋敷と道路を区画する第3号堀跡と同一列上に位置していることから、武家屋敷が整備された初期の段階では第4号掘立柱建物が建てられ、屋敷区画として機能した後、第3号堀が設置されたと考えるならば、事実と齟齬はないことになる。また、第4号溝跡は、屋敷内を南北に走行する規模の大きな溝で、単なる排水施設とは言い切れないものである。人為的に埋め戻されていることや、その後主屋の一部とみられる第8号掘立柱建物が建てられていることを考慮すると、第4号掘立柱建物の例と同様に、初期の段階で区画溝として機能した後、短期間のうちに埋め戻され、第8号掘立柱建物が建てられたと考えることができる。

この想定に従うならば、わずか半世紀の間に、屋敷区割りの一部に変更があったと考えざるを得ない。建物自体が粘土質の軟弱な地盤に直接柱を埋め込んで築かれていたことを考慮するなら、建物の存続期間が短かったことも予想され、屋敷地割の修正や建物の建て替えなど、近世城下町の成立は決して単純ではなかったことがうかがわれる。

宍戸城下図には、屋敷の広さと共に住人名が記載されている。今回の調査区域に該当する部分で判読できるのは、「植田次郎右衛門」「津田民部」「山東仁衛門」「蔵田又平衛」の4名である。前述の屋敷割想定図に当てはめてみると、西から植田次郎右衛門邸（間口24間）、津田民部邸（間口

24間), 1軒において山東仁衛門邸(間口17間), さらに1軒において蔵田又平衛門邸(間口17間)となる。また, 「秋田俊季公分限帳」によると, 植田次郎右衛門が200石, 津田民部が300石, 山東仁衛門が200石, 蔵田又平衛門が100石の知行高となっている。分限帳では, 1000石の秋田四郎兵衛を筆頭に高禄は一族衆によって占められており(表22), それに次ぐ家禄を給されていた家臣の屋敷地であったことが分かる。加えて, 家臣はこれら88名の知行取の他に, 扶持米・切米による下級家臣が500名程度いたこと, また, ほぼ同じ石高であった陸奥三春藩時代において, 総武力数が約2000人であったとする記録もあること⁵⁾を踏まえると, 今回確認された屋敷群は藩内においてかなり上位の家臣の屋敷であったことが分かる。

表22 知行取家臣(給人)石高別人数

石高	人数	家 臣 名
1000石	1名	秋田四郎兵衛
700石	1名	秋田奥左衛門
600石	1名	荒木金衛門
550石	2名	秋田五郎左衛門, 秋田宇右衛門
500石	1名	秋田半太夫
400石	1名	泉田源左衛門
350石	9名	秋田三郎右衛門, 奥村源左衛門, 藪市郎左衛門, 吉田鞆負, 岩谷大勝, 竹光権太夫, 奥野助右衛門他
300石	6名	秋田平之丞, 津田民部, 五十川又左衛門, 青木久兵衛, 小山三郎兵衛, 岡田治部左衛門
250石	3名	秋田内膳, 島井新右衛門, 松本与五右衛門
200石	33名	秋田八兵衛, 植田次郎右衛門, 山東仁衛門, 大高十太夫, 荒木武兵衛, 久野五郎兵衛, 鎌田八左衛門他
150石	17名	橋村惣左衛門, 松原庄兵衛, 大金六左衛門, 横田甚右衛門, 北尾権左衛門, 梶塚弥右衛門, 永井与左衛門他
100石	11名	蔵田又兵衛, 中村清太夫, 加村長左衛門, 山本喜兵衛, 郡司理助, 福田六兵衛, 鎌田三之丞, 脇田金兵衛他
50石	2名	富田与左衛門, 大貫小右衛門

4 近世初頭の武家社会を示す陶磁器と木製品

出土した土器や陶磁器を器種別に集計したのが, 表23である。ここに記した数字は個体数ではなく破片数であり, また, 出土数の多い池跡と廃棄土坑に絞って集計していることから, あくまでも全体的な傾向をつかむための指標と考えたい。

最も多く出土しているのが土師質土器皿で, 胎土に針状鉱物を含んでおり, 在地産と考えられる⁶⁾。次いで多いのが, 土師質・瓦質土器の播鉢・鍋類である。こうした土器の破片数の多さは, 土器自体のもつもろさに関わることも考えられるが, 皿に限れば, 儀礼や饗宴の場における大量消費と結びつけて考えることも可能である⁷⁾。寛永年間頃までの將軍の御成に使用された食器は, 後述するように, 土器と白木の折敷, 箸であることが知られており, 少なくとも17世紀前半には中世的供膳形態が残存していたことが分かる。

瀬戸・美濃系陶器では, 志野小皿22点と天目茶碗17点を除くと, ほとんどが10点に満たない出土量であり, 器種によって使い分けがなされていたことが推測される。すなわち, 志野小皿は規格品であることや他の城館跡では灯明皿としての使用も多く報告されていること等を踏まえると, 日用品の一部であり, 一方, 志野織部や赤織部, 美濃伊賀などの製品は高級品として個別に購入されたもの, あるいは懐石料理に使用するため数客を1セットとして購入されたものと考えられる。破損部分を漆継ぎによって補修されているのは青花と織部の製品だけであることや, 志野皿の破損品は補修されずに, 灯明皿として使用されていたことなども, そうした使い分けの状況をうかがわせる。第142図78はガラス容器を思わせるような高台を有し, 第142図81は水辺と植物を「当意即妙」による釉の掻き落としによって表現するなど, 現代にも通じるような良品である。また, 天目茶碗の出土が多い点については, 茶入や水指などが出土している点と併せ, 茶の湯の盛行がその背景にあるものと考えられる。

表23 宍戸城跡出土土器・陶磁器器種別集計表

種 別	器 種	第1号池跡	第2号池跡	第3号池跡	第29号土坑	第30号土坑	計
土師質土器	皿	7	20	94	26	6	153
	内耳鍋・播鉢		17	48	4		69
	焼塩壺			1			1
瓦質土器	香炉			1			1
	火鉢			1	2		3
	播鉢	10	5		8	5	28
瀬戸・美濃	香炉			2			2
	壺			1	3		4
	天目	2	1	5(白天目1)	9		17
	鼠志野皿			2	8		10
	鼠志野碗				4		4
	鼠志野大皿				1		1
	志野皿	1		9	12		22
	志野向付・小鉢				6		6
	志野大皿				1		1
	灰釉皿		1			1	2
	折縁皿					1	1
	志野織部皿				2		2
	志野織部碗				1		1
	鉄絵志野皿				2		2
	赤織部皿・向付		1	1			2
	総織部皿				1		1
	美濃伊賀水指			1			1
	香炉			1	1		2
	鉄釉茶入				1		1
	丸碗			1	3	1	5
銅緑釉德利				1		1	
御深井釉碗				2		2	
播鉢		1	2	5		8	
不明				1		1	
唐 津	皿		2	1	3		6
	碗・向付		1	1	5		7
	朝鮮唐津德利				1		1
	火入(香炉)				1		1
常 滑	甕		1				1
丹 波	播鉢				1	1	2
信 楽	播鉢						0
不明焼締陶	不明			1			1
京 焼カ	茶入				1		1
肥前磁器	碗			1	1		2
	皿						0
	德利			1			1
青 花	碗		1	5	32	1	39
	皿			1			1
白 磁	碗		1				1
	壺	1					1
青 磁	碗		2			1	3
計		21	54	176	149	17	422

表24 宍戸城跡出土遺物分類表

分類項目	種 別 ・ 器 種				
	土器・陶磁器・土製品	木器・木製品・漆器	金属器・金属製品	石製品	その他
生活用具	食卓用具	碗 皿 向付 焼塩壺	蒲鉾板 箸 折敷 椀 椀蓋		ガラス
	調理用具	播鉢 内耳鍋	杓子 柄 蓋 鬼卸 曲物	火箸	
	貯蔵用具	甕	桶		
嗜好用具	喫 茶	碗 天目茶碗 水指 茶入 茶壺 香炉		火箸	
	喫 煙			煙管	
	飲 酒	德利 皿 小碗			
	そ の 他	火鉢 土人形 土鈴	将棋駒 烏籠カ	金箔	碁石
文 房 具				硯	
装 身 具		下駄 櫛	小柄		
灯 火 具	皿	灯明台			
建築用具・部材	瓦	柱 敷居 棧 自在鉤	鋳 釘		
そ の 他		鍬先 棒状製品 箱蓋	環状製品, 古銭		

青花碗の出土が39点と多い点については、秋田氏が1645年に移転した陸奥三春城下における18世紀末の火災層から、漳洲窯系の磁器が出土していることが参考になる。それらは伝世品と評価されており⁸⁾、宍戸時代から所有していた可能性が高いものである。このことから、当時の宍戸藩士たちは数ある陶磁器の中でも特に中国青花を渴望し、その結果が大量所有につながったものと考えたい。出土した青花は、碗がほとんどであることから、それらの中には抹茶碗や懐石料理用の器として入手されたものも含まれていると考えられ、茶道が武家社会に浸透していた様子がうかがい知れる。中国青花や絵唐津、織部などの色鮮やかな製品は、茶の湯とそれに伴う懐石料理に使用されたと考えられ、饗宴の様が思い浮かぶようである。

ハレの場では、土器皿と共に、白木の箸や折敷が使用されていた。そして、白木の食器もまた皿と同様に使い捨てにされたと考えられている⁹⁾。將軍御成の際の祝宴後の一括廃棄が行われた東大病院地点「池」状遺構からは、寛永6年（1629年）銘の木簡と共に、白木の箸や折敷、土器皿、蒲鉾板、焼塩壺等が出土しており¹⁰⁾、こうした状況を物語るものとして興味深い。当遺跡では、廃棄土坑である第29号土坑から長さ27cm超の両口箸や折敷、蒲鉾板などが出土している。箸は8寸以上で両口のものがハレ、7寸半や7寸で片口のものがケの場で使用されたとする説があり¹¹⁾、饗宴の規模や格式の違いこそあれ、同じような儀礼行為が宍戸城下の武家屋敷内でも執り行われていた可能性がある。また、焼塩壺は食卓塩として階層性の高いものであり、庶民の屋敷からは出土しないものである¹²⁾。蒲鉾板は魚のすり身をのせて炙るための薄い板で、宴会の献立には「小かまぼこ」として頻繁に登場するものである¹³⁾。

一方、通常の食事に使用された食器は、陶磁器ではなく、漆器が主体であったと推測される。そもそも「茶碗」は抹茶のための碗であり¹⁴⁾、今回の調査でも、飯碗とみなし得る法量を有する陶磁器碗は天目茶碗を除いてほとんど出土していない。一方、漆器碗は35点出土しており、遺存率の低い遺物であるにもかかわらず、陶器碗の出土数をしのいでいる点は注目される。おそらく、日常生活に十分なだけの漆器が各屋敷には備えられていたものと思われる。

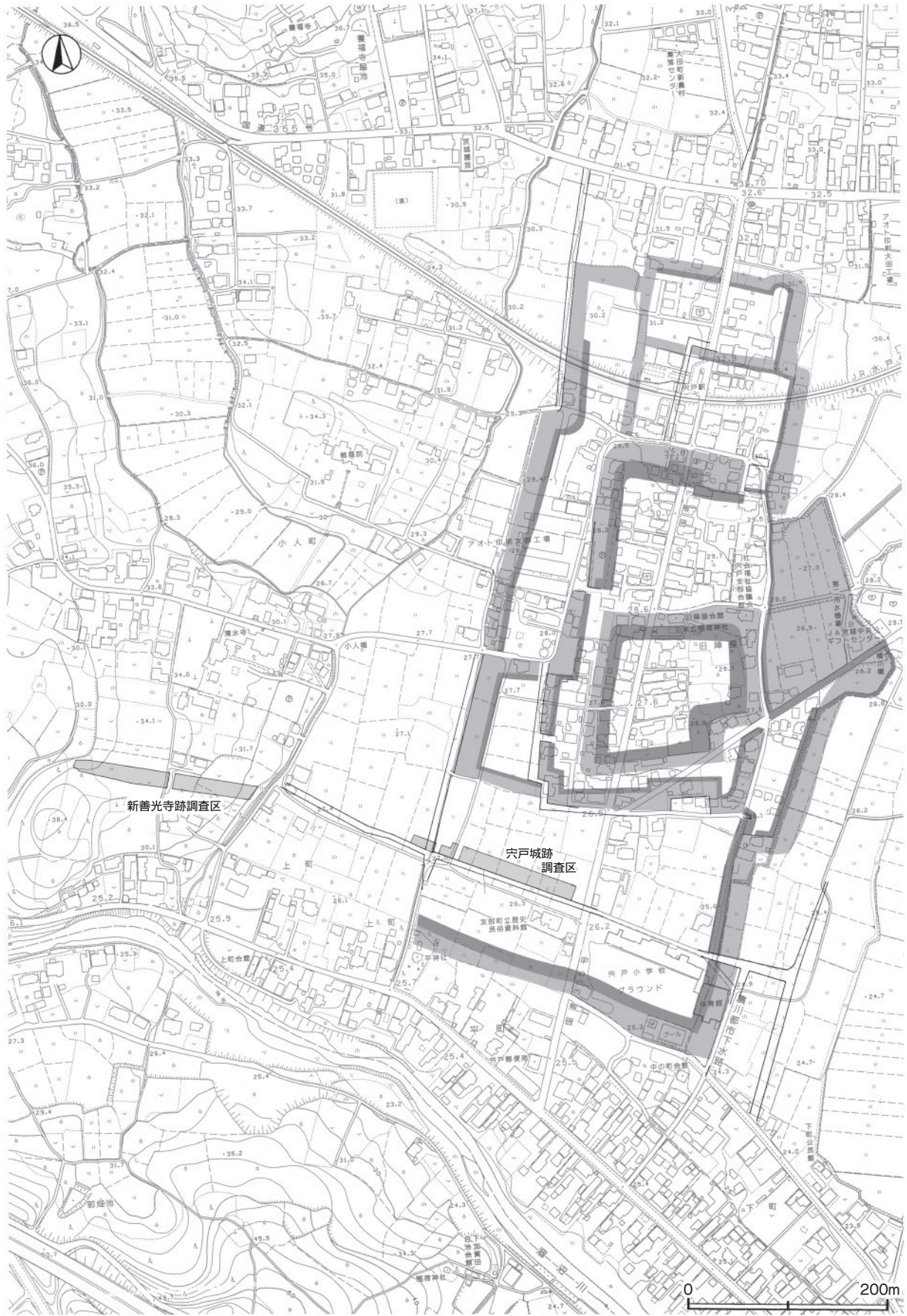
さらに、瀬戸・美濃製品が主流を占める中に、唐津、信楽、丹波、常滑などの製品が散見される点にも注目したい。これらの陶器類は、瀬戸・美濃製品が潤沢に供給される状況において、日常の補完品とは考えにくい。むしろ、南武蔵タイプに類似する土師質土器皿（第138図P57）の出土なども含めて、広範な流通や商圈の拡大、あるいは遠隔地との人的・物的交流による産物と考えられるものである。そして、少量ながらもこうした流通ルートが存在したことによって、17世紀後半以降の肥前系磁器の広範な流通が可能になったと思われる¹⁵⁾。

5 近世城下町としての宍戸城と秋田氏

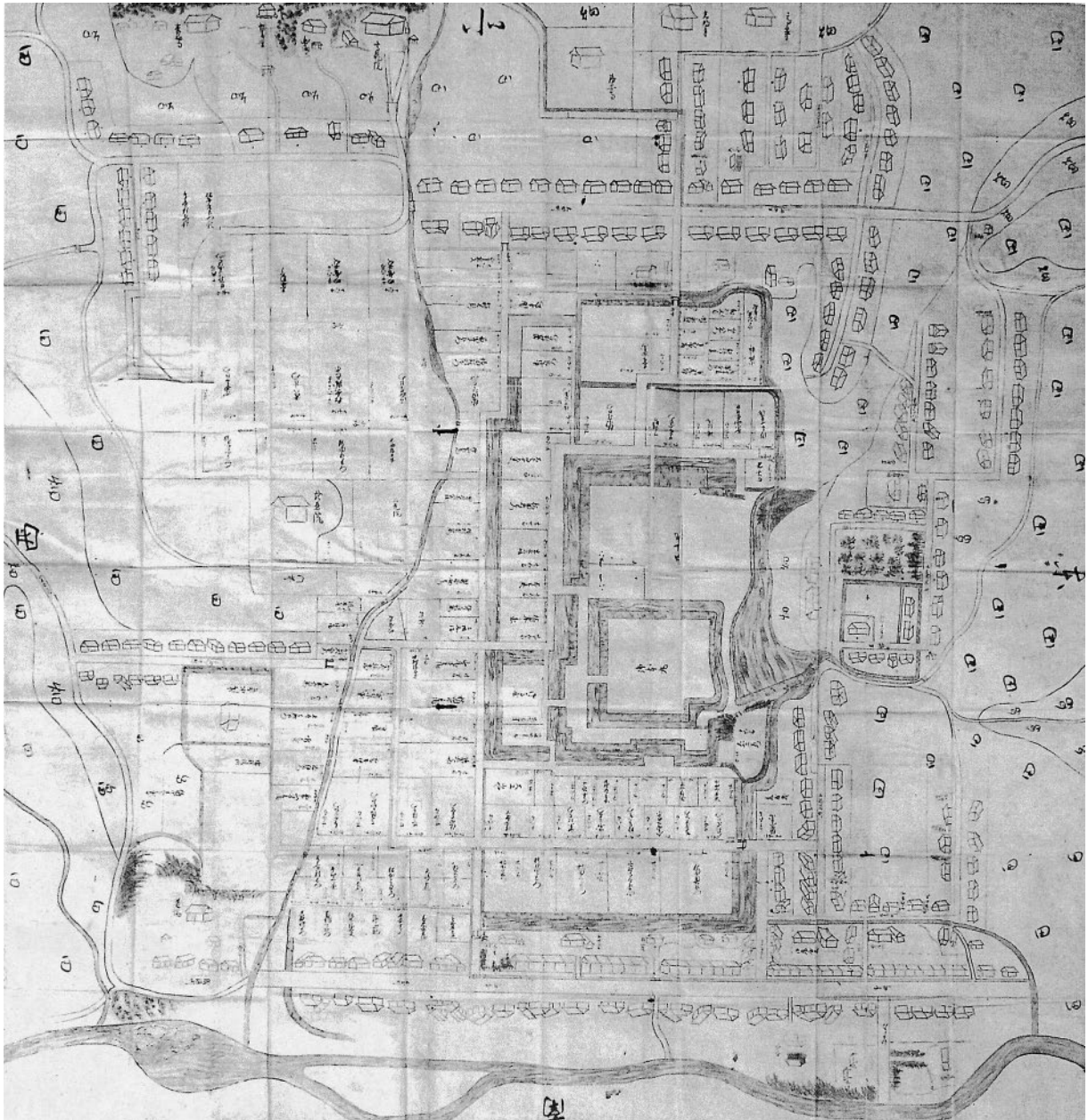
秋田氏は、「秋田城介」を家号とした出羽の名族で、十三湊を本拠とした安東氏を祖としている。宍戸に領地高5万石で入部してきた際には、出羽時代と比較して石高が実質的に半減したとされている¹⁶⁾。これに伴い、家臣数や家臣に割り当てる知行渡高も相当削らざるを得ない状況になったことは想像に難くない。そして、それは断行されたものと見て間違いなく¹⁷⁾、その際の家臣団の不平不満は相当のものであったと推測される。先に確認した屋敷地の修正・変更も、体制の移行期に見られる混沌とした状況の中で見るならば、理解が容易になる。

表25 宍戸藩主名一覧

姓	諱	受領名・官名	生没年月日	戒名	菩提所	藩主任期
秋田	実季	秋田城介	天正4年～万治2年	高乾院殿空岩梁空	永松寺（三重県伊勢市）	慶長7年～寛永7年
秋田	俊季	河内守	慶長3年～慶安2年	実岩常固真如院	高乾院（福島県田村郡三春町）	寛永8年～正保2年



第158図 穴戸城跡想定図



第159図 宍戸城下絵図（東北大学附属図書館蔵）

玉井哲雄氏によると、近世城下町は「各地の大名によって一斉に計画的に建設」されたものであり、それは城下町の規模や立地の違いに関わらず、基本的に共通しているとされる¹⁸⁾。各大名は、領国支配の拠点として有効に機能する都市空間を作り上げる必要に迫られていたのであり、中世における館や寺院・町場を踏襲しつつ再編成されたのであろう。宍戸城においても、同様な様子をうかがうことができる。武士と町人は、居住区において厳格に区別され、城の周囲に武家屋敷、街道沿いに町屋、外縁に寺院が計画的に配されていた。

今回の調査結果を現在の都市図に当てはめてみると、第158図のようになる。調査で確認された遺構の軸方向が絵図に示された方向と同じであることや道路跡が現代の道路と同じ位置を通っていることなどを根拠として現在の地割から復元し、さらに現地に残る土塁跡や堀跡から微調整を加えたものである。図を見て分かるように、一見すると普通の住宅地や水田地帯の区割りが、かなりの部分において絵図の示す区割りと一致していることが読み取れる。秋田氏が宍戸に居住していたのはわずか半世紀あまりであるが、

その間に整備された区割りが現在まで影響を及ぼしていることが分かる。また、宍戸城下の最南端に位置する「笠間街道」¹⁹⁾沿いの町人地は、外縁に位置する寺社と共に、秋田氏が宍戸を去り、武家屋敷の大半が水田となった後も、宿場町としてその命脈を保ち、当時の面影を現在に伝えている。

6 おわりに

宍戸城の南西端部という部分的な調査にもかかわらず、かなり大胆に宍戸城の全体像にまで触れることになったが、全容の解明には今しばらく時間がかかりそうである。城下周辺はかなりの湿地環境のため、居住に適していたとは言い難く²⁰⁾、この点においては、屋敷地の立地に際して居住環境よりも政治面や防衛面が優先されていたことが分かる。しかし、道や川、堀に則した短冊形の地割は、そこに住む人々に、共同体に必要な様々な役割を分掌させ、地域の構成員としての自覚を促していったものと思われる。そうした意味で、地域社会の一員として生きる我々にとって、現代社会の祖形としての宍戸城を見ることが出来る。

註

- 1) 友部町史編さん委員会 『友部町史』友部町 1990年3月
- 2) 『日本史総覧Ⅳ』近世1 人物往来者 1984年5月
- 3) 会津藩による「家世実記」九十七(1711年)において、厩中門の梁間・桁行を制限した例が記されている。
川本重雄氏は、書院造に代表される近世武家住宅は寝殿造を系譜とし、それらと社会秩序や儀式の関連について述べている。(『寝殿造の空間と儀礼』中央公論美術出版 2005年6月)
- 4) 藤川昌樹「近世の武家屋敷と都市史研究」『年報 都市史研究2 城下町の類型』都市史研究会 1994年12月
- 5) 前掲文献1に同じ
- 6) 佐々木義則氏は、「木葉下窯跡産坏A I の変化について」(『婆良岐考古』第17号 婆良岐考古同人会 1995年5月)において、第三紀に形成された「那珂西層」と呼ばれる泥岩中に大量の海綿骨針が含まれ、その泥岩は那珂川右岸に分布していることを紹介し、古代常陸の北半分に広く供給された木葉下窯跡産須恵器にも海綿骨針が含まれていることを指摘している。肉眼観察によるものであるが、当遺跡の土師質土器に含まれる針状鈹物は、この海綿骨針である可能性が高い。
- 7) 森本伊知郎「威信財としての近世陶磁器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集 国立歴史民俗博物館 2002年3月
- 8) 平田禎文「福島県三春城下町出土の陶磁器」『貿易陶磁研究』第18号 日本貿易陶磁研究会 1998年9月
- 9) 萩尾昌枝「江戸時代初期の宴会の食器類」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会 1992年1月
- 10) 萩尾昌枝他「東京大学本郷構内の遺跡 医学部附属病院地点」『東京大学遺跡調査室発掘調査報告書』3 東京大学遺跡調査室 1990年3月
- 11) 前掲文献8に同じ
- 12) 渡辺誠「焼塩壺」『江戸の食文化』江戸遺跡研究会 1992年1月
- 13) 島崎とみ子「江戸時代の料理と器具」『江戸文化の考古学』江戸遺跡研究会 2000年8月
- 14) 長佐古真也「お茶碗考 江戸における量産陶磁器の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集 国立歴史民俗博物館 2002年3月
- 15) 荒川正明氏の御教示による。
- 16) 前掲文献1に同じ
- 17) 秋田時代に12名いた1000石以上の高禄取りの家臣数が、二代藩主秋田俊季の時には1名にまで減少している。(前掲文献1より)
- 18) 玉井哲雄「近世城下町の都市空間とその特質」『関西近世考古学研究』Ⅴ 関西近世考古学研究会 1997年12月
- 19) 笠間藩主が参勤交代をする際に、江戸へ向かう最初の休憩所としていたことが知られている。(前掲文献1より)
- 20) 写真図版PL12参照

付章 宍戸城跡出土木製品の樹種

能城修一(森林総合研究所木材特性研究領域)

茨城県宍戸城跡から出土した近世前期の木製品28点の樹種を報告する。28点中には11分類群が見いだされた。

1. モミ属 *Abies* マツ科 図1: 1a, 1c (IB-292)

水平・垂直樹脂道をいずれも欠く針葉樹材。放射組織は柔細胞のみからなり、水平・垂直壁には単壁孔が著しい。分野壁孔はごく小型のヒノキ型～トウヒ型で1分野に2～3個。

2. アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 図1: 2a, 2c (IB-303)

水平・垂直樹脂道をもつ針葉樹材。放射組織は柔細胞と仮道管からなり、分野壁孔は大型の窓状で普通1分野に1個、放射仮道管の水平壁は著しい鋸歯状を呈する。

保存状態が悪く、放射仮道管の鋸歯が見えにくいものは、マツ属複維管束亜属とした。

3. スギ *Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don スギ科 図1: 3a, 3c (IB-296)

水平・垂直樹脂道をいずれも欠く針葉樹材で、晩材は量多く明瞭。早材の終わりから晩材に樹脂細胞が接線方向に散在する。分野壁孔は大型のスギ型で1分野に2個。

4. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図1: 4a, 4c (IB-284)

水平・垂直樹脂道をいずれも欠く針葉樹材で、晩材は量少ない。早材の終わりから晩材に樹脂細胞が接線方向に散在する。分野壁孔は中型のトウヒ型～ヒノキ型で1分野に2個。

5. アスナロ *Thujaopsis dolabrata* Sieb. et Zucc. ヒノキ科 図1: 5a, 5c (IB-306)

水平・垂直樹脂道をいずれも欠く針葉樹材で、晩材は比較的量多い。早材の終わりから晩材に樹脂細胞が接線方向に散在する。分野壁孔はごく小型のヒノキ型で1分野に2～4個。放射柔細胞には樹脂が著しい。

6. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図1: 6a (IB-307)

大型で丸い単道管が年輪のはじめに数列並び、晩材では薄壁の単道管が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。木部柔組織は晩材でいびつな接線状。放射組織は単列同性。

7. ブナ属 *Fagus* ブナ科 図1: 7a (IB-299)

小型の丸い道管が密に散在する散孔材。道管の穿孔はふつう単一で、時に10本ほどの横棒からなる階段状。放射組織は同性で、単列の小型のものから、高さが2ミリを越える大型のものまである。

8. コナラ属コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図1: 8a (IB-308)

大型で丸い単道管が年輪のはじめに1～2列並び、晩材では薄壁の単道管が放射方向に配列する環孔材。道管の穿孔は単一。放射組織は同性で、単列のものと集合状の大型のものからなる。

9. カツラ属 *Cercidiphyllum* カツラ科 図1: 9a (IB-294)

ごく小型の道管が密に均一に散在する散孔材。道管の穿孔は30本ほどの横棒からなる階段状、道管内にはチロースが著しい。放射組織は異性で3細胞幅くらい。

10. イスノキ *Distylium racemosum* Sieb. et Zucc. マンサク科 図1: 10ac (IB-302)

ごく小型の道管が均一に散在する散孔材。道管の穿孔は10本ほどの横棒からなる階段状、道管内には厚壁のチロースと黒色の物質が著しい。木部柔組織はしばしば接線状。放射組織は異性で2～3細胞幅。

11. 竹笹類 Subfam. Bambusoideae イネ科 図1: 11a (IB-288)

中心にある一対の道管と、原生木部間隙、節部を囲んで厚膜組織が維管束鞘を形成し、それが散在する。

ヒノキが17世紀中頃を中心として43%をしめ、針葉樹が全体の75%を占めている。針葉樹の樹種が多く、点数も多い点は、江戸における木材利用にそぐうものと言える。

表. 宍戸城跡出土木製品の樹種組成

樹種名	17c 前半	17c 中頃	総計	
モミ属		1	1	4%
アカマツ	2	2	4	7%
マツ属複維管束亜属		1	1	4%
スギ	2	2	4	14%
ヒノキ	3	9	12	43%
アスナロ	1		1	4%
クリ	2		2	7%
ブナ属	1		1	4%
コナラ属コナラ節	1		1	4%
カツラ属		1	1	4%
イスノキ	1		1	4%
竹笹類		1	1	4%
総計	13	15	28	

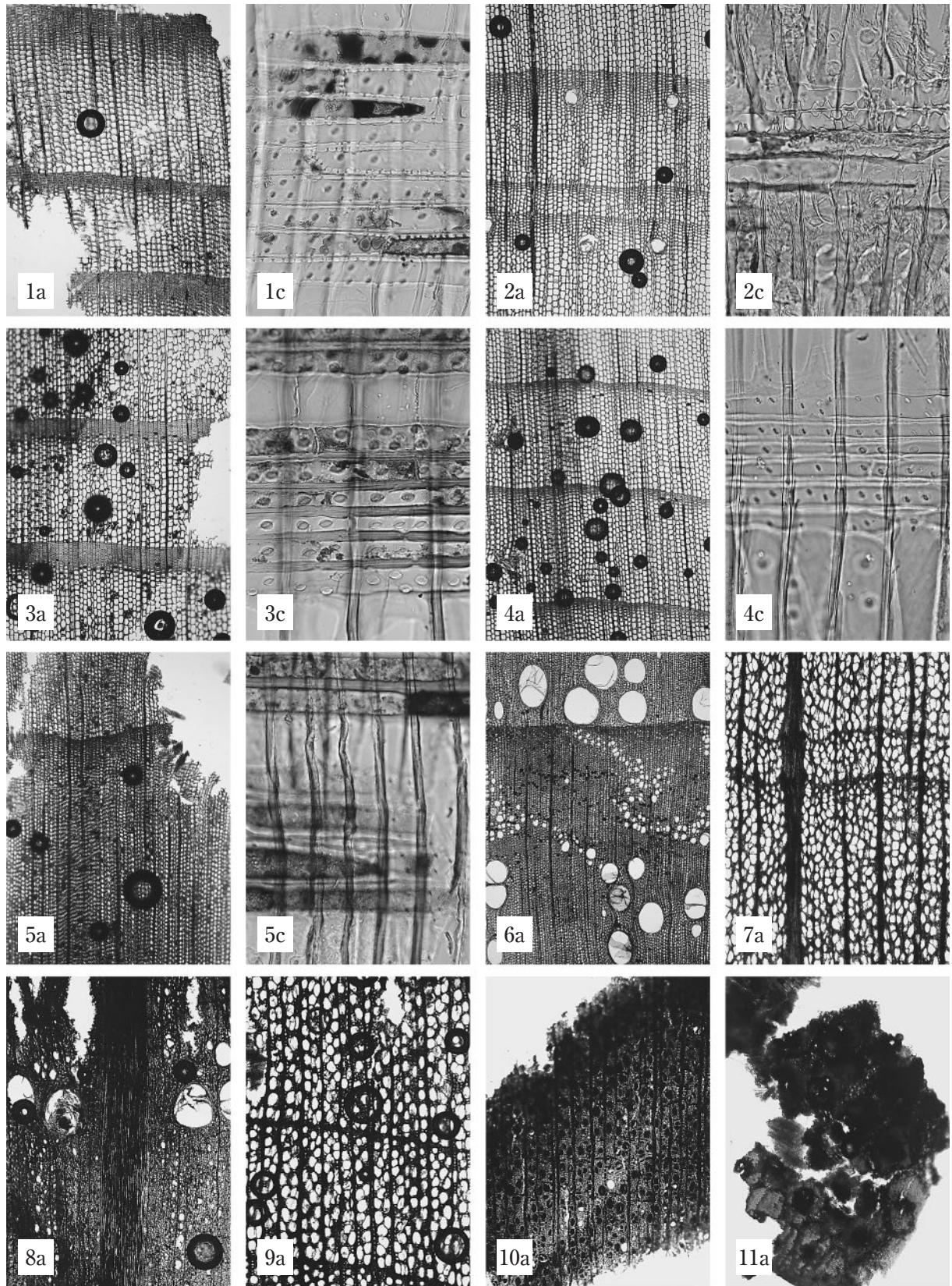


図1. 茨城県尖戸城跡出土木材の顕微鏡写真

1 a, 1c : モミ属 (W9), 2a, 2c : アカマツ (W21), 3a, 3c : スギ (W13), 4a, 4c : ヒノキ (W1), 5a, 5c : アスナロ (W24), 6a : クリ (W25), 7a : プナ属 (W16), 8a : コナラ属コナラ節 (W26), 9a : カツラ属 (W11), 10a : イスノキ (W19), 11a : 竹笹類 (W5). a : 横断面 (スケール = 500 μ m), c : 放射断面 (スケール = 25 μ m).

写真図版

新善光寺跡
穴戸城跡



新善光寺跡遠景（東から）

遺跡全景



第1号住居跡
完掘状況



第1号住居跡
遺物出土状況





第1号住居跡
遺物出土状況



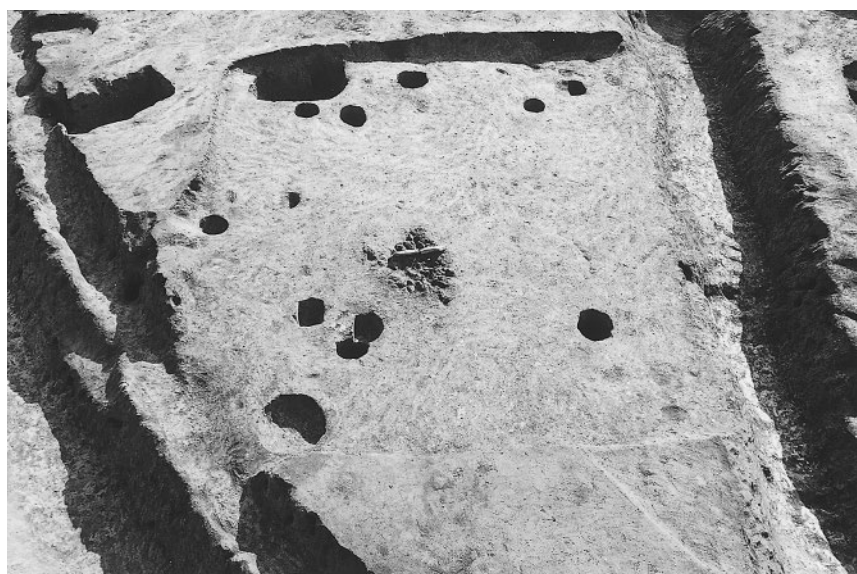
第5号住居跡
完掘状況



第5号住居跡
遺物出土状況



第 6 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 10 号 住 居 跡
完 掘 状 況



第 1 号 方 形 周 溝 墓
完 掘 状 況



第14号土坑遺物出土狀況



第19号土坑完掘狀況



第20号土坑完掘狀況



第21号土坑遺物出土狀況



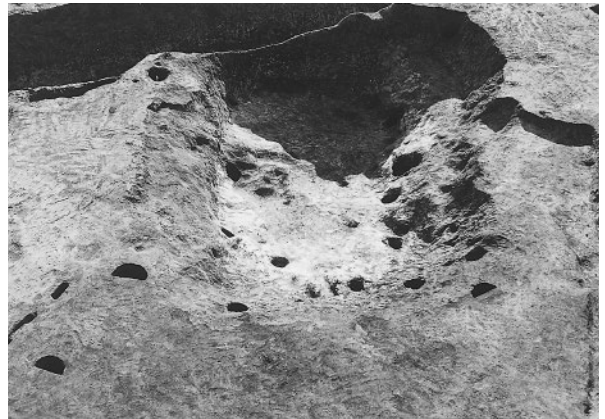
第21号土坑遺物出土狀況



第60号土坑遺物出土狀況



第60号土坑遺物出土狀況



第1号地下室状遺構完掘狀況



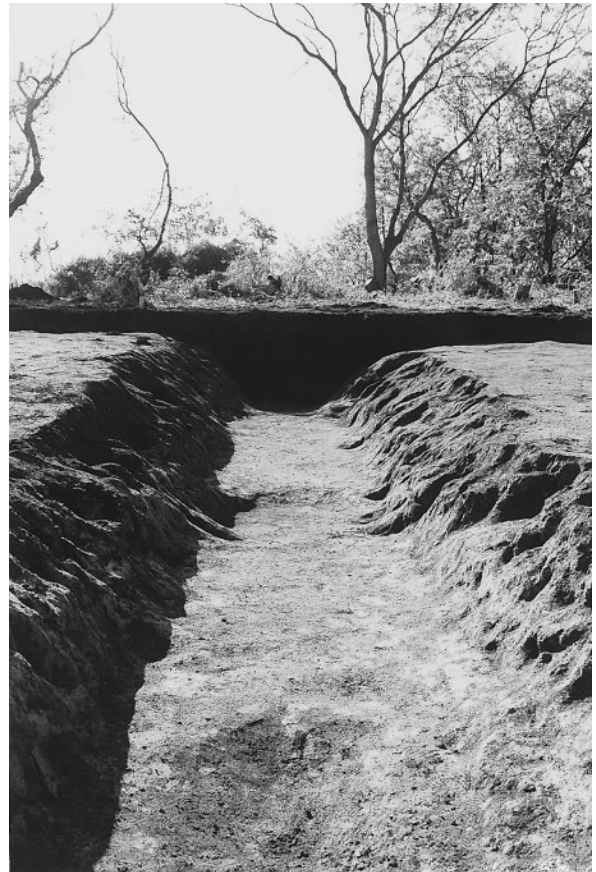
第4 A号溝跡完掘状況（西部）



第4 A号溝跡完掘状況（東部）



第4 B号溝跡完掘状況



第4 C号溝跡完掘状況



SK12-3



SK21-20



SK13-11



SK14-16



SK13-10



SK13-12



第21・38・60・68号土坑出土遺物



第1・7号住居跡・第14・21・60号土坑出土遺物



第1・5・9B号住居跡・第1号方形周溝墓出土遺物



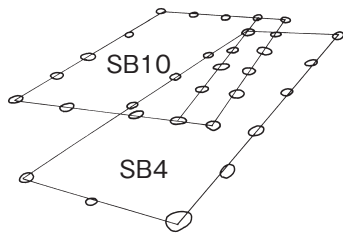
第1・4・5・10号住居跡・第1号方形周溝墓・第4B号溝跡・第21・22・39号土坑・遺構外出土遺物



西部全景



東部全景



第4・10号掘立柱建物跡
第3号堀跡・第1号溝跡
完掘状況





第 8 号掘立柱建物跡完掘状況



第 3 号掘立柱建物跡完掘状況



第11号掘立柱建物跡P 8 柱材出土状況



第 4 号堀跡P 4 完掘状況



第 2 号堀跡完掘状況



第 4 号ピット群完掘状況



第 2 号池跡完掘状況



第 3 号池跡完掘状況



第3号池跡遺物出土状況



第3号池跡完掘状況



第3号池跡遺物出土状況



第29号土坑土層断面



第29号土坑遺物出土状況



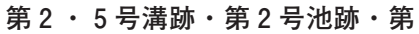
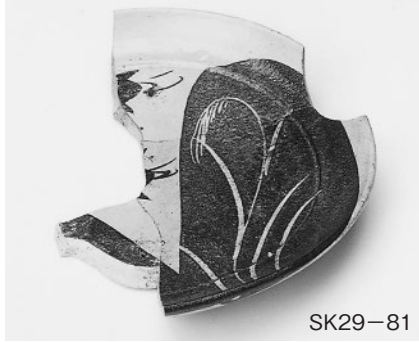
第29号土坑遺物出土状況



第7号井戸跡土層断面



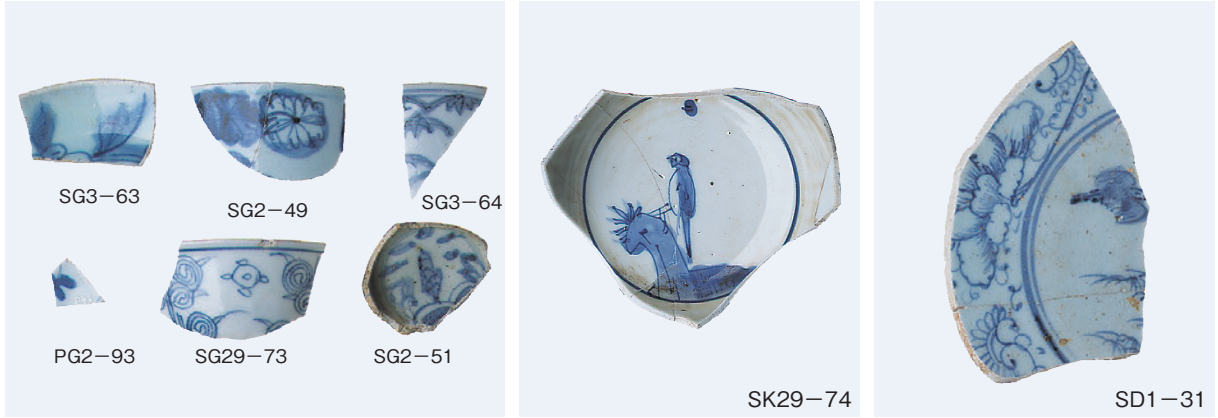
第7号井戸跡完掘状況



第2・5号溝跡・第2号池跡・第7号井戸跡・第2・29号土坑出土遺物



第1・9号掘立柱建物跡・第6号井戸跡・第2・3号池跡・第29号土坑出土遺物



第1号溝跡・第2・3号池跡・第14・29号土坑・陶磁器集合

茨城県教育財団文化財調査報告第256集

**新善光寺跡
宍戸城跡**

主要地方道大洗友部線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

平成18（2006）年3月20日 印刷

平成18（2006）年3月24日 発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 ワタヒキ印刷株式会社
〒310-0012 水戸市城東1-5-21
TEL 029-221-4381